

主要地方道高崎渋川線改築(改良)工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

# 小八木志志貝戸遺跡群 2

小八木志志貝戸遺跡・正観寺西原遺跡

(高崎市)

菅谷石塚遺跡

(群馬郡群馬町)

## II 古墳時代編

Koyagi-shishikaido site, Syohkanji-nishihara site,

Sugaya-ishizuka site

Takasaki City and Gunma Town, Gunma

Vol.2 Kofun Age

2001

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



主要地方道高崎渋川線改築(改良)工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

# 小八木志志貝戸遺跡群 2

小八木志志貝戸遺跡・正観寺西原遺跡  
(高崎市)

菅谷石塚遺跡  
(群馬郡群馬町)

II 古墳時代編

Koyagi-shishikaido site, Syohkanji-nishihara site,  
Sugaya-ishizuka site  
*Takasaki City and Gunma Town, Gunma*

Vol.2 Kofun Age

2001

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団







古墳時代後期環濠祭祀遺構（2-066号）出土須惠器大甕群（小八木志志貝戸2区）



古墳時代後期環壇塚祭祀遺構 (2-066号)  
(小八木志志貝戸2区)



古墳時代後期特殊井戸 (0-002号)  
(小八木志志貝戸0区)



古墳時代中期竪穴住居 (2-018号)  
(小八木志志貝戸2区)



中世墓群 (小八木志志貝戸2区)



中世幹線道「あづま道」跡 (6-001号)  
(小八木志志貝戸6区)

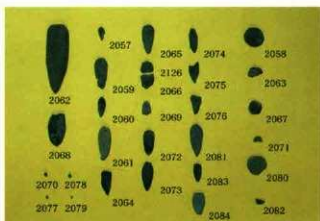


後期東山道跡の足跡 (菅谷石塚01号道路)

古墳時代中期石製模造品 (小八木志志貝戸2区)



056号遺構



066号遺構



( ) 以外066号遺構

古墳時代後期の供献された牛馬歯 (小八木志志貝戸O区)



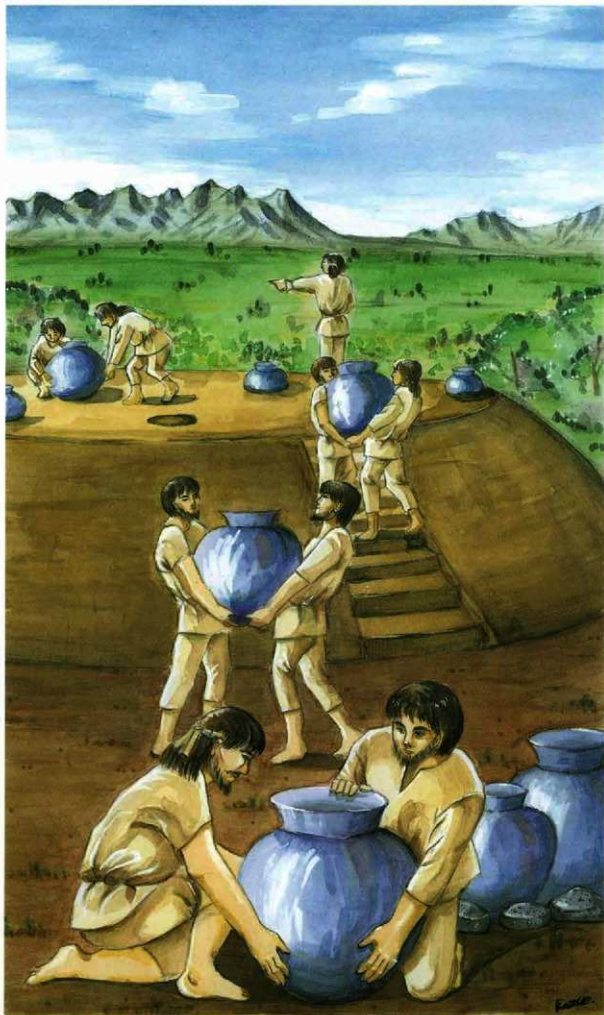
古代～近世陶磁片





廻遊群周辺地形復元図（中央が古墳時代後期環濠葬祀遺構 奥は榛名山）CG作成：技術調査設計





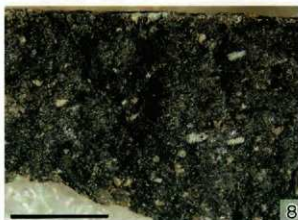
古墳時代後期環濠濠祭禮遺構への須恵器供献推定図 (原画：新井加寿江)



須恵器胎土断面の実体顕微鏡写真1 (スケール; 5mm)

1. 大甕 №1001 2. 大甕 №1002 3. 大甕 №1003 4. 大甕 №1004  
 5. 大甕 №1005 6. 大甕 №1006 7. 中型甕 №1009 8. 中型甕 №1010

口絵8



須恵器胎土断面の実体顕微鏡写真2 (スケール: 5mm)

1. 中型甕 No1011 2. 中型甕 No1012 3. 中型甕 No1013 4. 中型甕 No1077  
5. 中型甕 No1079 6. 甗 No1080 7. 大甕 No0001 8. 大甕 No0002



## 序

主要地方道高崎渋川線は近世の三国往還を踏襲しており、古くから往来が盛んな道路として知られています。現在では高崎市街地を南北に縦断してから国道17号線と交差して渋川市を結ぶ地方幹線道として、近年交通量がさらに増加しています。

本道路改築（改良）工事は、現道の東側を迂回するバイパスとして整備しつつあり、渋滞緩和のための早期開通が囑望されておりました。この工事に先立って当該する埋蔵文化財の記録保存として、昭和63年から群馬町教育委員会そして平成6年からは当事業団が発掘調査を実施してまいりました。

本遺跡群の北西方向には保渡田古墳群や三ッ寺Ⅰ遺跡など県内の有数の遺跡が分布しており、東方向には日高遺跡のような重要な遺跡が近接しています。また周辺では関越自動車道新潟線・上越新幹線・長野新幹線建設工事また地元の土地改良工事に伴って、発掘調査が数多くなされてきました。それらの中間にあたる地域として、本遺跡群は当地域の歴史を考える上で重要な資料を提供することと思います。

本遺跡群では縄文時代から近世にいたる、特にさまざまな信仰・埋葬の痕跡が密集して発見されております。前回の弥生時代編に続く本報告では、中でも大規模な中世墓地や古墳時代の大甕供献環濠祭祀遺構などについて報告いたします。また「あづま道」や東山道という中世・古代の幹線道跡の発見も掲載いたし、当地域の歴史をさらに解明するために、今後に資する事実を数多く提供できるでしょう。

本報告書の刊行に至るまでには、群馬県土木部道路建設課高崎土木事務所、県教育委員会、高崎市教育委員会また地元関係者の皆さまに大変ご尽力を賜りました。銘記して心から感謝申し上げますと共に、本報告書が広く基本的な歴史資料として活用されることを念願し、序とします。

平成13年1月31日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 小野 宇三郎



## 例 言

- 1 本書は、群馬県主要地方道高崎渋川線改築（改良）工事に伴う発掘調査報告書である。
  - 2 下記所収遺跡の第2冊目の調査報告となる。  

菅谷石塚遺跡	群馬郡群馬町菅谷石塚他
正観寺西原遺跡	高崎市正観寺町西原
小八木志志貝戸遺跡	高崎市小八木町字志志貝戸他
  - 3 事業主体 群馬県土木部道路建設課・高崎土木事務所
  - 4 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
  - 5 調査期間・担当 菅谷石塚遺跡 平成8年12月1日～9年3月31日  
 担当 松村和男・池田政志・横山千晶  
 正観寺西原遺跡 平成9年4月1日～7月9日、10年3月17日～31日  
 担当 坂井 隆・横山千晶・入沢雪絵（嘱託員）  
 小八木志志貝戸遺跡 平成9年6月26日～11年12月22日  
 担当 坂井 隆・神谷佳明・横山千晶・長岡将之  
 入沢雪絵（嘱託員）・小林一弘（嘱託員）
  - 6 整理期間・担当 平成11年4月1日～12年3月31日 整理担当 坂井 隆  
 担当部長 神保佑史 担当課長 小山友孝  
 （平成12年度 刊行担当 部長 水田 稔 課長 西田健彦）
- 署名部分以外の執筆は坂井が行ったが、調査経過（2頁）の一部は群馬県教育委員会文化財保護課が執筆した。
- 7 整理班 補助員 阿部和子 岩淵フミ子 大友幸江 高柳哲子 中橋たみ子 六本木弘子
  - 8 本書の報告範囲は古墳時代以降であるが、整理時に調査中であつた小八木志志貝戸遺跡4・5区は含まれていない。本遺跡群の掲載は次の通りである。  

小八木志志貝戸遺跡群1（既刊）	3遺跡の弥生時代の遺構・遺物
小八木志志貝戸遺跡群2（本書）	3遺跡の古墳時代以降の遺構・遺物
小八木志志貝戸遺跡群3	小八木志志貝戸遺跡の中世の遺構・遺物及び小八木井野川遺跡
小八木志志貝戸遺跡群4	小八木志志貝戸遺跡の縄文時代及び古代の遺構・遺物
  - 9 発掘調査作業員（平成8～10年度）  
 相川博雄 朝倉政代 足立信二 飯塚美穂子 石川真也 石川輝子 石崎徳枝 石崎正英 石原伸江 植杉あや子 宇賀美代子 栄直美 生方智恵子 江原岳志 大谷正子 大山朝子 岡田金五 小川照男 小本博 小木良江 笠井正雄 持田忠男 片平小夜子 金井百合子 金子くみ子 狩野茂生子 加納文代 狩野真 狩野基夫 加納康利 鹿子水輪子 川淵邦夫 川淵純子 久保田正司 久保田光枝 栗原保 黒崎ヤロウ 黒崎ミツノ 高野辺トリ子 小丸瀬原基夫 小丸瀬原幸子 近藤上 齊藤初美 齊藤八重子 坂井育子 佐藤はるの 芝田藤江 芝田ミツ 島田つ 嶋村みどり 清水幸子 清水茂 清水近江 清水次子 志村千恵子 岩谷友栄 城田雄 渡藤利雄 須藤はるの 関口弘子 関根さき枝 関根照代 関根秀雄 関根文子 沢村市子 曾我功 曾我みつ子 反町利雄 高畑松子 高島隆 高橋康子 高見寿美子 田島剛二 滝沢喜代志 武井綾子 武石正英 竹内昭子 竹内千代子 竹森タキノ 田中美代子 田野尚南 塚越幸子 辻みつる 土屋玲子 堀 隆 殿野子 鈴木重紀子 戸塚清市 富澤美代子 富所祐美子 内藤謙 永井寛治 永井裕子 中重友江 中島エイ子（記）中島源次郎 中嶋晴男 成瀬ケイ子 西島豊 貫井フツ江 野口市子 橋本智司 高崎信子 深沢日出次 深沢ヨシ子 堀島菊郎 星野悦子 星野トドリ 堀純子 前川章 増田香穂里 松井多喜 松田吉 村嶋光子 森田サチ子 森田裕子 矢口豊子 日本芳子 吉沢繁 吉田文江 吉田ヤス子 鎌賀裕子 渡部直江

## 凡 例

- 1 報告内容： 本第2集は3遺跡の古墳時代の調査成果を中心としたが、第1集掲載漏れの弥生時代成果、また第3・4集で扱う古代以降の遺構・遺物と縄文時代遺物も一部併せて報告した。また基本的に第2次調査（後述）までの成果である。
- 2 遺構表記： 番号は正観寺西原遺跡（SN）と小八木志志貝戸遺跡各区ではそれぞれ通し番号とし、菅谷石塚遺跡（SI）では種類ごとの番号とした。番号の後は、前者では号遺構と記し、後者は号溝のように表記した。使用方位は、座標北である。番号順の検索は、第5章遺構索引を利用されたい。
- 3 遺物表記： 番号は出土状態に関わらず4桁の通し番号を付与した。なお第1桁目は次のように種類で区分した。1（土器陶磁器）2（土製品）3（金属製品）4（有機物）また地元へ返却した近世の仏頭を除いて、全ては群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。種類順の検索は、第5章遺物索引を利用されたい。
- 4 略 称： 参考文献などの記載では、当事業団を群埋文と略称した。

# 目次

序 例言・凡例 抄録

1	序章	1
1-1	調査経過	2
1-2	周辺の環境と主要遺跡	10
1-3	調査に至る経過	12
	各遺跡全体図	4～9
2	考古学的検出内容	13
2-1	中世・近世	14
	中世墓地	16
	道路遺構	37
	その他の遺構 (屋敷・41 耕地・45) 遺構外遺物	59
2-2	古代	61
	道路遺構	61
	耕地	64
	集落	72
	遺構外遺物	76
2-3	古墳時代	77
	祭祀 (環濠祭祀遺構・79 その他祭祀遺構・87) 埋葬・93	
	集落 (中期竪穴住居・96 前期竪穴住居・113 掘立・ビット群・119)	
	耕地	121
	遺構外遺物	127
2-4	弥生時代補遺	130
	弥生遺構	132
	縄文弥生遺物	135
2-5	時期不明の遺構	137
	菅谷石塚遺跡	137
	小八木志志貝戸遺跡	139
3	自然科学調査	141
3-1	人骨・獣骨について (宮崎重雄)	142
3-2	須恵器胎土蛍光X線分析	150
3-3	プラント・オパール分析	154
3-4	花粉分析	163
3-5	樹種同定	167
3-6	補遺 弥生大型植物化石	173
3-7	自然科学調査成果まとめ	174
4	まとめと予察	175
4-1	中世墓地	176
4-2	「あづま道」と東山道	180
4-3	獣骨歯埋納	187
4-4	小八木志志貝戸遺跡出土の須恵器 (酒井清治)	188
4-5	県内の古墳出土の大甕について (入沢雪絵)	194
4-6	古墳時代中期の土師器について (深澤敦仁)	207
4-7	成果概要・summary	211
5	資料	213
	口絵案内	214
5-1	遺構索引	215
5-2	遺物索引	219
6	写真	229
	遺構写真 CD-ROM 使用方法	230
	遺物写真	231～248
7	付録 CD-ROM (遺構写真)	

# 第1章 序 章

## 1-1 調査経過

**遺跡区分** 本遺跡群は、群馬郡群馬町菅谷南部より高崎市小八木町の井野川に至る全長1.5キロの長距離に及んでいる。遺跡の区分は、次のように分かれる。

菅谷石塚遺跡	群馬郡群馬町菅谷南部（字石塚）
正観寺西原遺跡	高崎市正観寺町西部（字西原）
小八木志志貝戸遺跡	高崎市小八木町西部（字志志貝戸・西久保・ <sup>***</sup> 關添他）
小八木井野川遺跡	高崎市小八木町南西部（字井野川）

最も長大で密度の濃い小八木志志貝戸遺跡は、既存道路の位置より北から0～6区の呼称で区分した。なお3区のみは、他の区と連続しない西に離れた位置になる。

**調査に至る調整経過** 特に本書で報告する部分に関しては、昭和53・54年度に高崎市教育委員会が「小八木遺跡」として発掘調査を行っている。調査報告書「小八木遺跡Ⅰ・Ⅱ」がそれぞれ調査年度末には刊行されており、同調査地は本バイパス予定地と重なっている。

平成8年度になり、土木部から県教育委員会に、本地区に関する協議があったが、既に小八木志志貝戸遺跡6区から小八木井野川遺跡南端に至る500mの区間については協議がなされないまま工事が先行して行われている状況が見られた。このため平成10年度に、工事が行われていなかった東側車線部分に対する県教育委員会による再度の試掘調査が行われ、遺跡地であることが改めて確認されたため、小八木志志貝戸遺跡6区及び小八木井野川遺跡として発掘することになった。

また小八木志志貝戸遺跡2・4・5区は、現在の集落地と重なっており、家屋の移転の際に掘られた廃棄坑のため、遺構の残存状態は良くない状況であった。

（群馬県教育委員会文化財保護課）

**調査時期** 用地買収ならびに当事業団の他の発掘調査との関係で、本遺跡群の発掘調査は次のように多次に及ぶものになった。

第1次調査 平成8年12月1日～9年3月31日

菅谷石塚遺跡

第2次調査 平成9年4月1日～10年12月10日

正観寺西原遺跡

小八木志志貝戸遺跡0～3・6区

小八木井野川遺跡

第3次調査 平成11年4月1日～12月22日

小八木井野川遺跡

小八木志志貝戸遺跡4・5区

**調査内容** 各遺跡ならびに調査区での調査内容は、次のようにさまざまな条件と理由により異なっている。

菅谷石塚遺跡：全体を3面調査 北端は群馬町教育委員会の調査と重複

正観寺西原遺跡：一部2面調査 東側は高崎市教育委員会の調査と重複

小八木志志貝戸遺跡0区：単面調査 東側一部は高崎市教育委員会の調査と重複

同 1～3区：単面調査

同 4・5区：3面調査

同 6区：2面調査

小八木井野川遺跡：3面調査

（群馬県教育委員会文化財保護課）

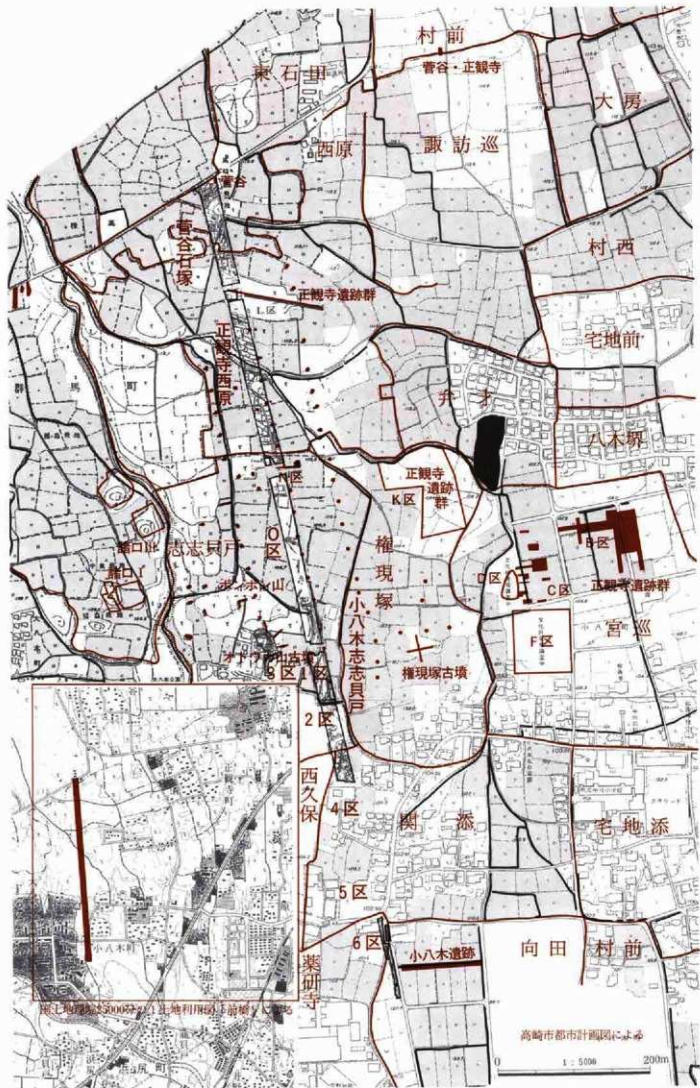
**現地説明会** 地元小八木町住民の遺跡への関心は大きく、次のように現地説明会を行った。

第1回 平成10年3月14・15日 小八木志志貝戸1・2区

第2回 同年12月10日 小八木志志貝戸6区

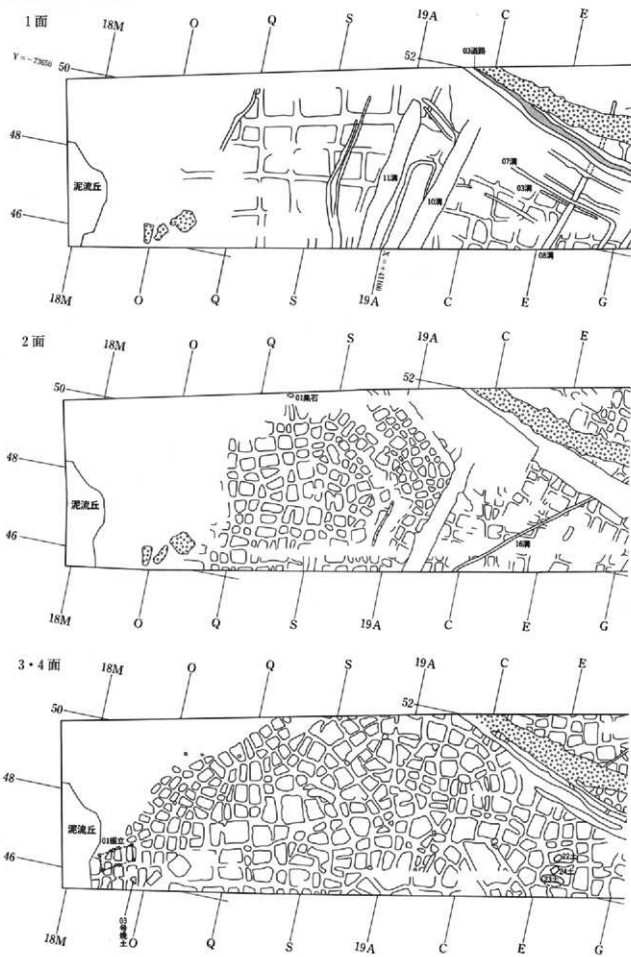
第3回 11年10月11日 小八木志志貝戸4・5区

**調査の方法・基本土層** 本遺跡群報告書第1集に記載済である。



第1章 序 章

菅谷石塚遺跡 全体図

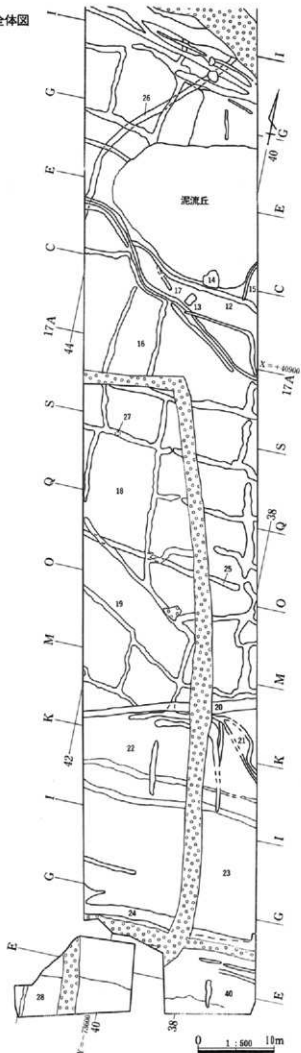
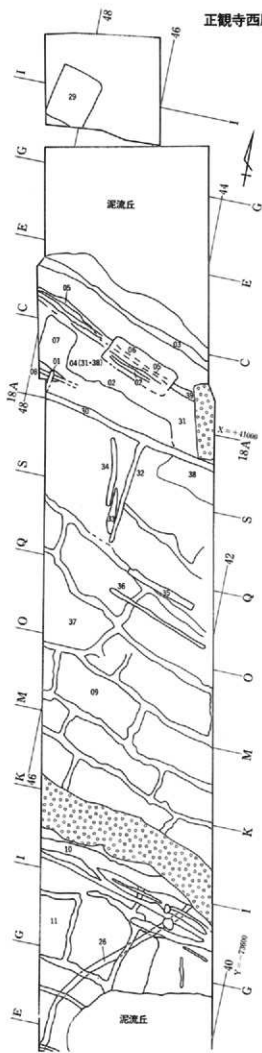




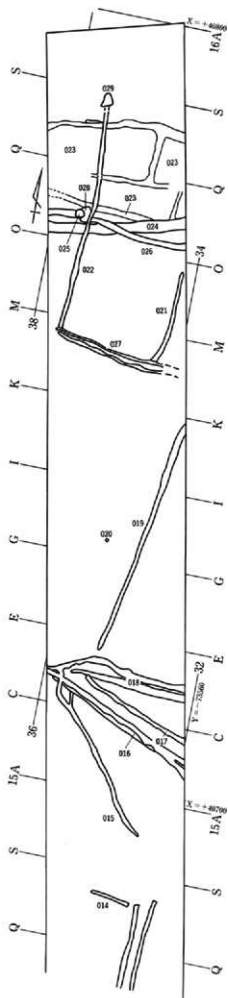
菅谷石塚遺跡 全体図



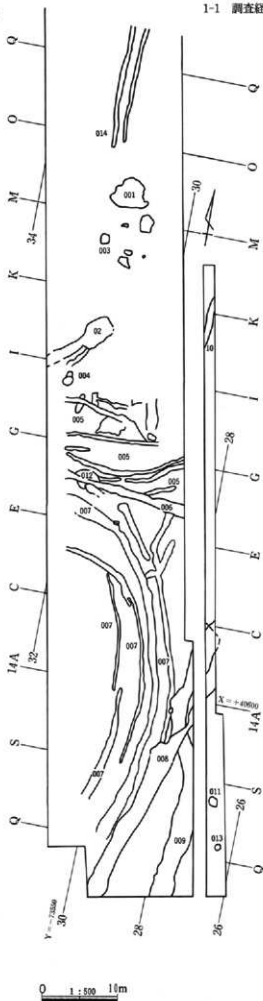
正観寺西原遺跡 全体図



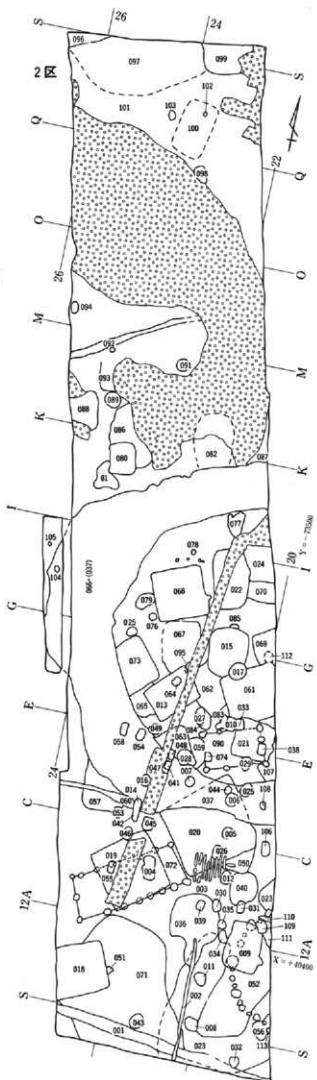
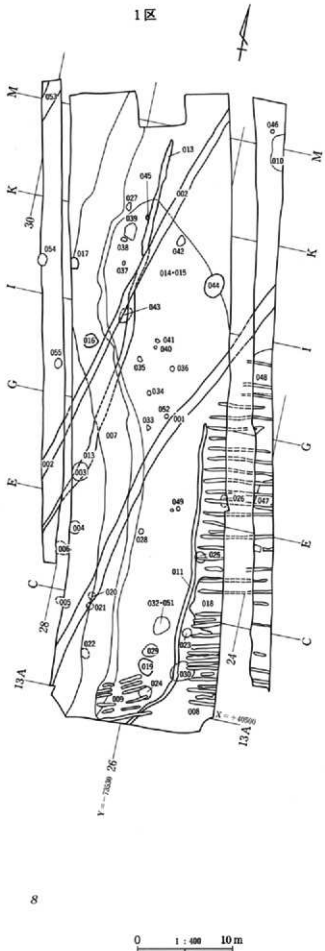
小八木志志貝戸遺跡 全体図1

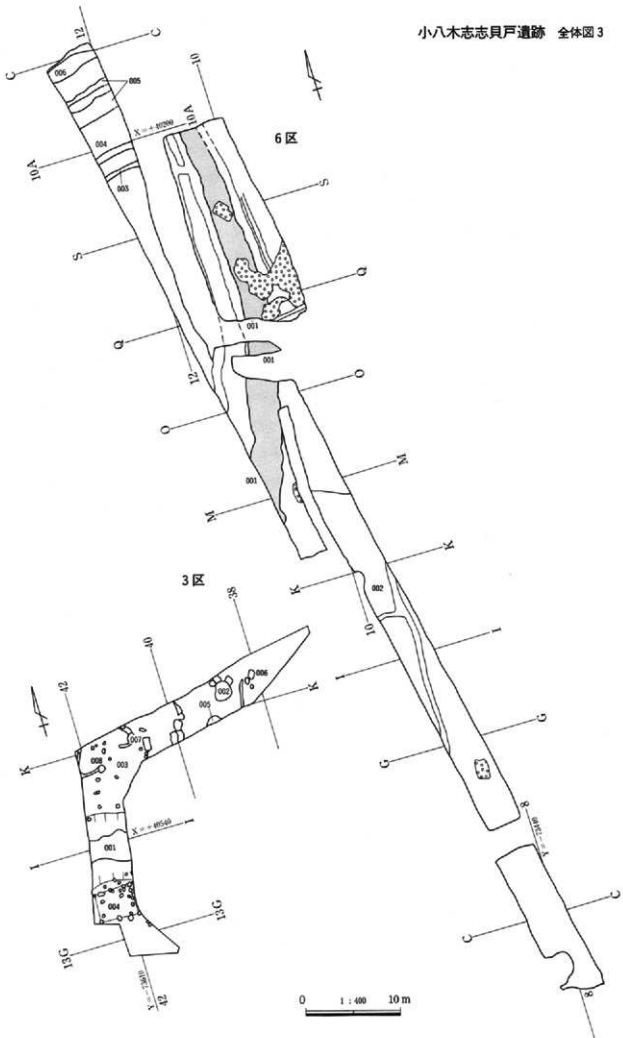


0区



1-1 調査経過





## 1-2 周辺の環境と主要遺跡

### 1 地理的位置

本遺跡群(1)は、榛名山南東麓の斜面が平地に変化する海拔110m前後に位置する。現利根川とその支流の烏川に挟まれたこの斜面一体は、海拔115mあたりから急速に傾斜度を弱めると共に、山中から流れてきた伏流水が湧き出る池が数多く見られる。また同時に有史前の榛名山の噴火により流出した瘤状の泥流丘も、そのような平地に点在している。

周辺の河川の大部分は、北西に当たる榛名山方向から南東流して平野部を運んでいるが、この地域ではまだ大規模な沖積平野は形成されておらず、地形的には旧利根川右岸に位置する前橋台地として区分されている。

### 2 歴史的特徴

そのような比較的水の得やすい平地であるため、本遺跡周辺での人々の生活は早くから始まっており、その足跡は無数に散在するといつて良い。特に6世紀代の榛名山の噴火による堆積物(Hr-FA)と1108年の浅間山噴火の軽石(As-B)は、概ね厚く堆積しており、それぞれの時代の生活を良く地中に残している。

同時に近年においては群馬県の二大都市前橋と高崎の中間地帯として人口集中は著しく、特に関越自動車道・上越新幹線・長野新幹線などの広域幹線交通網の建設や、さまざまな大小の開発が進められている。そのため発掘調査事例も膨大にふえており、その成果も多岐に広がっている。以下、本遺跡と直接関係の深いもののみを紹介する。

### 3 中世・近世の主な遺跡

近世の中心地は高崎城であるが、その前身は榛名山斜面部に位置する長野氏の本拠地箕輪城(4)である。そこを拠点として長野氏は群馬郡地域全体に大きな影響力を15・16世紀に持っていた。長野氏の関係する遺跡としては寺院址である和田山天神前遺跡(5)や下芝五反田遺跡(6)、また井野川右岸に点在する城館群として浜川高田遺跡(7)・北新波館跡(8)・矢島館跡(9)・寺ノ内遺跡(10)・大八木屋敷遺跡(11)・融通寺遺跡(12)などがある。一方、本遺跡の位置する井野川左岸から現利根川にかけては、熊野堂遺跡(13)・小八木井野川遺跡(2)・中尾遺跡(14)・吹屋遺跡(15)として蒼海城跡(16)が知られている。蒼海城跡は上野国府跡に形成された総社長尾氏の本拠とされる。

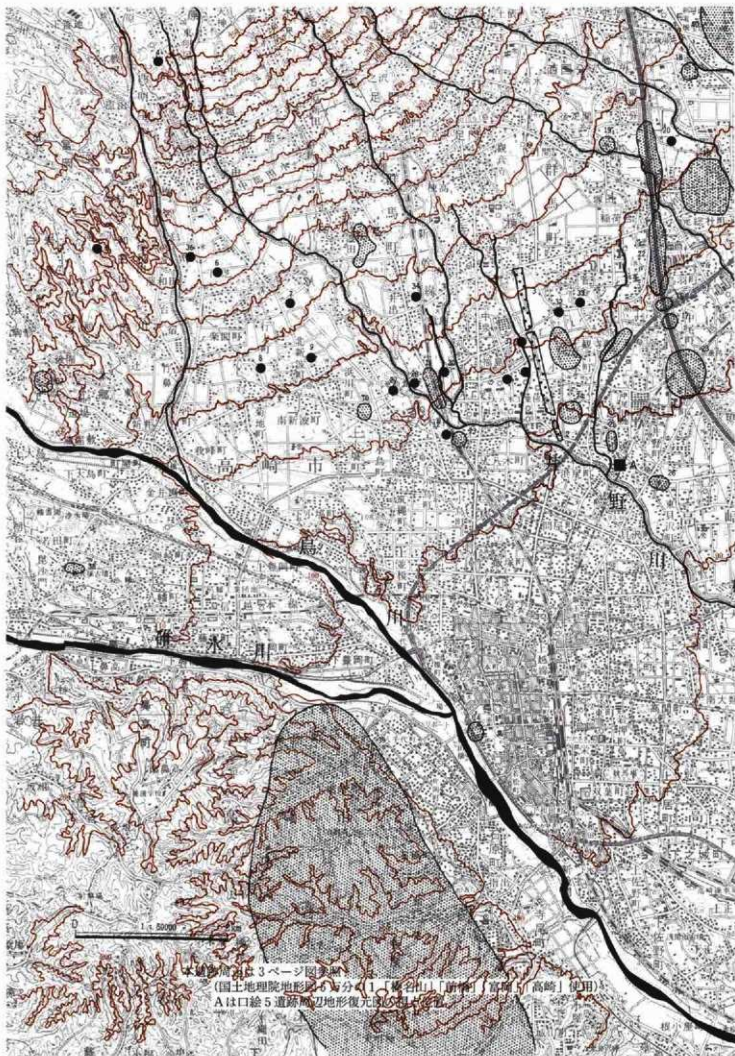
### 4 古代の主な遺跡

いまだ不明確な点も多いが、9世紀以降の上野国府(17)が前橋市元総社に置かれていた可能性は極めて高い。関連する上野国分僧寺(18)・国分尼寺(19)・僧寺尼寺中間地域遺跡(20)・烏羽遺跡(21)などがその西側に連なっている。7世紀に創建された山王寺(22)は北に位置する。また条里に関係する浅間 As-B 軽石で埋まった水田は、日高遺跡(23)で大規模に確認されている他に、本遺跡周辺では菅谷石塚遺跡(24)・小八木遺跡(25)・小八木重貝戸遺跡(26)・井野屋敷前遺跡(27)で発見がある。実際には群馬郡地域のかかり多くの場所で、同水田の発見は続いている。

なお本遺跡と関係する東山道関連遺構は、御布呂遺跡(28)・西下井出遺跡(29)・熊野堂遺跡(13)・西浦南遺跡(30)・福島飛地遺跡(31)・菅谷正観寺遺跡(32)・菅谷高貝戸遺跡(33)で確認されている。

### 5 古墳時代の主な遺跡

この時代の遺跡の分布も、本地域では極めて濃密である。本遺跡の北西には6世紀の豪族居館として知られる三ツ寺I遺跡(34)と、その居住者の墳墓群と考えられる保波田古墳群(35)が位置している。そしてさらに高度が上がった地点では、5世紀の土器祭祀遺跡である下芝天神遺跡(36)が榛名山白川左岸に、また6～7世紀の群集墳である奥原古墳群(37)が烏川左岸に展開している。南の碓氷川との間には、6世紀後半の前方後円墳である八幡観音塚古墳(38)があり、また碓氷川対岸の丘陵部には兼附・観音山丘陵須恵器古窯址群(39)が存在する。一方、北東側には7世紀代の古墳群である総社古墳群(40)があることも忘れてはならない。



本図は3ページ図より、(国土地理院地形図6万分(1「標名山」「新井」「高崎」使用)  
 Aは口線5道路周辺地形復元図(5/1)

## 1-3 調査に至る経過

群馬県主要地方道高崎渋川線は、県中央部を南北に縦貫して交通の要衝である高崎市と北部の拠点渋川市を結ぶ都市間連絡道路である。人口集中地帯の榛名山東麓平野部を通っているため、通勤通学など地域住民が日常生活に利用することが多く、生活基盤路線として位置づけられてきた。

しかし年々増加する交通量をまかなうには片側1車線と狭く、最近では朝夕の交通渋滞は日常的なものになるに至った。そのため、いくつかの交通隘路を迂回するバイパスの建設整備により、渋滞緩和が求められるようになった。

計画された高崎渋川線バイパスは、国道17号線高崎前橋バイパスの高崎市問屋町を起点として、現在の高崎渋川線の東側にほぼ平行して走っている。経路は、同市小八木町そして群馬郡群馬町の菅谷・冷水・金古、前橋市青梨子などを経て、渋川に至る。

このバイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和63年から群馬町教育委員会によって次のように行われてきた。

西三社免遺跡	群馬町榎高	昭和63年度調査
小池遺跡	同 引間	平成2年度調査
諏訪西遺跡	同 引間	平成5年度調査

その後平成5年度より、整備事業の主体者である県土木部道路建設課より早期供用開始を計る要請が県教育委員会文化財保護課にあり、平成6年度より当事業団が次のように発掘調査を行ってきた。

冷水村東遺跡	群馬町冷水	平成6年度調査
西国分新田遺跡	同 西国分	平成6年度調査
金古北十三町遺跡	同 金古	平成7～9年度調査

上記群馬町調査分より南側の高崎市小八木町を中心とする本遺跡群の地域については、平成8年度に県教育委員会による試掘調査が実施されて遺跡の存在が明白になった。そして本バイパス整備事業に伴う記録保存の発掘調査を、平成8年12月より当事業団が実施することになった。

しかしながら、前述のように本地域はすでに昭和50年代の土地改良事業が進展しており、それに伴うものを中心として高崎市教育委員会及び群馬町教育委員会による発掘調査も次のようになりに多く行われてきている(3頁図参照)。

正観寺遺跡群	高崎市正観寺町・小八木町北部	昭和53～56年度調査
	高崎市教育委員会「正観寺遺跡群Ⅰ～Ⅳ」	
同	同 小八木町北部	昭和54年度調査
	同 「中川遺跡」	
小八木遺跡	同 小八木町南部	昭和53～54年度調査
	同 「小八木遺跡Ⅰ・Ⅱ」	
諸口古墳群	群馬町中泉南部	昭和58～60年度調査
	群馬町教育委員会「西浦南遺跡」「諸口遺跡」	
菅谷遺跡	群馬町菅谷南部	昭和55年度調査
	群馬町教育委員会「菅谷遺跡」	
菅谷高貝戸遺跡	群馬町菅谷南部	昭和61年度調査
	群馬町教育委員会「推定東山道」	
福島飛地遺跡	群馬町菅谷南部	昭和61年度調査
	同 「推定東山道」	

これらの調査地はいずれも本道路予定地と最大でも200mの距離しかなく、全く重なっていた場合もあった。既調査遺跡の中に位置する本遺跡群の要調査地の設定は、試掘以前にすでに多くの情報が存在していたが、遺憾ながら明らかな遺跡地でも前述のように未調査のまま工事が先行してしまった部分も見られた。



## 第2章 考古学的検出内容

## 2-1 中世・近世

この時代の検出遺構は次のとおりである。

中世墓地	石塔墓	3基
	集石墓	4基
	土葬墓	22基
	火葬跡	1基
道路遺構		4カ所
屋敷関係遺構	屋敷跡	1カ所
	井戸	4基
	集石	2基
耕地関係遺構	畠	4カ所
	水田	1カ所
	水路	4条
	流路群	1カ所
	地境	8条
	溝	19条
	桶埋設坑	1基
その他土坑	9基	

中心的なものは、小八木志志貝戸2区に集中する中世墓群で計30基を検出した。この墓地は南側の同4区まで続く大規模なもので、合計して約100基前後になる。次に小八木志志貝戸6区では、中世の幹線道路遺構を検出した。他に中世と推定される道路遺構3カ所を菅谷石塚と小八木志志貝戸0区で確認した。

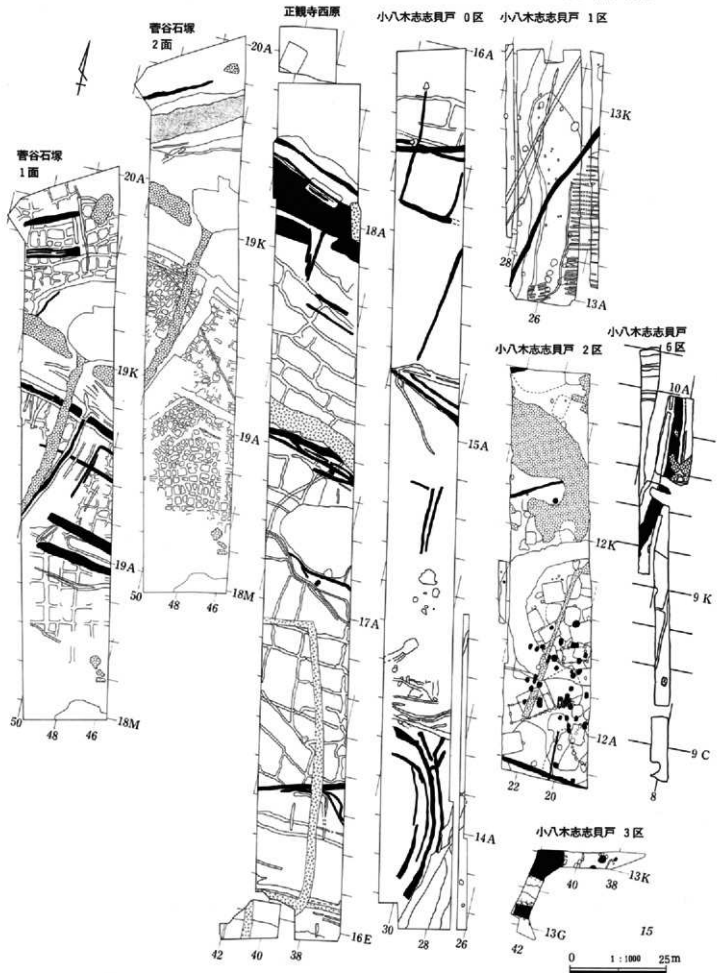
掘立・竪穴・井戸などで構成される中世屋敷跡1カ所を、小八木志志貝戸3区で検出している。また単独の井戸4基と集石（建物地業か）2基は、小八木志志貝戸2区の墓地周辺にあった。

耕地の中で確実なものは畠2カ所で、他の水田1カ所と畠2カ所は推定である。これらは近世の遺構で、大部分は正観寺西原で検出した。耕地に伴う水路は、各区で確認したが、正観寺西原のものが多く、また地境は小八木志志貝戸0区での検出がややまとまっている。性格不明の溝は、正観寺西原で少なからず見られた。

他に小八木志志貝戸0区で桶埋設土坑1基、そして性格不明の土坑多数を小八木志志貝戸2区で検出した。

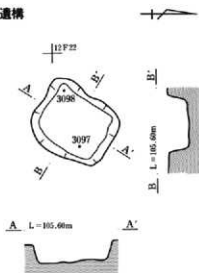
遺構外遺物としては、中世の中国陶磁片がやや多く見られた。また壊された中世墓からと思われる遺物も多かった。なお、今回の報告対象外である小八木志志貝戸4区の通称「ヤクシヤマ」（4-005号遺構）で検出した石仏頭部（2110）は、地元へ返却するために本書のこの部分に掲載した。

また、この時代の主要遺構群である中世墓地及び居館群については、第3集 中世編での報告が中心となる。



2-1-1 中世墓地

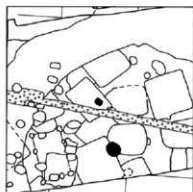
2-064号遺構



2-064号遺構



12F23



小八木志志貝戸2区064号遺構

【位置】 12E21グリッド

【形状】 方形 (0.9×0.7m) 土葬墓

【重複】 古墳時代竪穴住居013号埋土中に作られる。

【遺物】 埋土中より開元通宝・永業通宝出土。

【備考】 確認時に人歯検出したが遺憾ながら紛失。

小八木志志貝戸2区017号遺構

【位置】 12F20グリッド

【形状】 楕円形 底は長方形 (1.8×1.7m) 火葬跡

【重複】 古墳時代竪穴住居015・061号埋土中に作られる。

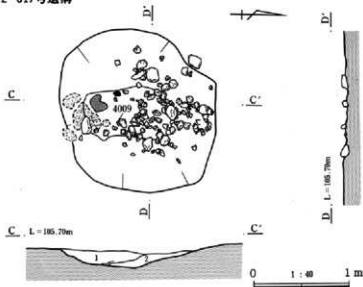
【土層】 1 灰黄褐色砂質土 下位に黒褐色灰 2 黒褐色土

【遺物】 埋土中より人骨 (4009) 出土。

【備考】 断面皿状で、南側を中心に炭化物・焼土・灰が部分的に散り、上には小礫が不定形に集中する。他の墓とは形状が異なる。

12G21

2-017号遺構



## 小八木志志貝戸2区027号遺構

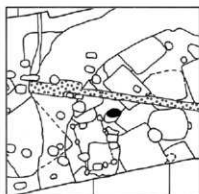
【位置】 12E21グリッド

【形状】 楕円形 底は長方形 (0.9×0.6m) 石塔墓

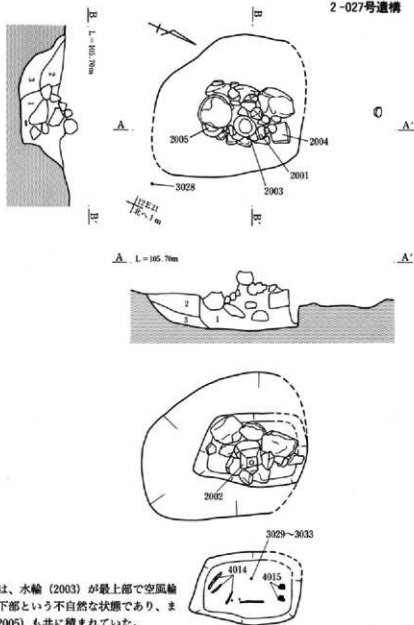
【重複】 古墳時代竪穴住居062号・縄文時代土坑084号埋土中に作られる。

【土層】 1 暗褐色砂質土 2 黄褐色土塊混在 3 暗褐色砂質土 4 淡褐色砂質土

【遺物】 1層中上位に大小の礫と共に、1層の掘り込みの形状に沿って五輪塔各部がばらばらに覆まれていた。底からは人骨・人歯と銅銭を検出。



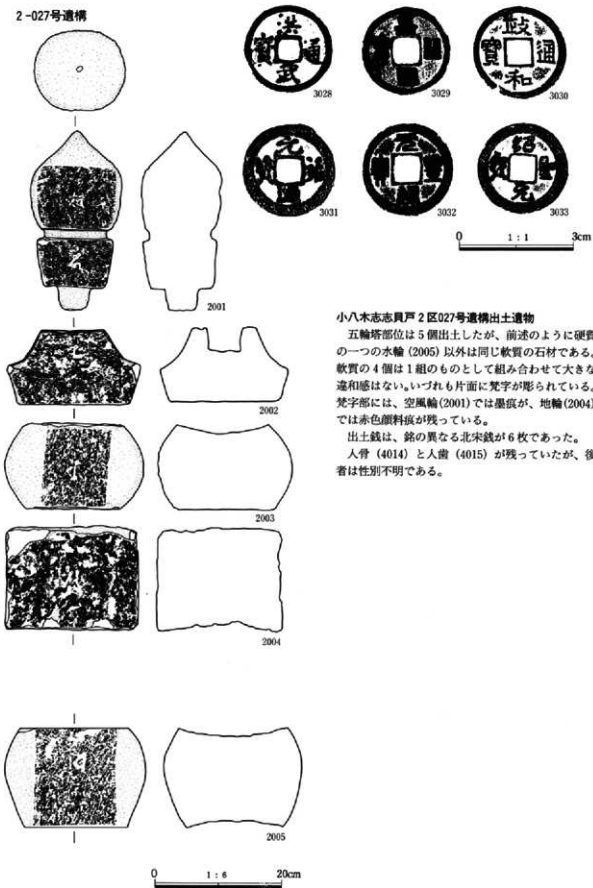
2-027号遺構



【備考】 五輪塔各部及び礫の積み方は、水輪 (2003) が最上部で空風輪 (2001) や火輪 (2002) が下部という不自然な状態であり、また石材の異なる別の水輪 (2005) も共に覆まれていた。そのため、この墓の上に一組の五輪塔が建っていた可能性はあるが、倒壊後周辺の五輪塔部位と共に片付けられた状態と考えられる。

0 1 : 40 1 m

2-027号遺構

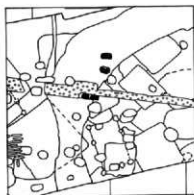


小八木志志貝戸2区027号遺構出土遺物

五輪塔部位は5個出土したが、前述のように硬質の一つの水輪(2005)以外は同じ軟質の石材である。軟質の4個は1組のものとして組み合わせて大きな違和感はない。いづれも片面に梵字が彫られている。梵字部には、空風輪(2001)では墨痕が、地輪(2004)では赤色顔料痕が残っている。

出土銭は、銘の異なる北宋銭が6枚であった。

人骨(4014)と人歯(4015)が残っていたが、後者は性別不明である。



## 小八木志志貝戸 2区058号遺構

【位置】 12D22グリッド

【形状】 長方形(約1.1×0.7m)  
土葬墓

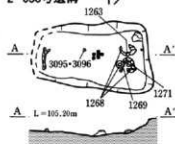
【重複】 古墳時代堀066号埋土中に作られる。

【遺物】 北側に集中してかわらけ4点が見られた。中央で人歯(4040女壮年期)、南側で鹿角(4039長20cm)が残る。

【備考】 066号の調査中に確認したため残存状況は不明

良。特に南側の壁は確認できなかったが、鹿角は足の位置にあたり、この遺構の遺物である。

## 2-058号遺構



## 小八木志志貝戸 2区054号遺構

【位置】 12D22グリッド

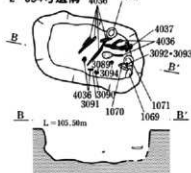
【形状】 小判形(1.0×0.5m) 土葬墓

【重複】 古墳時代堀066号埋土中に作られる。

【遺物】 北側でかわらけ5点・銅銭と共に人歯(4037性別不明壮年～熟年期前半)・人骨(4036)が見られた。

【備考】 残存状態はやや良好。

## 2-054号遺構



## 小八木志志貝戸 2区041号遺構

【位置】 12D21グリッド

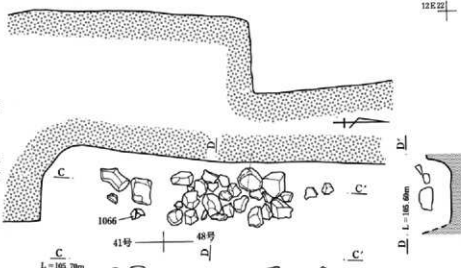
【形状】 小判形(0.8×0.5m) 集石墓

【重複】 古墳時代堀066号埋土中に作られる。上位水路建設破壊。

【土層】 2 黒褐色砂質土

【遺物】 磔の下位よりかわらけ2枚及び人骨(4028)・人歯(4029女壮年期)検出。

【備考】 上位が壊されているため磔の状態が当初のものかは不明。



## 小八木志志貝戸 2区048号遺構

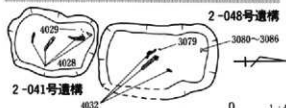
【位置】 12D21グリッド

【形状】 小判形(1.1×0.6m) 土葬墓

【重複】 古墳時代堀066号埋土中に作られる。上位水路建設破壊。

【土層】 1 黒褐色砂質土 2 同上 3 暗褐色砂質土

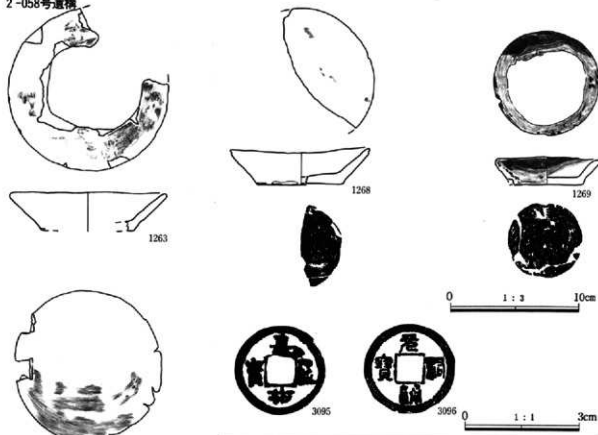
【遺物】 磔下位より人骨(4032)・人歯(4033女壮年～熟年期前半)と銅銭8枚検出。



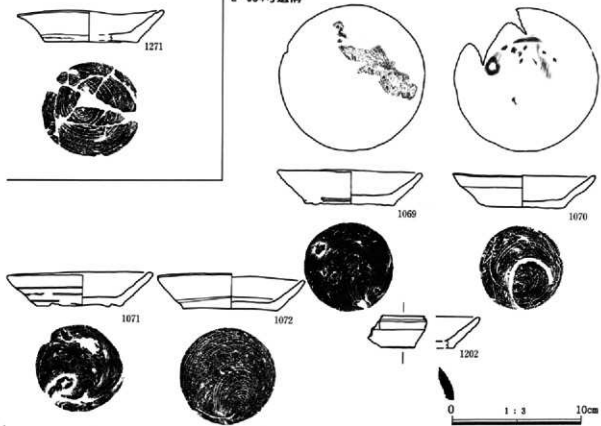
## 2-041号遺構

0 1:40 1m

2-058号遺構

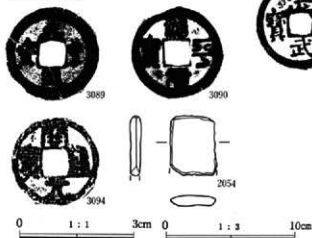


2-054号遺構





## 2-054号遺構



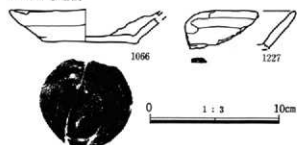
## 小八木志志貝戸 2区058号遺構出土遺物

かわらけ皿(1263・68)・片口皿(1271)・小皿(1269)と北宋銭2枚(3095・3096)出土。小皿は最も濃密に油煙痕が残る。

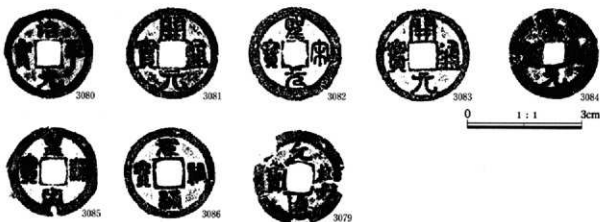
## 小八木志志貝戸 2区054号遺構出土遺物

かわらけ皿5点(1069～72・1202)と開元通宝(3094)・北宋銭3枚(3089・90・93)・洪武通宝(3091)・不明銭(3092)また砥石(2054)出土。

## 2-041号遺構



## 2-048号遺構



## 小八木志志貝戸 2区041号遺構出土遺物

かわらけ皿2点(1066・1227)出土。

## 小八木志志貝戸 2区048号遺構出土遺物

開元通宝2枚(3081・83)・北宋銭5枚(3079・80・82・85・86)・不明銭(3084)出土。

第2章 考古学的検出内容

小八木志志貝戸 2区028号遺構

【位置】 I2D21グリッド

【形状】 楕円形 (1.4×1.1m) 石塔基

【重複】 古墳時代竪穴住居063号遺構埋土中に作られる。

【土層】 1 黒褐色砂質土 2 黒色砂質土

【遺物】 上位に地輪を除く五輪塔各部が一列に並び、下位よりかわらけ片口皿 (1065) と銅銭 6 枚検出。

【備考】 当初底まで掘りきることができず、竪穴住居調査時に銅銭などを検出した。五輪塔各部は同一の石材であり、ここに建てられていた可能性はあるが、水輪の欠如などからもすでに大きく動かされている。火輪 (2007) は不鮮明だったが、他は各部に梵字が彫られ、地輪 (2008) では周辺に円形の墨跡があった。  
銅銭は北宋銭と明銭の組み合わせである。



I2D21

小八木志志貝戸 2区007号遺構

【位置】 I2D21グリッド

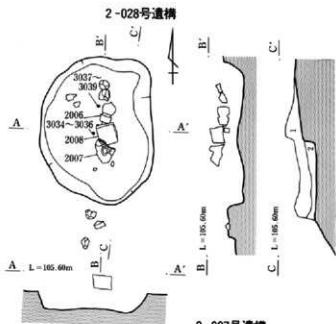
【形状】 小判形 (0.9×0.7m) 土葬墓

【重複】 古墳時代竪穴066号遺構埋土中に作られる。

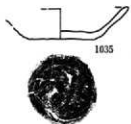
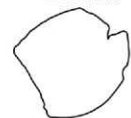
【土層】 1 黒褐色砂質土 2 黒褐色砂質土 褐色粘質土塊含み締まりなし 3 黒褐色砂質土

【遺物】 中位よりかわらけ片皿 (1035) と銅銭 3 枚、下位より人骨 (4005)・人歯 (4006 女壮年後半～熟年期前半) 検出。

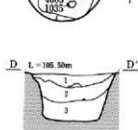
【備考】 当初円形に近く掘ったが、後に長方形プランであることが判明した。掘り込みの深さは本来のものに近いだろう。

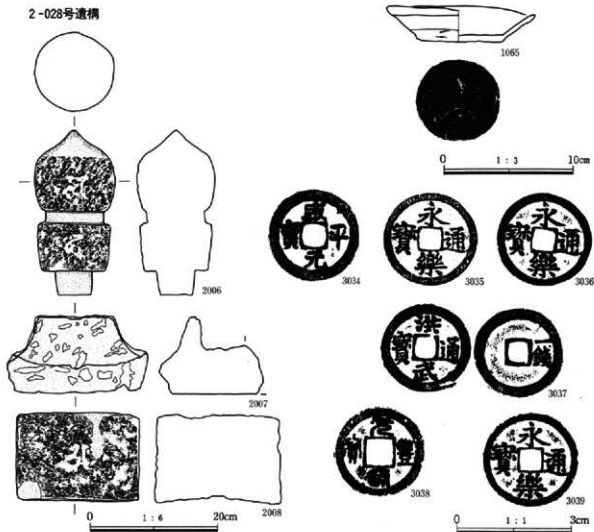


2-007号遺構



2-007号遺構





#### 小八木志志貝戸 2区010号遺構

【位置】 12E20グリッド

【形状】 小判形 (1.1×0.8m) 土葬墓

【重複】 古墳時代竪穴住居061号遺構埋土中に作られ、東の033号との関係不明。

【遺物】 下位よりかわらけ皿 (1036・37) と銅銭4枚検出。

【備考】 掘り込みの深さは本来のものに近いだろう。銅銭はいづれも北宋銭。

#### 小八木志志貝戸 2区033号遺構

【位置】 12E20グリッド

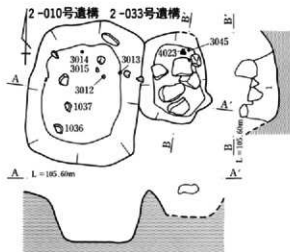
【形状】 小小判形 (0.8×0.5m) 築石墓

【重複】 古墳時代竪穴住居021号遺構埋土中に作られ、西の010号との関係不明。

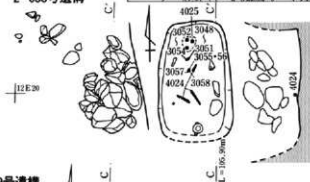
【土層】 1 暗褐色砂質土 ローム塊混在

【遺物】 上位に礫が敷いた状態で見られ、下位よりかわらけ皿 (1194) と銅銭1枚、人歯 (4023 女思春期～青年期) 検出。

【備考】 竪穴住居と共に調査したため東側のプランはやや不詳だが、規模が小さいことは間違いない。礫群は東側の038号とも似ている。

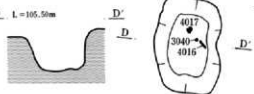


2-038号遺構



2-029号遺構

D L = 105.50m



小八木志志戸2区038号遺構

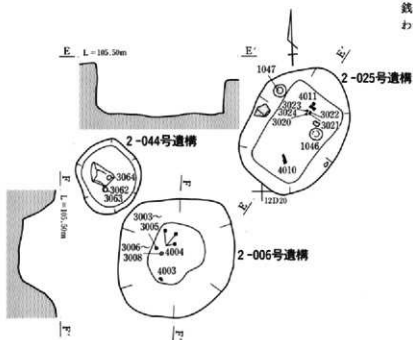
【位置】 12D19グリッド

【形状】 小判形(1.2×0.7m)集石基

【重複】 古墳時代竪穴住居021号遺構埋土中に作られる。

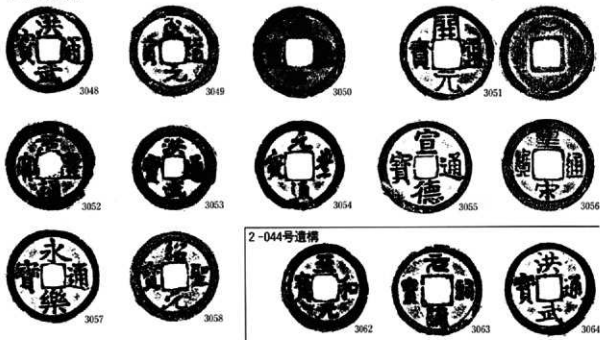
【遺物】 中位より上に土を敷き詰める。下位より人骨(4024)と銅銭11枚検出。

【備考】 雑群はしっかり積まれている。銅銭は唐銭1枚・北宋銭6枚・明銭4枚の組み合わせ。



0 1:80 1m

## 2-038号遺構



## 2-044号遺構

## 小八木志志貝戸 2区029号遺構

【位置】 12D20グリッド

【形状】 小小判形 (0.7×0.4m) 土葬墓

【重複】 なし

【遺物】 下位より人骨 (4016)・人歯 (4017 女壮年期) と銅銭 (3040) 検出。

【備考】 底は70×40cmほどの大きさで033号と同様に小型である。

## 小八木志志貝戸 2区044号遺構

【位置】 12D20グリッド

【形状】 小円形 (0.6×0.6m)

【重複】 古墳時代期66号遺構埋土中に作られる。

【遺物】 中位の自然礫の周辺より銅銭3枚 (3062~64) 検出。

【備考】 規模が小さく形状が円形で大きな自然礫1個があることから、墓本体とは考えにくい。銅銭は性格は不明。

## 小八木志志貝戸 2区006号遺構

【位置】 12C20グリッド

【形状】 楕円形 (0.7×0.6m) 土葬墓

【重複】 古墳時代期066号遺構埋土中に作られる。

【遺物】 下位より人骨 (4003)・人歯 (4004 女壮年期) と銅銭6枚検出。

【備考】 円形に近く掘ったが、長方形プランの可能性もある。銅銭は北宋銭と明銭の組み合わせ。

## 小八木志志貝戸 2区025号遺構

【位置】 12D19グリッド

【形状】 長方形 (1.0×0.6m) 土葬墓

【重複】 古墳時代期066号遺構埋土中に作られる。

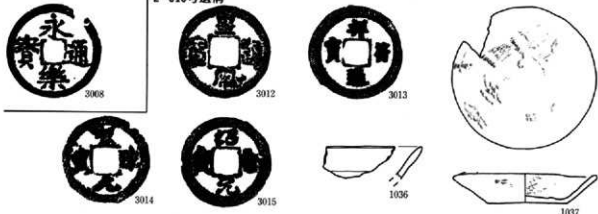
【遺物】 上位より肥前青磁鉢片 (1377)、下位よりかわらけ皿 (1046・47) と銅銭5枚及び人骨 (4010)・人歯 (4011 女壮年期) 検出。

【備考】 底の規模は100×70cmで掘り方は箱形。主軸方向は北北東。

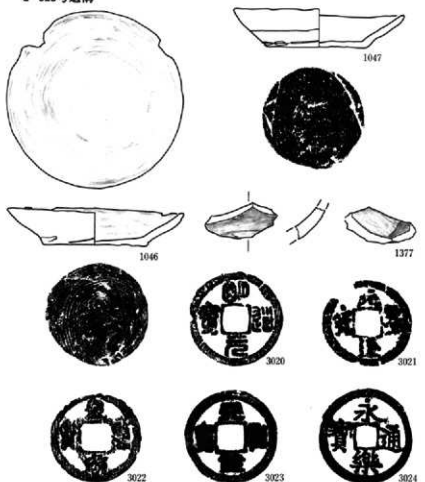
2-006号遺構



2-010号遺構



2-025号遺構



2-029号遺構

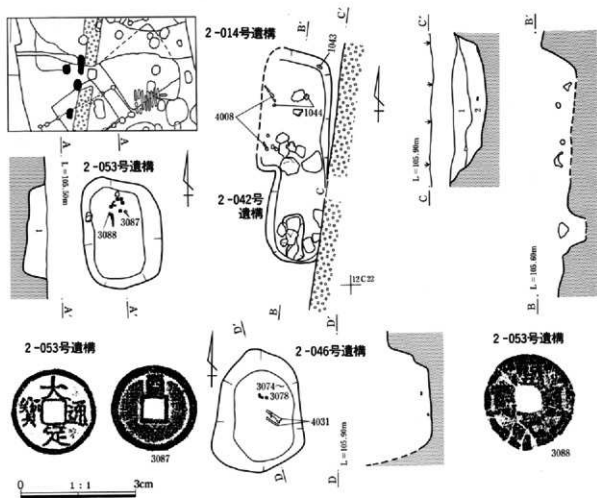


2-033号遺構



0 1:1 3cm

0 1:3 10cm



2-053号遺構

2-046号遺構

2-053号遺構

## 小八木志志貝戸 2区014号遺構

【位置】 12C22グリッド

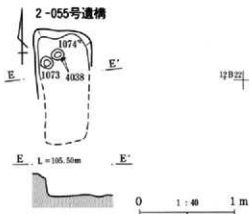
【形状】 長方形 (約1.1×0.7m) 土葬墓

【重複】 南側で042号を壊す。上部は水路で壊される。

【土層】 1 褐色砂質土 2 褐色砂質土 As-B 軽石混入多い

【遺物】 南側中心に中位に礫の集中が見られ、下位よりかわらけ皿 (1043-44) と人骨 (4008) 検出。

【備考】 礫は北側にも続いていた可能性がある。かわらけ皿は同一個体か。



2-055号遺構

## 小八木志志貝戸 2区042号遺構

【位置】 12C22グリッド

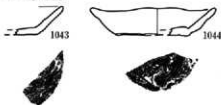
【形状】 長方形 (約0.9×0.5m)

【重複】 北側で014号に壊される。上部は水路で破壊。

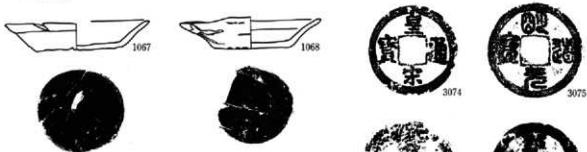
【遺物】 南側で礫が散っている。

【備考】 礫の下から浅いピット検出。確実に墓である証拠はないが、礫のあり方は014号にも似る。

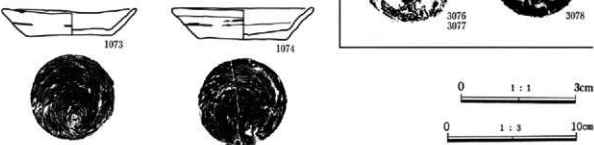
2-014号遺構



2-046号遺構



2-055号遺構



0 1 : 1 3cm

0 1 : 3 10cm

小八木志志貝戸2区053号遺構

【位置】 12C22グリッド

【形状】 小判形 (1.0×0.5m) 土葬墓

【重複】 弥生時代竪穴住居057号遺構埋土中に作られる。

【土層】 1 黒褐色砂質土

【遺物】 下位より銅銭2枚 (3087, 88)、人骨 (4034) と人歯 (4035性別不明壮年期?) 検出。

【備考】 銅銭は開元通宝と金銭の大定通宝。

小八木志志貝戸2区046号遺構

【位置】 12B22グリッド

【形状】 小判形 (1.0×0.6m) 土葬墓

【重複】 古墳時代竪穴住居019号遺構埋土中に作られる。上部一部水路で破壊。

【遺物】 下位よりかわらけ皿 (1067・68) と銅銭5枚、人骨 (4031) 検出。

【備考】 南側は竪穴住居と同時の調査で立ち上がり不明だが、底は残り良い。銅銭は北宋銭と不明銭。

小八木志志貝戸2区055号遺構

【位置】 12A22グリッド

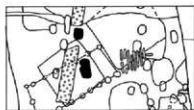
【形状】 長方形か (0.5×0.5m以上) 土葬墓

【重複】 古墳時代竪穴住居019号遺構埋土中に作られる。

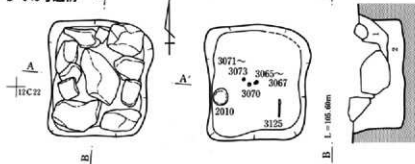
【遺物】 下位でかわらけ皿 (1073・74) と人歯 (4038女壮年期) 検出。

【備考】 竪穴住居調査時に発見したため、遺物のない南半の状況は不明。幅は50cmでやや小規模。





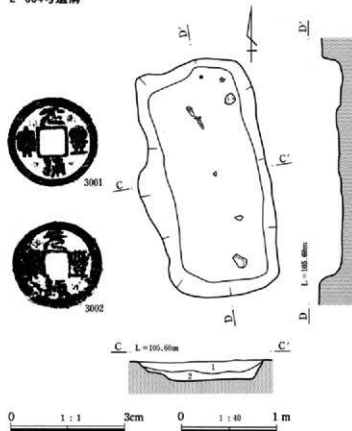
2-045号遺構



A. L = 105.60m



2-004号遺構



C. L = 105.60m

0 1:1 3cm 0 1:40 1m

## 小八木志志貝戸2区045号遺構

【位置】12B21グリッド

【形状】箱形 (1.1×0.9m) 集石墓

【重複】上部は水路で破壊。

【土層】1 黒褐色砂質土 地山塊混在 2 黒褐色砂質土

【遺物】礎下より銅銭9枚・鉄刀子(3125)・凹石(2010)と人歯(4030)性別不明青年～壮年期)検出。

【備考】ここで検出した礎は他の1基のものよりはるかに大きく、中央の1個を除いて壁に沿って並んでいる。しかし各礎の下はそれほど硬化していないため、箱形の掘り方を埋めた後にこれらの礎をそのままの形で並べたと思われる。箱形は唯一であり、また銅銭・かわらけ以外の副葬品例も他にない。底には浅いピットがあった。銅銭は北宋銭7枚・明銭1枚・不明1枚の組み合わせ。

## 小八木志志貝戸2区004号遺構

【位置】12A21グリッド

【形状】長方形 (2.2×0.9m) 土葬墓

【重複】古墳時代竪穴住居019号遺構埋土中に作られる。

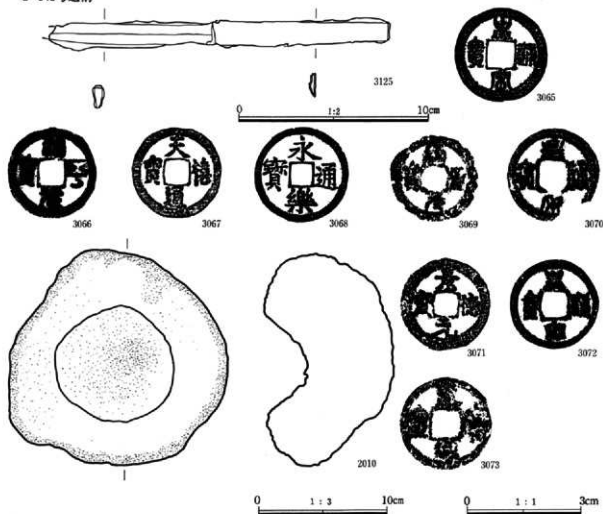
【土層】1 において黄褐色砂質土 2 灰黄褐色砂質土 地山塊混在

【遺物】下位より銅銭2枚(3001・02)、人骨(4001)と人歯(4002)男? 壮年～熟年期)検出。

【備考】遺物は北側のみであり竪穴埋土中であつたため、長さはもう少し短かった可能性がある。銅銭は北宋銭。

第2章 考古学的検出内容

2-045号遺構



小八木志志貝戸2区039号遺構

【位置】 12A20グリッド

【形状】 小判形 (1.0×0.6m) 土葬墓

【重複】 縄文時代敷石住居036号遺構埋土中に作られる。

【土層】 1 黒褐色砂質土 ローム塊混在

【遺物】 下位より銅銭3枚 (3059～61)、人骨 (4026) と人歯 (4027 女社年齢) 検出。

【備考】 敷石住居調査時の検出のため、残存状態は良くない。銅銭は北宋銭と明銭。

小八木志志貝戸2区030号遺構

【位置】 12A20グリッド

【形状】 小判形 (1.0×0.7m) 土葬墓

【重複】 縄文時代敷石住居036号遺構埋土中に作られる。

【遺物】 東側上位にかわけ皿3枚 (1054～56)、中位で岡2枚 (1052・53)、下位より人骨 (4018) 検出。他に埋土中よりさらに同1枚 (1226) があつた。

【備考】 かわけは初期埋没時に投入されたような出土状態である。

小八木志志貝戸2区035号遺構

【位置】 12A19グリッド

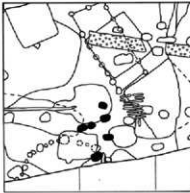
【形状】 楕円形 (0.7×0.5m) 土葬墓

【重複】 なし。

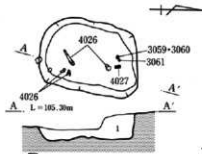
【土層】 1 オリーブ褐色砂質土 ローム粒含む 2 オリーブ褐色砂質土 ローム粒多

【遺物】 西側上位でかわかけ皿2枚 (1062・63)、東側中位でかわかけ片口皿1枚 (1064) と銅銭2枚 (3046・47) 検出。

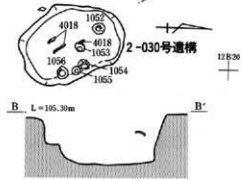
【備考】 規模形状はやや特殊だが遺物の種類から、墓の可能性はある。銅銭は唐・北宋銭。



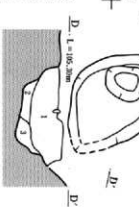
2-039号遺構



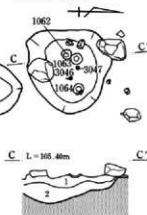
2-030号遺構



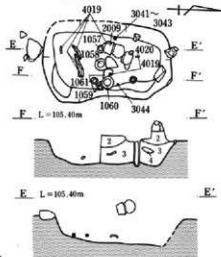
2-034号遺構



2-035号遺構



2-031号遺構



## 小八木志志貝戸2区034号遺構

【位置】 I2T19グリッド

【形状】 不定形 (1.2×0.7m)

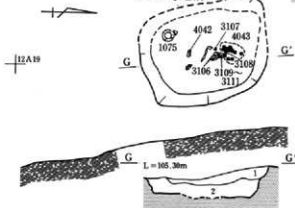
【重複】 古代竪穴住居009号遺構埋土中に作られる。

【土層】 1 暗褐色砂質土 2 黒褐色砂質土 3 褐色砂質土  
ローム粒混在

【遺物】 なし

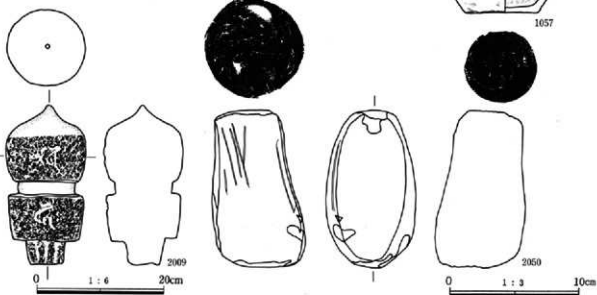
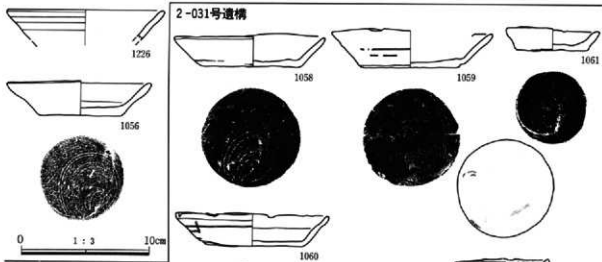
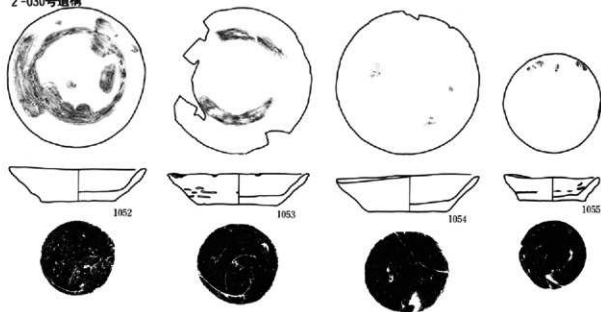
【備考】 性格不明

2-109号遺構

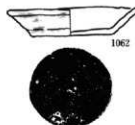


0 1:40 1 m

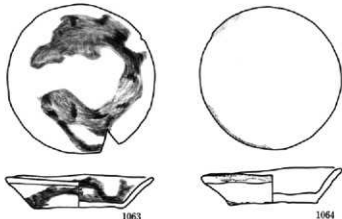
2-030号遺構



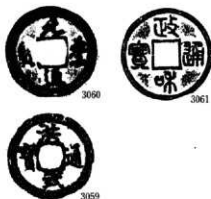
## 2-031号遺構



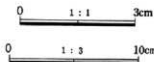
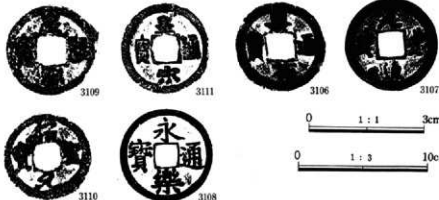
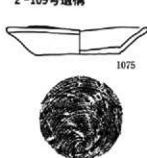
## 2-035号遺構



## 2-039号遺構



## 2-109号遺構



## 小八木志志貝戸2区031号遺構 (図31頁)

【位置】12A19グリッド 【形状】小判形 (1.1×0.6m) 石塔基 【重複】縄文時代土坑040号遺構埋土中に作られる。

【土層】1 黒褐色砂質土 2 暗褐色砂質土 3 褐色砂質土 ローム塊混在 4 黒褐色粘質土

【遺物】上位に五輪塔空風輪 (2009)、埋土中より砥石 (2050)、下位より銅銭4枚 (3041~44)、かわらけ皿 (1058~60)・同小皿 (1057・61)と人骨 (4019)と人歯 (4020性別不明青年期) 検出。

【備考】五輪塔は空風輪のみであるが、本来ここに建てていたものの残りと考えることもできる。北東側で細い竹が垂直に立っていた。銅銭は唐・北宋銭。

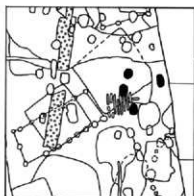
## 小八木志志貝戸2区109号遺構 (図31頁)

【位置】12A19グリッド 【形状】小判形 (1.1×0.7m?) 土葬墓 【重複】古墳古代竪穴住居009-111号遺構埋土中に作られる。

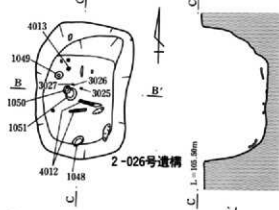
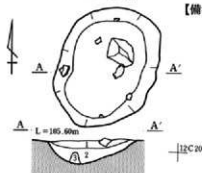
【土層】1 暗褐色砂質土 2 黒褐色砂質土

【遺物】下位よりかわらけ片口皿 (1075)・銅銭6枚 (3106~11)と人骨 (4042)・人歯 (4043女壮年期) 検出。

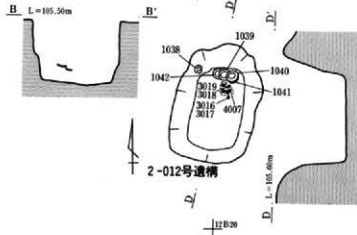
【備考】西側は竪穴調査時の検出のため不明。銅銭は北宋銭と明銭。



2-005号遺構



2-026号遺構



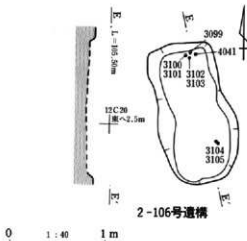
2-012号遺構

小八木志志貝戸2区005号遺構

- 【位置】 12C20グリッド
- 【形状】 楕円形 (1.1×0.8m)
- 【重複】 古墳時代竪穴住居020号遺構埋土中に作られる。
- 【土層】 1 黒褐色砂質土 A>B 軽石多 2 黒褐色粘質土 褐色粘質土塊多  
3 黒褐色粘質土 ローム塊含む
- 【遺物】 なし
- 【備考】 墓ではないが、位置や規模から何らかの関係が想定される。

小八木志志貝戸2区026号遺構

- 【位置】 12B20グリッド
- 【形状】 小判形 (1.0×0.7m) 土葬墓
- 【重複】 近世墓003号より古い。古墳時代竪穴住居020号埋土中に作られる。
- 【遺物】 下位よりかわらけ皿 (1048・51)・同小皿 (1049・50)・銅銭3枚 (3025~27) と人骨 (4012)・人歯 (4013 男壮年期) 検出。
- 【備考】 掘り込みは70cm近くあり本来のものに近い。銅銭は北宋銭。



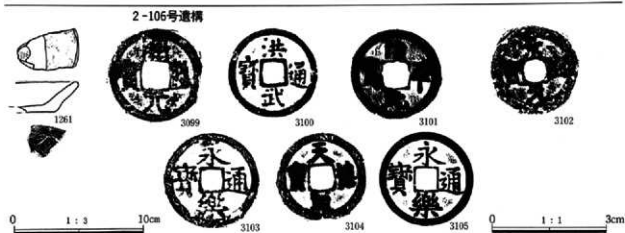
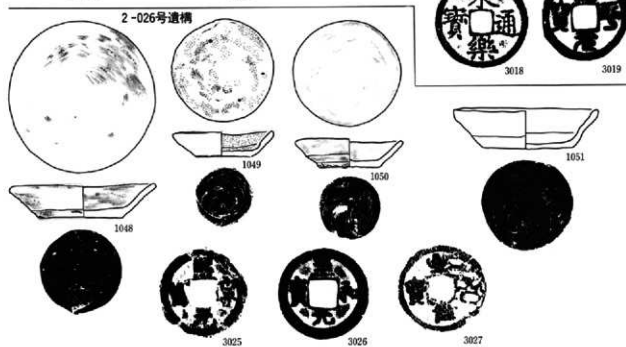
2-106号遺構

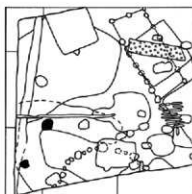
小八木志志貝戸2区012号遺構

- 【位置】 12B19グリッド
- 【形状】 小判形 (0.9×0.5m?) 土葬墓
- 【重複】 近世墓03号より古い。
- 【遺物】 下位北端よりかわらけ皿 (1039~41)・同片口皿 (1042)・同小皿 (1038)・銅銭4枚 (3016~19) と人歯 (4007女壮年期) 検出。
- 【備考】 歯は超小型で体格も同様のため、掘り込みは小さいか。銅銭は明銭と北宋銭。

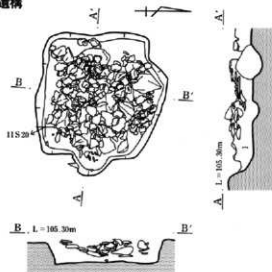
小八木志志貝戸2区106号遺構

- 【位置】 12B19グリッド
- 【形状】 長方形 (1.4×0.5m) 土葬墓
- 【重複】 なし
- 【遺物】 下位よりかわらけ皿 (1261)・銅銭7枚 (3099~105) と人歯 (4041女青年期後半~壮年期) 検出
- 【備考】 主軸方向は北北西をとる。銅銭は唐・北宋銭と明銭。





2-008号遺構



小八木志志貝戸2区008号遺構

【位置】 11S20グリッド

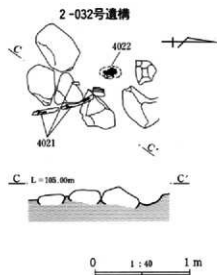
【形状】 方形 (1.2×1.2m)

【重複】 縄文時代列石023号遺構埋土中に作られる。

【土層】 1 暗褐色砂質土 As-B 軽石含む

【遺物】 なし

【備考】 扁平な角礫をほぼ掘り方全体に約20cmの厚さで敷き詰める。西側下の大きな礫は縄文だろう。単独のため石塔の地業か。石下には浅いピットがあったのみである。



小八木志志貝戸2区032号遺構

【位置】 11R19グリッド

【形状】 不明 土葬墓

【重複】 近世溝001号に切られ、縄文時代列石023号遺構埋土中に作られる。

【遺物】 覆土中から鉄釘 (3124)、下位から人骨 (4021)・人歯 (4022性別不明壮年期) 検出。

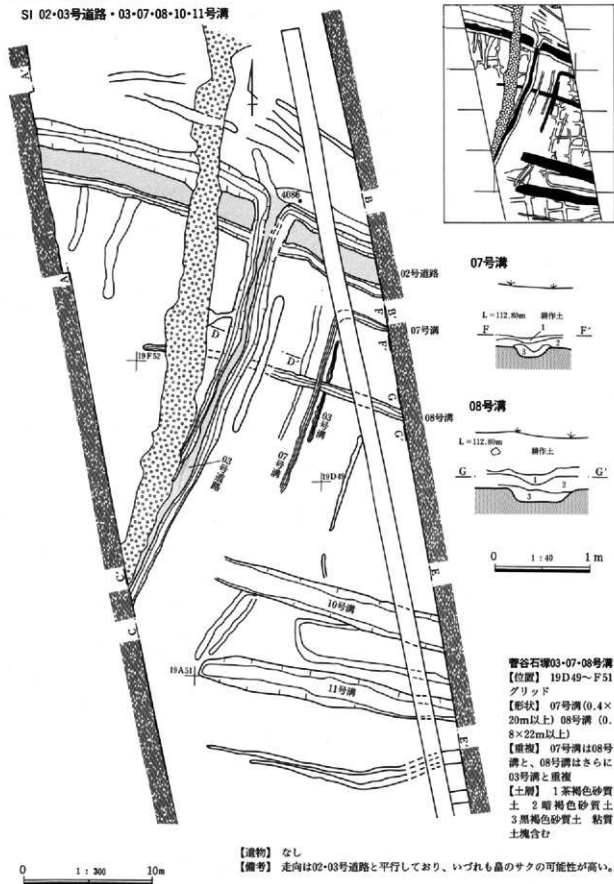
【備考】 縄文列石調査中に確認。掘り方不明。石は縄文列石のもので、そこまで掘って埋葬したものの。釘は01号のものかもしれない。





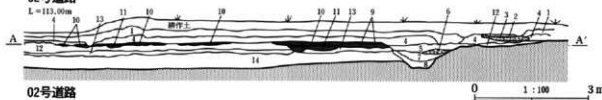
## 2-1-2 道路遺構

SI 02・03号道路・03・07・08・10・11号溝

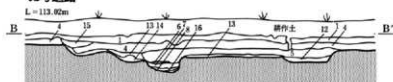


## 第2章 考古学的検出内容

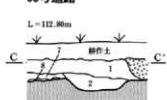
### 02号道路



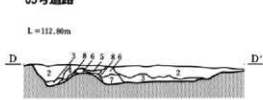
### 02号道路



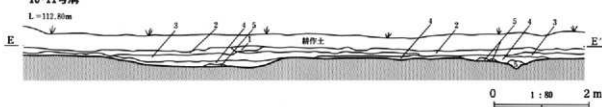
### 03号道路



### 03号道路



### 10・11号溝



### 菅谷石塚02号道路

【位置】 19G48～I53グリッド 【形状】 両側溝弧状 (2.0×29m以上)

【重複】 3号道路と交差

【土層】 1暗褐色砂質土 2灰黄褐色砂 3にぶい黄褐色砂質土 硬化(路面1) 4灰褐色砂質土 5褐色砂質土 6灰褐色砂質土 硬化(路面2) 7灰褐色砂質土 8黒褐色砂質土 9灰黄褐色砂 10にぶい黄褐色砂質土 As-B純層硬化(路面3) 11同前 硬化土弱い 12にぶい黄褐色シルト質土 Hr-F多 13黒褐色粘質土 14黒色粘質土 15暗褐色砂質土 16明黄褐色粘質土

【遺物】 北側溝外側で馬歯(4086)検出。

【備考】 西北西・東南東方向に走って両側溝を持つが、南側溝は極めて浅い。浅間A-B軽石降下面を固めて路面とするが、南側溝の存在も含めて路面幅は不均一。その後2回規模の小さな路面が見られ、最終的には土地改良前の農道まで続く。馬歯は4層下面で見られたが、性格不明。

### 菅谷石塚03号道路

【位置】 19B51～H49グリッド 【形状】 両側溝弧状 (1.0×35m以上)

【重複】 2号道路と交差

【土層】 1茶褐色砂質土 2暗褐色砂質土 3黒褐色砂質土 4黒褐色粘質土 5暗褐色砂質土 6茶褐色砂質土 やや硬化 7茶褐色砂質土 暗褐色砂質土ラミナ状堆積 8黒褐色粘質土

【遺物】 なし

【備考】 北北東・南南西走向で、02号道路北側溝が分かれた状態で南へ向かっている。東西両側溝は何回かの掘り直しが見られ、路面相当部分も溝だった時期がある。掘り込み面から考えると02号道路の路面3併行の時期であり、02号道路の北側溝の水流を南へ流すために作られ、結果的に中央が道路使用されたと思われる。西側には方向が似た土地改良前の水路の覆土がある。

### 菅谷石塚10・11号溝

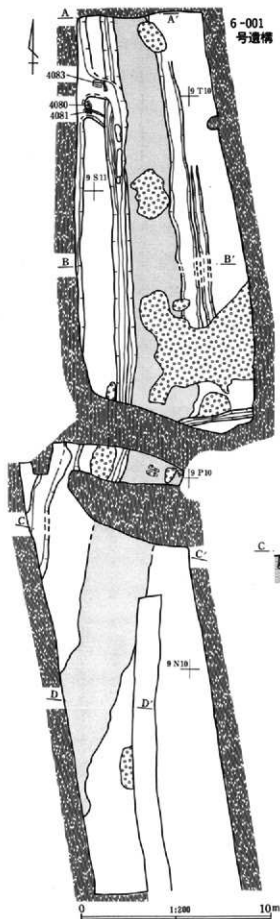
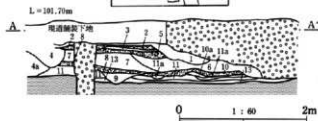
【位置】 18T47～19B50グリッド 【形状】 10号溝 (2.8×19m以上) 11号溝 (2.8×21m以上)

【重複】 なし

【土層】 1灰褐色砂質土 2茶褐色砂質土 3暗褐色砂質土 鉄分含む 4暗褐色砂質土 5暗褐色粘質土

【遺物】 なし

【備考】 共に西北西・東南東走向でほぼ平行。断面は緩い皿状で顕著な水流痕はない。02号道路とほぼ平行であり、増水時の排水を兼ねた畝の区画溝だろう。

6-001  
号遺構

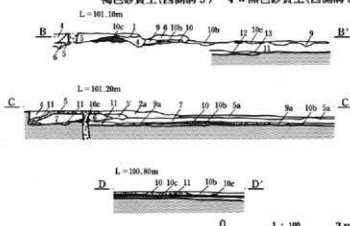
小八木志志貝戸6区001号遺構

【位置】 9 L11~T10グリッド

【形状】 両側溝弧状 (2.5×43m以上)

【重複】 未命名溝より新

【土層】 1暗褐色砂質土 2黒黄褐色砂質土 硬化(路面4)  
 2a褐色シルト質土上面やや硬化 3暗褐色砂 4黒  
 褐色砂質土(西側溝3) 4a黒色砂質土(西側溝2)

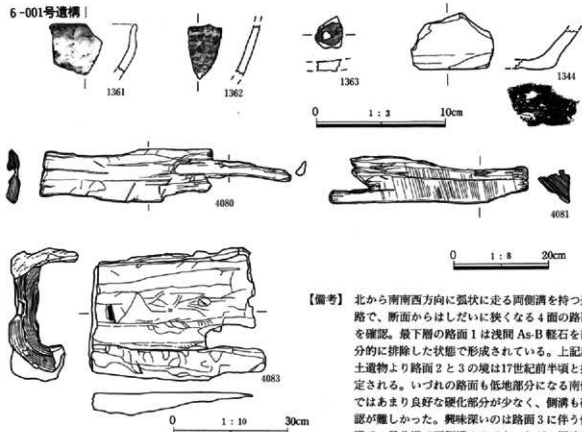


5暗褐色砂質土 硬化(路面3) 5a赤褐色砂質土 鉄化  
 6暗褐色砂質土 7暗褐色砂質土 8暗褐色砂質土 硬化  
 (路面2) 9暗褐色砂質土(西側溝4) 9a暗褐色砂  
 10暗褐色砂質土 硬化(路面1) 10a黒褐色砂質土  
 10b黒褐色砂質土 浅間As-B軽石多い 10c暗褐色砂質  
 土 浅間As-B軽石純層 11黒褐色粘質土 浅間As-C  
 軽石混じる 11a黒褐色粘質土 12黒褐色砂質土 浅間  
 As-C軽石多い 13黒褐色粘土

【遺物】 上面(路面3・4) 覆土より須恵質コネ鉢(1344)、下面(路  
 面1・2) 覆土より瀬戸美濃?天目碗(1361)・志野皿  
 (1363)、西側部分より瀬戸美濃天目碗(1362)、西側溝北  
 側でスギくり置き桶(4083)とクリ・マツ腐板材(4080)・  
 スギ角材(4081)を検出。

第2章 考古学的検出内容

6-001号遺構 |



【備考】 北から南南西方向に弧状に走る両側溝を持つ道路で、断面からはしだいに狭くなる4面の路面を確認。最下層の路面1は浅間As-B軽石を部分的に排除した状態で形成されている。上記出土遺物より路面2と3の境は17世紀前半頃と推定される。いずれの路面も低地部分になる南側ではあまり良好な硬化部分が少なく、側溝も確認が難しかった。興味深いのは路面3に伴う側溝で、最北端で西側溝のみであったが、樋暗渠

により分水して東側溝を新たに設けていた。用水的な利用があったのだろう。

小八木志志貝戸0区014号遺構

【位置】 14N32～R33グリッド

【形状】 両側溝 (1.5×19m以上)

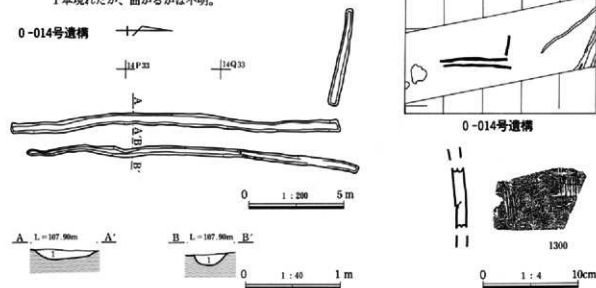
【重複】 なし

【土層】 1 灰黄褐色砂質土

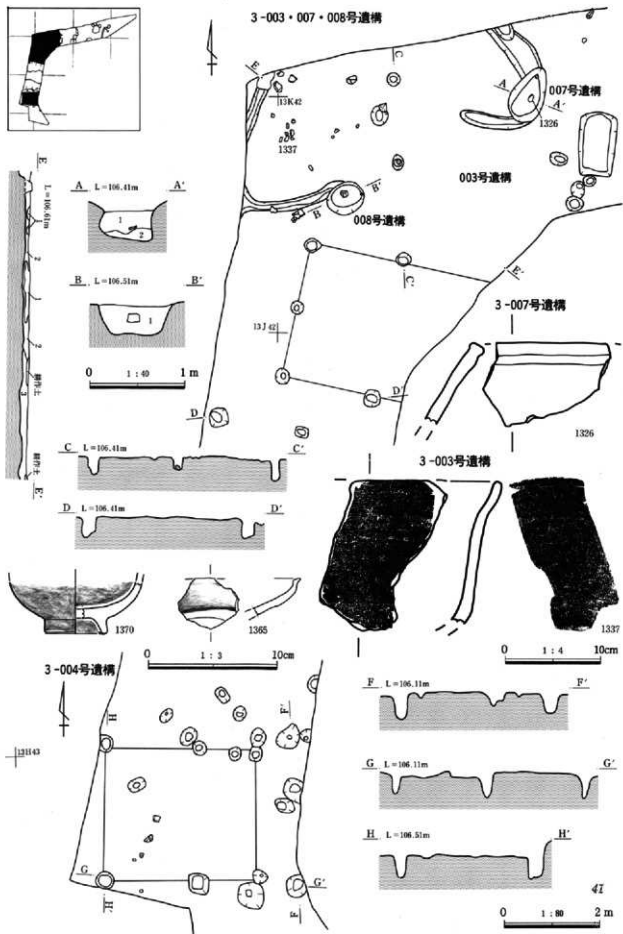
【遺物】 埋土中より葎葉燹片 (1300) 検出

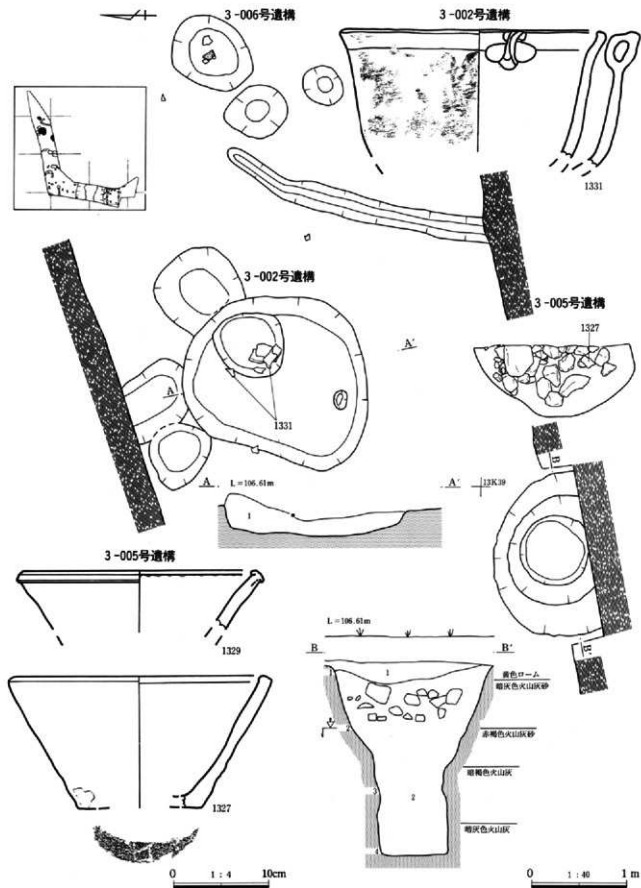
【備考】 ほぼ南北方向に走り浅い側溝を両側に持つ。路面は検出できず。北端で西方向に側溝状の溝が1本現れたが、曲がるかは不明。

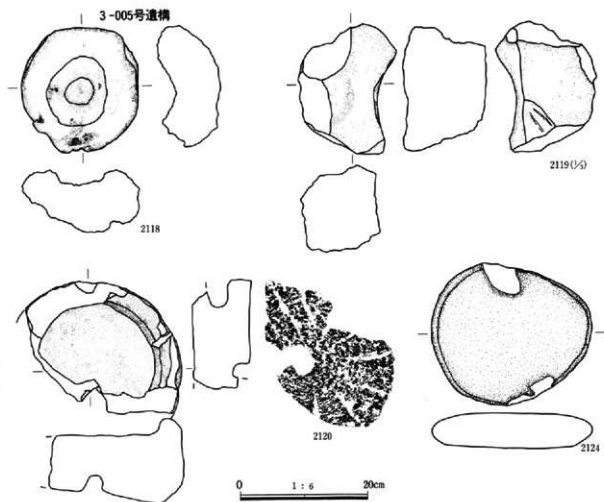
0-014号遺構



## 2-1-3 その他の遺構 2-1-3-1 屋敷







小八木志志貝戸3区002～008号遺構 (図41～43頁)

【位置】 13G41～K38グリッド 【形状】 各種

【重複】 なし

【土層】 03号1褐色シルト質土 2黒褐色砂質土 3黒色粘質土 硬化 07・08号1暗褐色粘質土 締まりなし 2同前  
 ローム塊混在 02・05号1黒褐色砂質土 2同前 礫多く含む

【遺物】 03号:床面より瓦質土器鍋 (1337)、埋土中より瀬戸美濃灰釉甃 (1365)・肥前兵器手輪 (1370)

07号:埋土中より瓦質土器コネ鉢 (1326)

02号:底より瓦質土器鍋 (1331)、埋土中より獣歯 (4076)

05号:上位より石臼 (2120)・他石製品 (2118・19・24) 下位より瓦質土器コネ鉢 (1327・29)

【備考】 鍋片が残っていた003号の小さな溝で囲まれた楕円形部分 (6×3m以上) は硬化した床面で、中心建物の土間などの可能性がある。溝には性格不明の二つの土坑007・008号が重なり、すぐ南側には掘立柱建物 (2×2間以上) があり、また10m南に離れて建て替えが多い小さな掘立柱建物004号 (3.2×2.8m 2×1間) が見られた。003号から東に10m離れて裸で埋められた井戸005号 (出水量多い) そして性格不明の土坑002号があった。オトウカ山古墳の南側を削って造られた屋敷地で、瓦質鍋 (1331) より14世紀頃と考えられ、近世まで何らかの継続があっただろう。

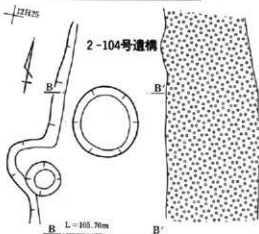
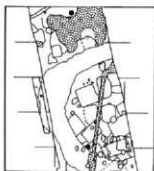
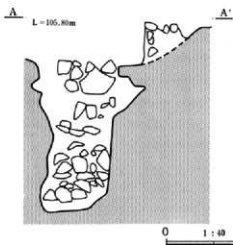
小八木志志貝戸2区049号遺構

【位置】 12D22グリッド 【形状】 径1.0m深さ1.6m

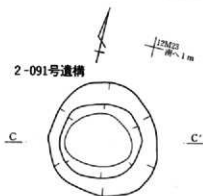
【重複】 水路跡047号が東側で近接

【遺物】 なし

【備考】 底まで角礫で埋まる。底から1.4mで湧水跡がある。047号より古い可能性が高い。



2-091号遺構



小八木志良戸2区104号遺構

【位置】 12G24グリッド 【形状】 径0.7m深さ0.7m

【重複】 古墳時代瀬066号より新

【土層】 1 灰黄褐色砂質土 2 褐色砂質土 黒色粘質土塊多 3 褐色砂質土

【遺物】 なし 【備考】 性格不明

小八木志良戸2区091号遺構

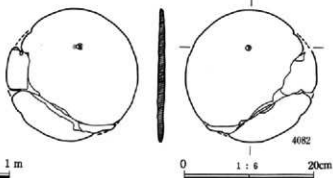
【位置】 12L22グリッド 【形状】 径1.0m深さ2.2m

【重複】 なし 【土層】 下位まで雑含む人為埋土

【遺物】 埋土中よりスギ釣瓶底板(4082)検出

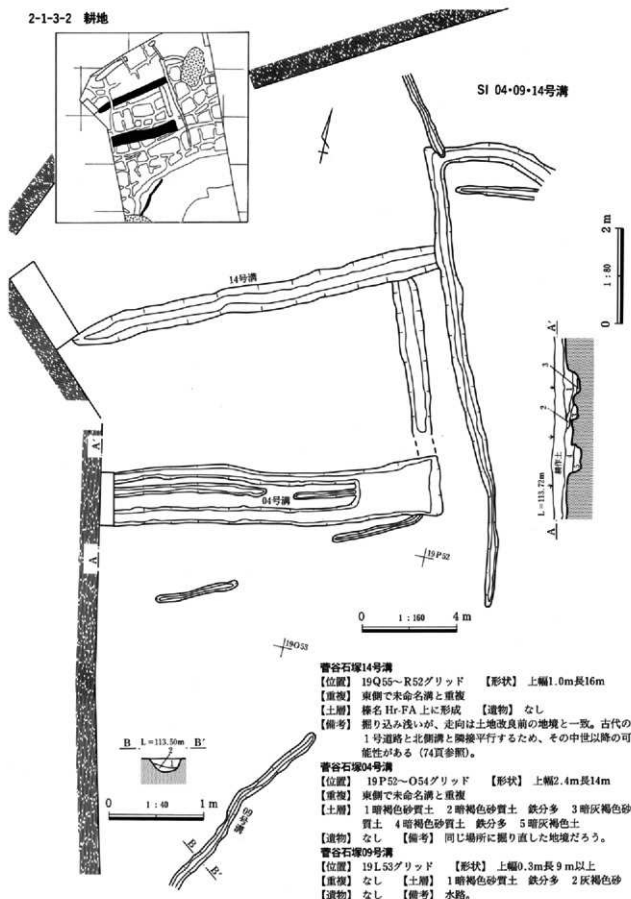
【備考】 形状から井戸だが、湧水直はなく短期使用か。調査時の出水はほとんどなし。

2-091号遺構





## 2-1-3-2 耕地



## 菅谷石塚14号溝

【位置】 19Q55～R52グリッド 【形状】 上幅1.0m長16m

【重複】 東側で未命名溝と重複

【土層】 層名 Hr・FA 上に形成 【遺物】 なし

【備考】 掘り込み浅いが、走向は土地改良前の地境と一致。古代の1号道路と北御溝と隣接平行するため、その中世以降の可能性がある（74頁参照）。

## 菅谷石塚04号溝

【位置】 19P52～O54グリッド 【形状】 上幅2.4m長14m

【重複】 東側で未命名溝と重複

【土層】 1暗褐色砂質土 2暗褐色砂質土 鉄分多 3暗灰褐色砂質土 4暗褐色砂質土 鉄分多 5暗灰褐色土

【遺物】 なし 【備考】 同じ場所に掘り直した地境だろう。

## 菅谷石塚09号溝

【位置】 19L53グリッド 【形状】 上幅0.3m長9m以上

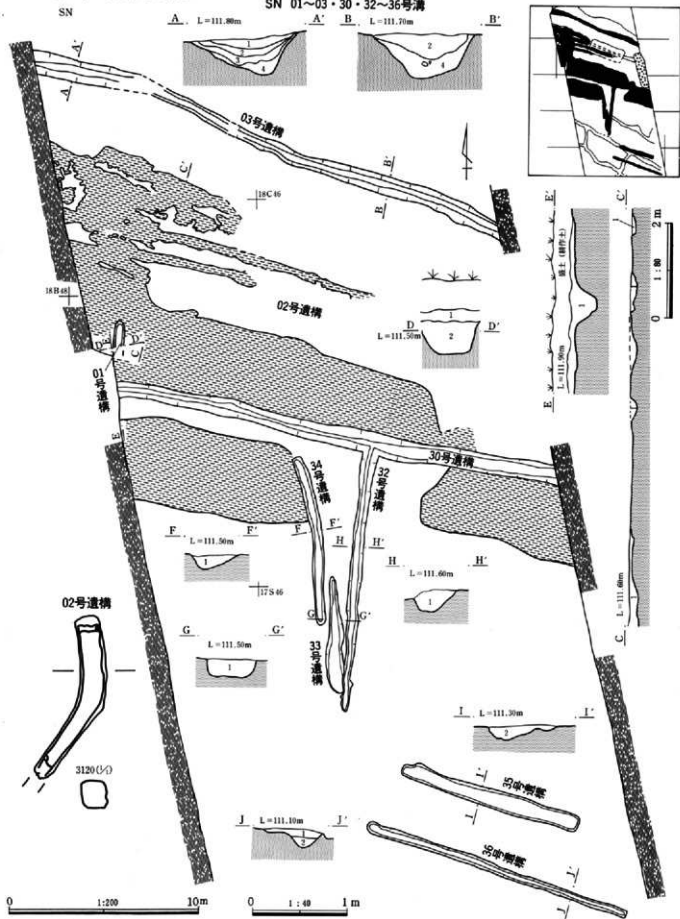
【重複】 なし 【土層】 1暗褐色砂質土 鉄分多 2灰褐色砂

【遺物】 なし 【備考】 水路。

第2章 考古学的検出内容

SN

SN 01~03・30・32~36号溝



**正観寺西原01号遺構**

- 【位置】 18A47グリッド  
 【形状】 0.5×1.5m以上  
 【重複】 なし  
 【土層】 1 暗赤褐色砂質土 2 黒褐色砂質土  
 【遺物】 なし  
 【備考】 近世の土坑。

**正観寺西原02号遺構**

- 【位置】 17S43～18C47グリッド  
 【形状】 不定  
 【重複】 30号より旧  
 【土層】 1 暗褐色砂質土 浅間 As-A と砂含む 2 灰黄褐色シルト質土  
 【遺物】 鉄角釘 (3120) 検出  
 【備考】 30号遺構と同方向の地山2層を切るサク(幅約0.5m)が見られた。畠の可能性がある。

**正観寺西原03号遺構**

- 【位置】 18B43～D48グリッド  
 【形状】 上幅1.2m長27m以上  
 【重複】 なし  
 【土層】 1 におい黄褐色砂質土 2 褐色砂質土 3 におい黄褐色砂質土 4 暗褐色砂質土  
 【遺物】 なし  
 【備考】 水流痕は顕著でないが、北側はすぐ泥流丘で、その壟を巡らしたのだろう。

**正観寺西原30・32号遺構**

- 【位置】 17R44～18A47グリッド  
 【形状】 30号：上幅1.2m長24m以上 31号：上幅0.4m長14m  
 【重複】 02・33号より新  
 【土層】 1 黒褐色砂質土 浅間 As-A 含む  
 【遺物】 なし  
 【備考】 直線状に走り直交する。水流痕は顕著でなく区画溝か。

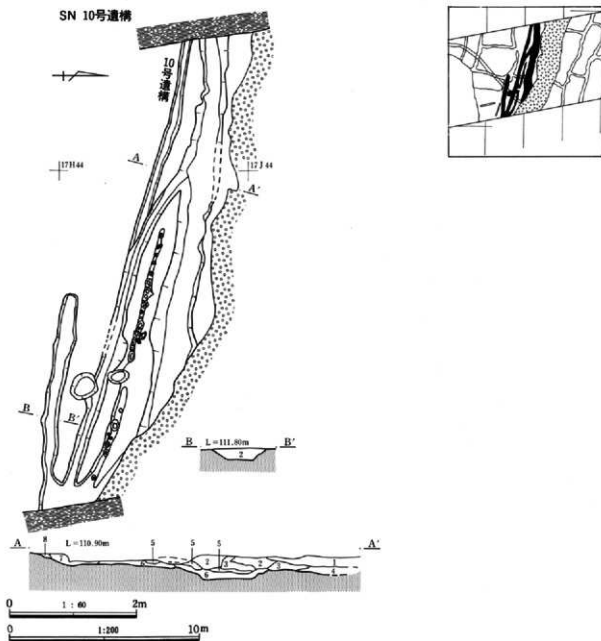
**正観寺西原33・34号遺構**

- 【位置】 17R45～T45グリッド  
 【形状】 33号：上幅0.7m長6m 34号：上幅0.5m長9m  
 【重複】 33号は32号より旧  
 【土層】 1 暗褐色砂質土  
 【遺物】 なし  
 【備考】 両者は平行しており、地境もしくは畠サクか。

**正観寺西原35・36号遺構**

- 【位置】 17O42～P44グリッド  
 【形状】 35号：9.5×0.9m 36号：上幅0.5m長15m  
 【重複】 なし  
 【土層】 1 褐色シルト質土 2 褐色砂  
 【遺物】 なし  
 【備考】 埋土は異なるが、30・32号と関係ある地境か。



**正観寺西原08号遺構**

【位置】 18A47グリッド 【形状】 上幅0.4m長4m以上 【重複】 02号より旧

【土層】 05号2層・06号4層と同じ 【遺物】 なし

【備考】 人為的埋没か。東側に広がって延びる傾向がある。

**正観寺西原10号遺構**

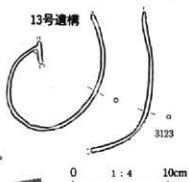
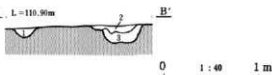
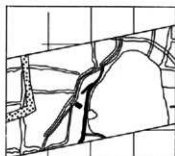
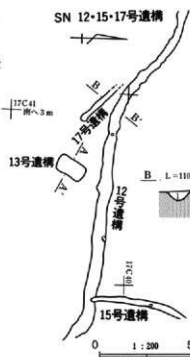
【位置】 17H40～145グリッド 【形状】 直線状25m以上 【重複】 浅間As-B下水田より新

【土層】 1 褐色砂質土 2 灰黄褐色砂質土 3 におい黄褐色砂質土 4 褐色砂質土 5 黒褐色砂 粘質土塊含む 6 灰黄褐色砂 浅間As-B多く含む 7 灰黄褐色砂質土 8 褐灰色砂質土 粘質土塊含む

【遺物】 なし

【備考】 同一方向に何回も水流のため掘り方が変化している。東側の擾乱も土地改良前の水路で、少なくとも近世以降存在していた水路である。

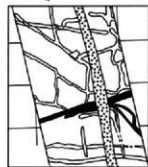
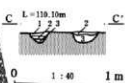
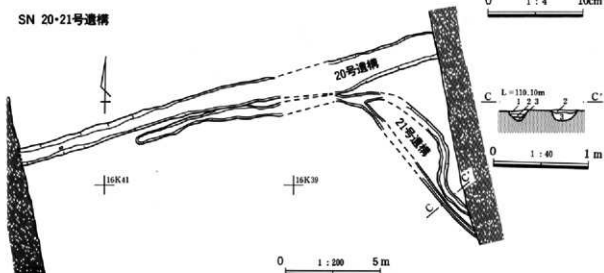
SN 13号遺構



正観寺西原13号遺構

【位置】 17B41グリッド 【形状】 箱形(1.4×0.7m) 【重複】 なし  
 【遺物】 釣り手状鉄製品(3123)検出 【備考】 泥流丘南側に位置。性格不明。

SN 20・21号遺構



正観寺西原12・15・17号遺構

【位置】 17B39～C42グリッド 【形状】 直線状25m以上  
 【重複】 12・15号の関係不明。 【土層】 1 褐色砂(下) 2 褐色粘質土 3 黒褐色粘質土 細まり弱  
 【遺物】 なし 【備考】 17号は水流痕が明瞭だが、12号は底が不均一で植栽痕と思われ地境と考えられる。15号も同様か。

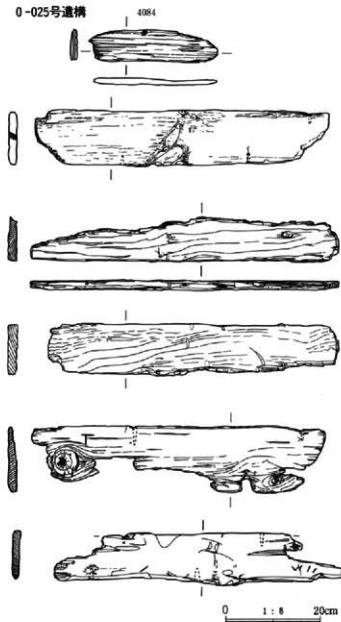
正観寺西原20・21号遺構

【位置】 16J37～K41グリッド 【形状】 20号：上幅1.2m長23m以上  
 21号：上幅0.5m 【重複】 浅間As-B下水田より新 【土層】 1 褐色砂 2 灰褐色シルト質土 3 黒褐色砂質土 【遺物】 なし 【備考】 20号は土地改良前の地境に平行する。21号はそれより古い小水路か。



第2章 考古学的検出内容

0-025号遺構



小八木志志貝戸0区024号遺構

- 【位置】 15O34～O37グリッド  
 【形状】 直線状上幅1.6m長20m以上  
 【重複】 022・026号より新  
 【土層】 2 褐色砂質土 暗褐色土塊混在 3に  
 ぶい黄褐色砂質土 4 黒褐色粘質土  
 褐色土塊混在 5 褐色シルト質土  
 【遺物】 なし  
 【備考】 人為的埋没。断面逆台形で深いが水流  
 痕はない。土地改良前地境とは一致し  
 ない。現代か。

小八木志志貝戸0区025号遺構

- 【位置】 15O37グリッド  
 【形状】 円形(径1.1m深さ0.5m)  
 【重複】 026号との関係不明  
 【土層】 1 褐色砂質土 2 暗褐色粘質土  
 【遺物】 スギ桶底板(4084)が2層上に並ぶ  
 【備考】 桶埋設土坑である。肥桶の可能性があ  
 る。底板は6枚が木釘で繋がれている。

小八木志志貝戸0区021・022・026・027号遺構

- 【位置】 15L34～R37グリッド  
 【形状】 021号：上幅0.4m長12m以上 022号：上幅0.4m長29m以上 026号：上幅0.8m長20m以上 027号：上幅1.4  
 m長15m以上  
 【重複】 024号より旧 025号とは不明  
 【土層】 6にぶい黄褐色砂質土 7 暗褐色砂質土  
 【遺物】 なし  
 【備考】 断面皿状の4条の溝に囲まれて方形区画(約13×14m強)が形成され、土地改良前の地境に一致する。



0-016・017・019号遺構

2-1 中世・近世

小八木志志貝戸0区019号遺構

- 【位置】 15D34～J33グリッド  
 【形状】 上幅0.8m長31m以上  
 【重複】 なし  
 【遺物】 なし  
 【備考】 断面皿状の浅い溝、土地改良前の地境に一致する。

小八木志志貝戸0区016・017号遺構

- 【位置】 15A32～C35グリッド  
 【形状】 016号：上幅1.2m長22m以上 017号：上幅0.5m長15m以上  
 【重複】 古墳時代溝015号より新  
 【土層】 1 暗褐色砂質土  
 【遺物】 016号下位より焼締陶器コネ鉢 (1307) 検出  
 【備考】 上記遺物があるものの016号は土地改良前の地境に一致するため近世より古いとは考えにくい。016・017号の間は地境の農道(幅1.4m)であったとも考えられる。



15H35

0-016号遺構

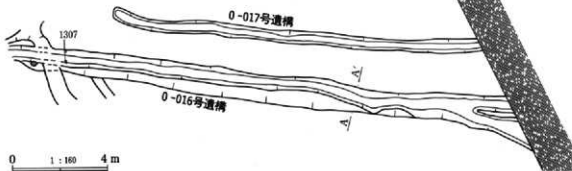
15E34



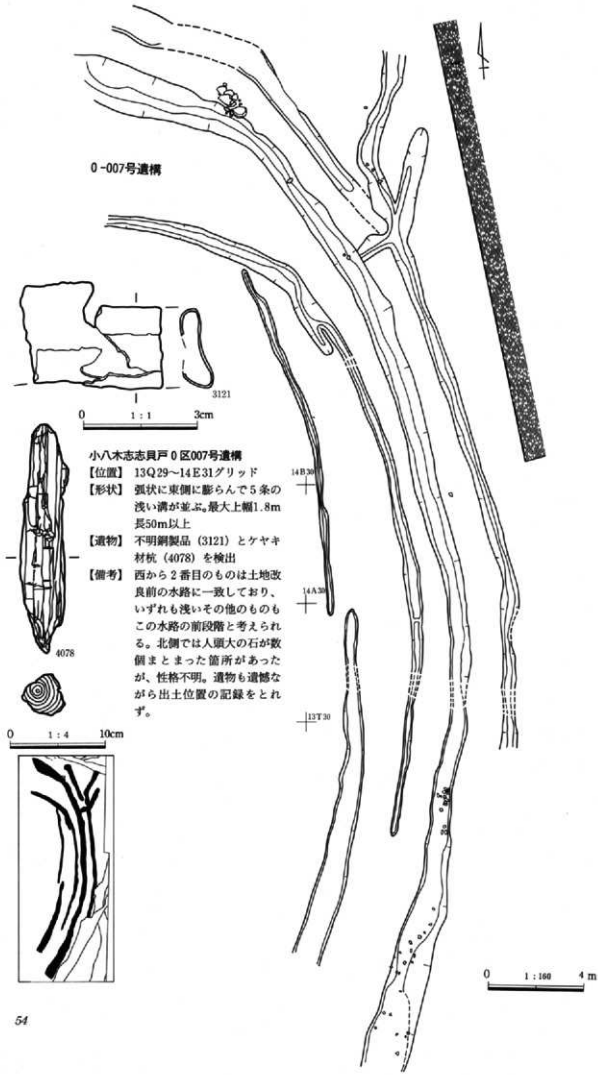
0 1:3 10cm

A L=106.10m A'

0 1:80 2m



0 1:160 4m



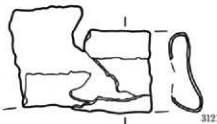
小八木志志貝戸 0区007号遺構

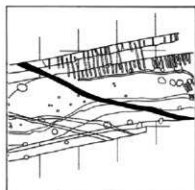
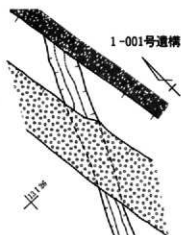
【位置】 13Q29-14E31グリッド

【形状】 弧状に東側に膨らんで5条の浅い溝が並ぶ。最大上幅1.8m 長50m以上

【遺物】 不明銅製品 (3121) とケヤキ材杭 (4078) を検出

【備考】 西から2番目のものは土地改良前の水路に一致しており、いずれも浅いその他のものもこの水路の前段階と考えられる。北側では人頭大の石が数個まとまった箇所があったが、性格不明。遺物も遺憾ながら出土位置の記録をとれず。





#### 小八木志志貝戸 1区001号遺構

【位置】 13A27～124グリッド

【形状】 上幅1.0m深さ0.8m長48m以上

【重複】 弥生各遺構の上に造られる

【土層】 1灰褐色砂質土 2同前 3褐色砂質土 4暗灰褐色砂質土 5 黒褐色砂質土 砂含む 6暗褐色砂質土 砂多い

【遺物】 なし

【備考】 断面V字状でやや曲がりながら走る。土地改良前地境とは一致しない。水流痕あり。

#### 小八木志志貝戸 2区092号遺構 (56頁)

【位置】 12L25～M23グリッド

【形状】 上幅0.8m長13m以上

【重複】 なし

【土層】 1黒褐色砂質土 砂層ラミナ状に含む  
2灰黄褐色粘質土 3黒褐色砂質土

【遺物】 底近くより皇宋通宝(3112)、上位2カ所より馬歯(4070・71)検出

【備考】 周辺には擾乱多いため、もっと深かった可能性がある。水流痕なし。

#### 小八木志志貝戸 2区096号遺構 (56頁)

【位置】 12R26グリッド

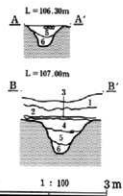
【形状】 上幅1.4m以上長3m以上深さ1.4m以上

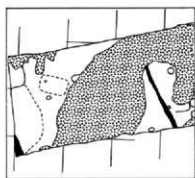
【重複】 弥生遺構の上に造られる

【土層】 1暗褐色砂質土 2同前 ローム塊混じる  
3黒褐色粘質土 斑状にローム塊混じる 4同前 シルト土塊混在

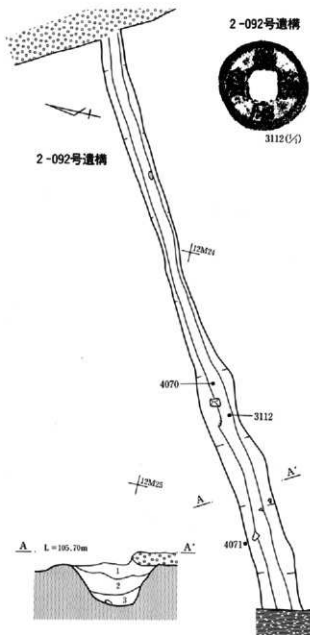
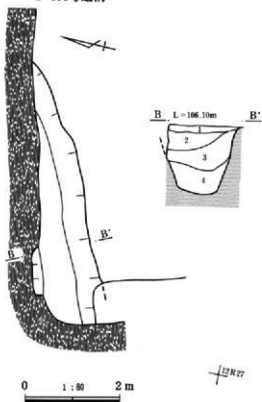
【遺物】 なし

【備考】 3層は人為的埋土。水流痕はないが、調査時にはかなり出水する。土地改良前地割りとの関係は不明。





2-096号遺構



2-092号遺構

2-092号遺構



3112(少)

小八木志志貝戸2区110号遺構

【位置】 I2A19グリッド

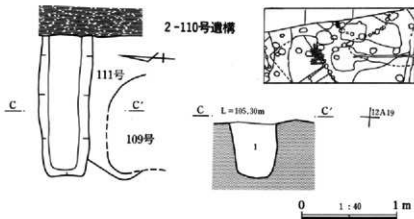
【形状】 短冊形 (0.5×1.5以上×0.6m)

【重複】 中世墓109号を壊す

【土層】 1 黒褐色砂質土

【遺物】 なし

【備考】 近世の短冊形土坑。



2-110号遺構

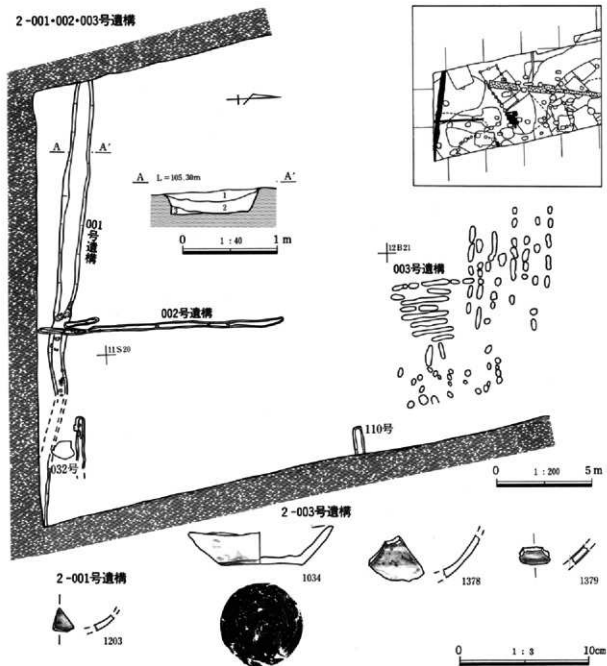
111号

109号

L=105.30m

I2A19

## 2-001・002・003号遺構



## 小八木志志貝戸 2区001・002号遺構

【位置】 11R18～T20グリッド 【形状】 001号：上幅1.2m長24m以上 002号：上幅0.2m長13m

【重複】 001号は002号より旧 中世墓032号を壊す

【土層】 1 黒褐色砂質土 2 同前 締まりなし 3 黒褐色砂

【遺物】 001号埋土より鉄絵陶器皿(1203)・骨製標片(4077)検出

【備考】 001号は流水痕があり、土地改良前の地境に一致する。18世紀頃か。002号は現代の畝跡だろう。

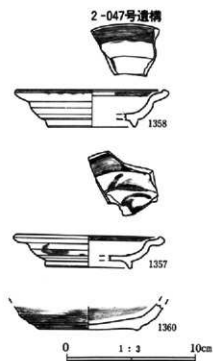
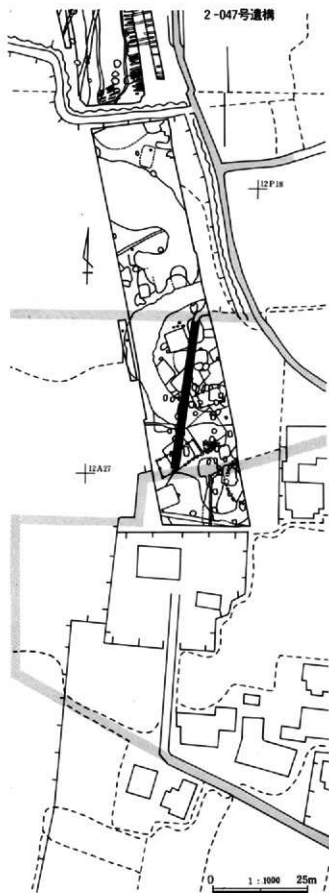
## 小八木志志貝戸 2区003号遺構

【位置】 12B219～C21グリッド 【形状】 3方向の浅い畝耕作痕(各幅3～5m)

【重複】 中世墓005・012・026号の上になされる

【遺物】 埋土中より竜泉窯系青磁碗片(1378・79)とかわらけ片口皿(1034)検出

【備考】 走向より002号と近い現代の畝跡と考えられる。かわらけは中世墓の副葬品だろう。



小八木志志貝戸2区047号遺構

【位置】 12A22～120グリッド

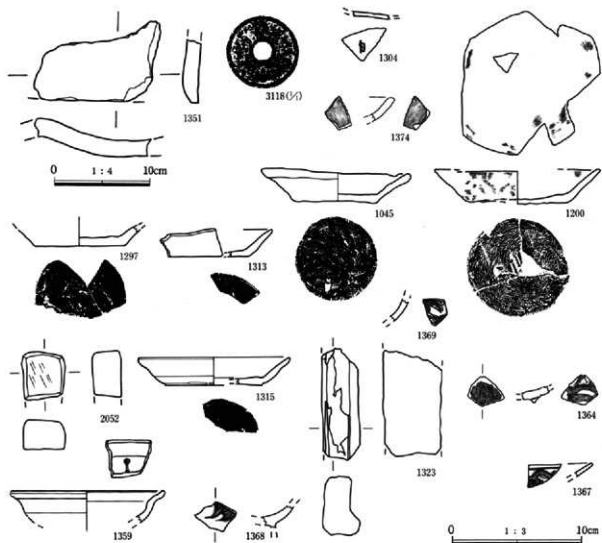
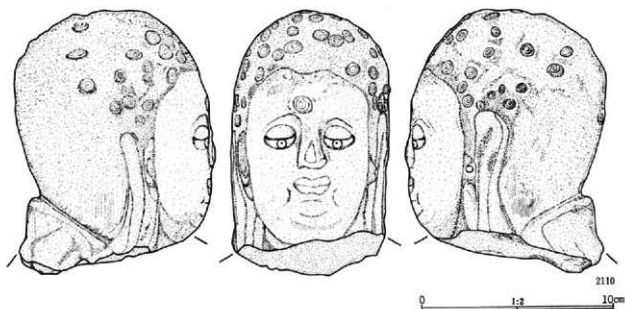
【形状】 長40m以上

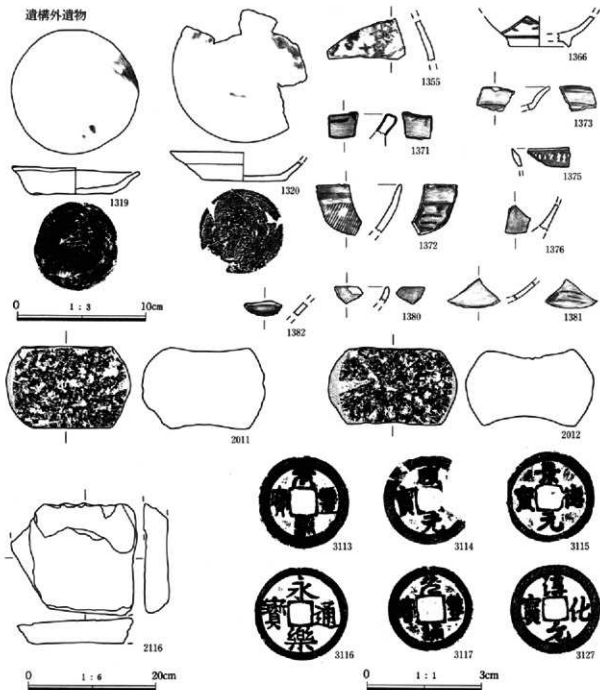
【重複】 中世墓より新

【遺物】 瀬戸美濃鉄絵皿 (1357・58) と同志野柚皿 (1360) 検出

【備考】 調査時にあったU字溝西50cmほどに平行して走っていた石敷列。扁平な川原石を使って上面を揃えており、水路の三面石敷溝の基礎と考えられる。南側の地境との交差部まで続いていた。土地改良前の地境と一致するが、出土遺物より近世初頭に造られた可能性がある。二つの道路を結ぶ南北方向の位置になる。

## 2-1-4 遺構外遺物





石仏頭部(2110)は、1999年度の小八木志志貝戸遺跡4区の調査で出土した。そのため本来ここで報告すべきものではないが、通称「ヤクシヤマ」(4-005号遺構)で発見したこの仏頭は、地元小八木地区への引き渡しが急がれたため、実測図と写真を本書に入れた。

遺構外遺物の中で注目すべきものは、次のものがある。近世の舶載陶磁では、景徳鎮産の可能性のある18世紀後半から19世紀前半の青花碗(1369)があり、中世では景徳鎮青花碗(1366)・青白磁合子(1375)、竜泉窯青磁鉢(1371)・碗(1380)、同安窯青磁碗(1372)・皿(1373)、白磁碗(1376)・皿(1381・82)が、小八木志志貝戸1・2区より出土した。これらはこの周辺での中世前半の居住を想定させる。

また板碑片(2116)も中世群周辺で見られた。舶載銭も同6区の淳化元宝(3127)を除いて同2区からの出土である。



## 2-2 古 代

この時代の検出遺構は次のとおりである。

道路遺構	1カ所	
集落関係遺構	竪穴住居	1軒
	井戸	4基
	土坑	1基
耕地関係遺構	水田	6カ所
	水路	6条
	流路群	1カ所
	その他土坑	1基

以上のように集落関係はかなり希薄だが、実は集落の主体は南側の4・5区に存在することがその後の調査で判明している（『小八木志志貝戸遺跡群4』報告予定）。

ここで重要なのは、東山道との関係が問題となる菅谷石塚遺跡検出の道路遺構と、その南に広く広がる浅間As-B軽石下で検出された水田群である。

遺構外出土遺物も多くない。特筆されるのは「好」字が墨書された黒色土器（小八木志志貝戸遺跡2区出土）である。

## 2-2-1 道路遺構

菅谷石塚01号道路（図63頁）

【位置】 19054～Q52グリッド

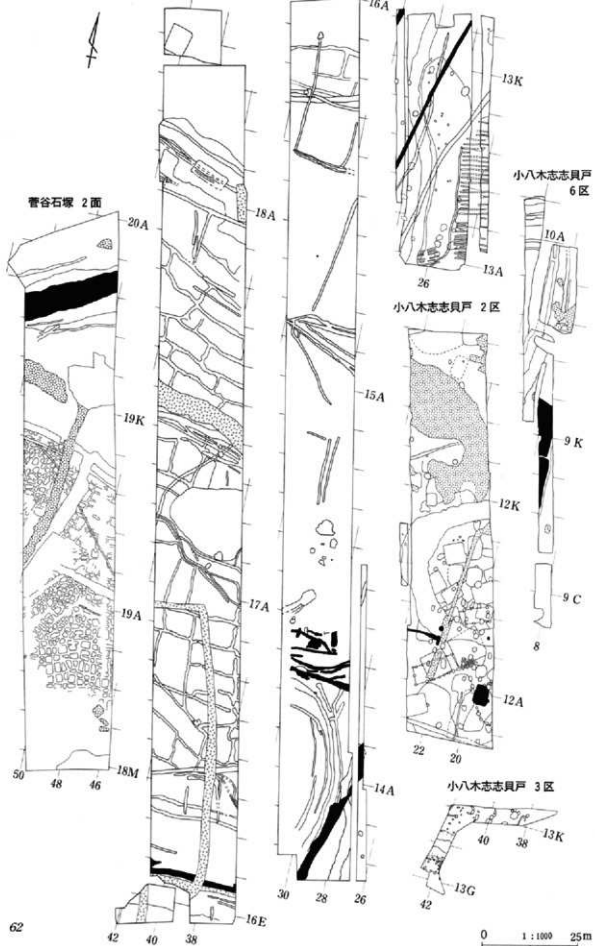
【形状】 路面幅5.5～7.0m長24m以上

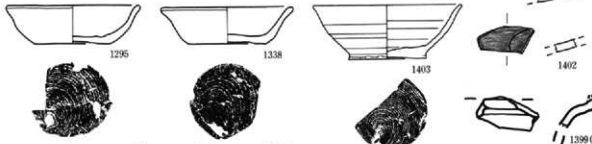
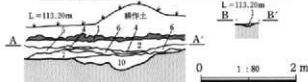
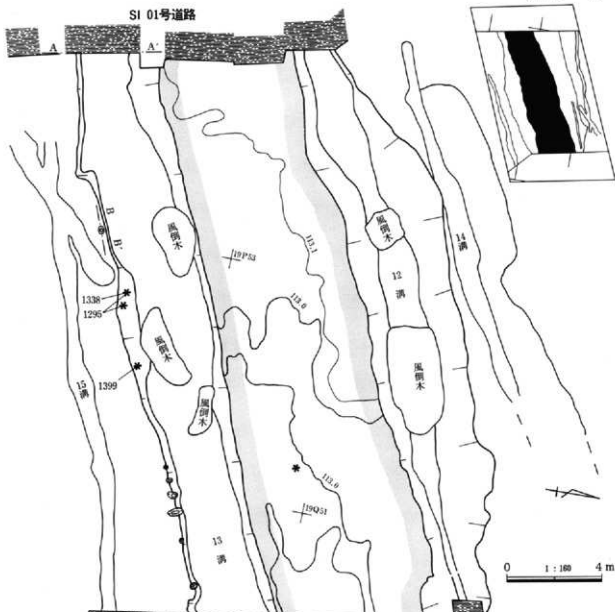
【重複】 浅間As-B下水田より旧

【土層】 1浅間As-B軽石 2黒褐色粘質土 3暗褐色砂質土 黒褐色土混じる 4灰褐色砂 5暗褐色砂質土 6黄褐色粘質土 水成様名Hr-FA含む 7灰褐色砂 8灰褐色砂質土 9褐色シルト質土 10暗褐色砂質土 砂含む 11黒褐色粘質土

【遺物】 北側溝（12号溝）埋土より平瓦（1397）、同下位（14号溝=19号土坑）より須恵器坏（1403）、南側溝（13号溝）埋土より平瓦（1398・1401）・須恵器中型甕（1399）・緑軸皿（1402）検出

【備考】 約N70度Eの走向で平行して走る3本の溝を検出。それぞれを側溝とする道路遺構で、12号溝は第一次北側溝、14号溝は第二次北側溝と考えられる。いづれも水流痕が明瞭である。調査時には12号溝の埋土一部に硬化面を確認した以外には路面の検出ができなかった。路面部分の断面調査ができなかったため不明確ではあるが、時期的には浅間As-B軽石の時点では少なくとも第一次側溝は完全に機能を失っていた。南側溝埋土上位で見られた古代末と考えられるかわらけ皿（1295・1338）と、埋土中より出た線刻のある緑軸陶器皿が道路使用時期最小幅を示すと思われる。なお後述のように直上の浅間As-B下水田では本遺構のほぼ路面内部分で複数の人足跡が検出されている。そのため、側溝がなく排水ができない状態ながら第一次路面は、浅間As-B軽石降下まで道路としての機能は存続していたと考えられる。第一次路面直上に上記足跡があったため、南側溝の確認できない第二次路面は浅間As-B軽石降下以後の可能性がある。南側溝の2m南にある15号溝は性格不明。





2-2-2 耕地



菅谷石塚浅間 As-B 下水田

【位置】 A：19M53～S53グリッド B：18O48～19H52

【形状】 A：大畦畔東西方向弧状（幅1.5m長25m）最大区画18㎡ 最小区画2㎡  
B：大畦畔南北方向直線状（幅1.5m長27m）最大区画20㎡ 最小区画3㎡

【遺物】 なし

【備考】 泥流丘を境にして二つの部分があるが、両者の畦畔の走向は全く異なる。北側のAは僅かに下面にある01号道路の走向と似た部分が土地改良前の区画と似ているのみだが、南側のBは比較的残存している部分が多い。後者はほぼ中央でやや小区画の中央部と大区画の南側にさらに走向が分かれている。前者では人と牛の足跡が見られた。

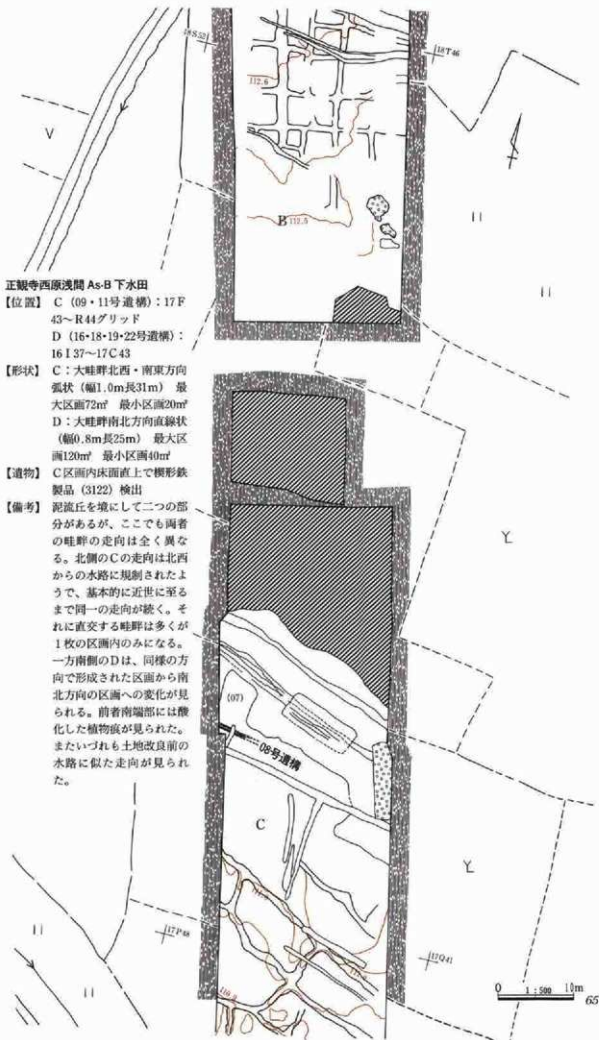
正観寺西原浅間 As-B 下水田

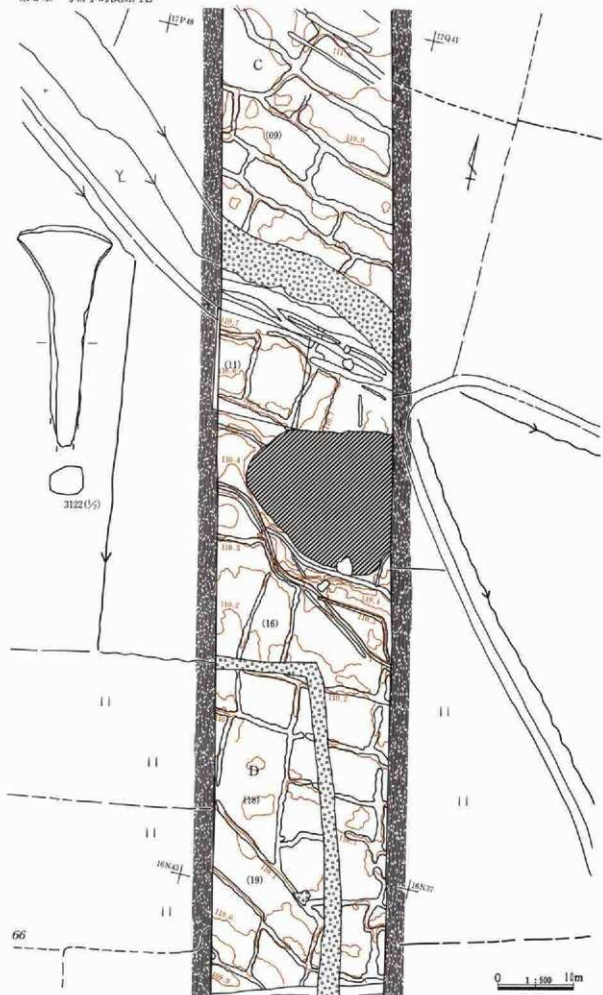
【位置】 C (09・11号遺構) : 17F  
43~R44グリッド  
D (16・18・19・22号遺構) :  
16I37~17C43

【形状】 C : 大畦畔北西・南東方向  
弧状(幅1.0m長31m) 最大  
区画72㎡ 最小区画20㎡  
D : 大畦畔南北方向直線状  
(幅0.8m長25m) 最大区  
画120㎡ 最小区画40㎡

【遺物】 C区画内床面直上で楔形鉄  
製品 (3122) 検出

【備考】 泥流丘を境にして二つの部  
分があるが、ここでも両者  
の畦畔の走向は全く異なる。  
北側のCの走向は北西  
からの水路に規制されたよう  
で、基本的に近世に至る  
まで同一の走向が続く。そ  
れに直交する畦畔は多くが  
1枚の区画内のみになる。  
一方南側のDは、同様の方  
向で形成された区画から南  
北方向の区画への変化が見  
られる。前者南端部には酸  
化した植物痕が見られた。  
またいづれも土地改良前の  
水路に似た走向が見られ  
た。





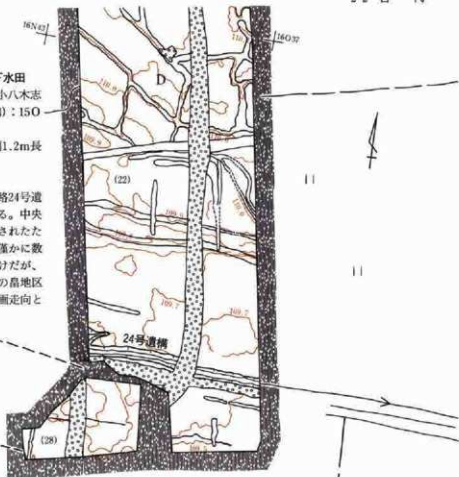
## 小八木志志貝戸0区浅間As-B下水田

【位置】 E (正観寺西原28号・小八木志志貝戸0区023号遺構): 15O  
35~16C42グリッド

【形状】 大畦畔東西方向弧状(幅1.2m長18m) 面積不明

【遺物】 なし

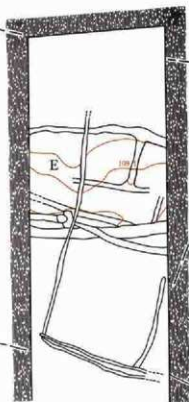
【備考】 正観寺西原最南端の水路24号遺構から8m南より広がる。中央部分は土地改良で破壊されたため、残存状況は不良。僅かに数本の畦畔を確認しただけだが、これらはほとんど近世の畠地区画及び土地改良前の区画走向と一致していた。



## 菅谷石塚浅間As-B下水田A検出足跡 (68頁)

人足跡 (19O54~Q50グリッド) 東西走向の畦畔と同一方向で複数の歩行列が見られた。走向は畦畔上だけではなく、区画内にもあった。この走向は範囲は、下面の01号道路とほとんど一致しており、また確認した畦畔自体も顕著なものではないため、むしろ畦畔の途切れた道路部分と考えた方がよいだろう。

牛足跡 (19Q52~R54グリッド) ほぼ2枚の区画内のみに集中している (型4087)。



SI 51号遺構足跡



正観寺西原浅間 As-B 下水田 C 検出植物痕

近世に水路化した部分に隣接する2枚の区画内でヨシなどと思われる植物が多数酸化して残っていた。この部分では浅間 As-B 軽石降下時にイネが植わっていなかったことを示すのだろう。

SN 11号遺構



0 1:200 10 m

正観寺西原24号遺構

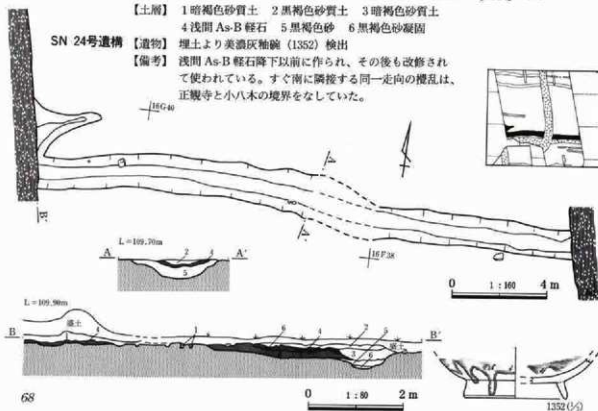
【位置】 16 F 36~40グリッド 【形状】 上幅1.6m長21m以上 【重複】 なし

【土層】 1 暗褐色砂質土 2 黒褐色砂質土 3 暗褐色砂質土

4 浅間 As-B 軽石 5 黒褐色砂 6 黒褐色砂凝固

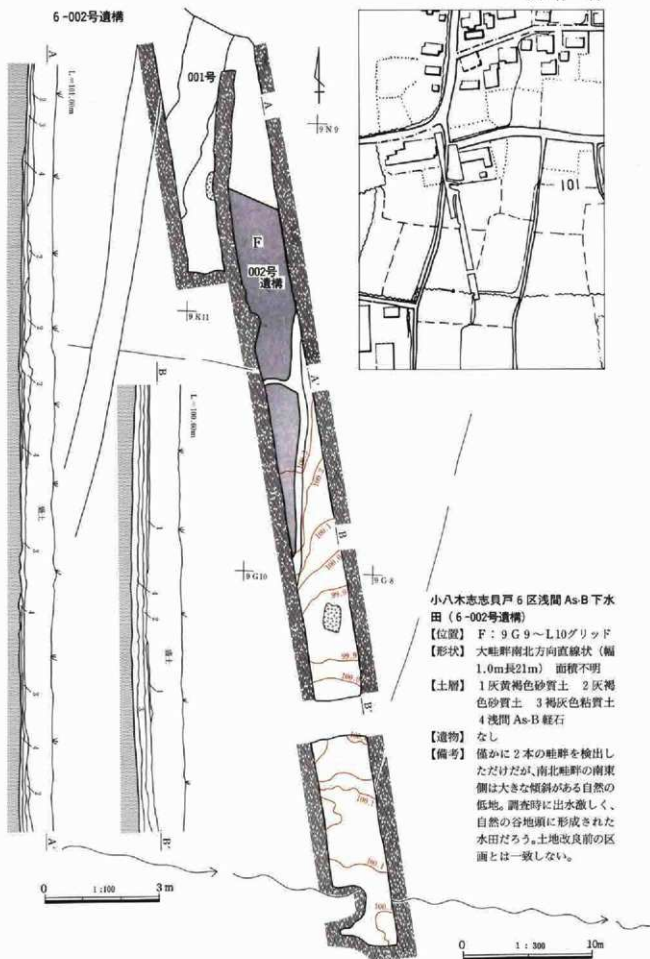
SN 24号遺構 【遺物】 埋土より美濃灰袖鉢 (1352) 検出

【備考】 浅間 As-B 軽石降下以前に作られ、その後も改修されて使われている。すぐ南に隣接する同一走向の櫓瓦は、正観寺と小八木の境界をなしていた。



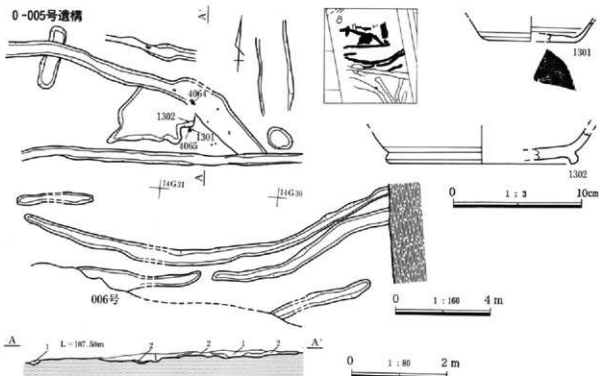


6-002号遺構



小八木志忠貝戸6区浅間As-B下水田(6-002号遺構)

- 【位置】 F: 9G9~L10グリッド  
 【形状】 大畦畔南北方向直線状(幅1.0m長21m) 面積不明  
 【土層】 1 灰黄褐色砂質土 2 灰褐色砂質土 3 褐色粘質土 4 浅間As-B軽石  
 【遺物】 なし  
 【備考】 僅かに2本の畦畔を検出したが、南北畦畔の南東側は大きな傾斜がある自然の低地。調査時に出水激しく、自然の谷地頭に形成された水田だろう。土地改良前の区画とは一致しない。



小八木志志貝戸0区005号遺構

【位置】 14F29～H31グリッド

【形状】 東西方向弧状（上幅0.3m長約20m）

【重複】 006号より旧

【土層】 1 褐色・におい黄褐色砂 ラミナ状に混在 2 暗褐色粘質土 締まり弱

【遺物】 須恵器杯（1301）・盤（1302）及び牛歯（4064・65）検出

【備考】 洪水で埋まった畚サクの可能性があるが、残存状態は不良。

小八木志志貝戸0区006・008号遺構

【位置】 006号：14E28～F31グリッド 008号：13L30～14A27グリッド

【形状】 006号：東西走向（上幅1.5m長約16m） 008号：南北走向（上幅2.5m長52m以上）

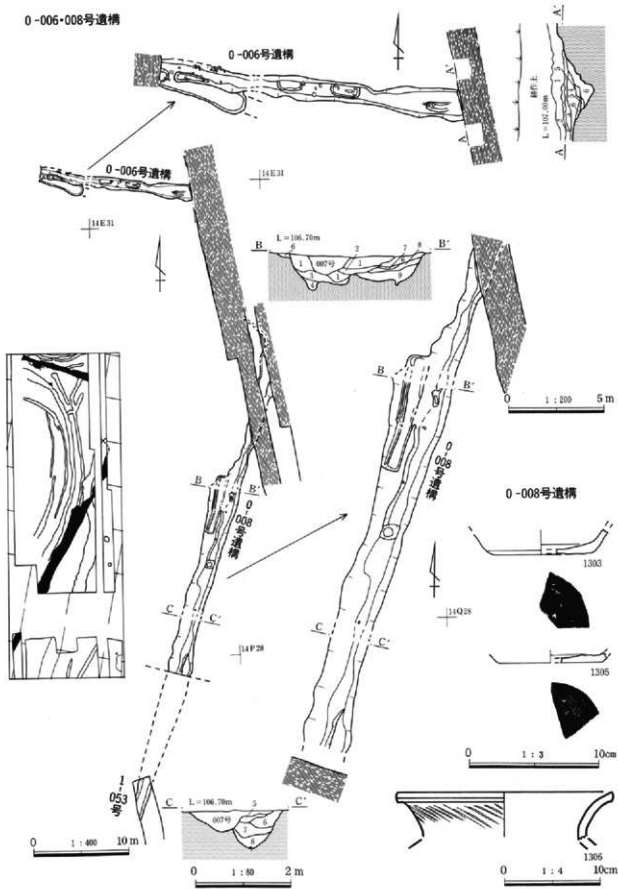
【重複】 006号：005号より新 008号：007号より旧

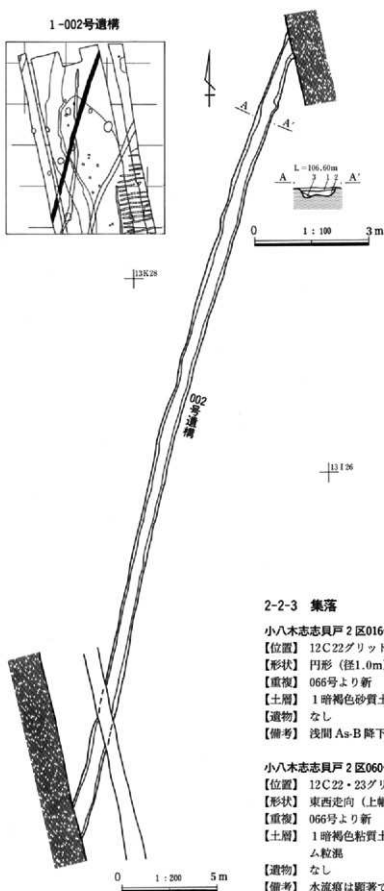
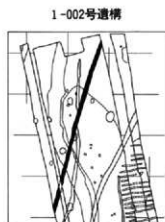
【土層】 006号：1 灰褐色砂質土 2 におい黄褐色砂質土 ラミナ状 3 におい黄褐色砂質土 ラミナ状 4 灰黄褐色砂質土 5 灰黄褐色砂 6 灰黄褐色砂質土 砂含む 008号：1 暗褐色砂質土 2 暗褐色粘土 3 黒褐色砂質土 砂含む 4 黒褐色粘質土 砂含む 5 灰黄褐色砂質土 6 黒褐色シルト質土 7 におい黄褐色シルト質土 8 暗褐色砂 9 黒褐色シルト質土 砂含む

【遺物】 006号：埋土より牛歯（4066）検出 008号：埋土中より須恵器杯（1303・05）・牛歯（4067）、底より中型壺（1306）検出

【備考】 両者共に水流痕は明瞭で、部分的にはかなり改修を行っている。008号中央の新しい掘り込み（1～4層）もその関係ではないか。008号の北側は未掘部分で北西方向に曲がっており、006号と合流する可能性もある。この周辺は近世の007号の弧状走向で顕著なように、オトウカ山古墳東の台地の角にあたって各時代の流路は曲がっていることが傍証となるだろう。

0-006-008号遺構





小八木志志貝戸1区002号遺構

【位置】 13E28～M26グリッド

【形状】 北北東-南南西走向直線状(上幅1.5m長約16m) 008号: 南北走向(上幅1.0m長44m以上)

【重複】 013号より新

【土層】 006号: 1にぶい黄褐色砂  
2暗褐色粘質土 3灰黄褐色砂

【遺物】 なし

【備考】 水流痕が明瞭で、土地改良前の地割りに近いが浅間As-B降下より古い。

2-2-3 集落

小八木志志貝戸2区016号遺構 (73頁)

【位置】 12C22グリッド

【形状】 円形(径1.0m)

【重複】 066号より新

【土層】 1暗褐色砂質土 2黒褐色砂質土 浅間As-B軽石灰多量

【遺物】 なし

【備考】 浅間As-B降下直後の二次堆積で埋没。

小八木志志貝戸2区060号遺構 (73頁)

【位置】 12C22・23グリッド

【形状】 東西走向(上幅1.0m長7.2m以上)

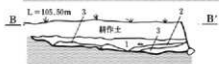
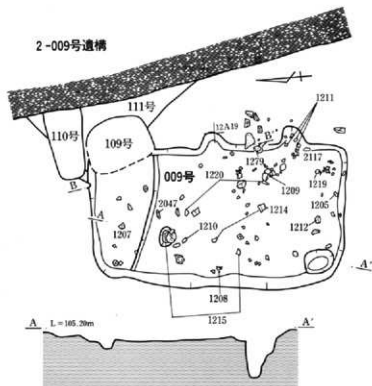
【重複】 066号より新

【土層】 1暗褐色粘質土 2黒褐色粘質土 3黒褐色粘質土 ローム粒混

【遺物】 なし

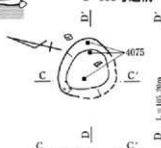
【備考】 水流痕は顕著でなく、東側では検出できず。

2-009号遺構

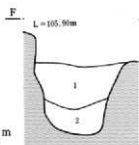
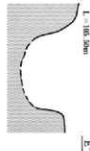
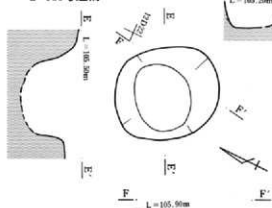


0 1 : 80 2 m

2-108号遺構

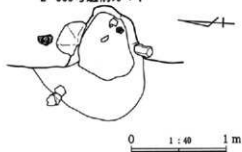


2-016号遺構



0 1 : 40 1 m

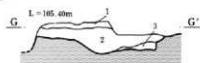
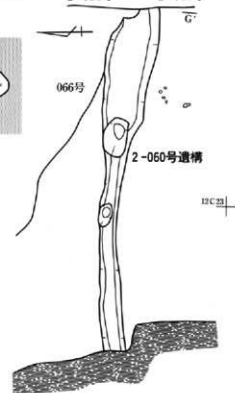
2-009号遺構カマド



0 1 : 40 1 m

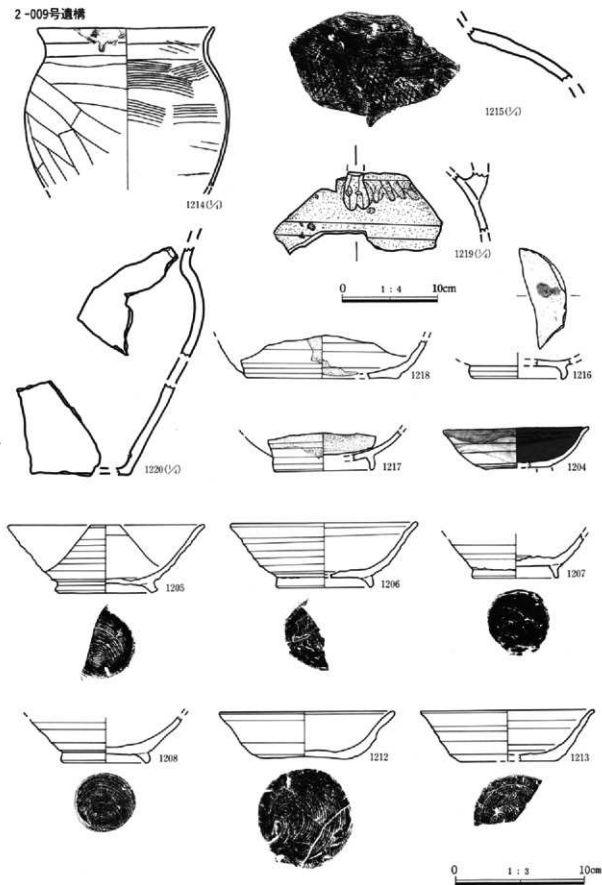


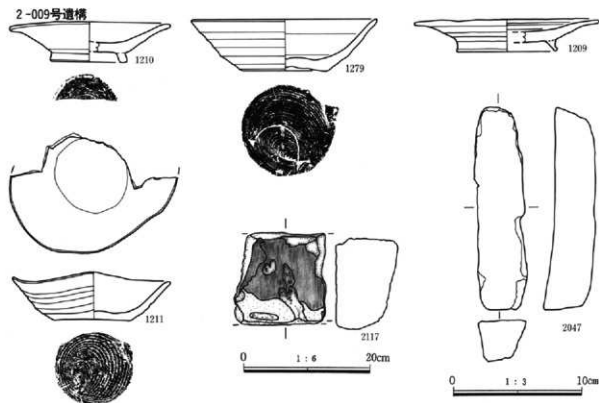
2-014号 2-042号



0 1 : 80 2 m

2-009号遺構





小八木志志貝戸2区108号遺構 (図73頁)

【位置】 12C19グリッド

【形状】 小円形 (0.4×0.4m)

【重複】 066号より新

【土層】 1黒褐色粘質土 2黒色粘質土

【遺物】 下位よりイノシシ幼獣歯 (4075) 検出

【備考】 イノシシ幼獣埋葬坑の可能性ある。時期は古代か。

小八木志志貝戸2区009号遺構 (図73頁)

【位置】 11T19グリッド

【形状】 長方形 (5.2×2.7m)

【重複】 北東側を中世墓109号で壊される

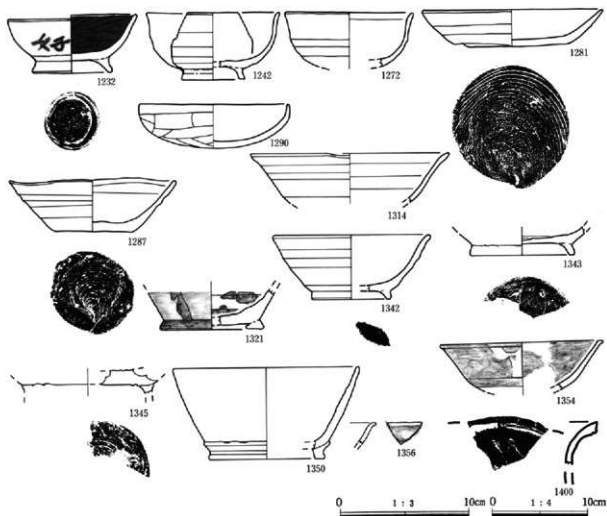
【土層】 1暗褐色砂質土 2岡前 粘土粒多い 3岡前 ローム塊多い

【内部施設】 東辺南よりにかマド 中央北側と南西角にピットがあるが后者は縄文遺構と重なる 床面北側は10cmほどの段差を持つ

【遺物】 カマド周辺から須恵器皿類 (1209・11)・坏 (1279)・袖石 (2117)、南壁側で須恵器把手付鍋? (1219)・碗 (1205)・坏 (1212)、中央から西壁側にかけて須恵器甕類 (1215・20)・碗 (1208)・片口皿 (1210)・土師器甕 (1214)・砥石 (2047)、北側で須恵器碗 (1207) が見られ、埋土中より灰軸陶器類 (1216~18)・黒色土器碗 (1204) を検出した

【備考】 東壁中央に突起部があるが性格不明。北側の段も当初重複と考えたが、明瞭な層位差はなかった。遺物はやや多いが、床硬化面もなく検出状況はあまい。

2-2-4 遺構外遺物



全体として多くなく、最も顕著なものは小八木志貝戸2区の「好」字墨書の黒色土器小型碗（1232）である。同じ2区では灰輪陶器碗（1354・56）・瓶頸（1321）、須恵器碗坏皿類（1242・72・81・87・1314）があった。同6区では須恵器碗（1342・43）・瓶頸（1345）が見られ、正観寺西原では須恵器碗（1350）、また菅谷石塚では軟質の須恵器横瓶？（1400）と土師器坏（1290）が顕著なものである。



## 2-3 古墳時代

この時代の検出遺構は次のとおりである。

祭祀関係遺構	環濠祭祀	1カ所
	土器集中	1基
	特殊井戸	1基
	遺物集中	2カ所
	その他井戸	1基
埋葬関係遺構	古墳	2基
集落関係遺構	中期竪穴住居	11軒
	前期竪穴	6軒
	掘立柱建物	1棟
	ピット群	3カ所
耕地関係遺構	水田	1カ所2面
	畠	2カ所
	水路	3条
	その他溝	7条
	流路群	1カ所
	その他土坑	1基

後期の祭祀関係の遺構が多いこと、そして同時期の集落がないことが最大の特徴である。中でも小八木志志貝戸2区で検出した066号遺構は、直径30mの円墳状の形態ながら、濠内から多くの須恵器大甕が出土している。集落は、弥生後期から連続するもので、小八木志志貝戸1・2区に集中している。水田は、古代とは異なり菅谷石塚のみで検出した。

なお小八木志志貝戸2区015号遺構は古墳時代前期、同050号遺構は弥生時代後期として調査時には認識していたが、その後015号は弥生時代後期、050号は古墳時代前期であることが判明した。015号については重複関係もあるため、本章で報告する。

正観寺西原と小八木志志貝戸6区では、この時代の遺構はほとんどなかった。

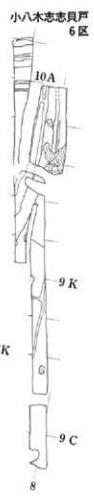
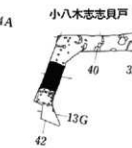
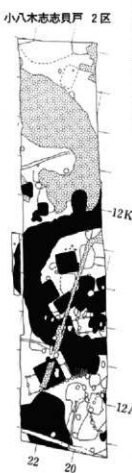
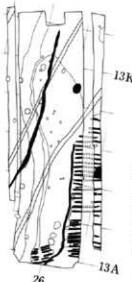
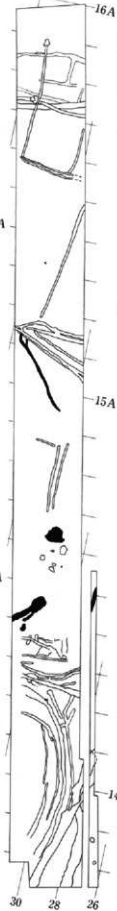
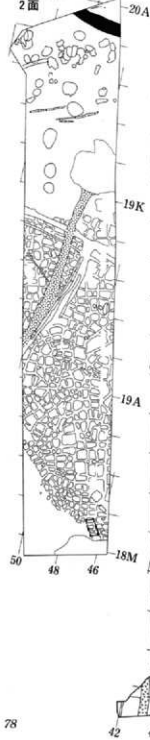
遺構外遺物では、埴輪がややまとまって出土した。

正観寺西原

小八木志志貝戸 0区

小八木志志貝戸 1区

菅谷石塚  
2面



## 2-3-1 祭祀

## 2-3-1-1 環濠祭祀遺構

小八木志志貝戸2区066号遺構(図80~86頁)

【位置】12C19-J22グリッド

【形状】墳丘：円形(径28.8m) 濠：多角形(最大幅8.2m最小幅2.2m)

【重複】古墳中期竪穴住居013・020・021・061・063・068・073・087各号より新 中世葛群より旧

【土層】1暗褐色砂質土 2暗褐色砂質土 3黒褐色粘質土 砂含む 4黒褐色砂質土 砂混じる 5黒色粘質土 6褐色粘質土 ローム塊含む

【墳丘】盛土等は全くなく、石室等の痕跡もない

【濠】底は全体に平坦で、上面が大きく攪乱された南西側を除き壁の立ち上がりは急。南側は幅が狭く不等間隔でピットがあり内側も浅く段状(幅1.0m)になる。北西側でも段状掘り込み(幅1.6m)を確認

【遺物】濠内の南西側から北側にかけて須恵器大甕8個体以上(口径30cm以上1001~08)・中型甕6個体以上(口径18cm以上1009~13・20)を5層中より検出。大甕は接合状況から転落した状態と考えられ、比較的狭い範囲でまとまる中型甕もその可能性がある。一方北側外壁直下からは土師器片集中部分(総重量約70kg 範囲2.8×1.0m)があり鏡類(1015・17・18他)・高坏(1019他)と共に未製品を含める石製模造品(剣形29点・鏡形8点・勾玉形2点・白玉4点・その他5点)がまとめて見られた。この土師器片集中部分には全く須恵器片は入っていないが、1m程度しか離れていないところには須恵器大甕片が出ている。他に形象埴輪小片(1029)1点のみが埋土中に見られた他に埴輪は全くなく、また葦石と考えられるものも見られない

【備考】この遺構の性格は不明な点が多いが、濠の土量から低い墳丘があったことは間違いない。しかし石室掘り方が墳丘中心部周辺で何も見られないこと、埴輪・葦石はなかったことから、典型的な古墳であるとは考えにくい。容器として実用には耐え難いものも含んだ須恵器甕類は低い墳頂部に置かれていたと考えるのが自然であり、全体としては30個程度以上があった可能性がある。土師器片・模造品集中部分は、すぐ北側で壊されている中期の竪穴住居087号との何らかの関係を考えるのが自然だろう。なお南側の濠が狭い部分は内部墳丘への入口部と思われ、ここでは須恵器甕類は出ていない。

小八木志志貝戸2区105号遺構(図82頁)

【位置】12H25グリッド

【形状】ピット(径0.8m深さ0.4m)内部上位に土師器底部片を容器として設置

【重複】066号濠外側掘り込み部に位置するが層位的に重複とは考えにくい

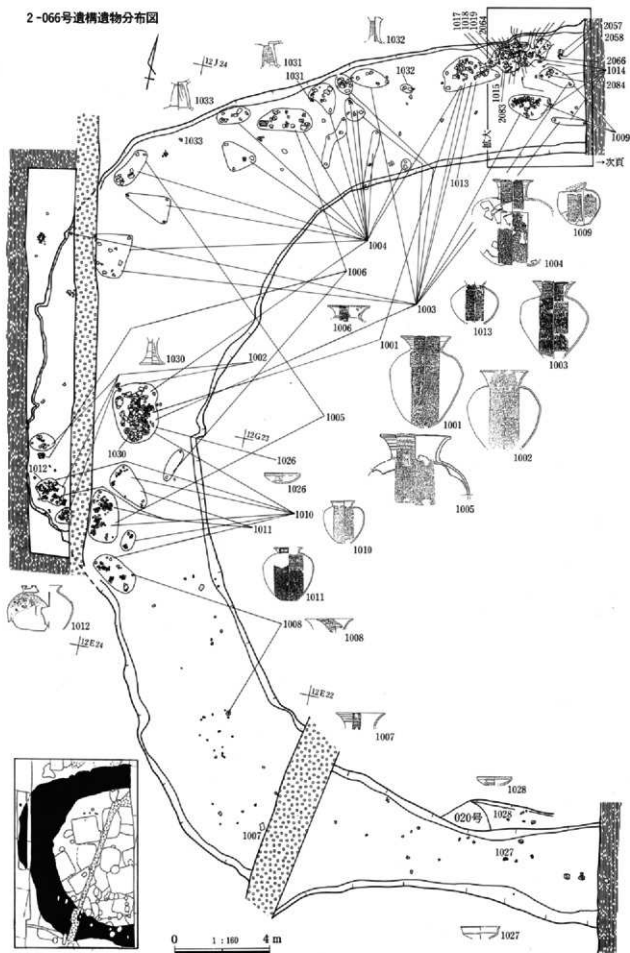
【遺物】容器である土師器壺片(1259)の上に重なる状態で同高坏片(1257)・竈体付着須恵器大甕片(1266)・弥生土器高坏片(1256)そしてイノシシ又はシカの焼骨片(4072・73)・不明焼骨片(4074)が固まっていた

【備考】調査範囲外に広がる弥生住居が066号濠外側掘り込みに壊されている。また須恵器大甕片は濠内部に散るものと同種である。そのため、066号の濠に大甕群が転落した時点で掘り込みが作られ、イノシシ又はシカの焼骨を埋納するために近くにある土師器片を利用したとしか考えられない。

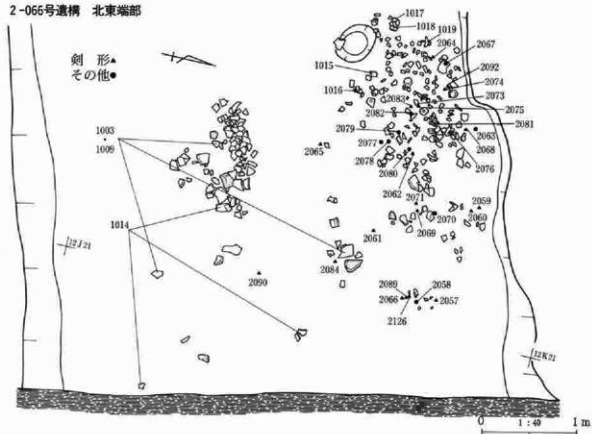


2-066号遺構遺物分布図

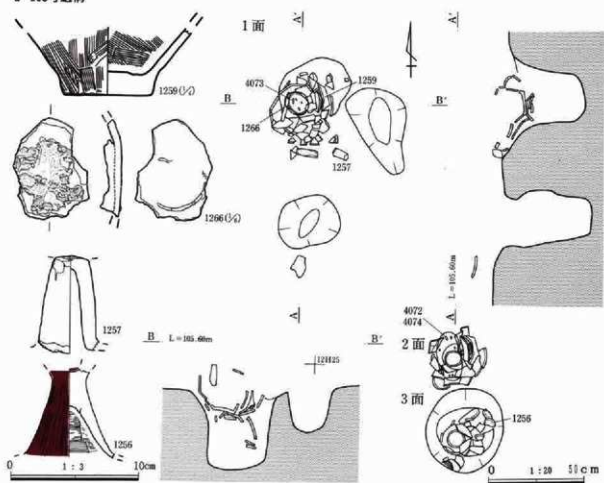
2-3 古墳時代



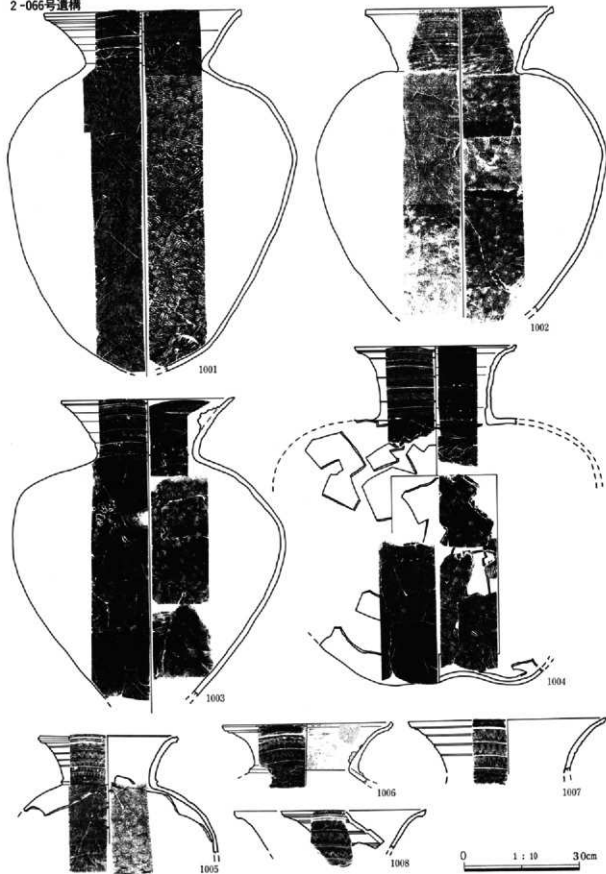
2-066号遺構 北東端部



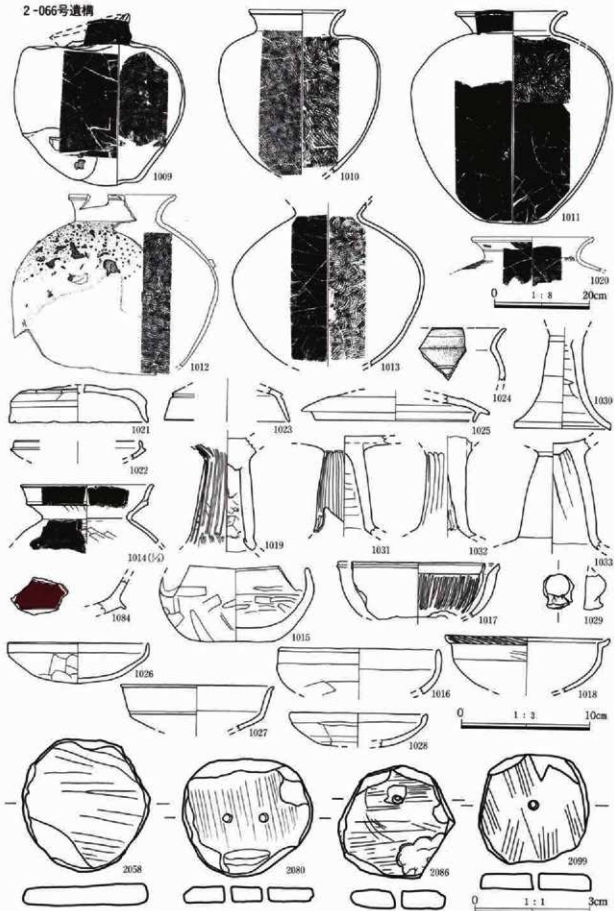
2-105号遺構



2-066号遺構

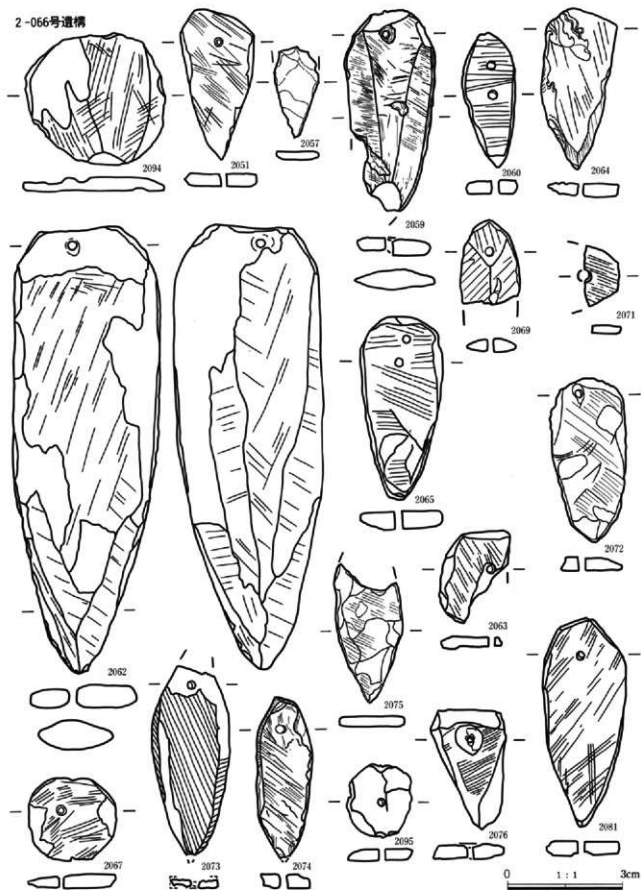


2-066号遺構

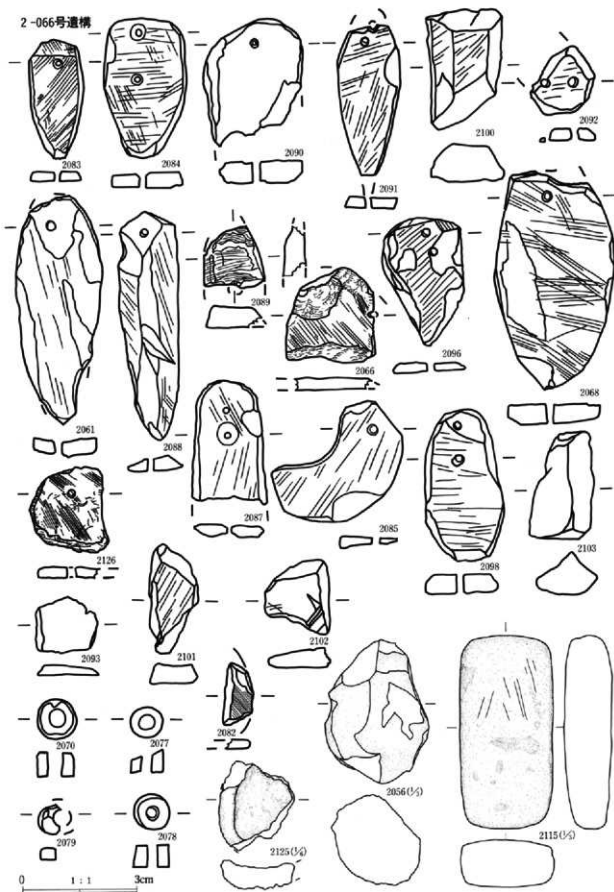




2-066号遺構

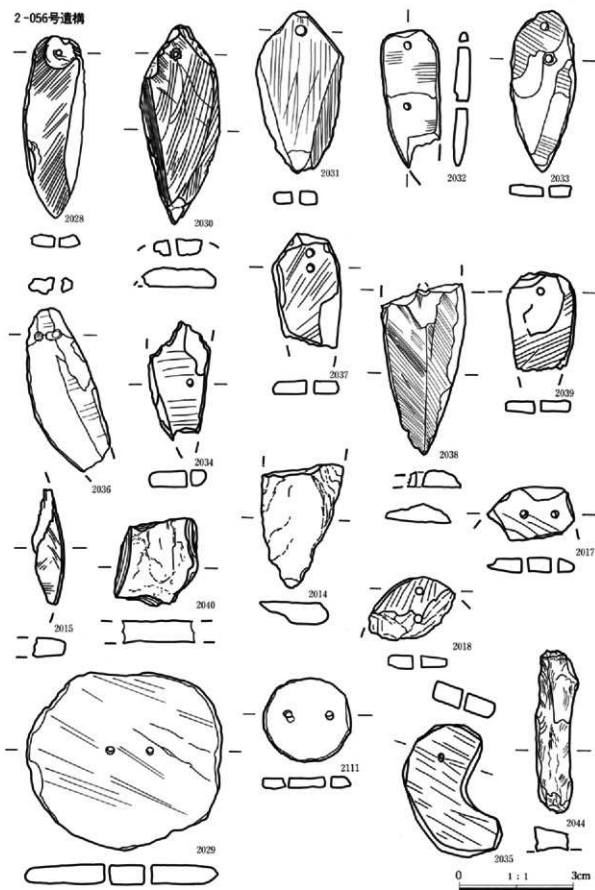


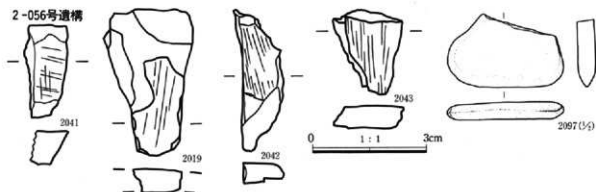
2-066号遺構





2-056号遺構





#### 小八木志志貝戸 2区056号遺構 (図87～89頁)

【位置】 11S18グリッド

【形状】 掘り込みを持たない状態で土師器片と石製模造品が集中 (範囲3×2m以上)

【重複】 縄文列石023号と円形木柱列052号の上に当たる

【土層】 1黒褐色粘質土

【遺物】 土師器碗類片 (1088他総重量10.7kg) と石製模造品 (鏡形2点・剣形28点・勾玉形1点・その他4点) が集中し、不明磨製石器 (2097) も混じっていた

【備考】 北に60m離れた066号北側の土師器片・模造品集中状態とほとんど同じものである。すぐ近接して同時期の遺構はない。

#### 小八木志志貝戸 0区001号遺構

【位置】 14M31グリッド

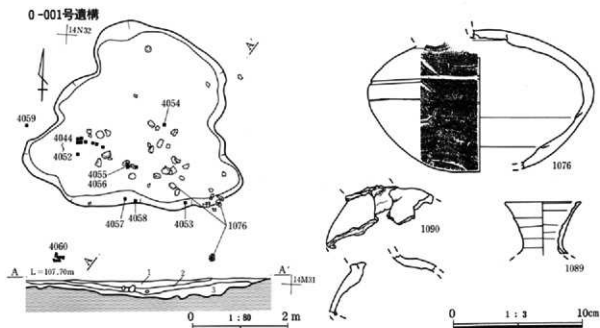
【形状】 不定形窪み (4.7×3.9m) 内部と周辺に須恵器瓶類と獣歯が集中

【重複】 なし

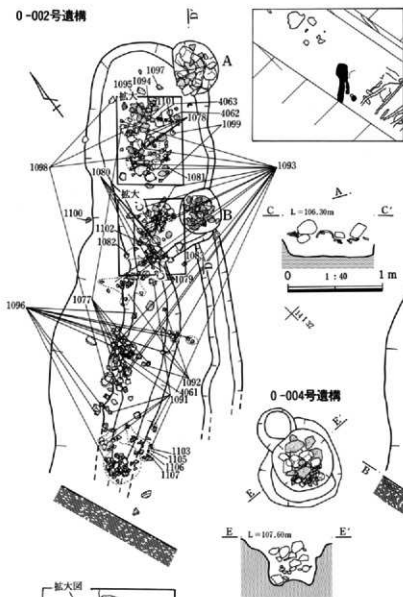
【土層】 1灰黄褐色砂質土 2灰黄褐色粘質土 3黒褐色粘質土

【遺物】 埋土土層で須恵器平瓶 (1076・90)・瓶類 (1089) と牛歯 (4044～51・55～57・59)・馬歯 (4053・60)・牛または馬骨片 (4058) 不明獣歯骨 (4052・54) を検出

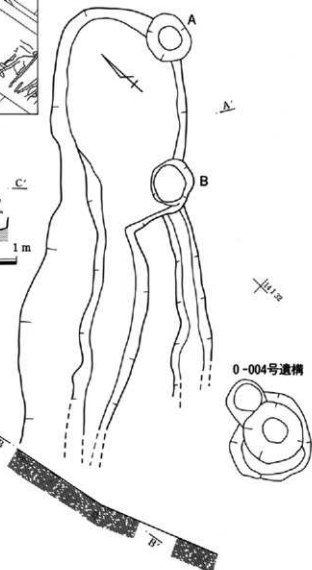
【備考】 窪みは底も不均一で自然の湧水点と考えられる。牛歯がほぼ全て内部であるのに対し、馬歯は外側にある。瓶類は水汲みに関係するののか。



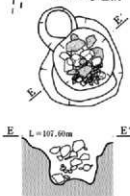
0-002号遺構



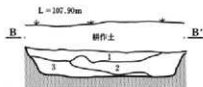
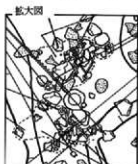
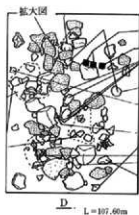
0-002号遺構



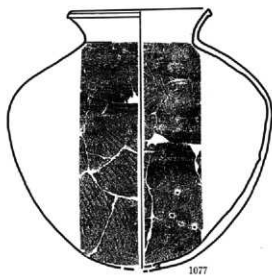
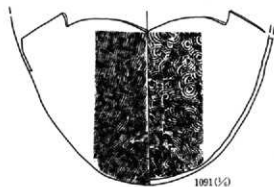
0-004号遺構



0-004号遺構

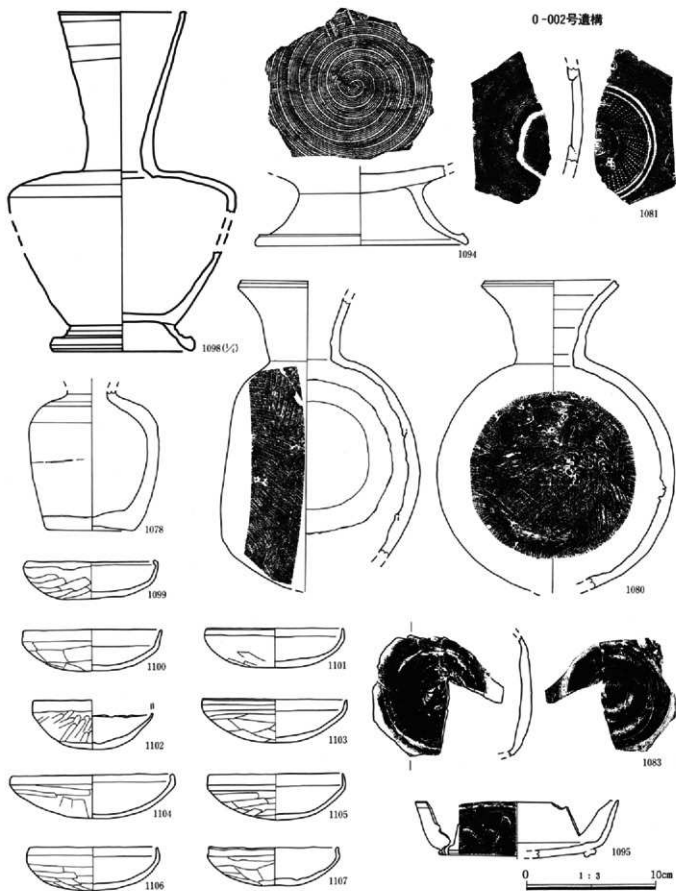


0-002号遺構



0 1 : 3 10cm

0 1 : 4 10cm





## 小八木志志貝戸0区002・004号遺構 (図90～92頁)

【位置】 14H32～J32グリッド

【形状】 002号：北東南西走向 (上幅2.8m長10m以上) 004号：円形 (径1.8m深さ0.9m)

【重複】 なし

【土層】 1黒褐色砂質土 2黒色粘質土 3黒褐色砂質土 締まり弱褐色土含む

【内部施設】 002号は井戸 (A：径1.0m深さ1.8m B：径1.0m深さ0.8m) とそこから始まる溝 (幅A2.4mB1.6m) の二組が重なる Aの溝部端は楕円形状 (底4.4×2.3m) の広い掘り方を持つ Bが新しいか

【遺物】 二つの井戸は礎で埋められ、Aの溝部は2層中にそれぞれの井戸前に礎群と須恵器壺類 (1077・79・82・91～93・96・97)・瓶類 (1078・80・81・83・98)・壺 (1094)・碗 (1095)・土師器坏 (1099～1107) が出土 壺類と土師器坏は南西側が多く、井戸前は瓶類が目立ちまた牛歯 (4061～63) を検出

【備考】 水流痕は明瞭ではないが井戸からの水を流す目的は確かで、それぞれの井戸の利用はあまり長期ではない。廃業後礎を投入すると共に瓶類と牛歯を意図的に埋納したと思われる。大壺片は200m南に離れた2区066号遺構のものと同様している。溝の走向は20m先でオトウカ山古墳台地にあたる。004号は小片遺物と位置より同時期と考えられる井戸だが、溝部を持たない。

## 2-3-2 埋葬

## 小八木志志貝戸3区001号遺構

【位置】 13H41グリッド

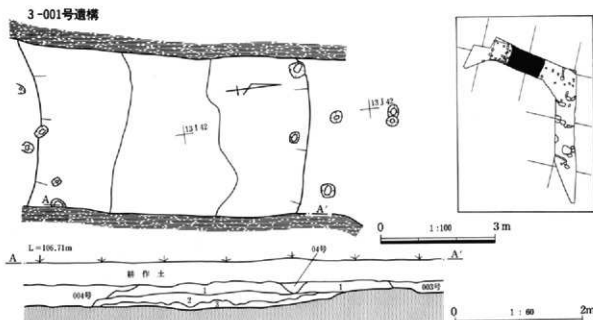
【形状】 上幅7.2m (長4m以上)

【重複】 中世屋敷003・004号より旧

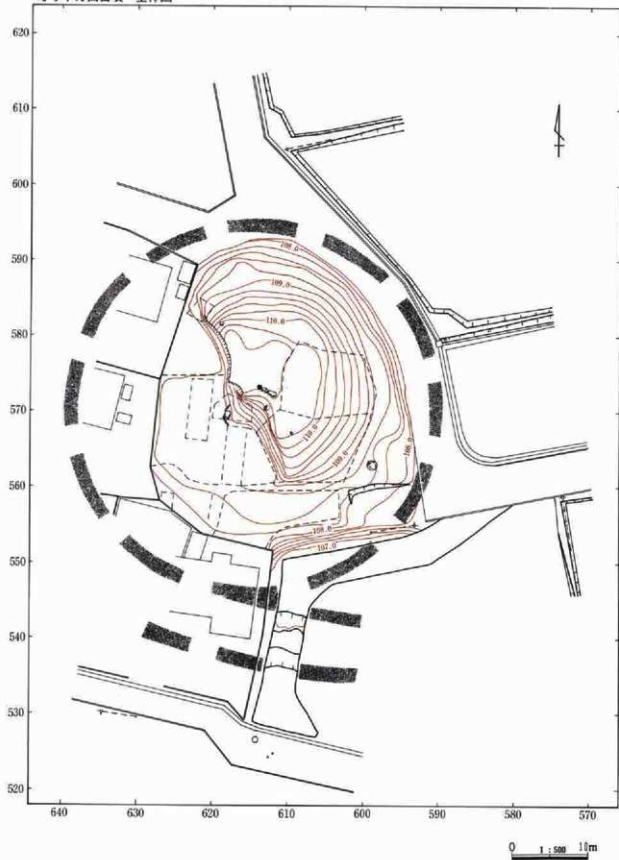
【土層】 1黒褐色砂質土 2黒色粘質土 3黒色粘質土 鉄分沈着

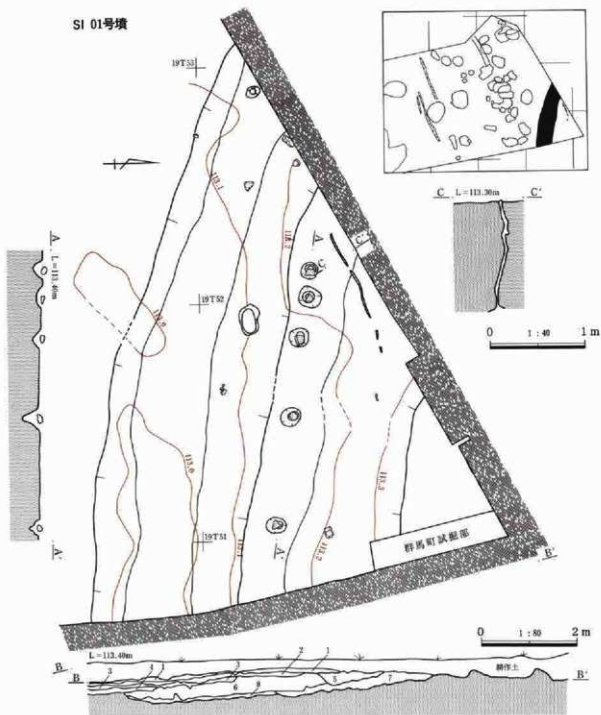
【遺物】 なし

【備考】 オトウカ山古墳 (推定径50m図94頁) 南側の濠と推定できるが、残存状況は不良。狭い範囲だが走向は円墳推定線とはずれるため、帆立貝墳の可能性もあるだろう。



オウトカ山古墳 全体図





## 菅谷石塚01号古墳

【位置】 19S50～T52グリッド 【形状】 縦上幅6.5m長12.3m以上 【重複】 なし

【土層】 1 浅間 As-B 軽石 2 黒褐色粘質土 3 暗灰褐色粘質土 4 黒褐色粘質土 浅間 As-C 多 5 暗褐色粘質土  
茶褐色土塊含み締まり弱 6 黒色粘質土 7 暗褐色粘質土 茶褐色土塊含む 8 暗茶褐色粘質土

【遺物】 なし

【備考】 本調査範囲北側に位置する桜山古墳南の濠状部分で、内側中位は古代にテラス状(幅1.2m)に削られて石を入れたピット列(長5.5m)が見られる。また北東・南西方向に走る濠状化現象痕(1.2m下の黄白色シルト質土の上昇)が見られた。なお調査範囲北東隅は昭和54年に群馬町教育委員会が試掘を行っているが、人工盛土などの土層は確認できず、古墳との判断を留保している。今回の調査成果も断定できる材料にはなっていない(参考：群馬町教育委員会、1980「菅谷遺跡」)。

### 2-3-3 集落

#### 2-3-3-1 中期整穴住居

小八木志志貝戸2区013号遺構 (図97・98頁)

【位置】 12E21グリッド

【形状】 長方形 (4.8×3.7m)

【主軸】 S-46°-W

【重複】 古墳時代整穴062号より新 073号近接

【内部施設】 南西辺南よりに煙道突出のないカマド 南と北角に貯蔵穴 南側と北角に不等間隔で柱穴 焼失し北側に焼土・炭化材残る。

【遺物】 カマド内から土師器大型環 (1188・91)・高環 (1185・89・90)・甕 (1177)・台付甕 (1179)、同周辺から碗 (1193)・埴 (1180・83)・高環 (1186・87)・甕 (1178)・甕 (1184)、床面各地から碗 (1192)・埴 (1182)・脚付甕 (1181)・壺 (1176)・石製紡錘車 (2045)、埋土中より磨石 (2122) 検出。高環 (1185) の接合破片は北貯蔵穴内からも出土。

【備考】 カマド内の遺物はやや不自然で、焼失廃棄後に移動があったかもしれない。

小八木志志貝戸2区018号遺構 (図99～101頁)

【位置】 11S22グリッド

【形状】 正方形 (5.6×5.4m)

【主軸】 N-68°-E

【重複】 ビット群071号と重複

【土層】 1 灰黄褐色粘質土 2 黒褐色粘質土 ローム塊炭化物焼土含む 3 黒褐色砂質土 4 灰黄褐色粘質土 焼土含む

【内部施設】 東辺南よりに煙道突出のないカマド 南東角に貯蔵穴 中央に4本柱穴 (柱間2.3～2.4m) 焼失し西北側に焼土・炭化材残る。

【遺物】 カマド内から土師器甕 (1117)・高環 (1125)・碗 (1136)・脚付碗 (1126)、貯蔵穴から甕 (1111・13・15・20)・甕 (1108)・埴 (1123)・碗 (1127・29・32・35)、東壁際から床中央にかけて甕 (1110・12・14・18・19)・壺 (1116)・甕 (1109・24)・埴 (1121・22)・碗 (1128・30・31・33・34) を検出。

【備考】 異常に多くの煮沸具を中心とする土器類が焼失時にあったことになる。全てがここでの使用ではなく、倉庫的な役割もあったか。

小八木志志貝戸2区019号遺構 (図102・103頁)

【位置】 12A21グリッド

【形状】 正方形 (6.4×6.3m)

【主軸】 N-53°-E

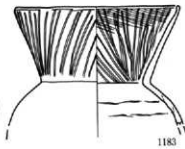
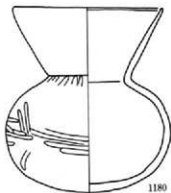
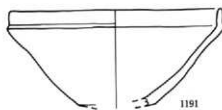
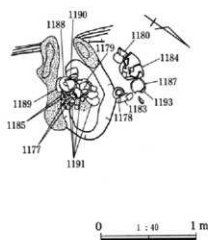
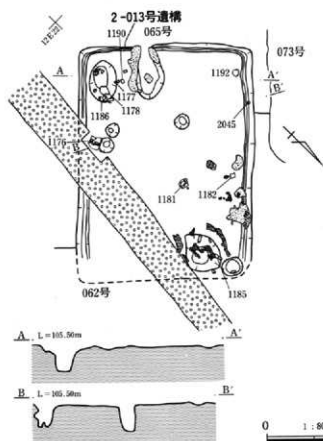
【重複】 古墳時代整穴020号やや近接

【土層】 1 橙色粘土 2 灰 3 灰褐色粘質土 4 にぶい褐色粘土

【内部施設】 北東辺南よりに煙道突出のないカマド 東角に貯蔵穴 中央に4本柱穴 (柱間3.1m) 広い周溝 (下幅0.2～0.3m) が四周。

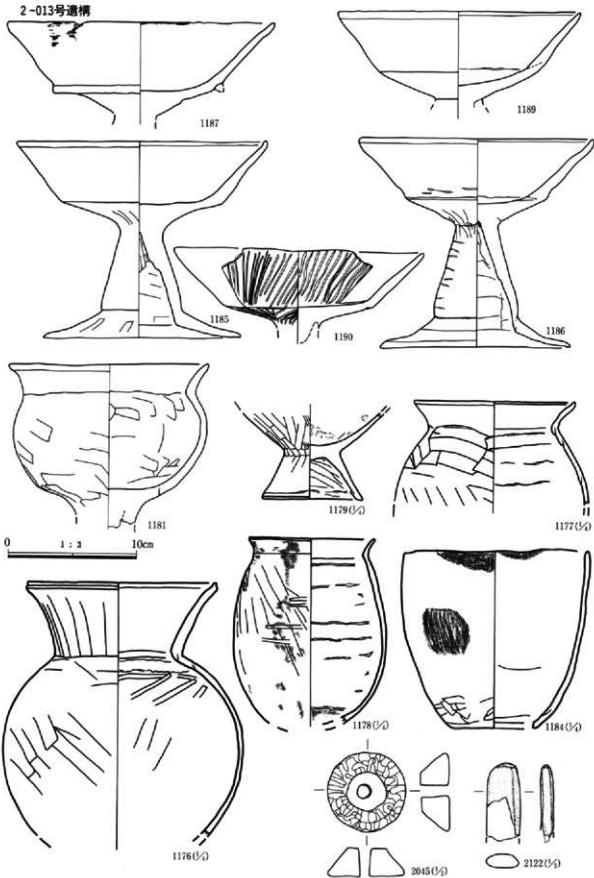
【遺物】 カマド内から土師器甕 (1141)・高環 (1143・44)、貯蔵穴から甕 (1137・38・40)・碗 (1146)、カマド前と左から甕 (1142)・甕 (1139)、埋土中より碗 (1145)・土製勾玉 (1291)・石製鋳型 (2108) 検出。

【備考】 特別の内部施設はなく、他に鍛冶遺物はないため、鋳型が本遺構に完全に伴うかは不明。

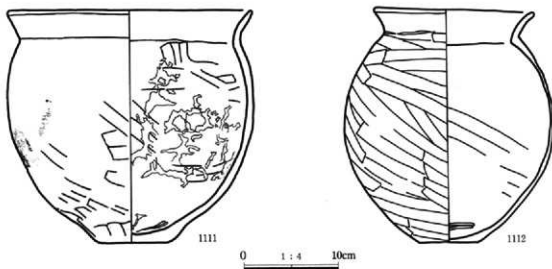
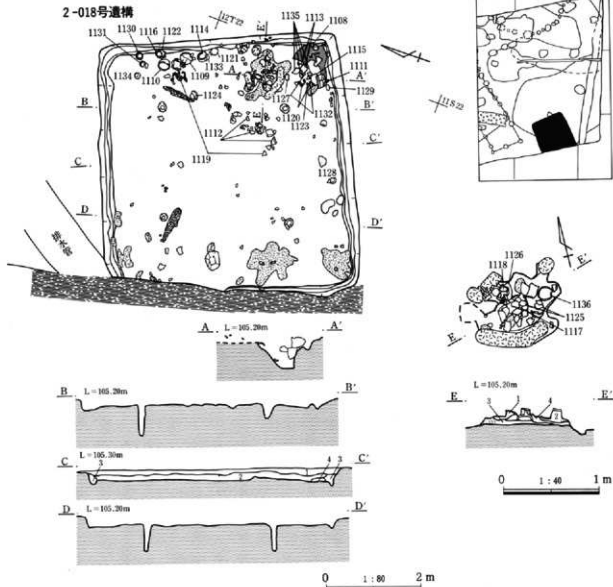


0 1 : 3 10cm

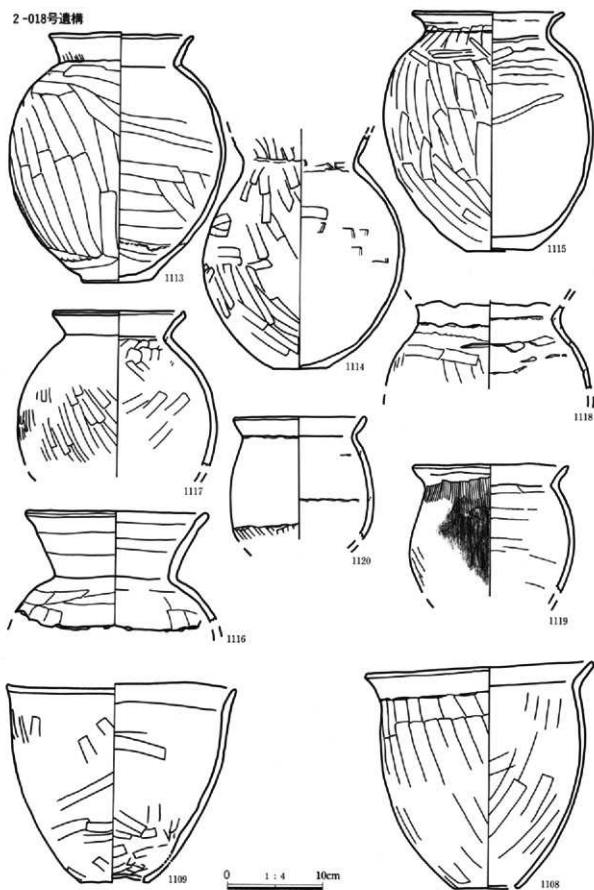
2-013号遺構



2-018号遺構

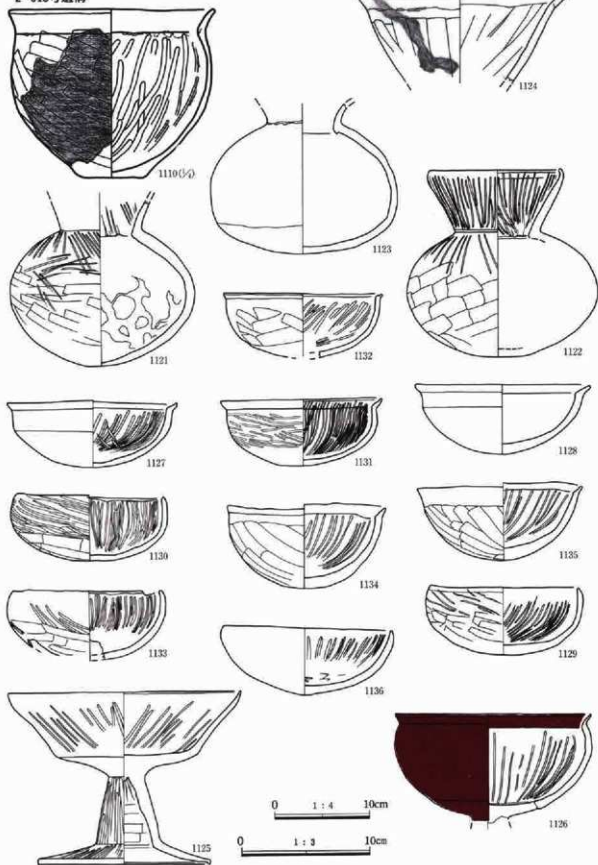


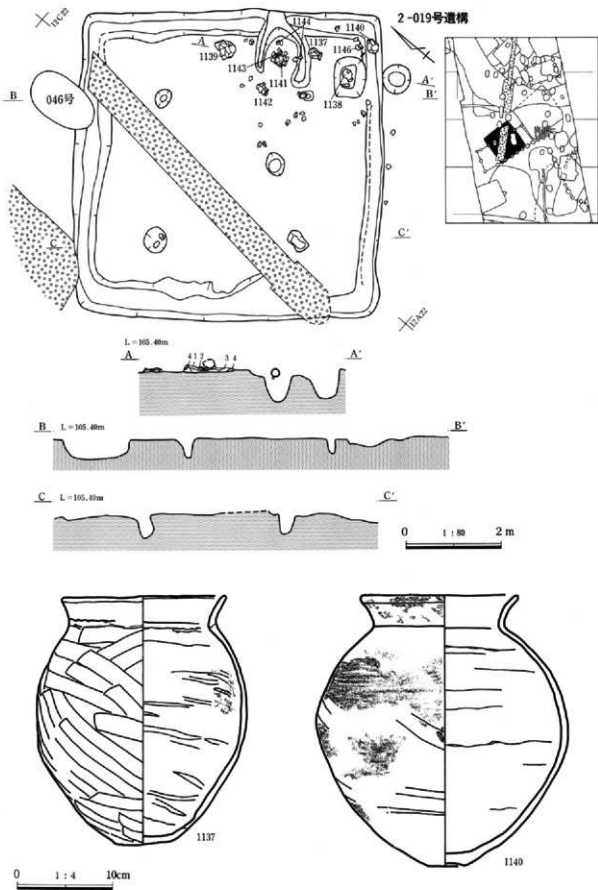
2-018号遺構



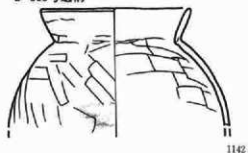


2-018号遺構





2-019号遺構



1142



1141

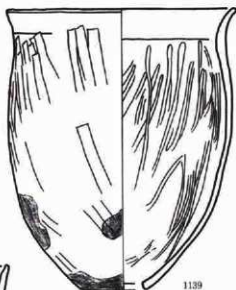


1291(5)



1138

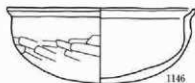
0 1 : 4 10cm



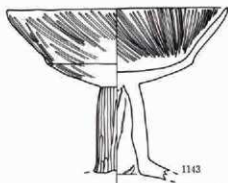
1139



1145



1146



1143



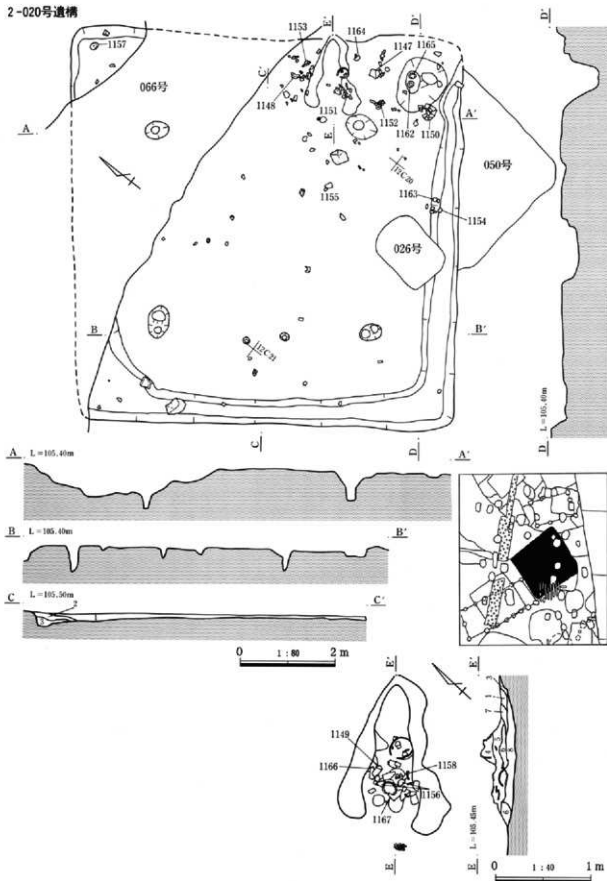
2108

0 1 : 3 10cm

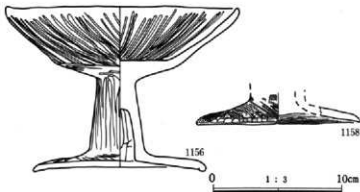
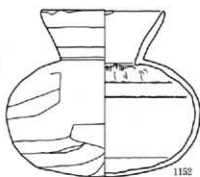
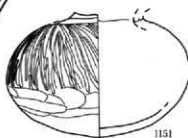
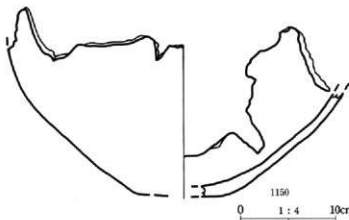
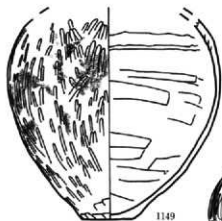
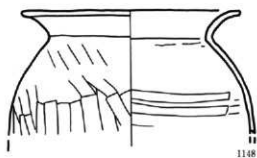
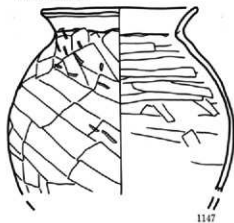


1144

2-020号遺構

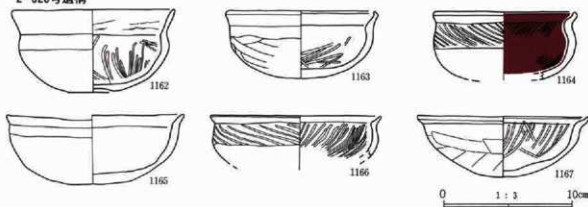


2-020号遺構



第2章 考古学的検出内容

2-020号遺構



小八木志志貝戸 2区020号遺構 (図104~106頁)

【位置】 12B19グリッド

【形状】 正方形 (8.0×7.8m)

【主軸】 N-51°-E

【重複】 古墳時代竪穴050号より新 019号やや近接

【土層】 1 黒褐色粘質土 2 同前 砂含む 3 同前 ローム塊含む 4 暗褐色粘土 5 灰白色粘土 6 焼土 7 灰 8 暗褐色粘質土 ローム塊含む

【内部施設】 北東辺東よりに煙道突出のないカマド 東角に貯蔵穴 中央に4本柱穴(柱間4.4m) 広い周溝(下幅0.4~0.5m)が四周

【遺物】 カマド内から土師器壺(1149)・埴(1151)・高坏(1156・58)・碗(1166・67)、貯蔵穴から壺(1147・48)・甕(1150)・埴(1152・53)・碗(1162・64・65)、中央南東側で埴(1154)・高坏(1155)・碗(1163)、北角より高坏(1157)検出

【備考】 カマド内の高坏は支脚として倒立使用。最大面積の竪穴住居。

小八木志志貝戸 2区021号遺構 (図107頁)

【位置】 12D19グリッド

【形状】 台形 (3.8×3.4~3.8m)

【主軸】 S-85°-E

【重複】 古墳時代竪穴061号より新か 中世墓3基と重複

【土層】 1 黒褐色粘質土 2 同前 ローム塊含む 3 焼土 4 灰黄褐色砂質土 近世古

【内部施設】 東中央に煙道突出するカマド 南東角に貯蔵穴 中央に4本柱穴(柱間1.6~2.0m) 周溝が四周

【遺物】 カマド内から土師器脚付碗(1241)、床に散って甕(1240)、埋土中より立方体軽石(2049)検出

【備考】 埋土上位には古代の遺物が見られた。

小八木志志貝戸 2区061号遺構 (図108頁)

【位置】 12E19グリッド

【形状】 正方形か(一辺6.8m程度か)

【主軸】 N-58°-E

【重複】 古墳時代竪穴021号より旧 015・062・069号より新

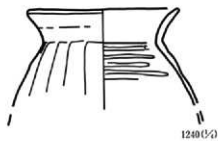
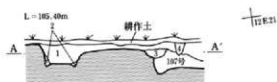
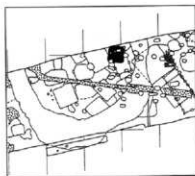
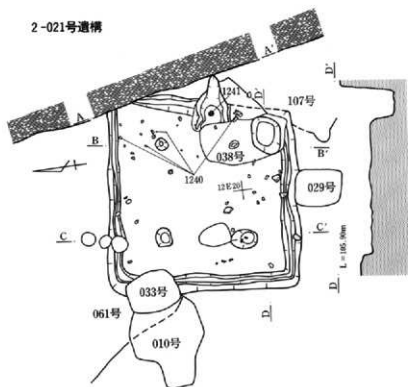
【土層】 1 黒褐色粘質土 2 同前 締まり良 上位にローム粒面 3 同前 ローム塊混在赤色顔料片含む

【内部施設】 東辺にカマドか 中央に二組の4本柱穴(柱間3.4~3.6m・2.5~2.8m) 南辺側に古い周溝痕 中央に不定形の浅い穴(1.5×1.3m) 焼失し北側中心に焼土・炭化材残り中央には粘土が散る

【遺物】 北西角側で土師器壺(1262)・高坏(1273・80)、南東側で甕(1285)検出

【備考】 2回以上の拡張をしている。重複多くまた掘り込みも浅いため残存状態不良。

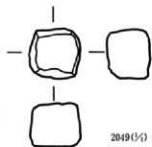
2-021号遺構



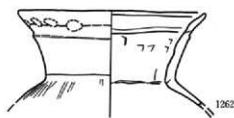
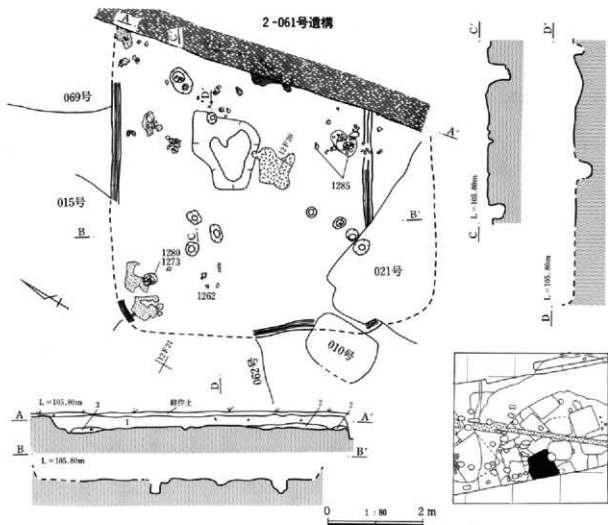
1240号



1241号



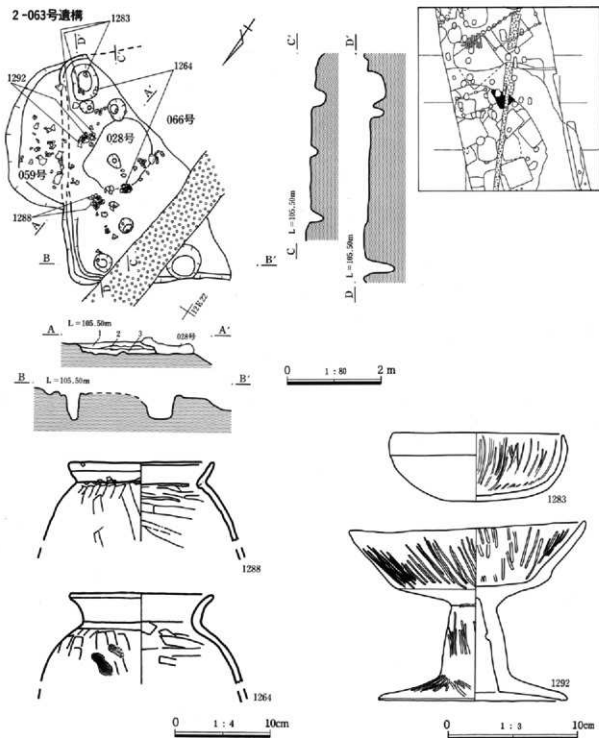
2049号



0 1 4 10cm

0 1 3 10cm





#### 小八木志志貝戸2区063号遺構

【位置】 12D21グリッド 【形状】 方形か（北東辺4.8m） 【主軸】 S-38-E?

【重複】 中世墓028号・古墳時代墓066号より旧 弥生竪穴住居059号より新

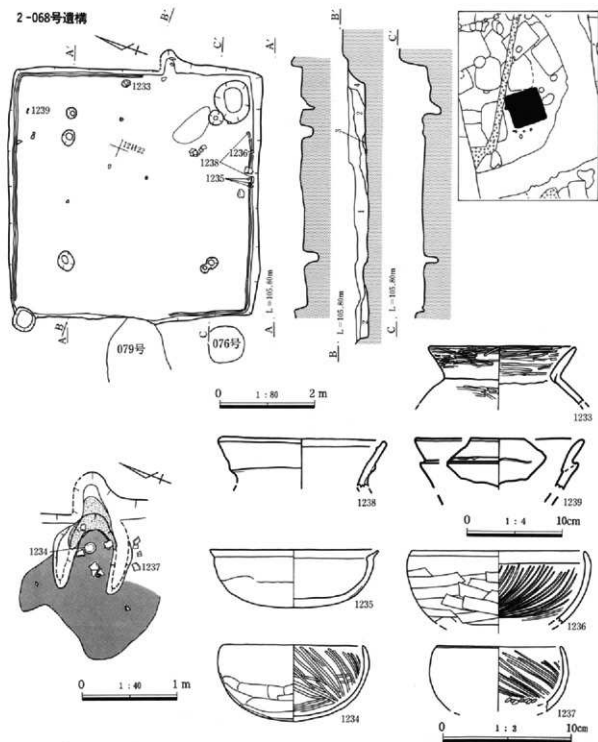
【土層】 1 黒褐色粘質土 2 同前 粘土含む 3 同前 ローム塊混在

【内部施設】 東隅に貯蔵穴・北西辺に大小のピット 中央に柱穴2個（柱間2.5m）

【遺物】 貯蔵穴で土師器碗（1283）、残存床中央で甕（1264・88）・高坏（1292）検出

【備考】 カマドは隣接する013号と同じように南西か。その場合は、東隅のピットは貯蔵穴ではなくなる。

2-068号遺構



小八木志志貝戸2区068号遺構

【位置】 12G21グリッド 【形状】 正方形 (5.1×5.1m) 【主軸】 N-72°-E

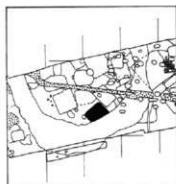
【重複】 時期不明土坑079号と重複

【土層】 1黒褐色粘質土 ローム塊混在 2黒色粘質土 ローム塊混在 3焼土 4暗褐色粘質土 ローム粒含む

【内部施設】 東辺に煙道突出するカマド 南東隅に貯蔵穴 中央に4本柱穴 (柱間3.1m)

【遺物】 カマド内から土師圓碗 (1234)、貯蔵穴脇で碗 (1237)、床南側で壺 (1238)・碗 (1235・36)、北東側で壺 (1233・39) 検出

【備考】 人為的に埋めた可能性が高い。



#### 小八木志志貝戸2区073号遺構

【位置】 12F22グリッド

【形状】 方形か（北東辺5.0m）

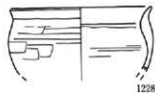
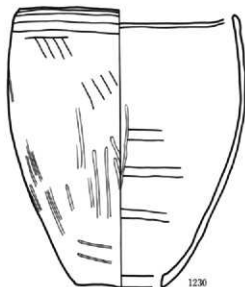
【主軸】 S—52°—W

【重複】 古墳時代竪穴住居013号近接 濠066号より旧

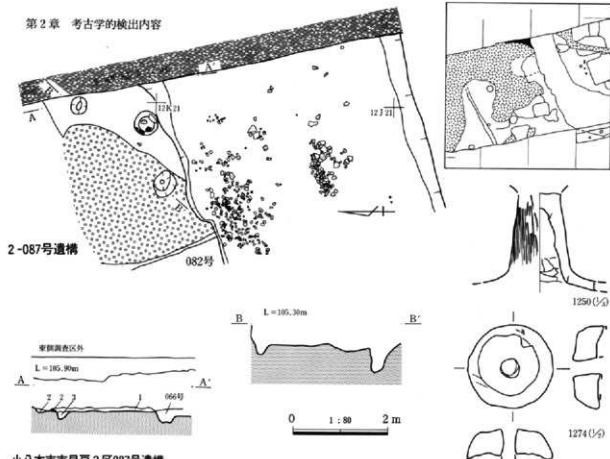
【内部施設】 東隅に貯蔵穴状のピット 南東壁際にピット2個

【遺物】 貯蔵穴状ピットより土師器甕（1230）・高坏（1229）・碗（1228）検出

【備考】 北東辺際以外は攪乱が激しく床も十分に検出できなかった。主軸は013号や063号と同様か。



0 1 : 3 10cm



2-087号遺構

小八木志志貝戸2区087号遺構

【位置】12K21グリッド 【形状】不明 【主軸】不明

【重複】古墳時代濠066号より旧

【土層】1暗褐色粘質土 2炭化粒 3黒褐色粘質土

【内部施設】中央に焼土・灰を含む炉状ピット 他にピット2個

【遺物】埋土中より土師器高坏(1250)・土製紡錘車(1274)検出

【備考】攪乱で大きく壊されている。本遺構を壊した066号の北側で出土している土師器環類・石製模造品集中部は、本遺構との何らかの関係が考えられる。炉状ピットからカマドがなかった可能性もある。

小八木志志貝戸2区111号遺構

【位置】12A18グリッド 【形状】方形か(南西辺2.6m以上) 【主軸】N-44°-E?

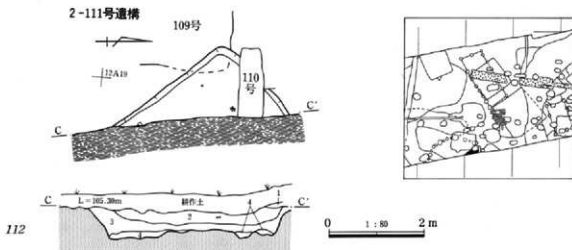
【重複】中世墓109号などより旧

【土層】1黒褐色粘質土 2暗褐色粘質土 3黒褐色粘質土 4黒褐色粘質土 ローム塊斑状に混在 上面に床なし

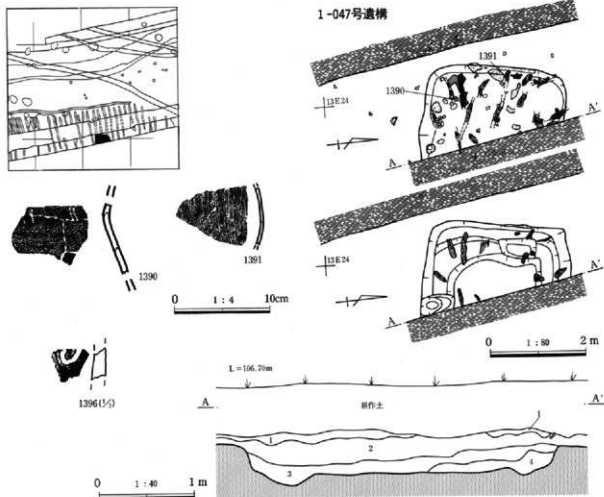
【内部施設】不明

【遺物】なし

【備考】3層下面が生活面と推定されるが床はなく平坦ではない。埋土状態より古墳中期の可能性は高い。



## 2-3-1-2 前期竪穴住居



## 小八木志志貝戸1区047号遺構

【位置】13E23グリッド 【形状】隅丸方形か(西辺2.8m) 【主軸】S-81°-E?

【重複】古墳時代Ⅱ008号より旧

【土層】1 黒褐色シルト質土 棒名Hr-FA多く含む 2 黒褐色粘質土 浅間As-C多く含む 3 同前 焼土炭化粒混じる 4 黒色粘質土 炭化粒多い

【内部施設】西壁・南壁際にピット 幅広い周溝(底幅0.3m) 焼失し炭化材多く残り西壁壁面も焼土化

【遺物】西壁近くより土師器台付壺(1391)・弥生土器壺(1390)、埋土中より縄文土器鉢(1396)検出

【備考】75m南に離れた同時期の焼失竪穴2区080号と同規模。

## 小八木志志貝戸2区080号遺構(図114頁)

【位置】12J23グリッド 【形状】隅丸方形(2.7×2.1m) 【主軸】N-5°-W

【重複】弥生竪穴086号より新 古墳時代ピット群081号より旧

【土層】1 黒褐色粘質土 ローム塊混在 2 黒褐色粘質土 浅間As-C多く含む 炭化材混在 3 黒色粘質土 ローム塊混在 4 黒色粘質土 炭化粒多い

【遺物】南側炭化材上より土師器台付壺(1255)検出

【備考】この竪穴は焼土施設や硬い床もなく、住居とは考えにくい。

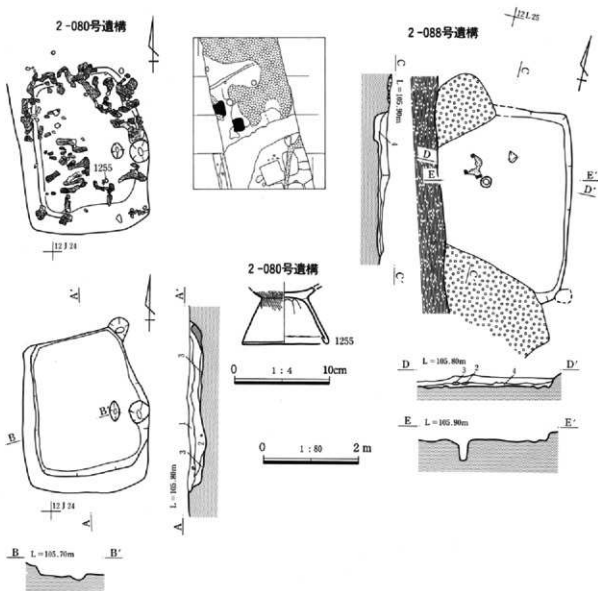
## 小八木志志貝戸2区088号遺構(図114頁)

【位置】12K24グリッド 【形状】隅丸方形か(東辺4.0m) 【主軸】N-10°-W 【重複】なし

【土層】1 黒褐色粘質土 浅間As-C多く含む 2 炭化物 3 焼土 4 暗褐色粘質土 珪状にローム粒含む

【内部施設】中央にピット 【遺物】1層中に土器小片含む

【備考】4層は掘り方だがその上面に床面はない。焼土・炭化物も炉のような施設ではないため、住居とは考えにくい。



小八木志志貝戸2区015・062号遺構 (図115頁)

【位置】 12E20グリッド

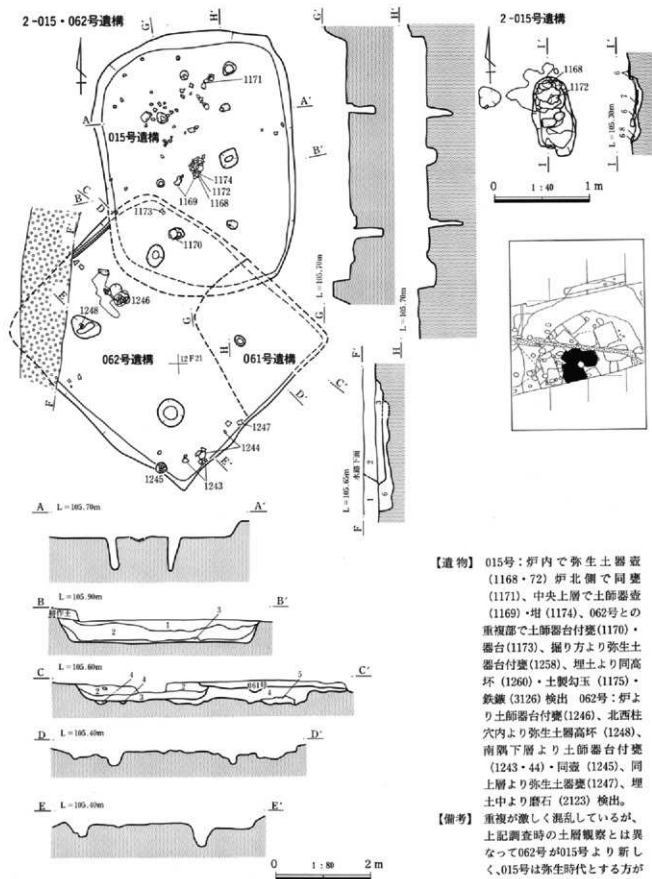
【形状】 015号：隅丸方形 (5.1×3.8m) 062号：長方形 (5.0×約4.5m)

【主軸】 015号：N-7'-W 062号：N-44'-W

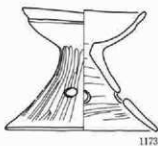
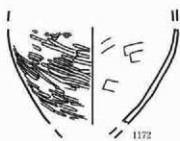
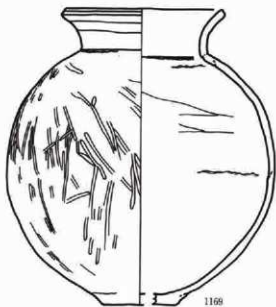
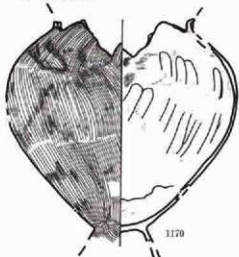
【重複】 古墳時代整穴013・061号より旧 古墳時代整穴069号・弥生整穴住居067号に接

【土層】 1黒褐色粘質土 浅間 As-C 含む 2同前 ロームを含む 3黒褐色粘質土 4暗褐色粘質土 ローム塊斑状に含む 5黒褐色粘質土 ローム塊多 6灰 7焼土 8黒褐色粘質土

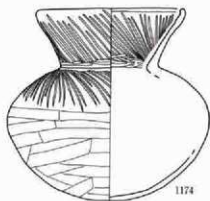
【内部施設】 015号：北側柱穴間に柵 4本柱穴 (柱間2.4×1.2m) 他にもピットがあるが性格不明 062号：北西側柱穴間に柵 4本柱穴 (柱間2.6×2.2m) 床ややまく東側壁に建て替え痕見える



2-015号遺構



0 1 : 4 10cm

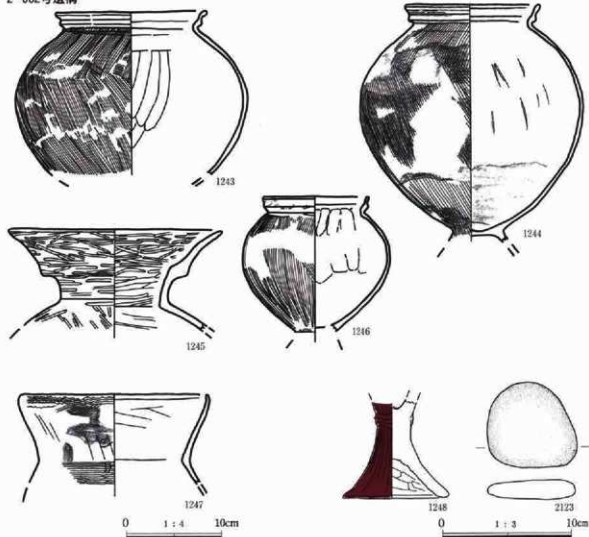


0 1 : 3 10cm

0 1 : 1 3cm



## 2-062号遺構



## 小八木志志貝戸2区050号遺構 (図118頁)

【位置】 12B19グリッド

【形状】 隅丸方形か(南辺約3.0m)

【主軸】 N-3°-E?

【重複】 古墳時代竪穴住居020号より旧

【土層】 1 黒褐色粘質土 浅間 As-C 多く含む 2 同前 ローム塊含む

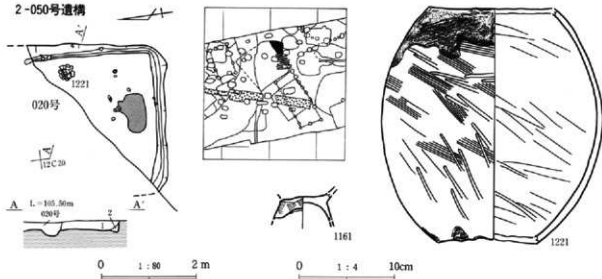
【内部施設】 南側床面に炭化物散る

【遺物】 東壁近くより土師器甕 (1221) 検出 なお050号遺構より出土した土師器台付甕 (1161) は本遺構の可能性が  
ある

【備考】 燃焼施設は不明だが、床はあり住居と考えられる。

第2章 考古学的検出内容

2-050号遺構



小八木志志貝戸2区069号遺構

【位置】 12 F 20グリッド

【形状】 隅丸方形か（北西辺2.6m以上南西辺2.8m?）

【主軸】 N-57°-E?

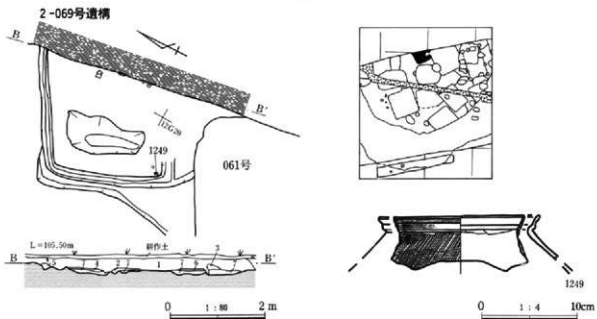
【重複】 古墳時代竪穴住居061号より旧 南西側に別遺構重複の可能性あり

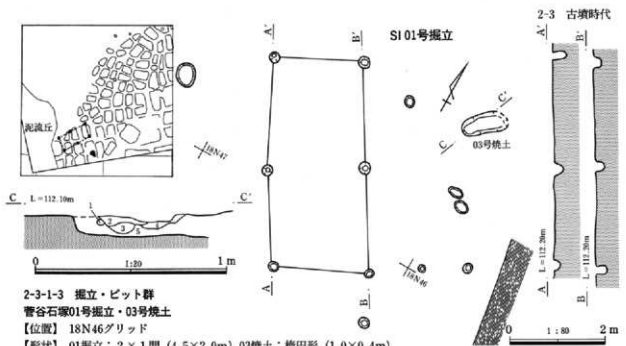
【土層】 1 黒褐色粘質土 浅間As-C多く含む 2 同前 焼土炭化粒混じる 3 焼土 4 炭化粒 5 黒褐色粘質土  
ローム粒含む 6 ローム粒貼り床 7 黒褐色粘質土 ローム粒多い

【内部施設】 南西辺2.8mで周溝が曲がるが、そこから先は不明瞭で判然としない。中央にある落ち込み（1.6×0.8m）は風倒木と考えられる。

【遺物】 中央南床面より土師器台付甕（1249）検出

【備考】 部分的な調査であるため、他の同時代の竪穴と同じような小規模のものかは断定できないが、床があることは確かである。なおこの遺構の位置は後期の溝066号の中心にあたるが、横穴式石室の掘り方の痕跡などは見られなかった。





### 2-3-1-3 掘立・ピット群

#### 菅谷石塚01号掘立・03号焼土

【位置】 18N46グリッド

【形状】 01掘立：2×1間（4.5×2.0m）03焼土：楕円形（1.0×0.4m）

【主軸】 01掘立N-60° 03焼土WN-42°-E

【重複】 古墳時代浅間 As-C 混土水田より旧

【土層】 1暗赤褐色粘質土 2焼土 3暗褐色粘質土 4褐色粘質土 焼土含む 5暗褐色粘質土

【内部施設】 01掘立の柱穴（深さ0.2~0.3m）

【遺物】 なし

【備考】 01掘立の周辺には他にまだピットがあったが、まとまらない。03焼土は調査時には住居としたが、積極的な証拠はない。

#### 小八木志志貝戸2区071号遺構

【位置】 11R20~T22グリッド 【形状】 不明 【主軸】 不明

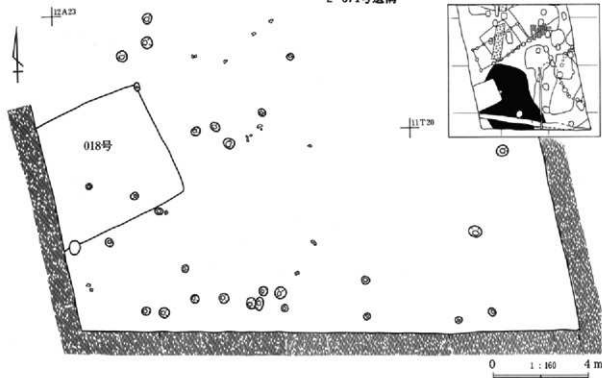
【重複】 古墳時代竪穴住居018号と重複

【土層】 黒褐色粘質土が主体

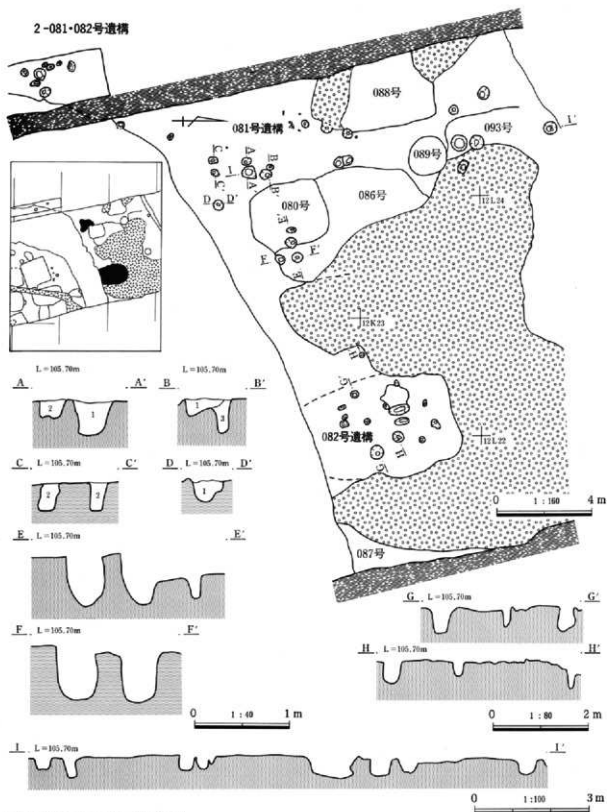
【遺物】 なし

【備考】 018号の周辺は縄文と近世の遺構を除くと空白地帯になるが、そこで検出した古墳時代相当のピット群。建物にはならなかったが、0.3m前後の深さのものもあった。

#### 2-071号遺構



2-081-082号遺構



小八木志志貝戸2区081・082号遺構

【位置】 12123～J21グリッド 【形状】 不明 【主軸】 不明

【重複】 古墳時代竪穴住居080号より新

【土層】 1黒褐色粘質土 浅間 As-C 軽石混じる 2黒色粘質土 3暗褐色粘質土 【遺物】 なし

【備考】 古墳時代遼066号の北外側で検出したビット群。北西端の105号と同様に066号と併行するビットも多いと思われるが、規則性は確認できない。082号は弥生住居の柱穴と古墳時代ビットが混在している可能性がある。

## 2-3-4 耕地

## 菅谷石塚様名 Hr-FA 下水田

【位置】 A: 19D52~153グリッド B: 19B47~19G49  
C: 18P46~19B49グリッド

【形状】 A: 小畦畔東方向弧状(幅0.5m長4m) 最大区画2.5m<sup>2</sup> 最小区画0.4m<sup>2</sup> B: 中畦畔東方向直線状(幅0.8m長8m) 最大区画3.5m<sup>2</sup> 最小区画1.0m<sup>2</sup> C: 小畦畔東方向直線状(幅0.6m長11.5m) 最大区画5.0m<sup>2</sup> 最小区画0.2m<sup>2</sup>

【遺物】 なし

【備考】 南北の泥流丘の間で大きな地形変化のない場所だが、畦畔形状より明らかに3部分の差がある。BとCは浅間As-B下水田でも見られた。Bの状態ですでに他遺跡でも確認されている小区画水田と言えるが、AとCは水田区画があまりに極小であるのに、畦畔は普通程度の幅がある。そのため調査時の水田との判断は、Bのみとするのが妥当である(ア・イはプラントオーバー採取地点)。

## 菅谷石塚16号溝

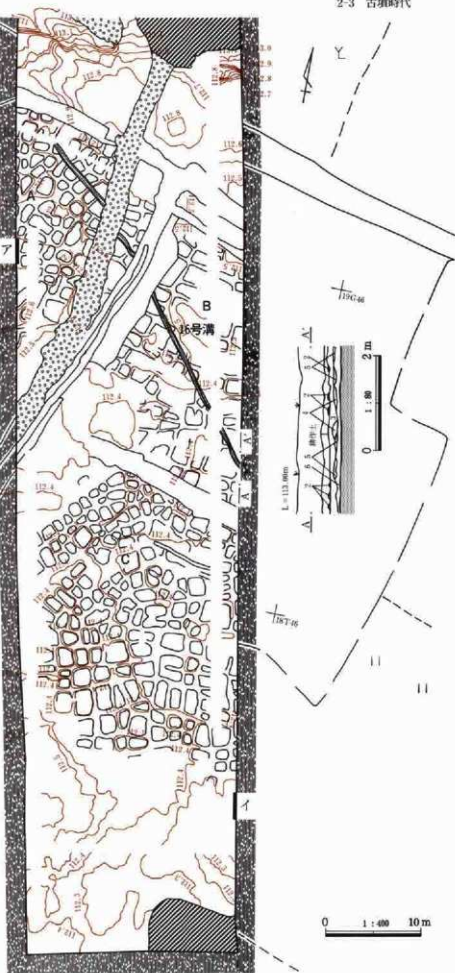
【位置】 19B47~H52グリッド  
【形状】 北西南東走向(上幅0.4m長40m以上)

【重複】 様名 Hr-FA 下水田より新

【土層】 1茶褐色砂質土 2浅間As-B 3暗灰色粘質土 4同前 様名 Hr-FA 塊少し含む 5様名 Hr-FA 6黒褐色粘質土 浅間As-C含む

【遺物】 なし

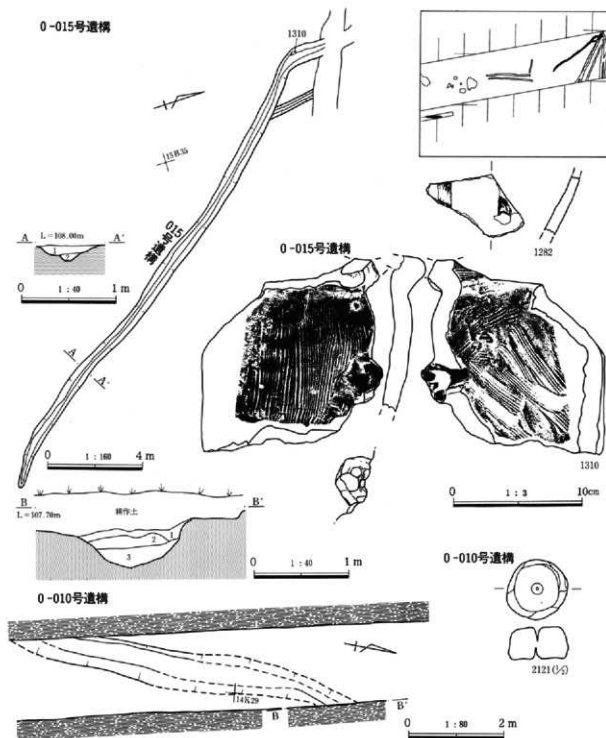
【備考】 水流通は不明瞭だが、区画溝とは考えにくい。



0 1:400 10m







小八木志志貝戸0区015号遺構

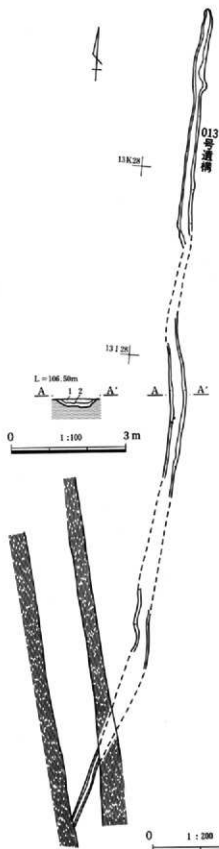
【位置】 14T32～15C35グリッド 【形状】 東西走向(上幅0.7m長24m以上)北西端で2条合流  
 【重複】 016・018号遺構より旧 【土層】 1 灰黄褐色粘質土 2 黒褐色砂 【遺物】 北西端底近くで形象埴輪(1310)、埋土中より須恵器中型壺(1282)検出 【備考】 水流痕は明瞭で、遺物は上流の遺構からのものとなる。

小八木志志貝戸0区010号遺構

【位置】 14J・K29グリッド 【形状】 北西南東走向(上幅0.8m長7m以上) 【重複】 なし 【土層】 1 黒褐色砂質土 2 黒褐色粘質土 砂含む 3 同前 締まりなし 【遺物】 埋土中より石製紡錘車未製品(2121)検出 【備考】 水流痕は明瞭で、延長方向は不明だが、北側は015号と繋がる可能性も考えられる。



## 1-013号遺構



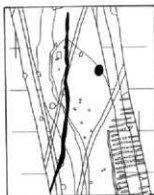
013号遺構

## 小八木志志貝戸1区013号遺構

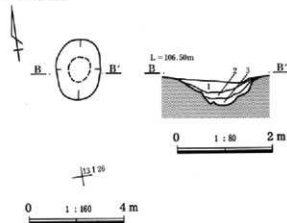
- 【位置】 13D28～L27グリッド  
 【形状】 南北走向（上幅0.9m長45m以上）  
 【重複】 002号遺構より旧  
 【土層】 1 灰褐色粘質土 2 黒褐色粘質土  
 浅間 As-C 軽石含む  
 【遺物】 なし  
 【備考】 水流痕は不明瞭で、様名 Hr-FA より新しい。

## 小八木志志貝戸1区044号遺構

- 【位置】 13I25グリッド  
 【形状】 楕円形（2.4×2.0m）  
 【重複】 弥生遺物集中014・015号より新  
 【土層】 1 黒褐色粘質土 浅間 As-C 軽石少し含む 2 同前 黄褐色土含む 3 同前 ローム塊含む  
 【遺物】 なし  
 【備考】 性格不明。



## 1-044号遺構



小八木志志貝戸1区008・009・011号遺構

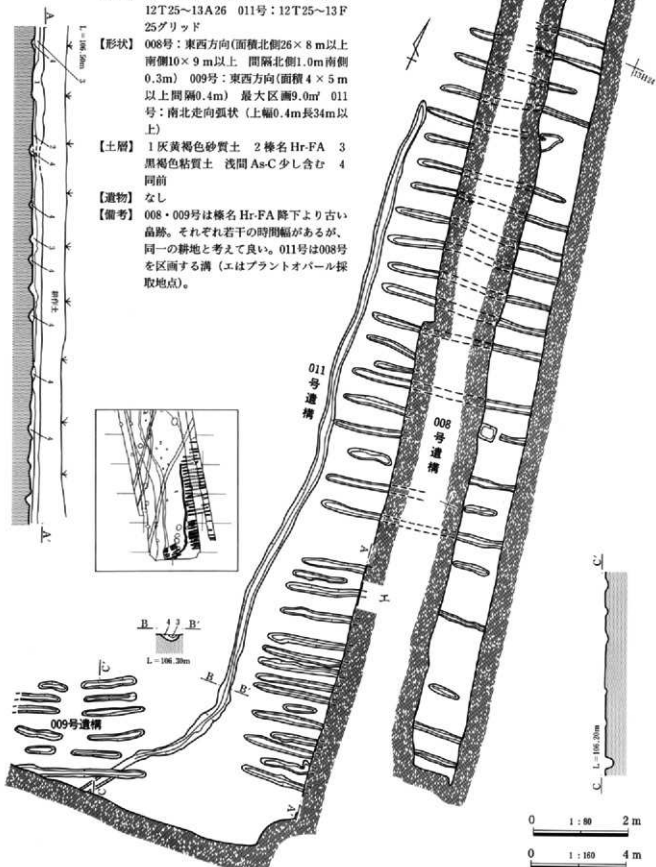
【位置】 008号：13A24～H24グリッド 009号：  
12T25～13A26 011号：12T25～13F  
25グリッド

【形状】 008号：東西方向(面積北側26×8m以上  
南側10×9m以上 間隔北側1.0m南側  
0.3m) 009号：東西方向(面積4×5m  
以上間隔0.4m) 最大区画9.0m<sup>2</sup> 011  
号：南北走向弧状(上幅0.4m長34m以  
上)

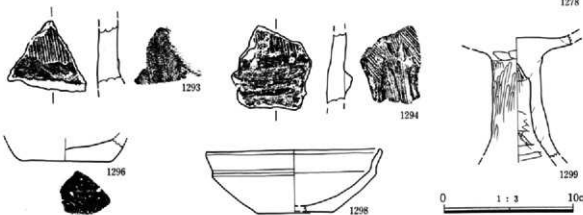
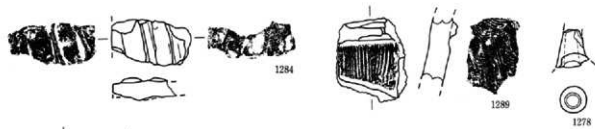
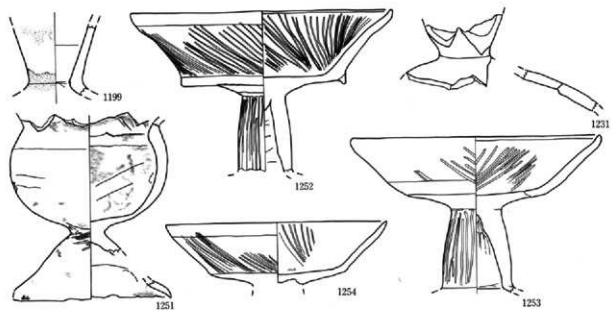
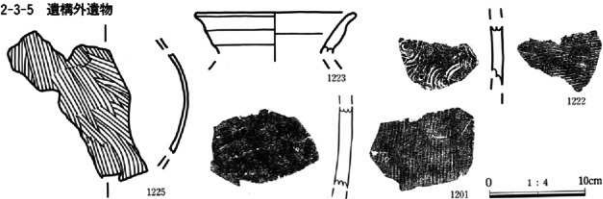
【土層】 1 灰黄褐色砂質土 2 榛名 Hr-FA 3  
黒褐色粘質土 浅間 As-C 少し含む 4  
同前

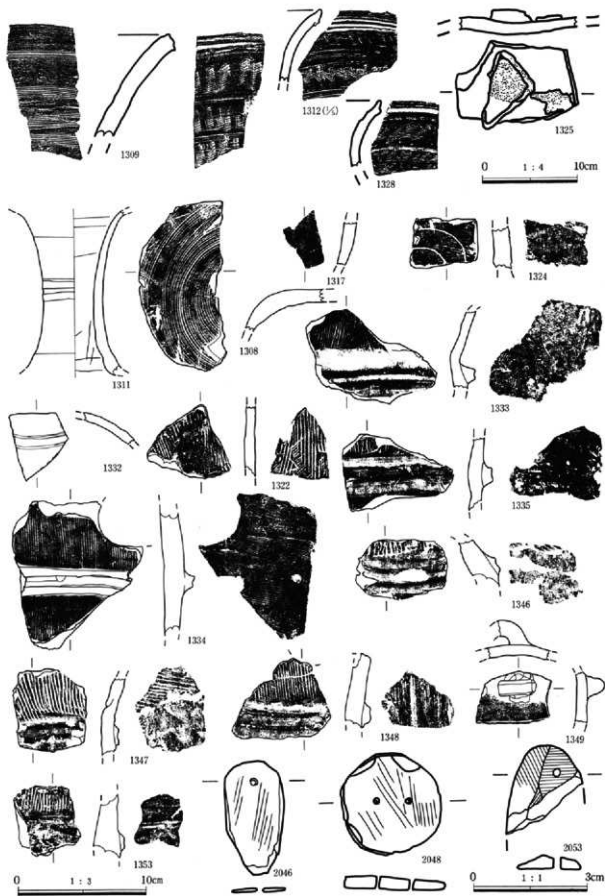
【遺物】 なし

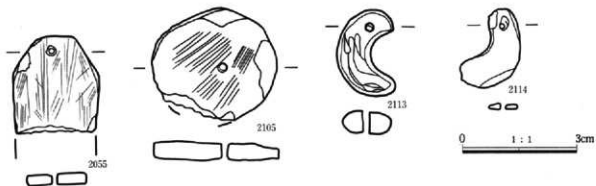
【備考】 008・009号は榛名 Hr-FA 降下より古い  
品跡。それぞれ若干の時間幅があるが、  
同一の耕地と考えて良い。011号は008号  
を区画する溝(エはプラントオパール採  
取地点)。



## 2-3-5 遺構外遺物







【既報告遺構出土遺物】

土師器台付甕(1225)は、小八木志志貝戸2区093号遺構ピット内から出土した。他に遺物のないこの遺構は、弥生時代ではなく古墳時代前期とすべきである。

【須恵器】

甕類は小八木志志貝戸2区出土が多いが(大甕1201・22・1312)、3区(大甕1325・中型甕1328)あるいは0区002号遺構周辺のもの(1309)もある。また0区からは把手付のもの(1349)も見られた。

瓶類では、同0区のもの(長頸瓶1311・瓶類1308)、2区のもの(長頸瓶1199・平瓶1231・瓶類1317)、3区のもの(瓶類1332)がある。

【土師器】

甕類では、小八木志志貝戸2区のものが多い(甕1296、高坏1252～54・1299、壺1223、脚付碗1251、大型坏1298)。器形が不明の注口(1278)も2区から出ている。

【埴輪】

円筒埴輪は、菅谷石塚からが多い(1289・93・94・1348)。隣接する正観寺西原からは1点あった(1353)。また小八木志志貝戸3区でも見られたのは、オトウカ山古墳のものと考えられる(1334・35)。

形象埴輪は、同3区からのもの(1322・24・33)、正観寺西原のもの(甕?1284)、菅谷石塚のもの(1346・47)が見られた。

【石製模造品など】

小八木志志貝戸2区から模造品(剣形2046・53・55、鏡形2048・2105)、そして石製勾玉(2113・14)が出土した。

## 2-4 弥生時代補遺

弥生時代の遺構・遺物については、「小八木志志貝戸遺跡群1」ですでに報告したが、そこで漏れた下記の遺構をここに報告する。

土器集中	1カ所
竪穴住居	1軒
ピット群	1カ所
土坑	1基

また竪穴住居1軒（小八木志志貝戸2区015号遺構）はすでに127頁に記した。

以上より、本報告までの弥生時代遺構総数は、次のようになる。

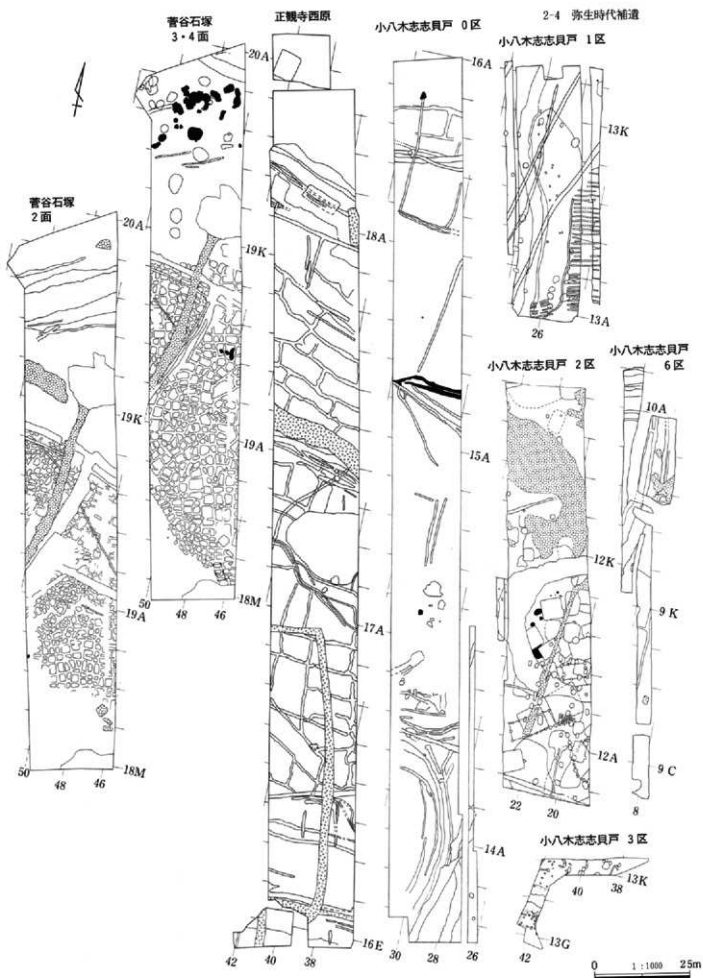
祭祀関係遺構	遺物集中	10カ所
埋葬関係遺構	土器棺墓	23基 (同可能性あるもの1基)
集落関係遺構	後期竪穴住居	16軒 (同可能性あるもの2軒)
	濠	1条
	ピット群	4カ所
	土坑	13基
	風倒木類	2基

なお進行中の小八木志志貝戸4・5区の調査でも弥生時代遺構は検出されているため、最終的な数量はさらに増える予定である。

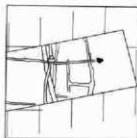
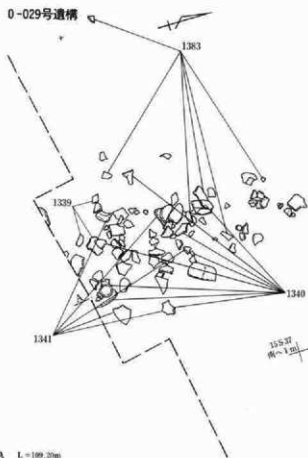
また次の既報告遺構の未報告遺物を遺構外出土と共に掲載した。

- 小八木志志貝戸1区007号遺構（濠）
- 1区014号遺構（土器集中地域）
- 1区019号遺構（土器集中遺構）
- 1区024号遺構（土器集中遺構）
- 2区077号遺構（風倒木）
- 2区093号遺構（竪穴住居?）
- 2区099号遺構（竪穴住居）

その他に、調査過程で伴出した縄文時代遺物についても一部を併せて載せた。なお縄文時代については「小八木志志貝戸遺跡群4」で本格的に報告の予定である。

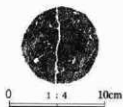
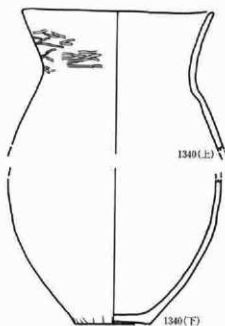
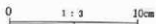
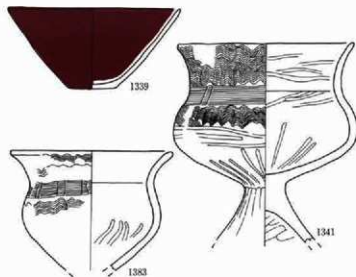
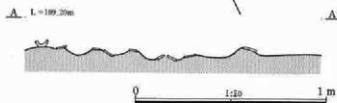


2-4-1 弥生遺構



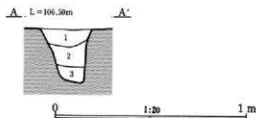
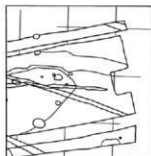
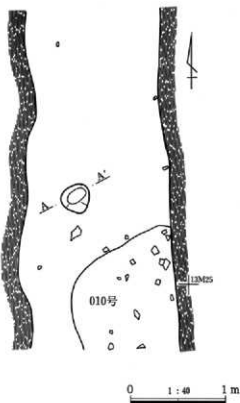
小八木志貝戸0区029号遺構

- 【位置】 15R37グリッド
- 【形状】 不定形（2×1m以上）範囲に土器片集中
- 【重複】 なし 土器棺墓0区028号遺構の北15m離れる
- 【土層】 土地改良で上面は遺物検出面近くまで削られていた
- 【遺物】 ほは同一面で弥生土器壺（1340）・台付壺（1341・83）・鉢（1339）検出
- 【備考】 大型の壺がないため棺とは考えにくい。





## 1-046号遺構



## 小八木志志貝戸1区046号遺構

- 【位置】 13M25グリッド 【形状】 単独の土坑（径0.28m深さ0.28m）  
 【土層】 1 黒褐色粘質土 2 同前 ローム粒含む 3 同前 地山黄褐色土塊含む  
 【重複】 弥生時代竪穴住居1区010号遺構より北西0.5m離れる  
 【遺物】 弥生土器甕（1388）検出  
 【備考】 010号遺構は壁を検出できなかったため、同遺構のピットの可能性もある。

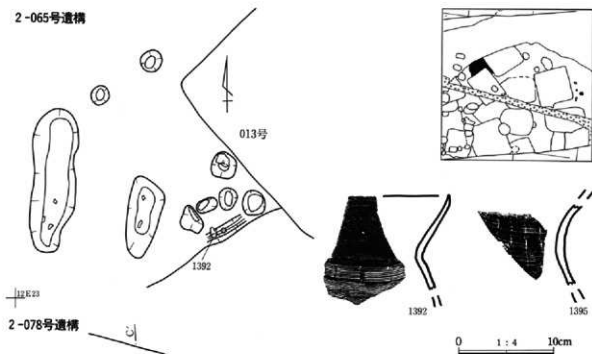
## 小八木志志貝戸2区065号遺構（図134頁）

- 【位置】 12E22グリッド 【形状】 不明  
 【主軸】 N-60°-E？  
 【土層】 ほとんど掘り方面まで攪乱を受ける  
 【重複】 古墳時代竪穴住居013号・濠066号より旧  
 【遺物】 周溝より弥生土器甕（1392）・埴土中より壺（1395）検出  
 【備考】 本遺跡で最も古い竪穴住居の可能性はあるが、残存状態は全く不良。

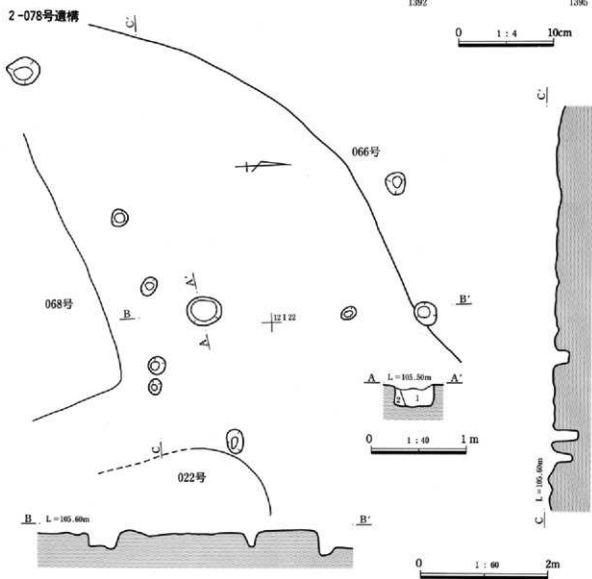
## 小八木志志貝戸2区078号遺構（図134頁）

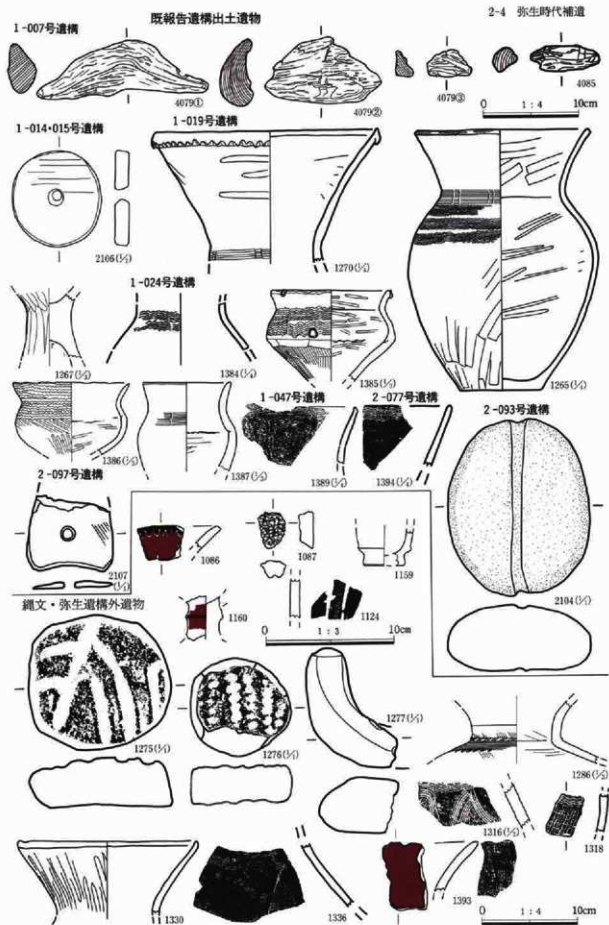
- 【位置】 12H21グリッド 【形状】 不定形ピット群（面積約5×8m）  
 【土層】 1 黒褐色粘質土 2 同前 ローム粒含む  
 【重複】 東側で弥生時代竪穴住居022号と接する  
 【遺物】 なし  
 【備考】 上面は攪乱されて不明だが、竪穴住居掘り方の可能性もある。ただし確実な遺物は検出できず。

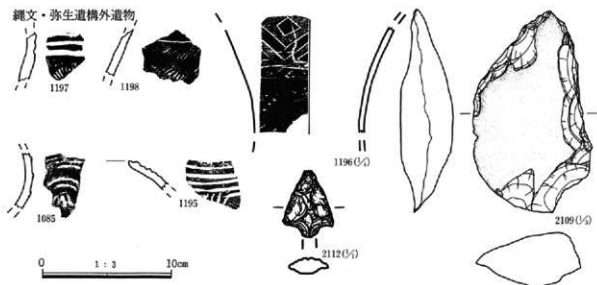
2-065号遺構



2-078号遺構







【既報告遺構出土遺物】

小八木志志貝戸1区007号遺構柱穴内出土のクヌギ節杭片(4079・85)、同014・015号遺構出土の石製紡錘車(2106)、同019号遺構出土の弥生土器甕(1265)・高坏(1267)・壺(1270)、同024号遺構出土の弥生土器壺(1384)・小型台付甕(1385・86)・小型甕(1387)、同047号遺構出土の甕(1389)、2区077号遺構出土の弥生土器壺(1394)、同093号遺構出土石製紡錘車(2104)、同097号遺構出土の磨製石鏃(2107)がある。

【弥生土器】

小八木志志貝戸2区からは、弥生土器甕(1318)・高坏(1086・1160)・壺(1224・86・1316・93)、有孔土製品(1087)・土製円盤(1275・76)・土製勾玉(1277)・不明土製品(1159)を検出。壺?(1224)は中期中葉～後半のものである。

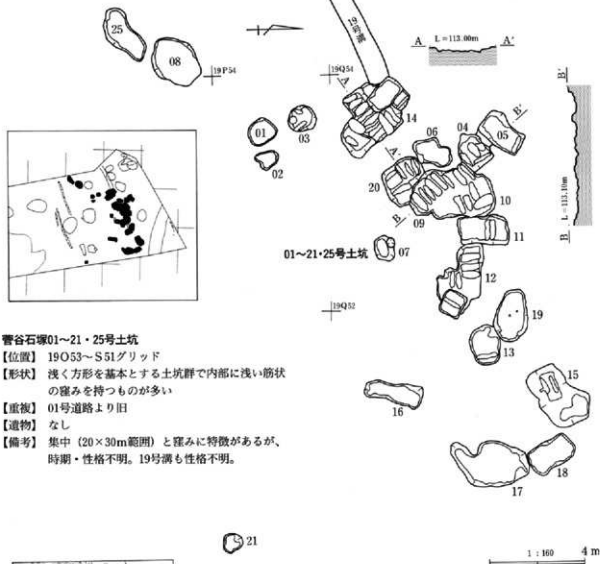
他に3区で壺(1336)、小八木志志貝戸出土区不明で壺(1330)が出ている。

【縄文時代遺物】

小八木志志貝戸1区からは、打製石器スクレーパー(2109)、同2区からは縄文土器鉢片(1085・1195～98)と打製石鏃(2112)が出ている。後者は『小八木志志貝戸遺跡群4』で報告予定の2区040号遺構から出土したものである。

## 2-5 時期不明の遺構

## 2-5-1 菅谷石塚遺跡



## 菅谷石塚01～21号土坑

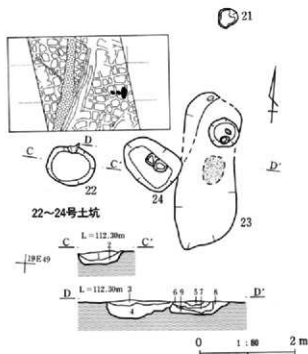
【位置】 19O53～S51グリッド

【形状】 浅く方形を基本とする土坑群で内部に浅い筋状の窪みを持つものが多い

【重複】 01号道路より旧

【遺物】 なし

【備考】 集中(20×30m範囲)と窪みに特徴があるが、時期・性格不明。19号溝も性格不明。



## 22～24号土坑

## 菅谷石塚22～24号土坑

【位置】 19E48グリッド

【形状】 22号：1.0×0.8m 23号：3.2×1.1m 24号：1.3×1.1m

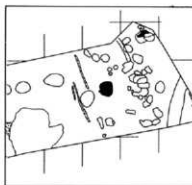
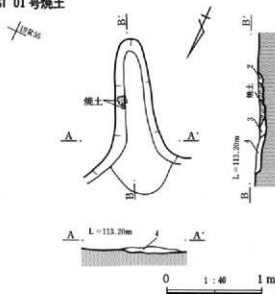
【重複】 浅間 As-C 混土下木田より旧

【土層】 1 暗褐色粘質土 黄褐色土ラミナ状に含む  
2 黒灰色灰 3 暗褐色粘質土 4 暗灰褐色土  
5 暗褐色粘質土 6 黒灰色灰 7 焼土 8 暗灰色粘質土 焼土含む 9 暗灰白色粘質土

【遺物】 なし

【備考】 22号と23号は焼土・灰の入った燃焼遺構だが、時期・性格不明。

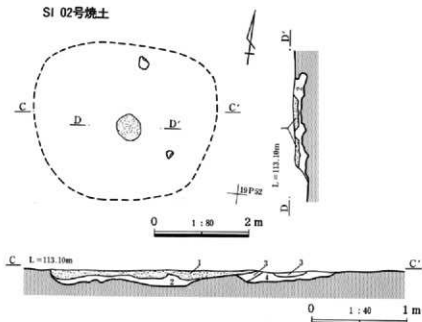
SI 01号焼土



菅谷石塚01号焼土

【位置】 19R55グリッド  
 【形状】 楕円形状(1.7×0.7m)  
 【主軸】 S-30°-E  
 【重複】 なし  
 【土層】 1 黒褐色粘質土 炭化物焼土含む 2 同前 茶褐色土塊含む 3 同前 焼土粒僅か含む 4 同前 黄褐色土粒含む  
 【遺物】 なし  
 【備考】 調査時には竪穴住居カマドとの判断だったが、積極的に裏付けられる材料に乏しい。

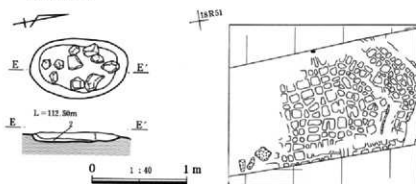
SI 02号焼土



菅谷石塚02号焼土

【位置】 19P52グリッド  
 【形状】 楕円形状(4.0×3.6m)  
 【重複】 なし  
 【土層】 1 暗褐色粘質土 焼土多い 2 褐色粘質土 焼土多い 3 暗褐色粘質土 黄褐色土塊含む 4 茶褐色粘質土 黄褐色土塊多い 5 暗褐色粘質土 硬い  
 【遺物】 なし  
 【備考】 広範囲に焼土が散るがそれ以上のものはなく、調査時の竪穴住居との判断には難点がある。

SI 01号集石

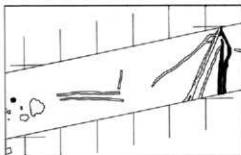
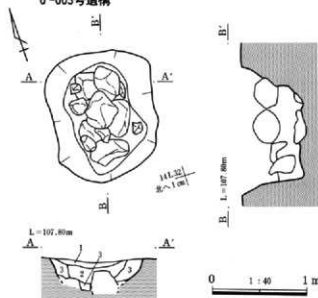


菅谷石塚01号集石

【位置】 18Q50グリッド  
 【形状】 楕円形 (1.0×0.6m)  
 【重複】 楯名 Hr-FA 下水田に近接  
 【土層】 1 黒褐色粘質土 浅間As-C 軽石含む 硬い 2 同前粘性強い  
 【遺物】 なし  
 【備考】 層位的に古墳時代の可能性はあるが、性格不明。

## 2-5-2 小八木志志貝戸遺跡

## 0-003号遺構



## 小八木志志貝戸0区003号遺構

【位置】 14L32グリッド

【形状】 楕円形土坑 (1.4×1.1m)

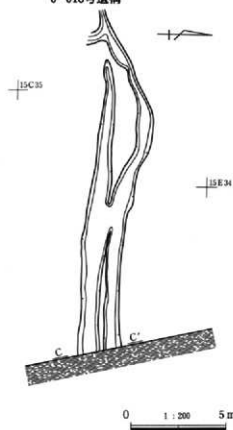
【重複】 001号遺構がやや近接

【土層】 1 黒褐色粘質土 2 暗褐色粘質土 ローム塊  
斑状に含む 3 同前 ローム粒含む

【遺物】 自然角礫で埋められる

【備考】 角礫での人為埋設は、10m南に離れた002号遺  
構とも似ているが、時期性格不明。

## 0-018号遺構



## 小八木志志貝戸0区018号遺構

【位置】 15C32～D35グリッド

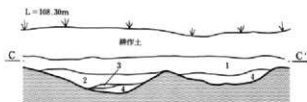
【形状】 東西走向の2条の溝 (上幅1.0m長16・19m以  
上)

【重複】 015・017号遺構と重なるが関係不明

【土層】 1 黒褐色粘質土 2 におい黄褐色シルト質土  
砂ラミナ状に含む 3 砂 4 暗褐色砂質土  
砂とシルト混在

【遺物】 なし

【備考】 水流痕は明瞭だが、時期不明。





小八木志志貝戸2区079号遺構

【位置】 12G22グリッド

【形状】 楕円形土坑 (2.3×1.3m)

【土層】 1 黒褐色粘質土 2 黒色粘質土 3 同前 ローム塊含む

【重複】 古墳時代竪穴住居089号と重複

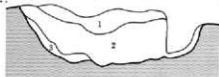
【遺物】 なし

【備考】 形状は風倒木に似る。

2-079号遺構



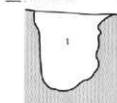
A. L=105.00m



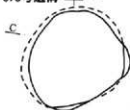
A' 2-076号遺構



B. L=105.50m



2-075号遺構 12G23



C. L=105.50m



小八木志志貝戸2区076号遺構

【位置】 12G22グリッド

【形状】 円形土坑 (径0.9m深さ0.8m)

【土層】 1 黒褐色粘質土 ローム粒僅か含む

【重複】 古墳時代竪穴住居068号と重複

【遺物】 なし

【備考】 北側がややえぐれ、井戸の可能性もある。

小八木志志貝戸2区075号遺構

【位置】 12F22グリッド

【形状】 円筒形土坑 (径1.1m深さ0.9m)

【土層】 1 黒褐色粘質土 褐色土塊斑状に含む 2 黒褐色粘質土 砂少し含む

【重複】 古墳時代竪穴住居073号と接する

【遺物】 なし

【備考】 オーバーハングきみだが、底は平坦。076号共に中世以後の遺構ではない。





## 第3章 自然科学調査

### 3-1 人骨・獣骨について

宮崎重雄(群馬県立大間々高等学校)

#### 1 はじめに

本遺跡は群馬県高崎市小八木町志志貝戸にあり、中世(14・15世紀)の土葬墓、集石墓、石塔墓から人骨や人の歯が、湧水地や特殊井戸から古墳時代(7世紀)のものと思われるウシやウマ、古墳時代の土器集中遺構から幼獣の骨が出土している。

#### 2 観察記録

##### A 人骨

人骨の保存は極めて不良で、歯以外から得られる情報量のごくわずかである。歯はすべて遊離歯で、歯根部を腐食によって欠くもの多く、歯冠部の風化しているものも少なからずある。

4001 大腿骨などの数片の骨片である。成人のものではあるが、保存不良で詳細は不詳である。

4002 右下顎第2又は第3大臼歯、歯冠部4片および小骨片5片の出土である。下顎大臼歯には近心舌側咬頭に三日月状の象牙質が露出していることから、壮年期～熟年期の個体で、歯の大きさから男性と推定される。

4003 10数片の微細骨片が出土しているが、保存がきわめて不良で、詳細は不詳である。

4004 歯種判定可能な9本の歯と、上顎臼歯2片、歯種不明の歯片13片が出土している。

左上顎第1大臼歯では咬耗により遠心2咬頭の象牙質が連続し、左下顎第3大臼歯ではエナメル質のみ、ごくわずかの咬耗を受けている。壮年期の個体であろう。歯の径は上顎第1大臼歯が8.9mm×10.3mm、下顎第1大臼歯が10.1mm×9.1mmと小さく、女性と思われる。

4005 上肢骨・大腿骨などの骨片数10片の出土である。保存がきわめて不良で、詳細は不詳であるが、成人のものと思われる。

4006 10本の歯と歯片9片が出土している。

右下顎犬歯は歯冠の1/3ほどが咬耗しており、咬耗面は遠心側へ強く傾斜している。右上顎小臼歯では頬側咬頭の象牙質が全面に露出し、左上顎第1小臼歯・同第2小臼歯では舌側咬頭が抉られたように咬耗され、象牙質が露出している。下顎小臼歯においても頬側咬頭の象牙質が全面に露出し、上顎第1大臼歯では4咬頭いずれにも象牙質が帯状から点状に露出している。歯冠部を咬耗(?)で欠く小臼歯と思われるものもある。

この咬耗度から壮年期後半から熟年期前半の年齢が、歯の大きさから女性と、推定される。犬歯及び小臼歯の咬耗状況は缺状咬合を思わせる。

4007 5本の歯と歯片1片が残存する。右上顎犬歯は尖頭部に半円状の象牙質が露出し、左上顎大臼歯では近心舌側咬頭に大きく、同頬側咬頭にきわめて小さく点状象牙質が露出している。壮年期の個体であろう。左第2小臼歯歯冠部遠心面にC1の齶触がある。歯石の付着はない。歯はかなり小さく、女性のものと思われる。

4008 きわめて保存不良の肢骨数片の出土で、詳細は不詳であるが、おそらく成人のものであろう。

4009 上肢骨など2片のみの出土で、成人のものであろうが、詳細は不詳である。多少火熱を受けているようである。

4010 極めて保存不良の肢骨数片の出土で、詳細は不詳である。

4011 11本の歯と2片の歯片が出土している。右上顎第1大臼歯には近心舌側咬頭に点状の象牙質が露出している程度であるが、左・右の上顎第3大臼歯はエナメル質のみの咬耗をすでに受けている。また、右下顎第1・第2小臼歯の咬耗はかなり激しく、頬側咬頭で象牙質が径4.4mmほど露出している。切歯

## 3-1 人骨・獣骨について

遺物番号	種 別	部 位	年 齢	性別	備 考
4001	ヒト	大腸骨片など数片	成人	?	
4002	ヒト	歯 (別掲)	壮年期~熟年	男性?	
4003	ヒト	微細骨片10数片	?	?	
4004	ヒト	歯 (別掲)	壮年期	女性	
4005	ヒト	上肢骨片・大腸骨?片など骨片数10片	成人	?	
4006	ヒト	歯 (別掲)	壮年期後半~熟年前半	女性	異常咬耗
4007	ヒト	歯 (別掲)	壮年期	女性	
4008	ヒト	趾骨片数片	成人	?	
4009	ヒト	上肢骨片など数片	成人	?	
4010	ヒト	趾骨片数片	?	?	
4011	ヒト	歯 (別掲)	壮年期	女性	
4012	ヒト	大腸骨片など数10片	成人	?	
4013	ヒト	歯 (別掲)	壮年期~熟年前半	男性	異常咬耗
4014	ヒト	椎骨片を含む骨片数10片	?	?	
4015	ヒト	歯冠片12片	壮年期?	?	
4016	ヒト	小骨片数片	?	?	
4017	ヒト	歯 (別掲)	壮年期	女性	
4018	ヒト	椎骨片など数骨片数10片	成人	?	
4019	ヒト	大腸骨骨片など数骨片数片と微細骨片数片	成人	?	
4020	ヒト	下顎臼歯片と上顎臼歯片など歯冠片数片	青年期	?	
4021	ヒト	大腸骨片など骨片数片	成人	?	
4022	ヒト	歯 (別掲)	壮年期	?	
4023	ヒト	歯 (別掲)	思春期~青年期	女性	
4024	ヒト	大腸骨片? 2片	成人	?	
4025	ヒト	歯 (別掲)	壮年期	女性	
4026	ヒト	趾骨片数10片	成人	?	
4027	ヒト	歯 (別掲)	壮年期	不明	異常咬耗
4028	ヒト	趾骨片数10片	成人	?	
4029	ヒト	歯 (別掲)	壮年期	女性	異常咬耗
4030	ヒト	右大腸骨1又は第2大臼歯他歯冠片5片	青年期~壮年期	?	
4031	ヒト	大腸骨片など骨片数10片	成人	?	
4032	ヒト	趾骨片数片	成人	?	
4033	ヒト	歯 (別掲)	壮年期	女性	異常咬耗
4034	ヒト	趾骨片	?	?	
4035	ヒト	歯 (別掲)	壮年	?	異常咬耗
4036	ヒト	肋骨片や椎骨片など10数片	成人	?	
4037	ヒト	歯 (別掲)	壮年期~熟年前半	不明	
4038	ヒト	歯 (別掲)	壮年期?	女性	
4039	シカ	角第2分枝部を含む角幹部	成獣	?	
4040	ヒト	歯 (別掲)	壮年期	女性	異常咬耗
4041	ヒト	歯 (別掲)	青年後半~壮年期	?	
4042	ヒト	趾骨片	?	?	
4043	ヒト	歯 (別掲)	青年期	女性	
4044	ウシ	2・3本分の後臼歯片多数	成牛	?	
4045	ウシ	1・2本分の後臼歯片10数片	成牛	?	
4046	ウシ	臼歯片5、他小歯片	成牛	?	
4047	ウシ	臼歯片5	成牛	?	
4048	ウシ	臼歯片10数片	老牛	?	
4049	ウシ又はウマ	臼歯片10数片	?	?	
4050	ウシ	後臼歯片4片	成牛	?	
4051	ウシ	臼歯片数10片	成牛	?	
4052	ウシ	歯片2	?	?	
4053	ウマ	1・2本分の下顎臼歯10数片	牡駒馬	?	
4054	?	小骨片5	?	?	
4055	ウシ	上顎後臼歯片	老牛	?	
4056	ウシ	前臼歯片7	成牛	?	
4057	ウシ	臼歯片	成牛	?	
4058	ウシ又はウマ	小骨片5	?	?	
4059	ウシ	上顎臼歯片10数片	若い成牛	?	
4060	ウマ	右大腸骨3前臼歯など上顎臼歯が1個分あるようだが歯片化	牡駒馬	?	
4061	ウシ	下顎第3後臼歯など上顎・下顎後臼歯数10片	若い成牛	?	
4062	ウシ	後臼歯片9片	成牛	?	
4063	ウシ?	下顎(?)臼歯片	成牛	?	
4064	ウシ	後臼歯片7片	若い成牛	?	
4065	ウシ	上顎後臼歯片10数片	若い成牛	?	
4066	ウシ	後臼歯片	若い成牛	?	
4067	ウシ	臼歯片	若い成牛	?	
4068	ウマ	上顎臼歯1本・10数片に分離	幼駒馬	?	
4069	ウシ?	歯片8	成牛	?	
4070	ウマ	切歯	牡駒馬	?	
4071	ウマ	右上顎後臼歯	牡駒馬	?	
4072	シカ又はイノシシ	嚙小骨片数10片	?	?	
4073	イノシシ(?)	脛骨(?)など数骨片約20片	?	?	
4074	?	嚙小骨片1	?	?	
4075	イノシシ	下顎第2および第3乳臼歯球か	幼獣	?	
4076	ヒト?	骨片	?	?	
4086	ウマ	下顎の第2前臼歯、第3前臼歯、第4前臼歯、右第3後臼歯	若い牡駒馬	?	
4087	ウシ	足跡	?	?	

は上顎・下顎とも切縁に咬耗があり、わずかに象牙質の露出があるのみであるが、右下顎側切歯の咬耗面は遠心側へ強く傾斜している。

以上のことから、壮年期の個体と考えられ、歯の大きさは女性を思わせる。歯の咬耗状況は弱い鉄状咬合を示している。

4012 大腿骨など数10片の出土である。成人のものであろうが、保存がきわめて不良で、詳細は不詳である。

4013 15本の歯と歯片および骨片各3片の出土である。歯には歯根を残すものもある。

右上顎犬歯は尖頭部に最大径4.6mmほどの菱形の象牙質が露出し、左の上・下の犬歯は咬耗が激しくて計測不可である。この異常咬耗は犬歯が過度に使用されたことを示している。上顎第1大臼歯では舌側2咬頭の象牙質が大きく露出し、下顎第1大臼歯でも遠心舌側咬頭を除き点状の象牙質が露出している。

この咬耗度は壮年期の、犬歯の大きさは男性の可能性を示している。切歯の咬耗面はごく弱い鉄状咬合を思わせる。

4014 焼骨化している骨片および火をほとんど受けていない骨片が数10片あるが、土と一体化していたり、風化がはなはだしく、細片化していて、詳細は不詳である。

4015 歯冠12片の出土である。大臼歯片などの咬耗痕から壮年期程度の個体と思われるが、詳細は不詳である。

4016 小骨片数片の出土であるが、詳細は不詳である。

4017 右上顎犬歯片ほか7片の歯片の出土である。尖頭部に長径2.4mmの象牙質が菱形に露出している。咬耗度からは壮年期と推定され、歯の大きさは女性を思わせる。

4018 橈骨など肢骨数10片である。成人のもと思われるが、詳細は不詳である。

4019 大腿骨など肢骨数片と微細骨片数片である。成人のものであるが、詳細は不詳である。

4020 下顎臼歯・上顎臼歯など細い歯冠数片である。青年期の個体のように思われるが、詳細は不詳である。

4021 大腿骨など骨片数片の出土である。成人のもと思われるが、保存が極めて不良で詳細は不詳である。

4022 26本の歯が出土し、歯根を部分的に残しているものが多い。切歯・犬歯の咬耗状況は弱い鉄状咬合を示す。下顎側切歯の咬耗面は遠心側へ強く傾斜している。右上顎犬歯は尖頭部舌側面に象牙質が大きく露出している。右下顎第1大臼歯では頬側2咬頭に点状の、遠心舌側咬頭及び第5咬頭に極小の、象牙質が露出している。

左上顎第3大臼歯や下顎第3大臼歯ではエナメル質のみに多少の咬耗があり、壮年期と思われる。性別は不明である。右上顎第3大臼歯の歯頸部に接触らしい痕跡がある。

4023 8本の歯および犬歯片、右下顎側切歯片、上顎第1または第2小臼歯片などである。上顎第1大臼歯の咬耗は近心頬側咬頭のみ点状の象牙質が露出し、第2大臼歯および上顎・下顎小臼歯には象牙質の露出はない。右上顎第2小臼歯の歯冠部は青緑色化し、古銭が付着していたようである。

この咬耗度は思春期～青年期を、歯の大きさは小柄の女性を思わせる。咬耗状況は鉄状咬合を示している。

4024 保存極めて不良の大腿骨片など2片の出土で、成人のもと思われるが、詳細は不詳である。

4025 7本の歯の歯冠部が出土している。右下顎犬歯の尖頭は菱形の象牙質が露出し、咬耗面は遠心側へ強く傾斜している。犬歯が特異な使われかたをしていたようである。

上顎第2小臼歯では頬側咬頭に菱形、舌側咬頭に雨滴状の象牙質が露出し、近心辺縁線にもわずかに象牙質が露出している。上顎第1大臼歯は頬側2咬頭に互いに大きさの異なる点状の象牙質が露出している。右上顎第2大臼歯遠心面には接触面があり、第3大臼歯が萌出していたことは明らかである。

以上の事実から壮年期の個体が想定され、歯の大きさは女性を思わせる。

4026 肢骨数10片の出土である。保存は極めて不良で、成人と思われるが詳細は不詳である。

4027 11本の歯と歯片5片が出土した。歯冠部エナメルは保存良好である。右上顎側切歯では切縁舌側に象牙質の露出があり、鉄状咬合を窺わせている。歯石が、下顎の左・右の側切歯と右下顎小臼歯の遠心

ト											単位: mm
種別	位置	骨種	近心径(mm)	背径(mm)	高径(mm)	幅(mm)	直径(mm)	取位置	取位置	取位置	
4002	右上顎	第2又は第3大白歯	11.1	10.8	4.6	なし	なし	近心舌側咬面に三日月状の象牙質露出			
他に歯孔3、骨孔4あり											
4004	右上顎	中切歯	7.5			なし	なし	切縁に線状の象牙質露出			
	右下顎	中切歯	5.2			なし	なし	切縁に線状の象牙質露出			
	右上顎	第1小臼歯	6.2	8.8		なし	なし	舌側咬面に階状の象牙質露出			
	右下顎	第1小臼歯	6.4	6.9		なし	なし	唇側咬面に帯状の象牙質露出			
	左上顎	第2小臼歯	7	7.5		なし	なし	頬側に小さく帯状の象牙質露出			
	右上顎	第1大白歯	8.9	10.3		なし	なし	遠心舌側咬面の象牙質露出、遠心舌側咬面に両歯状の象牙質露出			
	右下顎	第1大白歯	10.1	9.1	4.5	なし	なし	遠心舌側咬面に大きく、近心舌側咬面に小さく象牙質露出			
	左上顎	第2大白歯	8.7	8.4		なし	なし	近心舌側咬面に半月状の象牙質露出			
	右下顎	第3大白歯	9.3	8.3	4.9	なし	なし	ごくわずかにエナメル質の残れあり			
4006	左上顎	犬歯	7.7			8.6	なし	舌側に大きく象牙質露出			
	右下顎	犬歯	5.9	5.6	7.6	なし	なし	尖頭部に大きく象牙質露出、咬前面遠心側へ傾斜			
	右上顎	第2小臼歯	計測不能			なし	なし	唇側咬面に大きく象牙質露出			
	左上顎	第1小臼歯	6.6	8	7.4	なし	なし	舌側咬面に全面象牙質露出			
	左上顎	第2小臼歯	6.5			7.4	なし	舌側咬面に全面象牙質露出			
	右下顎	第2小臼歯	6.6	7.7	5	なし	なし	唇側咬面に全面象牙質露出			
	右下顎	第1小臼歯	6.5	7.4	3	なし	なし	唇側咬面に全面象牙質露出			
	左上顎	第2小臼歯	6.5	7.9	5	なし	なし	唇側咬面に全面象牙質露出			
	右上顎	第1大白歯	10.3	10.7	5.7	なし	なし	遠心舌側咬面で大きく、他の舌側咬面にやや小さく象牙質露出			
右下顎	第1大白歯	10.6	10.9	5.8	なし	なし	右上顎より1大白歯よりほぼ同等、遠心舌側咬面の象牙質露出				
4007	右上顎	犬歯	6.9	7.3	6.9	なし	なし	唇側咬面に半月状の象牙質露出			
	左上顎	犬歯	6.9	7	5.8	なし	なし	右上顎犬歯より視覚的に強い			
	右下顎	第2小臼歯	6.3	6.6	4.8	なし	なし	唇側咬面に点状の象牙質露出			
	右上顎	第2小臼歯	9.2	10.2	5.1	なし	なし	近心舌側咬面に点状、近心唇側咬面に極小の点状象牙質露出			
	右上顎	第3小臼歯	10.2	10.2	6.7	なし	なし	近心舌側咬面に大きく、近心唇側咬面に極小の点状象牙質露出			
	右上顎	側切歯	6.9	5.8	4.6	なし	なし	切縁に極小の象牙質露出			
	右上顎	中切歯	8.2	11.1		なし	なし	切縁の平分に象牙質露出			
	右下顎	側切歯	7.1	5.2	8.7	なし	なし	切縁の中央に極小の象牙質露出			
	右下顎	側切歯	5.8		8.4	なし	なし	切縁に線状の象牙質露出			
4011	右上顎	犬歯	7.6	7.4	7.8	なし	なし	尖頭部に点状の象牙質露出			
	左上顎	犬歯	7.7	7.7	8.5	なし	なし	尖頭部に点状の象牙質露出			
	右上顎	第1小臼歯	7.3	9.4	6.2	なし	なし	舌側咬面に勾玉状象牙質露出			
	右下顎	第1小臼歯	6.7	7.9	5.4	なし	なし	唇側咬面に扇形の象牙質大きく露出			
	右上顎	第1小臼歯	6.9	7.3	6.3	なし	なし	唇側咬面に扇形の象牙質大きく露出			
	右上顎	第3大白歯	9.2	10.2	6.3	なし	なし	エナメル質のみ残れ			
	右上顎	第2大白歯	9.6	11.4	6.1	なし	なし				
	右上顎	第1大白歯	10.3	11.4	6.3	なし	なし	近心舌側咬面に点状の象牙質露出			
	右上顎	第3小臼歯	9.4	7.2	5.9	なし	なし	エナメル質のみ残れ			
	右上顎	側切歯	7.7	5.2	9.7	なし	なし	切縁に線状の象牙質露出			
	右上顎	中切歯	9.2	7.4	9.7	なし	なし	切縁に帯状の象牙質露出			
	左上顎	側切歯	9.1	7.3	10.5	なし	なし	切縁に帯状の象牙質露出			
	左上顎	中切歯	7.6	4.4	7.6	なし	なし	切縁に線状の象牙質露出			
計測不能					なし	なし	尖頭部に帯状の象牙質大きく露出				
右上顎	犬歯	8.3	8.1	8.3	なし	なし	尖頭部に帯状の象牙質大きく露出				
左上顎	犬歯	7.7	7.7	8.5	なし	なし	尖頭部より大きく咬縁				
右上顎	第1小臼歯	6.7	7.3	6.2	なし	なし	尖頭に帯状の象牙質露出				
右下顎	第1小臼歯	7.7	7.9	5.4	なし	なし	右下顎より大きく咬縁				
計測不能					なし	なし	舌側咬面に勾玉状象牙質露出				
右上顎	第2小臼歯	7.3	10.1	7.3	なし	なし	唇側咬面に点状の象牙質露出				
左上顎	第2小臼歯	7	9.8	6.7	なし	なし	唇側咬面に点状の象牙質露出				
有歯顎	第2小臼歯	7.4	8.3	5.8	なし	なし	近心舌側咬面にC2線輪				
右下顎	第1小臼歯	6.8	7.5	7.6	なし	なし	近心舌側咬面にC2線輪				
右下顎	第1小臼歯	6.8	7.5	8.2	なし	なし	唇側咬面に扇形の象牙質露出				
右上顎	第1小臼歯	5.8		6.3	なし	なし	唇側咬面に扇形の象牙質大きく露出				
左上顎	第1大白歯	11.2	11.4	6	なし	なし	舌側咬面に象牙質大きく露出				
左上顎	第1大白歯	12.2	10.8	5.4	なし	なし	遠心舌側咬面に以外に点状の象牙質露出				
4017	右上顎	犬歯	7.6	8.3	7.7	なし	なし	尖頭部に長径2.4mmの帯状の象牙質露出			
他に、歯孔7											
4022	右上顎	側切歯	6.2	5.8	9.3	なし	なし	切縁でエナメル質わずかに咬縁			
	右上顎	中切歯	9	6.7	11.4	なし	なし	切縁にごく細かい線状の象牙質露出			
	左上顎	中切歯	8.6	6.8	11.2	なし	なし	切縁に点状に象牙質露出			
	右下顎	側切歯	6.7	3.7	9.4	なし	なし	切縁でエナメル質わずかに咬縁			
	右下顎	側切歯	6.2	3.9	8.2	なし	なし	切縁に帯状の象牙質露出			
	右上顎	犬歯	8	8.2	9.9	なし	なし	尖頭に点状の象牙質露出			
	左上顎	犬歯	7.6	7.9	8.6	なし	なし	尖頭に点状の象牙質露出			
	右下顎	犬歯	6.9	7.6	10.2	なし	なし	尖頭に点状の象牙質露出			
	左上顎	側切歯	6.8	11.5	9.8	なし	なし	尖頭に点状の象牙質露出			
	右上顎	第2小臼歯	7.1	9.4	7.1	なし	なし	舌側咬面に点状の象牙質露出			
	右上顎	第1小臼歯	7.1	9.7	8.4	なし	なし	エナメル質のみ残れ			
	左上顎	第1小臼歯	6.9	9.5	7.8	なし	なし	唇側咬面に点状の象牙質露出			
	右下顎	第2小臼歯	7	9.4	7.1	なし	なし	舌側咬面に点状の象牙質露出			
	右下顎	第1小臼歯	6.8	7.9	7.9	なし	なし	唇側咬面に極小の象牙質露出			
	左上顎	第3大白歯	9.4	11.7	6.1	なし	なし	唇側咬面に極小の象牙質露出			
	右上顎	第2大白歯	8.9	11.1	6.1	なし	なし	近心舌側に点状の象牙質露出			
	右上顎	第1大白歯	10.5	11.2	6.5	なし	なし	近心舌側に大きく遠心舌側に小さく象牙質露出			
	左上顎	第1大白歯	10.1	11.2	6.2	なし	なし	近心舌側咬面に大きく他の咬面に極小の象牙質露出			
	左上顎	第2大白歯	9.6	11.4	6	なし	なし	エナメル質に咬縁			
	左上顎	第3大白歯	9.5	10.6	5.2	なし	なし	エナメル質に咬縁			
	右下顎	第3大白歯	10.2	9.7	5.6	なし	なし	エナメル質に咬縁			
右下顎	第2大白歯	10.4	9.3	6.7	なし	なし	エナメル質に咬縁				
右下顎	第1大白歯	11.1	10.2	6.2	なし	なし	唇側咬面に点状、第5臼歯・遠心舌側咬面に極小の象牙質露出				
右下顎	第1大白歯	11.1	10.4	5.4	なし	なし	遠心舌側咬面に以外に咬縁に象牙質露出				
右下顎	第2大白歯	10.4	9.7	6.2	なし	なし	近心舌側咬面に点状の象牙質露出				
右下顎	第3大白歯	10.4	10.4	4.9	なし	なし	エナメル質多少咬縁				
4023	左上顎	中切歯	8.2	7.4	10.4	なし	なし	切縁に線状の象牙質露出			
	左上顎	中切歯	7.3	6.5	9.8	なし	なし	切縁に線状の象牙質露出			
	右上顎	第2小臼歯	6.9	9	7.2	なし	なし	エナメル質わずかに咬縁			
	右上顎	第1小臼歯	6.6	8.6		なし	なし	エナメル質わずかに咬縁			
	左上顎	第1小臼歯	6.5	8.2	4.1	なし	なし	エナメル質わずかに咬縁			
	左上顎	第2小臼歯	6.8	7.5	6.4	なし	なし	エナメル質わずかに咬縁			
	右下顎	第1大白歯	9.7	10.9	9	なし	なし	近心舌側咬面に点状の象牙質露出			
	右下顎	第2大白歯	8.9	10.8	6	なし	なし	エナメル質わずかに咬縁			
	4025	右上顎	中切歯	8.1		10.3	なし	なし	尖頭に帯状の象牙質露出、咬前面遠心側へ傾斜		
右下顎	犬歯	6.7			なし	なし	尖頭に帯状の象牙質露出、咬前面遠心側へ傾斜				

側に付着している。右上顎犬歯は咬耗により歯冠部の1/3を失い、咬耗面は遠心へ強く傾斜し、左下顎側切歯も右上顎第1小臼歯も遠心側へ強く傾斜して、異常咬耗している。小臼歯の咬耗も著しい。犬歯・小臼歯あたりを過度に使用していたことを示している。

左下顎第3大臼歯のエナメル質にごくわずかの咬耗があることから、年齢は壮年期と考えられる。性別は不明である。

4028 肢骨数10片が出土する。成人と思われるが、保存が極めて不良で、詳細は不詳である。

4029 9本の歯の出土で、上顎中切歯の切縁から舌側面に咬耗による帯状の象牙質が露出していることから、鉄状咬合が予想される。小臼歯・犬歯の咬耗が進み、これらの歯の過度の使用が窺える。咬耗度は壮年期を、歯の大きさは女性を思わせる。

4030 右上顎第1大臼歯又は同第2大臼歯、他歯冠5片での出土である。近心頬側咬頭に点状の象牙質の露出があり、青年期～壮年期の個体を思わせる。性別は不明である。

4031 大腸骨など数10片の骨片である。成人と思われるが、保存が極めて不良で、詳細は不詳である。

4032 肢骨数片の出土である。成人と思われるが、保存が極めて不良で、詳細は不詳である。

4033 12本の歯が出土している。歯根を部分的に残すものが多い。

上顎中切歯の咬耗状況は弱い鉄状咬合を示している。咬耗が著しく、右下顎犬歯は遠心半分が大きく咬耗し、左下顎犬歯は尖頭部に菱形の象牙質が露出し、咬耗面が遠心側へ強く傾斜している。下顎小臼歯も咬耗が著しい。犬歯・小臼歯あたりを過度に使用していたようである。

右下顎第3大臼歯がエナメル質の咬耗を受けていることで壮年期と推定される。歯の大きさは女性を示している。左側切歯には頬側に歯石が大きく付着している。

4034 肢骨片の出土であるが、保存不良で、詳細は不詳である。

4035 右下顎犬歯、他歯冠数10片の出土である。歯冠の近遠心径は7.0mm、唇舌径は7.2mmであるが、性別は不明である。また、尖頭部には菱形に象牙質が露出し、咬耗面は遠心側へ強く傾斜している。この個体も犬歯・小臼歯あたりを過度に使用していたようである。年齢は壮年期ほどと思われる。

4036 肢骨や肋骨など10数片の出土である。成人のものと思われるが、保存が極めて不良で、詳細は不詳である。

4037 7本の歯と歯冠数10片の出土である。歯根をわずかに残すものが多い。いずれの歯も咬耗が進んで象牙質が大きく露出し、なかでも犬歯・小臼歯あたりの咬耗が目立っている。咬耗度は壮年期から熟年期前半の個体を推定させる。性別は不明である。

4038 左上顎犬歯など歯冠10数片の出土である。犬歯は尖頭部が大きく咬耗し、犬歯付近の特異な使い方があったようである。右下顎第1大臼歯(?)では遠心2咬頭の象牙質が咬耗によりつながっている。壮年期の個体であろう。歯の大きさから、女性が想定される。

4040 12本の歯が出土している。上顎中切歯の咬耗状況は、弱い鉄状咬合を示している。

犬歯の咬耗が特に著しく、犬歯付近の過度の使用があったようである。右上顎第1(?)大臼歯は咬合面の周辺部だけにエナメル質が残存し、象牙質がほぼ全面に露出している。しかし左上顎第1(?)大臼歯は各咬頭に点～面状の象牙質が露出しているだけである。おそらく壮年期の個体であろう。歯の大きさは女性の可能性を示す。

4041 上顎大臼歯が4本出土している。右上顎第2大臼歯は古銭の接触で青緑色を呈している。この歯には遠心歯頸部に齧らしの痕がある。上顎第1大臼歯では2咬頭で点状の象牙質が露出し、上顎第3大臼歯にはごくわずかの咬耗がある。青年期後半から壮年期の個体であろうが、性別は不詳である。

4042 肢骨(?)片の出土であるが、保存が極めて不良で、詳細は不詳である。

4043 19本の歯が出土している。上顎中切歯の切縁が帯状に咬耗されていることから、鉛字咬合と思われる。右上顎犬歯が比較的強く咬耗されている。右下顎臼歯では頬側3咬頭に点状の象牙質が露出している。第3大臼歯はすでに萌出しているが、咬耗の痕跡はない。したがって青年期の個体と思われる。歯の

## 3-1 人骨・骸骨について

単位:mm

骨号	位置	種 類	近遠心径	幅(最大)	厚	高さ	備 考	
4027	右上顎	第2小臼歯	6.4	8.3	4.9	なし	頬側咬頭に歪形、舌側咬頭に歯状の象牙質露出、近心冠縁縁線も象牙質むずかしく露出	
	左下顎	第2小臼歯	6.3	7.2	3.9	なし	頬側咬頭にヒョウタン型の象牙質露出	
	右下顎	第2小臼歯	8.8	10.2	4.4	なし	近心冠縁縁線に歪形、遠心舌側咬面により大きい点状象牙質露出	
	右下顎	第1小臼歯	8.4+	10.8+	5.4	なし	遠心冠縁縁線に極小点状象牙質露出	
	右下顎	第1小臼歯	10.9	9.5	5.1	なし	頬側2咬頭に大きめの点状象牙質露出	
	右上顎	中切歯	7.2	5.8	10.2	なし	舌側舌面と近心冠縁縁線にエナメル質の咬痕あり	
	右下顎	側切歯	6.3	5.9	7.8	なし	切縁に歯状の象牙質露出	
	右下顎	側切歯?側切歯	6.2+	6	9.2	なし	切縁に歯状の象牙質露出、咬痕歯面傾へ強く傾斜	
	右上顎	犬歯	7.0+	8.7	11.4	なし	尖頭に半月状の象牙質露出、咬痕歯面遠心側へ傾斜	
	右上顎	犬歯	7.9	8.5	10.4	なし	なし	
	右上顎	第2小臼歯	6.5	9.3	7.1	なし	舌側咬面に径6mmの半月状の象牙質露出	
	右上顎	第1小臼歯	6.7	8.6	9.6	なし	頬側咬面に径3.5mmの象牙質露出	
	右下顎	第2小臼歯	7	8.4	5.8	なし	頬側咬面に歯状の象牙質露出	
右下顎	第1小臼歯	8.8	7.4	8.8	なし	頬側咬面に径径3.5mmの象牙質露出		
右下顎	第1又は大白歯	7	10.4	5.7	なし	近心冠縁縁線に点状の象牙質露出		
右下顎	第3大白歯	10.1	10	5.4	なし	こゝろずかエナメル質のみ咬痕		
4029	右上顎	中切歯	8	11	なし	なし	切縁へ舌側面に歯状の象牙質露出	
	右上顎	中切歯	7.9	9.1	7.1	なし	切縁に歪形の象牙質露出	
	左下顎	中切歯	4.7+	5.7	6.7	なし	切縁に歪形の象牙質露出	
	左下顎	側切歯	5.7	5.7	6.7	なし	切縁に歪形の象牙質露出	
	右上顎	犬歯	6.6	7.9	8.5	なし	舌側に部分的に象牙質露出	
	左下顎	犬歯	5.9	5.4+	7.3	なし	舌側のほぼ全面象牙質露出	
	右下顎	犬歯	6.2	7.4	9	なし	尖頭部から頬側へ歯状の象牙質露出	
	右下顎	第2小臼歯	6.3	8.4	5.5	なし	頬側咬面に径径4.5mmと大きく象牙質露出	
	右下顎	第1小臼歯	5.4	8.3	8.1	なし	頬側咬面に径径3.5mmと大きく象牙質露出	
	左下顎	中切歯	8.5	6.9	9.5	なし	尖頭から舌側にかけて歯状に象牙質露出	
	左下顎	側切歯	8.5	6.9	9.5	なし	上と同じ	
	左下顎	犬歯	7.4	7.8	8.3	なし	切縁に大きく象牙質露出	
	左下顎	犬歯	計測不能	9.4	5.8	なし	尖頭部に象牙質大きく露出	
左下顎	犬歯	6.1	7.1	9.4	なし	遠心半分大きく咬痕		
左下顎	犬歯	6.2	9.1	6.5	なし	尖頭部に歪形の象牙質露出、咬痕歯面遠心へ傾斜		
右上顎	第2?小臼歯	6.2	9.1	6.5	なし	頬側咬面から遠心冠縁縁線に歯状の象牙質露出		
左下顎	第1?小臼歯	7.2	9.6	8.1	なし	頬側・舌側両咬面に点状の象牙質露出		
左下顎	第2小臼歯	6.8	9.1	6.2	なし	近心冠縁縁線に歪形の象牙質露出		
右下顎	第2小臼歯	6.4	7.2	5.4	なし	咬痕歯面、舌側面に大きく象牙質露出		
右下顎	第1小臼歯	6.2	7.4	7.2	なし	遠心又は近心の半分大きく咬痕		
右下顎	第3大白歯	11	10	5.9	なし	エナメル質のみ咬痕		
右下顎	犬歯	7	7.2	9.7	なし	尖頭に歪形の象牙質露出、咬痕歯面遠心へ傾斜		
4037	右上顎	中切歯	8.6	8.3	なし	なし	切縁に象牙質大きく露出	
	右上顎	第1小臼歯	7.9	5.1+	8.1	なし	舌側咬面全面に、頬側咬面歯状に象牙質露出	
	左下顎	第2小臼歯	6.3	9.9	6.7	なし	舌側咬面全面に、頬側咬面歯状に象牙質露出	
	左下顎	第2小臼歯	7.2	9.1	6.7	なし	頬側咬面に径径3.7mmの歯状象牙質露出	
	右下顎	第1小臼歯	7.2	8.8	8.3	なし	頬側咬面に歪形の象牙質露出	
	右下顎	第1?小臼歯	7.2	8.0?	なし	なし	咬痕がかなり進むが、保存不良で詳細は不明	
	右下顎	第2小臼歯	7.3	8.1	なし	なし	舌側咬面に歯状に象牙質露出	
	右下顎	犬歯	7	7.2	7.8	なし	尖頭部が大きく咬痕され、咬痕歯面遠心へ傾斜	
	4040	右上顎	中切歯	8.1	6	11.4	なし	切縁は歪形に象牙質露出
		右上顎	側切歯	7	8.1	9.1	なし	切縁は一咬に象牙質露出
		右上顎	犬歯	7.9	8.5	9.3	なし	尖頭に径3.9mmの歯状の象牙質露出
		左下顎	中切歯	7.7	9.3	10.2	なし	尖頭の遠心側に径3.7mmの歯状象牙質露出
		右下顎	犬歯	3.9	7.9	なし	なし	尖頭部に径4.0mm歯形の象牙質露出
左下顎		第1小臼歯	7.2	9.2	7.4	なし	頬側咬面に点状の象牙質露出	
右下顎		第2小臼歯	7	7.3	6.5	なし	なし	
右下顎		第1小臼歯	7	7.8	8.2	なし	なし	
右上顎		第2大白歯	10	9.4	6.1	なし	頬側咬面遠心側に側論状に象牙質露出	
右上顎		第1?大白歯	9.4+	12	なし	なし	エナメル質のみ咬痕	
左下顎		第1?大白歯	9.4	12.2	8.3	なし	咬合面馬刃部のみエナメル質残存	
左下顎		第1大白歯	10	10.4	5.8	なし	近心舌側・遠心頬側・遠心舌側咬面に象牙質露出	
左下顎		第2大白歯	10	10.4	5.8	なし	頬側2咬頭に点状に象牙質露出	
4041	右上顎	第3大白歯	7	10.3	5.4	なし	咬痕歯面にどう?エナメル質の咬痕	
	右上顎	第2大白歯	9	11	6.3	なし	近心部分的に咬痕	
	右上顎	第1大白歯	10.1	11.9	6.7	なし	近心冠縁縁線と遠心冠縁縁線に点状の象牙質露出	
	左下顎	第1大白歯	10	12	5.8	なし	舌側2咬頭に点状の象牙質露出	
	右上顎	側切歯	6.7	9.2	なし	なし	切縁に歯状の象牙質露出	
	右上顎	中切歯	8.4	6.6+	10.6	なし	切縁に歪形の象牙質露出	
	左下顎	中切歯	8.6	10.3	なし	なし	切縁に歪形の象牙質露出	
	右上顎	犬歯	7	7.6	8.5	なし	尖頭部に径3.5mmの長条型の象牙質露出	
	右上顎	犬歯	6.8	7.4	9.1	なし	尖頭部に点状の象牙質露出	
	右下顎	犬歯	6.4	8	9.8	なし	尖頭部に点状の象牙質露出	
	左下顎	第1小臼歯	6.8	9.5	7.7	なし	頬側咬面に点状の象牙質露出	
	右下顎	第2小臼歯	6.5	8.2	7.1	なし	頬側咬面に点状の象牙質露出	
	右下顎	第1小臼歯	6.6	9.8	7.1	なし	頬側咬面に点状の象牙質露出	
左下顎	第1小臼歯	6.6	7.6	7.8	なし	頬側咬面に極小点状の象牙質露出		
左下顎	第2小臼歯	6.6	7.7	7.7	なし	エナメル質のみ咬痕		
右上顎	第2又は第3大白歯	7	10.3	5.4	なし	エナメル質むずかしく咬痕		
右上顎	第1又は第2大白歯	10.1	11.9	6.7	なし	近心冠縁縁線と遠心冠縁縁線に点状の象牙質露出		
左下顎	第1大白歯	10	12	5.8	なし	舌側2咬頭に点状の象牙質露出		
右下顎	第3大白歯	10.2	9.6	5.4	なし	咬痕なし?		
右下顎	第2大白歯	11.4	11	5.7	なし	遠心舌側咬面、第3咬頭に点状の象牙質露出		
右下顎	第1大白歯	10.2	10.9	5.8	なし	頬側3咬頭に象牙質露出		
左下顎	第1大白歯	11.1	10.7	5.3	なし	頬側2咬頭と第3咬頭に歪形の象牙質露出		
左下顎	第2大白歯	11.2	10.9	6	なし	遠心舌側咬面に点状の象牙質露出		
インデント								
骨号	位置	種 類	近遠心径	幅(最大)	厚	高さ	備 考	
4075	第2乳臼歯	14.4+					遠心部の咬面に点状に咬痕	
	第3乳臼歯	16.8					表咬痕	
ワマ								
骨号	位置	種 類	近遠心径	幅(最大)	厚	高さ	備 考	
4086	下顎	第2前臼歯	27.6+			48.8	歯根分岐開始直後	
		第3前臼歯				68	歯根末分岐	
		第4前臼歯				72.4	歯根末分岐	
		第2後臼歯				81.2		
		第3後臼歯	22.7+			42	歯根分岐開始直後	

### 第3章 自然科学調査

大きさは小柄の女性を思わせる。

#### B ウシ

- 4044 2-3本分の後臼歯片多数。歯冠高は27.2mmあり成牛であろうが、詳細は不詳である。
- 4045 1-2本の後臼歯10数片である。歯冠高は25.9mmで成牛と思われるが、詳細は不詳である。
- 4046 臼歯片5と小歯片である。最大歯冠高は26.0mmで成牛であろうが、詳細は不詳である。
- 4047 臼歯5片である。成牛であろうが、詳細は不詳である。
- 4048 臼歯10数片である。成牛であろうが、詳細は不詳である。
- 4049 臼歯10数片であるが、詳細は不詳である。
- 4050 後臼歯4片である。歯冠高は23.5mmあり、詳細は不詳である。
- 4051 前臼歯など臼歯片10数片である。成牛と思われるが詳細は不詳である。
- 4052 歯片2片が出土しているが、詳細は不詳である。
- 4055 上顎後臼歯片の出土である。歯冠高が18.0mmしかなく、老牛と思われるが、詳細は不詳である。
- 4056 前臼歯7片である。歯冠高は8.9mmで成牛と思われるが、詳細は不詳である。
- 4057 臼歯片である。歯冠高は15.0mmあり成牛と思われるが、詳細は不詳である。
- 4059 上顎後臼歯10数片である。歯冠高は41.0mmあり、若い成牛と思われるが、詳細は不詳である。
- 4061 右下顎第3後臼歯の他上顎臼歯・下顎臼歯の歯片が数本分ある。第3後臼歯の歯冠高は41.5mmで、若い成牛(4~6才)であることを示している。詳細は不詳である。
- 4062 後臼歯片9片である。歯冠高は24.9mmあり成牛であろうが、詳細は不詳である。
- 4063 下顎(?)臼歯片である。歯冠高は30.8mmあり成牛のようであるが、詳細は不詳である。
- 4064 後臼歯7片である。歯冠高は28.6mmで成牛であろうが、詳細は不詳である。
- 4065 上顎後臼歯片10数片である。歯冠高は44.3mmあり、若い成牛であろうが、詳細は不詳である。
- 4066 後臼歯片である。歯冠高は47.3mmあり、若い成牛であろうが、詳細は不詳である。
- 4067 上顎臼歯片である。歯冠高は45.5mmあり、若い成牛であろうが、詳細は不詳である。
- 4069 歯片8片である。成牛であろうが、詳細は不詳である。
- 4087 足跡である。保存不良で詳細は不詳である。

#### C ウマ

- 4053 1-2本分の下顎臼歯片である。歯冠高は36.5mmあり、8~13才程の牡馬であろうが、詳細は不詳である。
- 4060 左上顎第3前臼歯・第3後臼歯など上顎臼歯が1頭分あるようだが、細片化がはなはだしい。第3前臼歯の歯冠高は56.6mmあり、6~8才ほどの若い牡馬であろう。
- 4068 右上顎臼歯1本と10数片に分離した歯である。歯冠高は63.3mmあり、咬頭部にわずかに咬痕があるだけの、幼馬と思われる個体である。
- 4070 切歯1片である。成馬であるが詳細は不詳である。
- 4071 左上顎第3後臼歯片である。歯冠高は52.0mmあり7~9才ほどの牡馬と思われるが、詳細は不詳である。
- 4086 下顎の第2前臼歯、第3前臼歯、第4前臼歯、第3後臼歯である。最後者は歯根分岐直後で年齢は5才ほどと推定される。歯の大きさからは日本在来馬並みの馬格が想定される。

#### D ウシ又はウマ

- 4058 最大保存長21.3mmの小骨片5片であるが、詳細は不詳である。

#### E イノシシ

- 4075 右下顎第2乳臼歯・同第3乳臼歯などの出土である。下顎乳臼歯はすべて埋存していたようであるが、上顎乳歯の存在は確認されてない。下顎第2乳臼歯は遠心端の咬頭が咬耗されていて、下顎第3乳臼歯は未咬耗である。したがって生後2カ月ほどと推定される。



## F ニホンシカ

4039 ニホンシカの第2分岐部付近の保存全長206mmの角幹部である。第1分岐部上部の角幹部で切り取ったものと思われるが、保存が極めて不良で、加工痕等は確認できない。

## G イノシシ又はシカ

4072 焼小骨片数10片であるが、詳細は不詳である。

4073 焼骨片など肢骨片約20片の出土である。

## 3 まとめ

## 3-1 中世墓出土の人骨について

本遺跡では、人骨を埋葬した土坑が44基発掘されており、そのうち25基ではきわめて保存不良の断片のな体肢骨、微細歯冠片が出土するだけで、得られる情報はごく限られている。

残り19基の土坑では比較的保存良好な複数の歯が残存し、年齢・性別等推定可能である。

これらの歯を現代人のものに照合してみると、女性12個体、男性2個体、どちらも判断しがたいもの5個体で、女性が圧倒的に多い。

また年齢では、壮年期を中心とする成人がほとんどで、乳幼児が含まれていない。

歯は、犬歯・小臼歯あたりで咬耗が異常に進んでいて、過度に使用されていたことを示している。生業との関わりであろう。女性に限ったことでなく、男性にも見られる特徴である。

齧蝕された歯は少なく、4013の右下顎第1小臼歯と同第2小臼歯、4022の右上顎第3大白歯、4041の右上顎大白歯にわずかに見られるだけである。

歯石の付着している歯も少なく、4027の右下顎側切歯・左下顎側切歯の頰側・右下顎第1小臼歯の遠心側、4033の左側切歯の頰側で観察されるのみである。歯冠表面がわずかながら腐食されているものが多く、本来はこれより多くの歯に歯石の付着があったものと思われるが、風化あるいは発掘・クリーニングの過程で消失したのであろう。

## 3-2 古墳時代のウシ・ウマについて

本遺跡では、古墳時代(古代)のウシ・ウマの歯や骨が低地・溜井・流路から出土している。

少なくとも群馬及びその周辺地域の古墳時代(古代)の遺跡から出土するウシ・ウマの個体数の割合は1:3程度でウマの方が多い。ところが本遺跡では、個体数としては算出できないものの、出土遺物数ではウシが圧倒的に多く、地域的特徴となっていると言えよう。

また、特殊井戸及びその周辺・流路から出土のウシ・ウマでは若い個体が多くを占め、とりわけ特殊井戸及びその周辺出土のウマは幼駒馬である。老齢による自然死でなければ、屠殺による水中投入が考えられよう。

## 3-3 その他

古墳時代の土器集中遺構から焼骨片数10片が出土しており、イノシシ又はシカと思われるが、決め手に欠け、いずれとも判定しがたい。

## 参考・引用文献

- 林 良博・西田隆雄・望月公子, 1977: 「日本産イノシシの歯牙による年齢と性の判定」『日本獣医学雑誌』39(2), 165-174。  
 平野賢二, 1935: 「歯牙の熱処理に関する研究(第一編) 人類歯牙の熱処理に就いて」『口腔病学雑誌』9, 375-393。  
 Levine M. 1982: The use of crown height measurements and eruption-wear sequences to age horse teeth. In Wilson B., Grigson C. and Payne S. eds. *Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites*. Bar British Series 109, 223-250。  
 長安 清, 1968: 「歯牙の熱処理に関する研究」『大阪大学歯学会雑誌』3(2), 155-183。  
 宮崎直雄, 1995: 「城北遺跡の獣骨類」『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書, 150集, 766-776。

## 3-2 須恵器胎土蛍光X線分析

藤 根 久 (パレオ・ラボ)

## 1 試料と方法

小八木志志貝戸遺跡は、高崎市小八木町地内に所在する遺跡である。調査では、須恵器大甕や中型甕などが出土している。ここでは、これら須恵器大甕胎土の蛍光X線分析を行い、製作地の推定を試みた。なお、胎土の特徴を記載するために実体顕微鏡を用いて観察した。

試料は、須恵器表面に付着する自然軸を岩石カッターにより除去した後、洗浄後10g程度をセラミック乳鉢(成分、 $Al_2O_3$ : 93.4%、 $SiO_2$ : 5%)で粉砕し粉末化した。乾燥後、試料1.8000gを秤量し、同様に乾燥させた融剤(無水四ホウ酸リチウム( $Li_2B_4O_7$ ):リチウムメタボレイト( $LiBO_2$ )=8:2)3.6000gと十分混ぜ合わせた。混合試料は、白金ルツボに移した後、ビードサンプラー(朝東東京科学製NT-2000型)により、約1100°Cで220秒間溶融・135秒間混合を行い、測定用ガラスビードを作成した。

測定は、波長分散型蛍光X線分析装置(桐リガク製System 3080)を使用し、データ処理システムDATA FLEX-151(検量線法)を用いて定量分析を行った。

測定元素は、主成分元素( $Na_2O$ 、 $MgO$ 、 $Al_2O_3$ 、 $SiO_2$ 、 $P_2O_5$ 、 $K_2O$ 、 $CaO$ 、 $TiO_2$ 、 $MnO$ 、 $Fe_2O_3$ )と微量元素( $Rb$ 、 $Sr$ )である。

## 2 結果および考察

## [実体顕微鏡による胎土の特徴]

実体顕微鏡による観察では、全体的に灰白色～灰色の胎土が多いが、 $Na_4$ がにおい赤褐色、 $Na_5$ の外側が黄褐色、 $Na_{14}$ の内側がにおい褐色などである。また、胎土中に含まれる粒子は、全体的に白色の長石類を含む胎土が多く、黒色の発泡粒子を含む胎土も比較的多い(第1表)。なお、 $Na_{12}$ の胎土は、輝石類を特徴的に多く含む胎土であり、場所によっては黒色の発泡粒子として含まれる。このことから、黒色発泡粒子は、輝石類が溶融して発泡したものと考える。

## [化学組成の特徴]

分析の結果では、酸化ケイ素( $SiO_2$ )が最も多く約64.41%～76.79%含まれ、次いで酸化アルミニウム( $Al_2O_3$ )が約17.45%～26.54%、酸化鉄( $Fe_2O_3$ )が約2.15%～7.39%、酸化カリウム( $K_2O$ )が約1.12%～2.50%それぞれ含まれている。このうち、酸化アルミニウム( $Al_2O_3$ )は、例えばカオリナイト( $Al_2Si_2O_7$ )のように、粘土鉱物の重要な構成元素であり、粘土分や構成粘土鉱物に関係するものとする。

$Na_{12}$ の胎土は、肉眼的に輝石類が多く含まれる胎土であるが、例えば斜方輝石の化学組成は、 $(Mg, Fe)SiO_3$ と表されるが、蛍光X線分析による分析値では $MgO$ の値が高く、多量に混和する輝石類を反映するものとする。

化学組成全般では、平均値から外れて大きな値を示す試料について見ると、酸化ナトリウムでは $Na_7 \cdot 11 \cdot 15 \cdot 16$ 、酸化マグネシウムが $Na_5 \cdot 12$ 、酸化リチウムが $Na_2$ 、酸化カリウムが $Na_4$ 、酸化カルシウムが $Na_{12} \cdot 16$ 、酸化鉄が $Na_4 \cdot 7 \cdot 14$ などである(第2表)。

なお、第1図には、定量分析に用いた標準岩石(地質調査所配布岩石)と出土須恵器のSr-Rb散布図を示す。ルビジウム( $Rb$ )とストロンチウム( $Sr$ )は、ルビジウムの放射性同位体 $^{87}Rb$ が $\beta^-$ 崩壊して(半減期 $4.8 \times$

表1 須恵器胎土の種類と産地の概観

No.	出土産地	種類	産地	明度/彩度	色	最大粒径	粒子の特徴	砂粒	その他粒子	輪付帯状況	推定産地の数値		
		産地	産地								検体1	検体2	検体3
1	2区66号遺跡	大塚	1001	N7/	灰白色	φ<3mm	白色チャート質	少ない	黒色炭微粒		秋岡古窯	東野古窯	吉井古窯
2	2区66号遺跡	大塚	1002	N7/~8/	灰白色	φ<3mm	白色チャート質	多い	黒色炭微粒		藤野古窯	月夜野古窯	
3	2区66号遺跡	大塚	1003	N6/~7/	灰~灰白色	φ<1mm	白色石灰石	少ない	黒色炭微粒	輪付帯	秋岡古窯	東野古窯	吉井古窯
4	2区66号遺跡	大塚	1004	10R6/4	にじみ赤褐色	φ0.3mm	白色石灰石	少ない	灰白色炭微粒		藤野古窯	吉井古窯	秋岡古窯
5	2区66号遺跡	大塚	1005	外側N、内側10R5/4	外部：黄褐色、内部：灰白	φ<1mm	白色石灰石	少ない	黒色炭微粒		吉井古窯	秋岡古窯	
6	2区66号遺跡	大塚	1006	7.5R6/1	赤灰色	φ<1mm	白色石灰石	多い	黒色炭微粒		月夜野古窯	秋岡古窯	吉井古窯
7	2区66号遺跡	中塚	1009	N4/	灰色	φ1.5mm	白色石灰石	多い	黒色炭微粒		月夜野古窯	秋岡古窯	
8	2区66号遺跡	中塚	1010	N7/	灰白色	φ1mm以下	白色石灰石	少ない	黒色炭微粒		秋岡古窯	東野古窯	吉井古窯
9	2区66号遺跡	中塚	1011	N5/	灰色	φ<1mm	白色石灰石	少ない	黒色炭微粒		藤野古窯	秋岡古窯	吉井古窯
10	2区66号遺跡	中塚	1012	5Y7/3	灰白色	φ1mm以下	白色石灰石	少ない	黒色炭微粒	輪付帯	東野古窯	吉井古窯	秋岡古窯
11	2区66号遺跡	中塚	1013	7.5R6/1	褐色	φ<3mm	白色石灰石	少ない	黒色炭微粒		秋岡古窯	秋岡古窯	吉井古窯
12	8区66号遺跡	中塚	1077	N5/~6/	灰白色	φ<1mm	麻石多量		黒色炭微粒		笠懸古窯	東野古窯	
13	8区66号遺跡	中塚	1079	外側N5、内側5YR6/2	外部：灰色、内部：白色	φ<2mm	白色石灰石	少ない	黒色炭微粒		笠懸古窯	東野古窯	吉井古窯
14	8区66号遺跡	鳥	1080	外側N5、内側5YR6/2	外部：灰、内部：にじみ赤	φ1mm以下	白色石灰石	少ない	輪付帯		東野古窯	秋岡古窯	吉井古窯
15	大塚村61号遺跡	大塚	0001	7.5Y6/1	灰色	φ<2mm	白色石灰石	多い	赤色炭微粒		月夜野古窯	秋岡古窯	
16	志茂北土2号遺跡	大塚	0002	5Y4/1~5/1	灰色	φ<6mm	白色石灰石	少ない			月夜野古窯	笠懸古窯	藤岡古窯

No.15・16は須恵器産地に關する多野町古井町の古遺出土資料である。

表2 須恵器胎土の蛍光X線分析による分析値 (Na<sub>2</sub>O・Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は%単位、RbとSrはppm単位)  
【化学組成】 Na<sub>2</sub>O: 酸化ナトリウム、MgO: 酸化マグネシウム、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>: 酸化アルミニウム、SiO<sub>2</sub>: 酸化ケイ素、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>: 酸化リン、K<sub>2</sub>O: 酸化カリウム  
CaO: 酸化カルシウム、TiO<sub>2</sub>: 酸化チタン、MnO: 酸化マンガン、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>: 酸化鉄、Rb: セシウム、Sr: ストロロンチウム

No.	種類	産地(発石/採取場所)	産物No.	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Total	Rb	Sr
1	大塚	2区66号遺跡	1001	0.30	0.747	17.45	76.79	0.022	1.02	4.3	0.93	0.002	2.15	100.35	87.4	45.9
2	大塚	2区66号遺跡	1002	0.61	0.713	23.49	69.87	0.064	2.08	0.65	0.92	0.000	3.00	101.39	84.8	34.9
3	大塚	2区66号遺跡	1003	0.27	0.778	21.87	71.95	0.031	1.71	0.40	1.03	0.006	3.60	101.73	100.6	52.3
4	大塚	2区66号遺跡	1004	0.41	0.983	18.27	69.08	0.034	2.50	0.37	0.84	0.073	6.97	99.54	105.1	57.4
5	大塚	2区66号遺跡	1005	0.90	1.337	20.91	69.50	0.034	2.37	0.36	0.94	0.020	4.45	100.64	106.6	85.5
6	大塚	2区66号遺跡	1006	0.55	0.821	18.78	74.51	0.022	1.54	0.44	0.91	0.009	3.09	100.69	81.5	67.0
7	中塚	2区66号遺跡	1009	1.44	0.757	20.25	57.91	0.037	1.93	0.63	0.91	0.027	7.39	101.22	81.8	140.2
8	中塚	2区66号遺跡	1010	0.32	1.098	22.30	70.36	0.027	1.81	0.41	1.00	0.008	3.97	101.21	98.2	51.7
9	中塚	2区66号遺跡	1011	0.40	1.240	22.77	70.66	0.033	1.84	0.29	0.89	0.018	3.59	101.38	105.2	55.1
10	中塚	2区66号遺跡	1012	0.47	0.766	17.48	75.08	0.018	1.90	0.29	0.88	0.004	2.61	99.51	102.1	53.1
11	中塚	2区66号遺跡	1013	1.08	1.203	26.54	64.41	0.038	1.99	0.83	1.05	0.028	5.23	102.41	124.3	126.5
12	中塚	8区66号遺跡	1077	0.73	2.275	18.79	69.48	0.039	1.16	1.54	1.11	0.063	5.22	101.47	69.5	113.0
13	中塚	8区66号遺跡	1079	0.38	1.005	24.45	66.32	0.032	1.75	0.45	1.16	0.024	4.85	100.62	109.0	48.8
14	鳥	8区66号遺跡	1080	0.68	0.957	18.80	69.14	0.028	1.85	0.49	0.88	0.012	5.97	98.80	86.6	67.2
15	大塚	大塚村61号遺跡	1001	1.15	0.790	25.45	67.55	0.057	2.03	1.50	1.64	0.030	3.11	101.64	108.0	187.7
16	大塚	志茂北土2号遺跡	1002	1.25	1.094	23.74	66.89	0.048	1.12	1.11	1.43	0.039	4.99	101.71	53.8	181.2
		平均値		0.68	1.02	21.30	69.89	0.03	1.80	0.50	1.00	0.027	4.39	100.83	92.94	64.64
		最大値		1.44	2.28	26.54	76.79	0.06	2.50	1.58	1.43	0.063	7.39	102.41	124.30	341.60
		最小値		0.27	0.70	17.45	64.41	0.02	1.12	0.29	0.84	0.000	2.15	98.80	53.80	45.90
完 成 に 用 いた 産 地	宝山台 (1962)	神谷川原真取陶器	JA-1	3.84	1.570	15.22	63.97	0.165	0.77	5.70	0.85	0.157	7.07	99.31	12.3	263.0
	宝山台 (1963)	神谷川原真取陶器	JA-2	3.11	1.740	15.41	66.43	0.146	1.81	6.29	0.66	0.108	6.21	99.76	72.9	248.0
	宝山台 (1964)	群馬県産陶器(ツツコト)	JA-3	3.19	3.720	15.56	62.27	0.116	1.41	6.24	0.70	0.164	6.00	99.91	38.7	297.0
	大武井 (1964)	長崎県佐賀県小川町陶器	JF-1a	2.73	2.830	14.65	62.41	0.260	1.49	3.91	1.29	0.148	9.95	98.87	39.2	424.0
	大武井 (1964)	東京都大島三上原山	JF-2	2.94	4.820	14.64	63.35	0.181	0.42	9.82	1.19	0.218	14.25	100.55	7.4	178.0
	大武井 (1963)	山形県南村入村陶器	JF-3	2.73	5.190	17.29	50.96	0.294	0.78	9.79	1.44	0.177	11.22	99.44	51.1	403.0
	花畑跡群 (1965)	群馬県南村入村陶器	JG-1	3.38	4.740	14.24	72.30	0.099	2.90	2.20	0.26	0.063	2.18	99.48	182.0	194.0
	花畑跡群 (1964)	群馬県南村入村陶器	JG-1a	3.30	4.690	14.30	72.30	0.083	2.96	2.13	0.25	0.057	2.00	99.15	178.0	187.0
	花畑 (1965)	群馬県南村入村陶器	JG-2	3.54	4.037	12.47	76.83	0.042	3.71	0.70	0.044	0.016	9.97	98.52	309.1	17.9
	花畑跡群 (1964)	鳥羽島三上原山陶器	JG-3	3.26	7.190	18.48	67.29	0.127	2.64	3.49	0.49	0.071	2.69	99.21	87.3	329.0
はなれい跡群 (1963)	群馬県南村入村陶器	JG-1	1.29	7.850	17.49	43.96	0.066	1.24	1.80	0.60	0.189	15.06	99.25	65	637.0	
石	産地群 (1962)	長野県下諏訪町産地群(北)	JR-1	4.02	0.129	12.82	75.45	0.021	4.41	0.67	0.11	0.099	0.89	98.62	257.0	29.1
	産地群 (1962)	長野県下諏訪町産地群(南)	JR-2	3.99	0.040	12.72	75.49	0.012	4.45	0.50	0.07	0.112	0.77	98.35	303.0	8.1

10<sup>18</sup>年)、安定同位体ストロンチウム<sup>87</sup>Srに変化する。そのため、基盤岩石が古い西日本地域ではストロンチウム(Sr)が相対的に多く含まれている(三辻, 1983)。こうしたことから、これら元素は、地域を指標する元素として胎土分析において利用される。

#### [示標値による比較]

県内の古窯出土須恵器については、大沢・大江(1990)や花岡・斎藤(1989)など数多くの調査分析が行われている。県内の窯跡群は、秋岡古窯跡群、中之条古窯跡群、月夜野古窯跡群、笠懸古窯跡群、太田金山古窯跡群、藤岡古窯跡群、吉井古窯跡群、乗野古窯跡群、新田古窯跡群、里見古窯跡群などが知られている(大沢・大江, 1990)。分析の結果では、重複する古窯跡群もあり、必ずしも個別の古窯跡群を明確に区別することは言え

ない。ここでは、これら古窯跡群出土須恵器や瓦の分析値との比較を行い、候補となる産地を推定してみた。第2図には、Sr/Rb-CaO/K<sub>2</sub>O 散布図を示す。なお、古窯跡群のデータは、佐藤(1993)が統計解析を行ったデータに吉井町教育委員会(1995)の結果を加えたものを使用した。一部、分析データの点数が少ない古窯跡群もあるが、ある程度まとまった分布を示す古窯跡群もある。この散布図を見ると、隣接した古窯跡群は散布図においても近い位置に分布しているが、これらの分布軸の傾きに若干の違いが見られる。例えば、吉井古窯跡群や栗附古窯跡群あるいは秋間古窯跡群は、隣接した古窯跡群であるが、粘土材料となる粘土層が類似しているなど地質学的な背景があるものと予想される。

小八木志志戸遺跡から出土した須恵器は、比較的まとまって分布する傾向が見られるが、Na<sub>2</sub>・7・11・12・15・16は分散している。こうした傾向は、先の化学組成のパラツキにおいても示された。

この散布図から、各須恵器の産地は、第1表に示すように複数の候補があげられる。これらの産地候補は、あくまでも現段階の推定であり、今後の調査・分析により変更される可能性がある。なお、平成10年度の伊勢崎市の光仙房II遺跡において、これまで知られていなかった須恵器古窯が検出され、新たな産地として注目されている。

#### 〔蛍光X線分析による材料検討〕

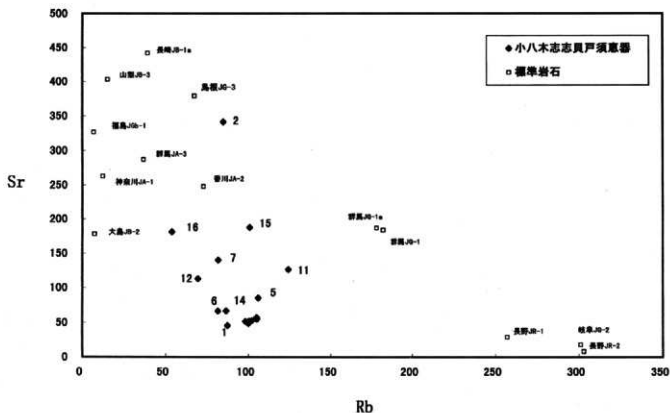
ここで対象とした須恵器は、一部を除きその化学組成が類似していることが分かった。製作地がいずれであるかは別として、これら化学組成が類似した須恵器は同一窯で製作されたことが考えられる。これまで一古窯から出土した焼き物を見た経験では、全体的に一窯跡から出土した焼き物胎土は、材料的にはかなり均一であるという印象を受ける。実際、比較試料として用いた吉井古窯の須恵器は、同一窯から出土した須恵器を分析しているが、その化学組成はまとまった値を示している(第2図)。焼き物の生産は、少留まりを良くするために材料としての粘土の種類や混和剤の質および量はかなり管理されていたことが予想され、一製作集団の個性が反映された製品になるものと考えられる。

月夜野古窯や笠懸古窯など Sr/Rb-CaO/K<sub>2</sub>O 散布図において広範囲に分布するが、比較試料は、複数窯から出土した須恵器であり、一古窯から出土する須恵器としては、まとまった化学組成を示す可能性が考えられる。こうした点に留意して、今後の須恵器胎土の化学組成についての検討を行う必要があるものと考えている。

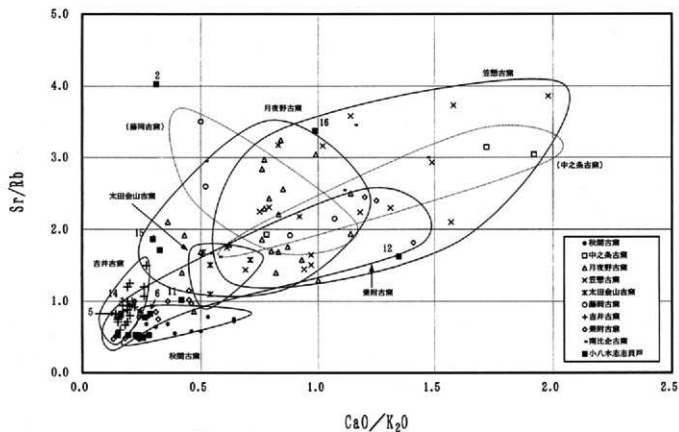
Na12の量は、砂粒物として輝石類の結晶が特徴的に含まれるが、この輝石類が遊離した結晶であることから、テフラ(主に軽石)起源の輝石類と考える。こうしたテフラ起源の結晶は、製作地の化学組成とは異なり、給源火山の化学組成が反映されることから、化学組成値から直ちに製作地を推定できるものではない。少なくとも、どのような混和剤が含まれているかは重要な特徴であり、製作集団の個性を現す要素として記載しなければならぬ。須恵器のように高温焼成された焼き物においても、Na12の須恵器のように輝石類が特徴的であるとか、骨針化石が含まれるとか、などある程度肉眼で観察される。化学組成の検討とは言え、こうした肉眼的な特徴は見逃す訳にはいかず、こうした特徴を加味した材料に関する検討が必要と考えている。こうした胎土に関する肉眼的特徴や化学組成の特徴から、産地の様子について理解されるものとする。

#### 引用文献

- 花岡敏一・斎藤利明, 1989: 「1 胎土分析」『上栗須遺跡・下栗須遺跡・中大塚遺跡』群理文, p641-646.  
 三辻利一, 1983: 「古代土器の産地推定法」考古学ライブラリー14, ニューサイエンス社, 80p.  
 大沢通剛・大江正行, 1990: 「第6編 仁田遺跡出土土器の胎土分析」『仁田遺跡・暮井遺跡』群理文, p132-134.  
 佐藤元彦, 1993: 「胎土分析による土器の分類について」『研究紀要11』群理文, p89-109.  
 吉井町教育委員会, 1995: 『メカリ沢A窯址発掘調査報告書』76p.



第1図. 須恵器と標準岩石の Sr - Rb 散布図

第2図. 主な古窯群と出土須恵器の Sr/Rb - CaO/K<sub>2</sub>O 散布図

### 3-3 プラント・オパール分析

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

プラント・オパールとは、根から吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積し形成された植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体）が、植物が枯れるなどして土壌中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無および稲作地の広がりについての検討も行われている（藤原, 1984）。こうした研究成果から近年、このプラント・オパール分析を用いて稲作の検証が各地・各遺跡で行われている。

小八木志志貝戸遺跡群において行われた発掘調査では、畝地や水田址とみられる遺構および用途不明の平坦地などが検出され、こうした遺構および平坦地における稲作あるいは他の作物について検証する目的でプラント・オパール分析や一部花粉分析を行った。分析は第1次（北部 97年7月）と第2次（南部 98年11月）の2回実施したため、それらを分けて報告する。

#### A 第1次分析

##### 1 試料

試料は、浅間テフラや洪水層に覆われた各地区の遺構より採取された9試料と、畝状遺構の2試料の計11試料である。各試料について簡単に記すと、試料1（菅谷石塚様名 Hr-FA 下水田Aア地点）と2（同前Cイ地点）は様名二ヶ岳沢川テフラ（Hr-FA）の下部より採取された黒灰色砂質シルト（褐色を帯びる）である。試料3（同浅間 As-C 混土下水田Bウ地点）と4（同前Aア地点）は褐色を帯びたやや粘土質の黒色砂質シルトで、浅間Cテフラ（As-C）が混じる土層の下部より採取された。

試料5～7は正観寺西原北側試料で、試料5は02号遺構洪水層の褐色細粒砂、試料6は04号遺構洪水層の下位の黒色砂質シルト、試料7は北端部浅間Cテフラが混じる土層（18B47グリッド）の下部より採取された粘性の高い黒色粘土である。

試料8、9は正観寺西原南側試料で、試料8は浅間Bテフラ（浅間 As-B 下水田C）の下位の黒色砂質シルト、試料9は浅間Cテフラが混じる土層の下部（同前下層）より採取された砂レキ混じり黒色シルトである。これら9試料のうち、試料1、2は様名二ヶ岳沢川テフラに覆われた畝地の可能性が、試料8は浅間Bテフラに覆われた水田址と考えられている。その他の試料3、4、6、7、9は用途不明の平坦地の試料である。

また、小八木志志貝戸1区の試料10、11は団粒状を示すレキ混じりの砂質シルトで、試料10は1-008号遺構の畝、11は同凹部より採取された。

##### 2 分析方法

プラント・オパール分析は上記した11試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40 $\mu$ m）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により細かな粒子（1 $\mu$ m以下）を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

表1 試料1g当りのプラント・オパール個数

試料番号	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	サヤヌカグサ属 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	ジュズダマ属 (個/g)	不明 (個/g)
1	14,600	10,400	2,100	1,000	0	5,200	0	9,400	24,900	1000	23,900
2	47,500	15,100	1,100	2,200	0	2,200	0	12,900	41,000	0	28,000
3	1,100	60,100	4,500	3,400	0	18,200	0	1,100	155,500	0	40,900
4	34,900	42,100	1,100	2,200	0	17,300	0	1,100	119,700	0	45,300
5	2,900	5,100	1,000	0	0	0	2,000	0	12,200	0	5,100
6	31,900	11,900	2,500	0	0	1,200	0	8,600	23,300	0	11,000
7	37,900	61,200	7,300	1,500	0	11,600	0	4,400	77,200	1500	68,400
8	146,400	42,100	0	1,100	1100	10,000	1,100	14,400	35,500	0	20,000
9	10,200	110,300	10,200	1,100	0	14,800	0	3,400	84,800	0	33,000
10	15,900	208,600	15,900	1,300	0	14,600	0	1,300	42,500	0	22,600
11	15,700	93,200	6,100	1,200	0	8,500	0	1,200	13,300	0	17,000

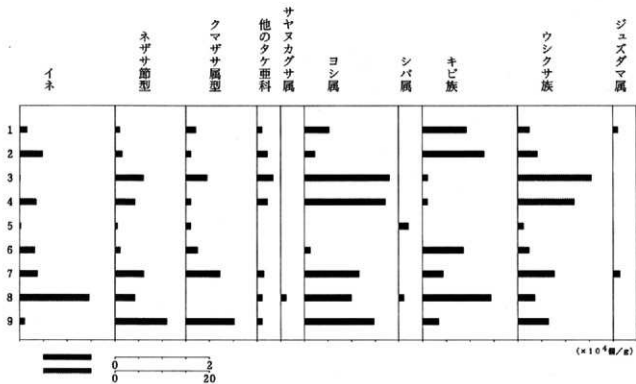


図1 菅谷石塚・正観寺西原遺跡 プラント・オパール分布図 (試料1~9)

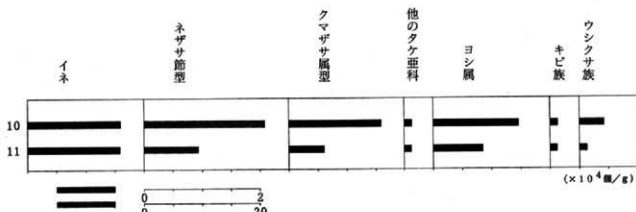


図2 小八木志志貝戸遺跡のプラント・オパール分布図 (1区008号遺構)

### 3 分析結果

同定・計数された各分類群のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(表1)、それらの分布を図1(試料1~9)、図2(試料10,11)に示した。以下に分析結果を示すが、各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、イネは全試料から検出され、試料3が1,100個、試料5が2,000個と少ない他はいずれも10,000個を越え、試料8では約150,000個と非常に高い数字を示している。その他、試料5、6、8~11の6試料からは顕微鏡で形成される珪酸体の破片が観察され、特に試料10、11では多く、単純にプラント・オパールと同様に計算すると試料10が12,000個、試料11が7,300個で、他の1,000個ほどに比べ多量である。

また、イネ属型とみられる単細胞珪酸体も少し認められる。イネ以外では、ネザサ属型とウシクサ属が多く、ほぼ10,000個以上で、ネザサ属型は試料9、10で、ウシクサ属は試料3、4で110,000個を越えている。ヨシ属も多くの試料で10,000個を越え、ヨシ属としては多く得られている。キビ族は試料5を除く10試料より検出され、試料1、2、6、8で10,000個前後とキビ族としてはやや高い数値を示している。クマザサ属型もほぼ全試料から検出されているが個数的にはそれほど多くなく、試料9、10で10,000個を越える程度である。その他、サヤヌカグサ属、シバ属、ジュズダマ属などが若干検出されている。

### 4 稲作について

上記したように、全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、福岡市の板付北遺跡では、イネのプラント・オパールが試料1g当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている(藤原,1984)。この調査例から稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。小八木志志戸遺跡群においては全試料よりイネのプラント・オパールが検出されていることから、以下に各地区ごとの稲作について示す。

菅谷石塚ウ地点(試料3)：イネのプラント・オパールの検出数は約1,000個で、検出個数からは稲作が行われていた可能性は低いと判断される。

菅谷石塚ア地点(試料1、4)：両試料とも多くのイネのプラント・オパールが検出されており、稲作が行われていた可能性は高いと検出個数からは判断される。

菅谷石塚イ地点(試料2)：非常に多くのイネのプラント・オパールが検出され、検出個数からは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。

なお、ア地点試料1およびイ地点試料2について予察的に花粉分析を行った。検鏡の結果、試料1ではマツ属複雑管束型属1、イネ科1、ヨモギ属3、シダ植物胞子3、不明1が認められた。試料2ではヨモギ属が132と多く、その他、ニレ属一ケヤキ属1、イネ科18、カヤツリグサ科1、アブラナ科1、キク亜科1、タンポポ科2、シダ植物胞子4、不明8が観察された。このうち栽培に関係する可能性のある分類群はイネ科(イネ)を除くとアブラナ科が考えられる。しかしながら後述するように、アブラナ科の形態分類は難しく、得られた花粉化石が栽培種に由来するかどうかはわからず、よってアブラナ科の栽培についても言及することはできない。

正観寺西原北側(試料5~7)：試料5は洪水砂層(近世?)であり、若干検出されたイネのプラント・オパールは他の稲作地あるいは埋積された前時代の稲作地よりもたらされたものと推測される。この洪水砂層の下位の試料6および浅間Cテフラが混じる層の下部より採取された試料7からは多くのイネが検出され、稲作が行われていた可能性は高いと検出個数からは判断される。

正観寺西原南側(試料8、9)：両試料とも多くのイネのプラント・オパールが検出され、検出個数からは



稲作が行われていた可能性は高いと判断される。特に浅間Bテフラに覆われた水田址とみられる遺構部より採取された試料8からは非常に多く得られ、水田址を支持する結果を示していると判断される。

小八木志志貝戸1区(試料10,11):畠とみられる遺構の畝部と凹部より採取された試料であるが、両試料ともほぼ同じくらいの多くのイネのプラント・オパールが検出され、やはり検出個数からは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。

小八木志志貝戸1区(試料10,11)の両試料について花粉分析を行ったところ、試料11(凹部)からは花粉化石は得られなかった。試料10では作成した1枚のプレパラートからイネ科3、クワ科1、アブラナ科1、ヨモギ属5、タンポポ科1が検出されたのみであった。地上に落下した花粉は池や溝などの水のついた還元環境下では良好な状態で保存されるが、畠地などでは紫外線やバクテリアなどで容易に分解されてしまう。試料10,11は畠地と予想され、先に記したことにより検出数が少なかったと思われる。そのなかで、栽培に関係する可能性のある分類群はクワ科(クワ)とアブラナ科(アブラナ、カブ、ダイコンなど)であるが、両科とも形態分類が難しく、得られた花粉化石がどの種であるか現時点では判断できず、栽培種によるものか雑草類であるのかは不明である。

なお、プラント・オパール分析においてキビ族が比較的多く検出されているが、キビ・アワ・ヒエといった栽培種によるものか、エノコログサやタイヌビエなどの雑草類によるものか形態からは現時点では分類が難しく、得られたキビ族についても不明である。

以上のように試料3(菅谷石塚浅間As-C混土下Bウ地点試料)と試料5(正観寺西原02号遺構)を除く他の9試料からは多くのイネのプラント・オパールが得られ、検出個数のみからは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。また、花粉分析も行ったが、他の作物についての手がかりはなにも得られなかった。

### 5 遺跡周辺のイネ科植物

ネザサ節型やウシクサ族が多く検出されており、ネザサ節型のササ類(アズマネザサ、ゴキダケなど)やウシクサ族(ススキ、チガヤなど)が草地的な景観が遺跡周辺丘腰部や上記稲作地周辺に広がっていたとみられる。また、この稲作地周辺の地下水位の比較的高いところや河川、溝などにヨシ属(ヨシ、ツルヨシなど)やジューズグマ属、ウシクサ族のオギなどが生育していたと推測される。

## 第2次分析

### 1 試料と分析方法

分析用試料は、いずれも浅間Bテフラ(As-B)堆積層直下の土層より採取されている。各試料について、試料1は小八木志志貝戸遺跡6区002号遺構(9L10G)より採取された黒〜黒褐色の粘土、試料2は小八木井野川遺跡001号遺構より採取された黒〜黒褐色粘土、試料3は井野屋敷前遺跡西側地点の畦畔をとまなう水田遺構の水田面直下の黒褐色砂質粘土である。試料4、5は井野屋敷前遺跡東側地点の浅間Bテフラ直下黒色粘土層(やや泥炭質)より採取された。そのうち試料4は特に黒色の強い最上部2cmより採取され、試料5は浅間Bテフラ層の下4cmより採取された。プラント・オパール分析はこれら5試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約40μm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検観した。同定および計数はガラスビー

ズが300個に達するまで行った。

## 2 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(表2)、それらの分布を図1に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、全試料より非常に多くのイネのプラント・オパールが検出された。個数としては、最も少ない試料4(井野屋敷前天水地区)でも15,000個で、試料2においては100,000個弱に達している。

イネ以外についてみると、ネザサ節莖は30,000個前後、ウシクサ族は20,000個前後検出され、キビ族も3,000個前後を示し、遺跡により多少異なる結果を示しているがそれほど大きな違いは無い。これらに比べヨシ属3試料は30,000個前後を示すものの、試料2(小八木井野川遺跡)においては6,000と少なく、試料4では反対に約90,000個と非常に多く検出されている。その他クマザサ属型やジュズダマ属などが若干検出されている。

## 3 稲作について

上記したように、全試料より多くのイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、福岡市の板付北遺跡では、イネのプラント・オパールが試料1g当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている(藤原, 1984)。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。

今回分析を行った各地点においてはいずれも5,000個を超える個数が得られており、検出個数からは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。これらのうち、試料3(井野屋敷前遺跡屋敷前地区)は畦畔をとまなう水田遺構の水田面直下の試料である。また、花粉分析結果をみると、多くのイネ科花粉の検出とともにオモダカ属(オモダカ、ウリカワなど)、ミズアオイ属(ミズアオイ、コナギなど)などの水田雑草を含む分類群も産出しており、水田稲作を支持する結果を示している。また、同様の水田遺構が検出されている試料1(小八木志志貝戸遺跡6区002号遺構)についてもプラント・オパール分析および花粉分析結果を合わせ水田稲作が行われていた可能性は高いと判断される。

しかしながら試料2についてみると、イネのプラント・オパールは非常に多く検出されているが、ヨシ属は他の試料に比べ非常に少なく、花粉化石もほとんど検出されていない。これらのことから、試料2採取層は地下水位が低く、他の地点に比べ乾いた環境であったことが予想され、花粉化石の多くは分解・消失してしまったと推測される。よって、試料2、すなわち小八木井野川遺跡001号遺構において稲作が行われていたとするとかなり乾いた状況での稲作(陸稲?)が予想されよう。また、稲作ではなく、そうした状況は示されていないが畑作であるとなると、肥料などとして稲葉が試料採取地点付近に供給された結果大量のイネのプラント・オパールが検出されたことも考えられよう。このようなことから、小八木井野川遺跡における稲作についてはさらに検討が必要と考える。

また試料4についてみると、プラント・オパール分析および花粉分析とも水田稲作を支持する結果を示している。そのうちプラント・オパール分析においてはヨシ属(ヨシ、ツルヨシなど)が非常に多く検出されており、花粉分析においてはガマ属(ガマ、ヒメガマなど)の多産が示されている。これらは池沼や湿地などに生育する植物であり、堆積物もやや泥炭質と他地点に比べ水環境の影響が予想される。このような堆積層における稲作について、東京都の溜池遺跡では良質な草本泥炭層においてヨシ属の多産とともにイネが検出されており、ヨシ属、ガマ属、カヤヅリグサ科の湿原の形成とともに一部で水田稲作が行われるようになった(鈴木, 1997

試料1g当りのプラント・オパール個数

遺跡	試料番号	イネ (個/g)	ネザサ属型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ属 (個/g)	ウシクサ属 (個/g)	不明 (個/g)
小八木志志貝戸遺跡	1	54,900	49,400	4,100	1,400	30,200	5,500	20,600	19,200
小八木井野川遺跡	2	96,500	35,000	1,200	0	6,000	6,000	18,100	16,900
井野屋敷前遺跡屋敷前地区	3	38,900	24,800	1,200	0	31,800	2,400	24,800	18,900
井野屋敷前遺跡天水地区-1	4	15,000	27,400	0	0	89,800	2,500	20,000	32,400
井野屋敷前遺跡天水地区-2	5	28,300	19,900	1,700	0	24,900	3,300	10,000	8,300



a)とされている。また神奈川県海老名市の四大縄遺跡においても分解質泥炭層より大量のヨシ属とともにイネが検出され、ヨシ原を切り開いて水田稲作が行われるようになった(鈴木, 1997b)と考えられている。

このように、湿地環境が予想される堆積物においても水田稲作が予想される結果となった。なお、井野屋敷前遺跡天水地区において、試料4直下の試料5ではヨシ属、ガマ属とも他地点と同様の産出を示しており、これらが大量に検出された環境は一時的であったと推測される。

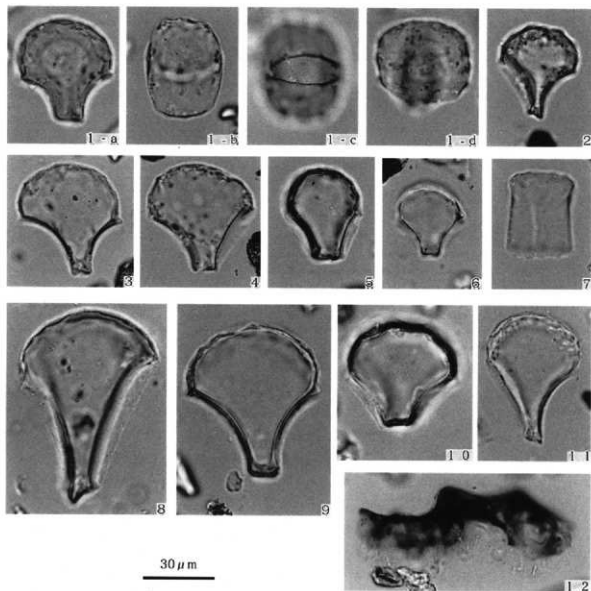
#### 4 水田稲作と土壌

上記した井野屋敷前遺跡天水地区の試料4は特に黒色が強い粘土であり、これは泥炭が酸化分解して形成されたもの(黒泥)と考えられる。また、赤褐色酸化鉄の集積が認められないことから還元環境であったと推測され、水田としては湿地であったと思われる。一方、同遺跡屋敷前地区の水田遺構より採取された試料3は砂質粘土であり、赤褐色酸化鉄の集積が認められる。また、小八木志志貝戸遺跡の試料1にも酸化鉄の集積が認められる。この赤褐色酸化鉄の集積は土壌が空気と接していたことを示すと考えられ、水が常時ついているわけではない水田、すなわち乾田あるいは半乾田における稲作と推測される。また、先にも記したが、溜池遺跡にみられる良質な泥炭土においても稲作が予想されている(鈴木, 1997a)。

一般的な水田土壌としては試料3のような砂質粘土あるいは砂質シルトと予想されるが、このように泥炭や黒泥においても水田稲作が行われていた可能性があり、土相だけでは判断しにくいことを示していると考えられる。

#### 引用文献

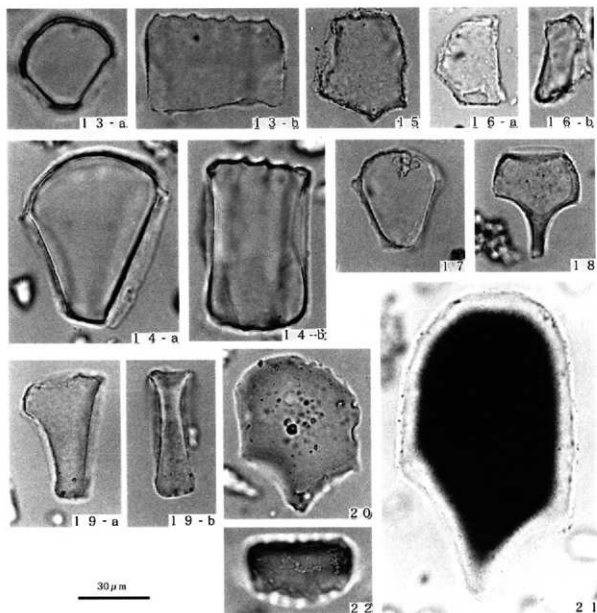
- 鈴木 茂, 1997a: 「溜池遺跡の植物埋蔵体」『溜池遺跡第II分冊』帝都高速交通営団・地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会, p.146-154.
- 鈴木 茂, 1997b: 「海老名市四大縄遺跡のプラント・オパール」『四大縄遺跡 海老名市No.47遺跡発掘調査団, p.87-90. (p.19)
- 藤原宏志, 1976: 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科植物の埋蔵体標本と定量分析法-」『考古学と自然科学』9, p.15-29.
- 藤原宏志, 1984: 「プラント・オパール分析法とその応用-先史時代の水田址探査-」『考古学ジャーナル』227, p.2-7.
- 藤原宏志・佐々木彰, 1978: 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(2)-イネ (Oryza) 属植物における機動細胞埋蔵体の形状-」『考古学と自然科学』11, p.9-20.



第1次分析

図版1 小八木志志貝戸遺跡群のプラント・オパール

- 1~11: イネ (1-a, 2~6, 8~11: 断面, 1-b, 7: 側面, 1-c: 表面, 1-d: 裏面)  
 1: 試料1, 2: 試料2, 3: 試料3, 4: 試料4, 5: 試料5, 6: 試料6  
 7: 試料8, 8: 試料7, 9: 試料9, 10: 試料10, 11: 試料11  
 12: イネ類部柱胞体破片 試料6



## 第1次分析

図版2 小八木志志貝戸遺跡群のプラント・オパール

13, 14: ネゾア型 (13-a, 14-a: 断面, 13-b, 14-b: 側面) 13: 試料7, 14: 試料11

15, 16: タマザオ型 (15, 16-a: 断面, 16-b: 側面)

15: 試料5, 16: 試料7

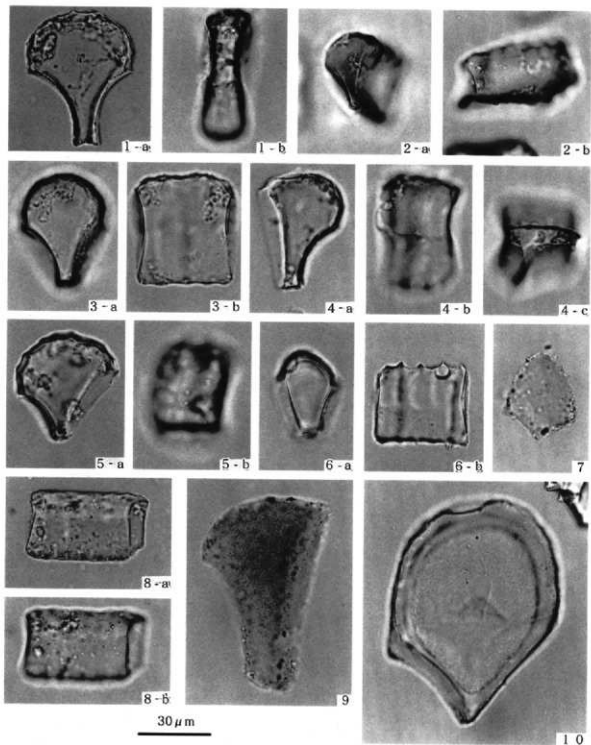
17: その他のタケ虫科 (断面) 試料7

18: シバ属 (側面) 試料5

19: ウシクサ属 (19-a: 断面, 19-b: 側面) 試料5

20, 21: ヨシ属 (断面) 20: 試料4, 21: 試料11

22: キビ属 (側面) 試料6



## 第2次分析

### 各遺跡のプラント・オパール

1～5：イネ (a：断面、1-b、3-b、4-b：断面、4-c：表面、2-b、5-b：裏面部)

1：試料1、2：試料2、3：試料3、4：試料4、5：試料5

6：ネザサ部型 (a：断面、b：側面) 断面4 7：クマザサ属型 (断面) 試料1

8：キビ属 (断面) 試料1 9：ウシクサ属 (断面) 試料1

10：ヨシ属 (断面) 試料4

## 3-4 花粉分析

新山雅広 (パレオ・ラボ)

小八木志志貝戸遺跡、小八木井野川遺跡、井野屋敷前遺跡 3 遺跡から採取された合計 5 試料について、各試料を採取した土層が水田耕作土層であるか否かを推定することを主な目的として花粉化石群集の検討を行った。

### 1 試料

分析に用いた試料は、以下の通りである。なお、この 5 試料はプラント・オパール第 2 次分析の検討にも用いられている。

試料 1: 小八木志志貝戸遺跡 6-002 号遺構の黒色～黒褐色粘土層より採取された。この土層の上部には褐鉄鉱が根状に集積しており、直上には浅間 B 軽石 (As-B) が多量に混じる黒褐色シルト層が堆積する。

試料 2: 小八木井野川遺跡 001 号遺構の黒色～黒褐色粘土層より採取された。この土層は、根状の褐鉄鉱の集積が僅かに認められ、直上には浅間 As-B 軽石が多量に混じる黒褐色シルト層が堆積する。

試料 3: 井野屋敷前遺跡屋敷前地区の黒褐色砂質粘土層より採取された。この土層は、水田耕作土層と考えられており、試料は水田遺構面の直下より採取された。この土層の直上には浅間 B 軽石が堆積する。

試料 4, 5: 井野屋敷前遺跡天水地区の黒色粘土層より採取された。この土層は、最上部 1 cm 程が特に黒色が強く、試料 4 はこの最上部約 1 cm の部分から、試料 5 はその下の最上部約 4～8 cm の部分から採取された。この土層の直上には浅間 As-B 軽石が堆積する。

### 2 分析方法

花粉化石の抽出は、試料約 2～3 g を 10% 水酸化カリウム処理 (湯煎約 15 分) による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理 (約 30 分) による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理 (水酢酸による脱水、濃硫酸 1 に対して無水酢酸 9 の混液で湯煎約 5 分) の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、全ての試料において重液分離 (臭化亜鉛を比重 2.1 に調整) による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロベットで取り、グリセリンで封入した。

検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

### 3 花粉化石群集の記載

試料 1 (小八木志志貝戸遺跡): 同定された分類群数は、樹木花粉 19、草本花粉 13、形態分類で示したシダ植物胞子 2 である。樹木花粉の占める割合は約 47% である。その中で、コナラ亜属が約 39% で最優占し、次いでアカガシ亜属 (約 16%)、クマシダ属-アサダ属 (10%)、スギ属 (約 8%) が出現する。草本花粉では、イネ科が約 26% で最優占し、次いでカヤツリグサ科が約 13% で出現する。他に、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属などが低率で出現する。

試料 2 (小八木井野川遺跡): 同定された分類群数は、樹木花粉 8、草本花粉 6、形態分類を含むシダ植物胞子 2 である。樹木花粉の産出個数が不十分なため花粉化石分布図として示せなかった。樹木花粉では、コナラ亜属が比較的多産し、クマシダ属-アサダ属、アカガシ亜属などが僅かに産出した。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科が比較的多産し、ガマ属、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ科や水生シダ植物のサンショウモなどが産出した。

試料 3 (井野屋敷前遺跡屋敷前地区): 同定された分類群数は、樹木花粉 21、草本花粉 15、形態分類を含むシダ植物胞子 2 である。樹木花粉の占める割合は約 32% と低率である。その中で、コナラ亜属が約 27%

で最優占する。次いで、アカガシ亜属(約23%)、スギ属(約11%)、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科(約6%)、クマシデ属-アサダ属(約6%)などが出現する。草本花粉では、イネ科が約36%で最優占し、次いでカツリグサ科が約17%で出現する。他に、オモダカ属、ミズアオイ属、キサシグサ属、サンショウモなどが低率で出現する。

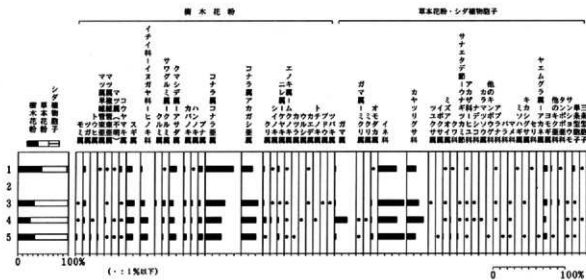
試料4(井野屋敷前遺跡水田地区)：同定された分類群数は、樹木花粉21、草本花粉15、形態分類を含むシダ植物孢子3である。樹木花粉の占める割合は約24%と低率である。その中で、コナラ亜属が約23%で最優占する。次いで、アカガシ亜属(約21%)、スギ属(約11%)、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科(約10%)、クマシデ属-アサダ属(約7%)などが出現する。草本花粉では、イネ科が約27%で最優占し、次いでカツリグサ科が約23%で出現する。他に、ガマ属が約18%と突出した出現傾向を示し、オモダカ属、ミズアオイ属、サンショウモなどが低率で出現する。

試料5(井野屋敷前遺跡水田地区)：同定された分類群数は、樹木花粉20、草本花粉17、形態分類を含むシダ植物孢子2である。樹木花粉の占める割合は約33%と低率である。その中で、コナラ亜属が約22%で最優占する。次いで、アカガシ亜属が約21%、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、スギ属、クマシデ属-アサダ属が約10%で出現する。草本花粉では、イネ科が約37%で最優占し、次いでカツリグサ科が約12%で出現する。他に、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属、キサシグサ属、サンショウモなどが低率で出現する。

#### 4 考察

検討した5試料の花粉組成は、いずれもイネ科が比較的高率で出現し、オモダカ属、ミズアオイ属、キサシグサ属、サンショウモなどの現在の水田において普通にみられるいわゆる水田雑草が随伴するという特徴がある。従って、花粉化石群集からみた場合、いずれの試料を採取した土層も水田耕作土層である可能性が考えられる。試料3(井野屋敷前遺跡水田地区)については、既に発掘調査で水田遺構が確認されており、水田耕作土層と考えられる土層から採取された試料であるが、花粉組成からも水田遺構であることを支持する結果が得られたことになる。ただし、試料4(井野屋敷前遺跡水田地区)については、ガマ属が他試料に比べて非常に多産する傾向がみられ、水田に類似した水位の低い湿地的環境が存在していた可能性も考えられる。

遺跡周辺の植生については、いずれの試料も花粉組成は概ね類似しており、コナラ亜属、アカガシ亜属を主体に針葉樹のスギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、落葉広葉樹のクマシデ属-アサダ属などを混じえた森林が成立していたことが予想される。



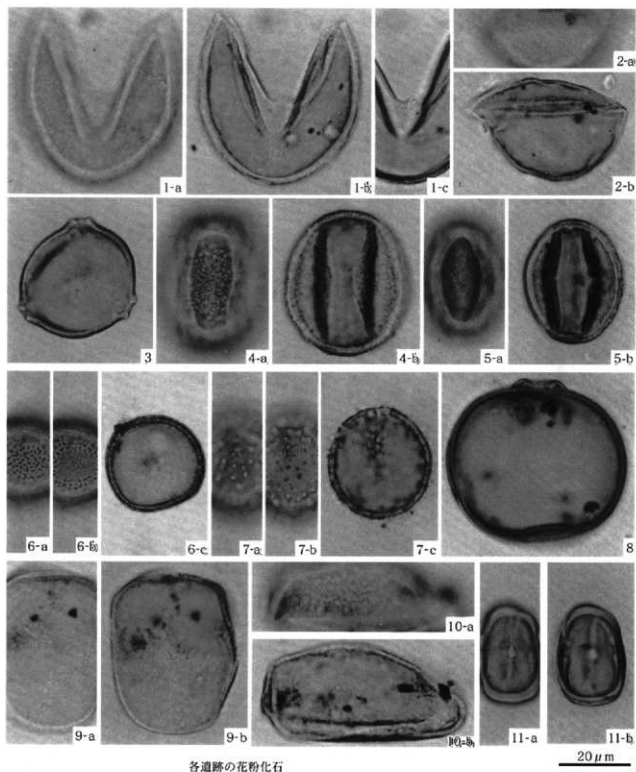
〔樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・孢子は総花粉・孢子数を基数として百分率で算出した〕

花粉化石分布図



## 花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5
<b>樹木</b>						
モミ属	<i>Abies</i>	-	-	1	1	5
ツガ属	<i>Tsuga</i>	7	1	8	5	5
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	-	1	3
マツ属単雄管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	1	-	-	-	3
マツ属複雄管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	1	-	1	4	2
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	1	-	-	2	1
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	8	-	1	1	1
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	17	1	23	23	21
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.- C.	4	-	12	22	22
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	-	5	-	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	2	-	9	7	3
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	21	3	12	15	21
カバノキ属	<i>Betula</i>	4	-	7	5	9
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	1	1	5	3	3
ブナ属	<i>Fagus</i>	13	-	7	11	15
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	82	11	56	48	49
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	33	3	48	44	45
クリ属	<i>Castanea</i>	4	2	3	10	2
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	2	-	1	4	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	6	1	1	4	6
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	2	-	2	1	1
カツラ属	<i>Cercidiphyllum</i>	-	-	-	-	1
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	-	-	1	-
カエデ属	<i>Acer</i>	1	-	1	-	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	-	1	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	1	-	-
ツバキ属	<i>Camellia</i>	-	-	1	-	-
<b>草本</b>						
ガマ属	<i>Typha</i>	7	2	9	158	14
ガマ属-ミクリ属	<i>Typha - Sparganium</i>	-	-	-	2	2
ミクリ属	<i>Sparganium</i>	-	-	-	1	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	4	-	9	12	21
イネ科	Gramineae	116	16	232	238	240
カヤツリグサ科	Cyperaceae	58	15	107	207	80
ツユクサ属	<i>Commelina</i>	-	-	1	-	-
イボクサ属	<i>Anellema</i>	-	-	-	-	1
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	3	-	4	1	7
クワ科	Moraceae	1	-	-	10	8
サナエタデ属-ウナギツカミ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	-	3	2	7
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	-	3	3	1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	1	1	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	-	-	1	-
他のキンポウグ科	other Ranunculaceae	-	-	-	-	3
アブラナ科	Cruciferae	1	-	3	1	-
バラ科	Rosaceae	-	-	-	-	1
マメ科	Leguminosae	-	-	2	3	1
ミノハギ属	<i>Lythrum</i>	1	-	-	-	-
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	-	-	2	-	3
セリ科	Umbelliferae	1	-	-	-	-
ヤエムグラ属-アカネ属	<i>Galium - Rubia</i>	-	-	-	-	2
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	24	5	33	30	31
他のキク亜科	other Tubuliflorae	5	3	8	-	3
タンポポ科	Liguliflorae	4	1	12	-	-
<b>シダ植物</b>						
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> All.	-	1	1	1	3
単葉型胞子	Monolete spore	14	6	5	4	6
三葉型胞子	Trilete spore	1	-	-	1	-
<b>樹木花粉</b>						
樹木花粉	Arboreal pollen	210	23	205	213	218
草本花粉	Nonarboreal pollen	226	42	429	670	425
シダ植物胞子	Spores	15	7	6	6	9
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	451	72	640	889	652
<b>不明花粉</b>						
不明花粉	Unknown pollen	4	3	11	4	3



各遺跡の花粉化石

1. スギ属、試料3、PAL.MN 1179
2. イチイ科—イマガヤ科—ヒノキ科、試料4、PAL.MN 1171
3. クマシデ属—アサダ属、試料5、PAL.MN 1174
4. コナラ属コナラ亜属、試料3、PAL.MN 1180
5. コナラ属アカシヤ属、試料5、PAL.MN 1173
6. ガマ属、試料4、PAL.MN 1170
7. オモダカ属、試料5、PAL.MN 1175
8. イネ科、試料5、PAL.MN 1178
9. カヤツリグサ科、試料4、PAL.MN 1172
10. ミズカオイ属、試料5、PAL.MN 1177
11. キカシグサ属、試料5、PAL.MN 1176

## 3-5 樹種同定

植田 弥生・松葉 礼子 (パレオ・ラボ)

### A 第1次分析

群馬県高崎市小八木町に所在し、利根川右岸の標高約120mの平野部に位置する。ここでは当遺跡から出土した木製品1点と竪穴住居跡出土炭化材52点の樹種同定結果を報告する。木製品は、0-007号遺構出土の古墳時代の杭(?)が1点である。炭化材はすべて古墳時代初期の竪穴住居の構造材であり、2-080号遺構の炭化材52点の樹種同定を行った。

#### 1 樹種同定の方法

未炭化の材については、片刃剃刀を用いて横断面(木口と同義・写真図版a)、接線断面(板目と同義・写真図版b)、放射断面(柀目と同義・写真図版c)の3方向を作成し、これらの切片をガムクロラルにて封入し、永久標本を作成し、光学顕微鏡で組織を観察し現生標本との比較により樹種を決定した。作成した木材組織プレパラートは、髷パレオ・ラボで保管されている。

炭化材は、まず実体顕微鏡で横断面を観察し分類群のおおよその目安をたてる。次に各分類群の代表的な試料と、より詳細な観察を要する試料については、走査電子顕微鏡で観察するために次のような試料を作成した。横断面は手で割り接線断面と放射断面は片刃の剃刀を方向に沿って軽くあて弾くように割り平滑面を出し、各3断面を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗り充分乾燥させた後に金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM-T100型)で観察・写真撮影をした。炭化試料の残りは、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

#### 2 結果

##### (1) 木製品

0-007号遺構から出土した古墳時代の杭(?)と思われる材はケヤキであった。

##### (2) 古墳時代初期の焼失竪穴住居構造材

2-080号遺構は52地点から採取されたため、ひとつの竪穴住居に使用された材についての情報が多く得られた。検出された分類群は、クスギ節・クリ・コナラ節・エノキ属の4分類群であった。試料は表面は炭化しているが内方は土が進入しており、正確な元の形状や大きさを知ることはできなかった。しかし炭化して残っている表面部からではあるが、出土位置51は径の幅が30cmありそのほかも10cm以上のものが多く、年輪線のカーブからも大径木の材ではなかったかと推定される試料が多かった。また年輪幅の狭いぬか目材が目立った。出土位置6と37はクリであり、出土位置6は厚み約0.8cm、幅約3.0cm、長さ5cmほどの板目取りの薄い板状でありまた半焼け状態であった。出土位置51からはクスギ節・コナラ節・エノキ属の3分類群が検出された。コナラ節とエノキ属はクスギ節より小さな破片であったことから、これらはクスギ節に近接しておりその一部がクスギ節と一緒に採取されたと思われる。そのほかの試料はすべてクスギ節であった。

以上の同定結果を表1にまとめ、同定の根拠となった組織観察結果を以下に記載する。

##### (3) 組織記載

#### 1 コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Q.* sect. *Prinus* ブナ科 写真図版1 2a-2c (2-080号 出土位置51-2)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、晩材部は薄壁の非常に小型の管孔が火災状に配列する環孔材。散在状、接線状の柔組織が顕著である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースが顕著である。放射組織は同性、単列と集合状のものがある。

### 第3章 自然科学調査

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木で、コナラ・カシワ・ナラガシワ・ミズナラがある。材は重硬だが乾燥すると割れや狂いが出やすい。

- 2 コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* subgen. *Q. sect. Cerris* ブナ科 写真図版1 3a-3c. (2-80号 出土位置26)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、晩材部は厚壁の小型管孔が単独で放射方向に配列する環孔材。散在状・短接線状の柔組織がある。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は同性、単列と集合状のものがあ、道管との壁孔は櫛状である。

クヌギ節は暖帯の山林や二次林に普通の落葉性高木で、クヌギとアベマキが含まれる。関東ではクヌギ、瀬戸内海沿岸地方にはアベマキが多い。材は重厚で割裂性が良く、関東地方では遺跡からの出土例が多く、多用されている分類群である。

- 3 クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真図版2 4a-4c. (2-80号 出土位置6)

年輪の始めに大型の管孔が密接して配列し徐々に径を減じて行き、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく開いている。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

- 4 ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 写真図版2 5a-5c. (0-07号 杭?)

年輪の始めに中型で厚壁の管孔が1~2層配列し、晩材部では小型の管孔が塊状に集合し接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1~4細胞幅の紡錘形、上下端に結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅いが狂いが出やすい材である。

- 5 エノキ属 *Celtis* ニレ科 写真図版2 6a-6c. (2-80号 出土位置51-3)

中型の管孔が1~3層配列し、晩材部は小型~非常に小型の管孔が集合して斜状や波状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は方形・平伏細胞からなる異性で縁に鞘細胞がある。

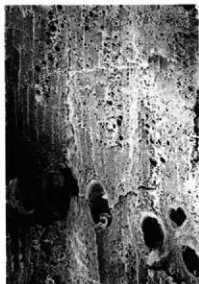
エノキ属は落葉性の高木で、本州以南の低地から山地に普通のエノキ、北海道以南の山地に生育するエゾエノキ、近畿以西の山地に稀なコバノチョウセンエノキがある。材は硬いがあまり強くはない。

#### 3 まとめ

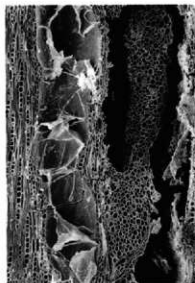
古墳時代の杭(?)として古墳時代初期の竪穴住居構造材に使われていた分類群は、クヌギ節・クリ・コナラ節・ケヤキ・エノキ属であり、これらは低山地の落葉広葉樹林の普通の樹種であることから、遺跡周辺の落葉広葉樹林に豊富に生育していた樹種を選択利用していたと思われる。

竪穴住居2-080号ではクヌギ節がほとんどであり、また2-080号のクヌギ節は径が10cm以上の大きな材がほとんどであった。多くの試料が得られた竪穴住居2-080号については、構造材はクヌギ節がほとんどでありその材の径は10cm以上はあるものがほとんどであった。そのほかにクリとコナラ節とエノキ属も各1~2点ではあるが検出された。樹種により構造上の使い分けがあったかどうかは判らないが、クヌギ節の材を主体として少数ではあるがクヌギ節以外の樹種も使用していたと言える。

当遺跡の東方に位置する新保遺跡の弥生時代中期~古墳時代前期の加工木や自然木の樹種調査においても最もクヌギ節は優占する分類群であった。新保遺跡の調査から古墳時代前期頃の周辺植生は、クヌギ節が優占する落葉広葉樹林であったことが復元されている(鈴木・能城, 1986・1988)。この結果から当遺跡の竪穴住居は、当時周辺から入手しやすくかつ豊富に生育し建築材としても適材であったクヌギ節を豊富に利用していたといえる。



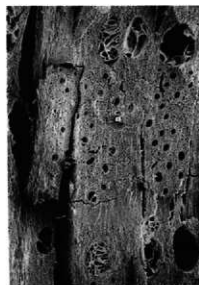
2a. コナラ部 (横断面)  
2区80号 出土位置51-2 bar:0.5mm



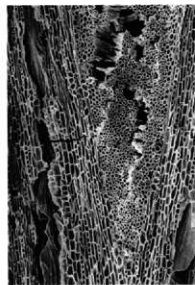
2b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



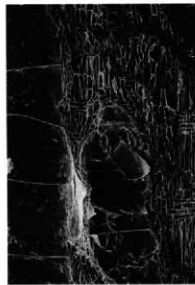
2c. 同 (放射断面) bar:0.1mm



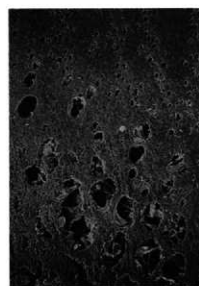
3a. クスギ部 (横断面)  
2区80号 出土位置26 bar:1.0mm



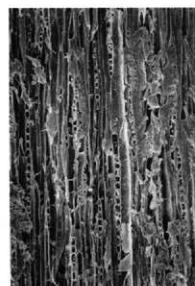
3b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



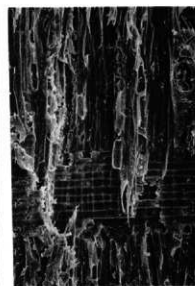
3c. 同 (放射断面) bar:0.1mm



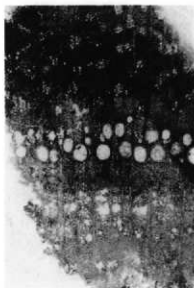
4a. クリ (横断面)  
2区80号 出土位置6 bar:1.0mm



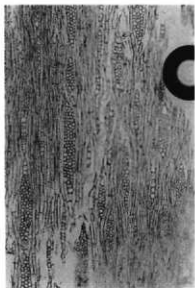
4b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



4c. 同 (放射断面) bar:0.1mm



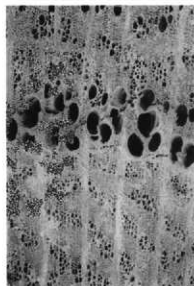
5a.ケヤキ (横断面)  
OIK07号 杭(?) bar:1.0mm



5b.同 (接線断面) bar:0.4mm



5c.同 (放射断面) bar:0.2mm



6a.エノキ属 (横断面)  
2区80号 出土位置51-3 bar:0.5mm



6b.同 (接線断面) bar:0.1mm



6c.同 (放射断面) bar:0.1mm

表1 小八木志志貝戸遺跡出土木材の第1次樹種同定結果 (172頁に続く)

資料№	遺構	出土位置	樹種	備考	時期	資料№	遺構	出土位置	樹種	備考	時期
1	0-007号		ケヤキ	杭(?)	古墳時代	12	2-080号	3	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期
2	0-025号	下板	針葉樹	桶下板	江戸時代	13	2-080号	4	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期
10	2-080号	1	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期	14	2-080号	5	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期
11	2-080号	2	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期	15	2-080号	6	クリ	竪穴住居構築材	古墳時代初期
15	2-080号	6	クリ	竪穴住居構築材	古墳時代初期	40	2-080号	31	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期
16	2-080号	7	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期	41	2-080号	32	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期
17	2-080号	8	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期	42	2-080号	33	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期
18	2-080号	9	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期	43	2-080号	34	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期
19	2-080号	10	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期	44	2-080号	35	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期
20	2-080号	11	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期	45	2-080号	36	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期
21	2-080号	12	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期	46	2-080号	37	クリ	竪穴住居構築材	古墳時代初期
22	2-080号	13	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期	47	2-080号	38	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期
23	2-080号	14	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期	48	2-080号	39	クスギ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期

Bar: 

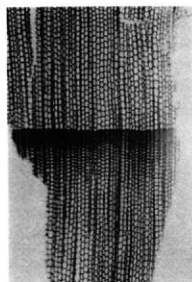
1a マツ属 bar:1mm



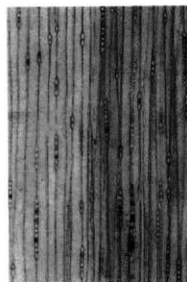
4080-2 1b 同 bar:0.4mm



1c 同 bar:0.1mm



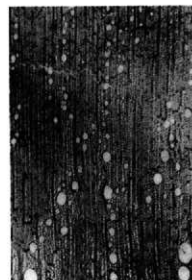
2a スギ bar:1mm



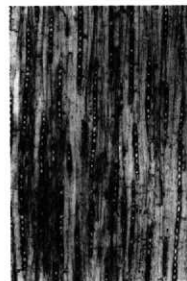
4080 2b 同 bar:0.4mm



2c 同 bar:0.1mm



3a クリ bar:1mm



4080-1 3b 同 bar:0.4mm



3c 同 bar:0.2mm

### 第3章 自然科学調査

資料No.	遺構	出土位置	樹種	備考	時期	資料No.	遺構	出土位置	樹種	備考	時期
24	2-080号	15	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	49	2-080号	40	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期
25	2-080号	16	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	50	2-080号	41	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期
26	2-080号	17	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	51	2-080号	42	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期
27	2-080号	18	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	52	2-080号	43	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期
28	2-080号	19	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	53	2-080号	44	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期
29	2-080号	20	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	54	2-080号	45	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期
30	2-080号	21	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	55	2-080号	46	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期
31	2-080号	22	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	56	2-080号	47	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期
32	2-080号	23	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	57	2-080号	48	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期
33	2-080号	24	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	58	2-080号	49	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期
34	2-080号	25	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	59	2-080号	50	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期
35	2-080号	26	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	60	2-080号	51-1	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期
36	2-080号	27	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	60	2-080号	51-2	コナラ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期
37	2-080号	28	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	60	2-080号	51-3	エノキ属	竪穴住居構築材	古墳時代初期
38	2-080号	29	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期	61	2-080号	52	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期
39	2-080号	30	クスギ節	竪穴住居構築材	古墳時代初期						

(170頁からの続き)

## B 第2次分析

### 1 分析対象試料と方法

試料は、中世(14世紀)の釣瓶、近世(18世紀)の桶や桶の角材・板材と時代不明の杭で計11点である(表2)。同定には、木製品から直接片削刺刀を用いて、木材組織切片を横断面、接線断面、放射断面の3方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版にし、同定の証拠とする。なお、作成した木材組織プレパラートは遺物番号を付し、静岡県泉原蔵文化財調査事業団で保管されている。

表2 小八木志志貝戸遺跡出土木材の第2次樹種同定結果

遺物No.	遺構	樹種	備考	時期	遺物No.	遺構	樹種	備考	時期
4080-1	6-001号	タリ	板材	近世	4084-01	0-025号	スギ?	桶底	近世
4080-02	6-001号	マツ属	板材	近世	4084-02	0-025号	スギ?	桶底	近世
4081	6-001号	スギ	角材	近世	4084-03	0-025号	スギ?	桶底	近世
4082	2-091号	スギ	釣瓶	中世	4084-04	0-025号	スギ?	桶底	近世
4083	6-001号	スギ?	桶	近世	4084-05	0-025号	スギ?	桶底	近世
					4084-06	0-025号	針葉樹	桶底	近世

## 2 同定根拠

### 1 マツ属 *Pinus Pinaceae*

写真図版 1a~1c: 4080-2

水平・垂直両樹脂道をもとに持つ針葉樹。樹脂道の周囲にはエビセルウム細胞があるが腐朽のため欠落している。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管と放射樹脂道からなり、単列と紡錘形のものがある。分野環孔は大型の窓状で、1分野に1~2個。

以上の形質からマツ科のマツ属の材と同定した。マツ属にはアカマツ・クロマツが含まれる複雑管束亜属と単純管束亜属があるが、放射仮道管の内壁に肥厚が腐朽のため確認できずマツ属までしか同定に至らなかった。

### 2 スギ *Cryptomeria japonica* (L.fil.) D.Don Taxodiaceae

写真図版 2a~2c: 4082

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて接線方向に散在する。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。分野環孔はスギ型で、通常1分野あたり2個存在する。

以上の形質により、スギ科のスギの材と同定した。スギは常緑の針葉樹で、本州~屋久島の温帯~暖帯に分布している。



3 クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. Fagaceae

写真図版 3a~3c: 4080-1

晩材部に小型薄壁で角張った管孔が、火炎状から放射状に配列する。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材部で接線状から短接線状。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は対列状を呈す。

以上の形質より、ブナ科のクリの材と同定した。クリは北海道~九州の温帯~暖帯に分布する落葉性高木あるいは中高木である。

## 3 結果

11試料を同定した結果マツ属、スギ、クリの計3樹種が確認された。中世の釣瓶と近世の樋桶と角材はスギであった。その他の樹種はいずれも1点でマツ属とクリは近世の板材に確認されている。

スギは中世鎌倉で多く確認される樹種であるが(藤根, 1993)、関東全体で中世以降曲物や桶などの製品が増加するに従い多く出土する樹種でもある。今回は各時代同定した点数が少ないため結果を報告するにとどめる。

## 引用文献

- 鈴木三男・能城修一, 1986: 「新保遺跡出土加工木の樹種」 71-94, PL.3-19, 『新保遺跡 I 弥生・古墳時代大溝編』 群埋文  
鈴木三男・能城修一, 1988: 「新保遺跡出土自然木の樹種とそれによる古墳生復元」 435-453, 図版190-211, 『新保遺跡 II 弥生・古墳時代集落編』 群埋文  
藤根 久, 1993: 「佐助ヶ谷遺跡出土木製品の樹種同定」 『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉視察啓用) 発掘調査報告書 第2分冊』 389-396, 佐助ヶ谷遺跡調査団

## 3-6 補遺 弥生大型植物化石

新山 雅 広 (パレオ・ラボ)

## 1 出土した大型植物化石

大型植物化石の検討を行ったのは、小八木志志貝戸遺跡1-049号遺構の1試料である。なお、数字は出土個数を示す。

イネ (炭化胚乳、1) タデ属 (炭化果実、1)

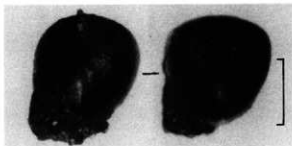
## 2 栽培・利用状況

出土したのは、イネとタデ属の2分類群のみである。イネは栽培植物であり、タデ属も栽培され、利用されていた可能性が考えられる。この出土したタデ属は、種までの同定には至らないが、炭化した状態でイネなどの穀類と共にしばしば遺跡から出土する種類のものである。本遺構からは前回の分析でイネの炭化胚乳が1個見られている。

## 3 大型植物化石の形態記載

タデ属 *Polygonum* 炭化果実

側面観は楕円形、上面観はかなり丸みを帯びた三角形。長さ約2.1mm、幅約1.6mm。



(スケールは1mm) タデ属、炭化果実

追記: 他に正観寺西原遺跡02号遺構(近世畠)からはエゴノキ種子、小八木志志貝戸遺跡6区試掘でモモ核が出土している。

## 3-7 自然科学調査成果まとめ

以上の各自然科学調査の成果について、次のようにまとめることができる。

### 3-1 人骨・獣骨について

#### 3-1-1 中世墓出土の人骨

性別・年齢の判明したものの中では、圧倒的に壮年期の女性が多かった。しかもその中で少なからぬ部分には犬歯・小臼歯に異常な咬耗が見られた。これは被葬者の生業との関係が想起される。

#### 3-1-2 古墳時代のウシ・ウマ

若いウシを中心とする出土した牛馬歯は、自然死的な状況では考えにくいとされた。出土遺構は墓坑でないことは明らかであり、屠殺による埋納が想定される。

#### 3-1-3 その他

性格不明の古墳時代土器集中遺構から出土した歯は、イノシシ又はシカと推定された。本遺跡の小字名との関係も、これらのシシはあるかもしれない。

### 3-2 須恵器胎土蛍光X線分析

ここで目標としたことは、2-066号遺構の須恵器大甕及び0-002号遺構の同瓶類など、まとめて出土した須恵器の産地を解明することであった。残念ながら上野内でこれまで11カ所判明している生産地の中で、窯単位の分析データがあるところは極めて少ない。

そのため、既存の産地データは数少ない表面採集破片資料によるものであり、本分析結果でも明らかのように決定的に産地特定するには至っていない。本遺跡の分析資料は、参考資料とした吉井町の古墳出土の大甕資料も含めて全体としてはまとまる傾向があり、概ねその産地は西部の諸窯のものに近いが、完全に特定することはできなかった。今後の産地データの蓄積に詳細は待ちたい。

しかし、にもかかわらず細部の形態には大きく差異がある点は興味深い。

ただし、0-002号遺構出土の中型甕(1077)である資料12は、唯一肉眼的にも班別できる混和材として輝石が入っており、他のものとは明らかに異なる産地ということになる。

### 3-3 プラント・オパール分析

古墳時代から近世に至る各水田・畠遺構で分析を行ったが、その中で菅谷石塚の浅間 As-C 混土下 B と正観寺西原02号遺構は、水田の可能性が否定された。特に前者は水田の可能性あるものとした発掘調査成果が否定されることになった。実際、改めて畦畔を見てみると、水利的な点からは理解しにくい検出内容であった。これは稲作の可能性があるとされた上面の榛名 Hr-FA 下の場合も同様である。

これに反して、小八木志志貝戸1区の畠では稲作の可能性が高いとされ、また浅間 As-B 下の場合は、いずれも濃厚な稲作の可能性が指摘された。特に小八木志志貝戸6区は乾田であり、周辺の井野屋敷前遺跡に湿地があったことと対照をなすことになる。

### 3-4 花粉分析

小八木志志貝戸6区では、水田雑草が検出されている。また12世紀初頭の周辺の植生は、落葉高木の(コナラ亜属、アカガシ亜属)を主体に針葉樹(スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科)と落葉広葉樹(クマシラ属-アサダ属)を混じえた森林であった。

### 3-5 樹種同定

古墳時代前期の竪穴2-080号に使われていた在の大半は落葉広葉樹クヌギ節であり、周辺の植生にあつたものとされている。

一方、中世・近世の木製品はスギが使われており、これは上記12世紀初頭の花粉分析成果とも関係して、古代末期頃以降用材材として針葉樹が対象になったことを表している。

### 3-6 補遺 弥生大型植物化石

弥生後期の土器中より、イネと共に栽培された可能性があるタゲ属が検出された。当時の植物栽培の広がりを示す資料の一つとなるだろう。

## 第4章 まとめと予察

## 4-1 中世墓地

### 1 調査概要

小八木志志貝戸遺跡2区では、集中して分布する中世墓群を検出した。遺体の一部が残るもの、遺体は全く残っていないが明らかな副葬品が出土したものを併せると30基（火葬跡1基を含む）になる。しかも、それらは全て2区南半部に集中しており、大部分は28×20mほどの範囲にまとまっている。そして墓どうしの重複はほとんど見られない。

このようにこの墓群は、かなり齊一的な考え方のもとに形成された墓地として考えられる。しかし、この2区に隣接する小八木志志貝戸4区の調査では、さらに多数の中世墓が確認されている。その数は、人骨を検出したものだけでも26基に達する。本報告で述べた2区の墓群では、30基の中で人骨が残っていたものは21基だったことを考えれば、4区に相当数の墓群が展開していることは確かである。そして2-032号遺構のように、4区境界にほとんど接する位置で確認したものもある。

半分以上の情報が調査中の4区に存在する以上、この墓地の全体像を理解するためには、ここで述べられることには自ずから大きな限界があることは否めない。ただ、2-032号遺構を除けば、他の墓は上記範囲の中にまとまっているため、墓地全体での北側部分の特徴を見出すことは可能である。

### 2 構造

調査時の検出状態から、次のように区分することができる。

石塔墓 3基 集石墓 4基 火葬跡 1基 土葬墓 22基

石塔墓は、五輪塔の各部が墓坑の上に見られたものである。しかし、いずれも五輪塔の各部は原位置ではなく、後世に動かされている。特に2-027号遺構の場合、1組以上の石塔各部位が礫といっしょに方形に積まれていた。また石塔を据えるための地業的な構造は、いずれでも見られなかった。そのため、この3基の墓坑の上にもともと五輪塔があったかについては、断言できない。なおこの中で2-027号遺構検出の骨は、焼骨だった。集石墓は、墓坑の上自然礫が積まれていたものである。中でも2-045号遺構は、方形掘り込みの壁に人頭大の礫を組んで全体を覆った状態で確認した。その他のものは拳大よりやや大きい程度ではあるが、やはり墓坑の上に礫が積まれていた。これらは、逆に本来石塔が上に建っていた可能性を想定することができる。

火葬跡(2-017号遺構)は焼土と焼骨を検出したもので、最北端に位置する。ここでは副葬品は全く見られず、掘り込みも皿状で他の箱形とは全く異なっている。

圧倒的多数を占めるのが、土葬墓である。これらは横臥膝抱え葬が可能な程度の小判形掘り方の土坑で、いずれも長軸を北に向けている。

全体としては北半部には土葬墓以外のものが多いが、石塔墓2-031号遺構は単独で南半部にあった。なお2-045号遺構・2-031号遺構などでは、細い篠竹が垂直に底に刺さった状態で確認したが、その意味は不詳である。

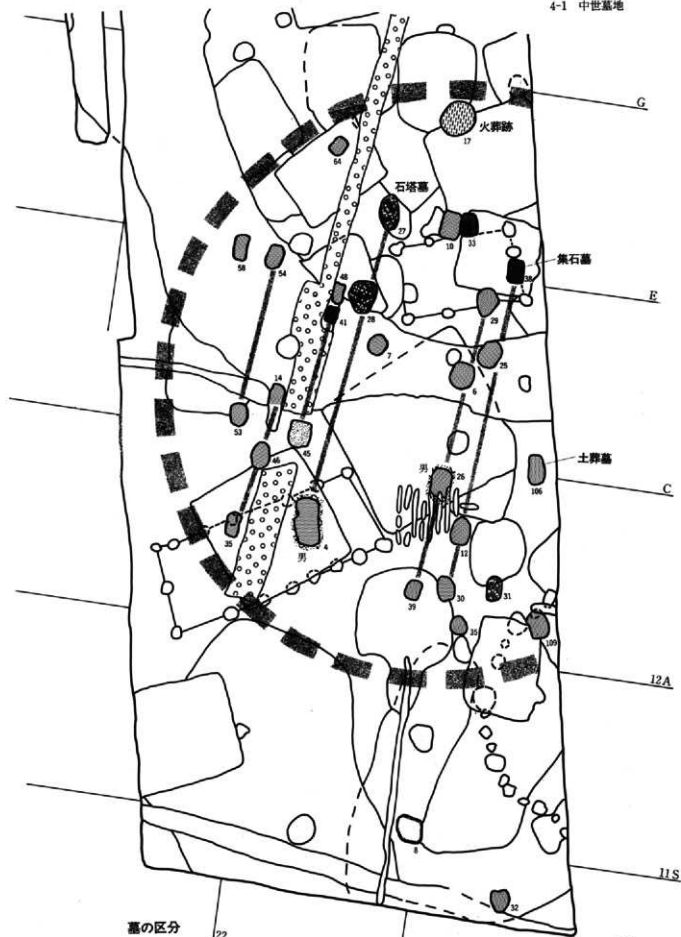
### 3 副葬品

共通する副葬品は、銅銭とかわらけ皿類である。

銅銭は、唐銭から明銭までの舶載銭で、墓坑からの出土は合計108枚である。火葬跡を除く単純平均は1墓坑当たり3.7枚になるが、内容的には唐宋銭77枚（金銭1枚含む）・明銭24枚・不明銭7枚となる。出土状態の組み合わせは銭種判明のみで見ると、唐宋銭のみ10基・唐宋銭+明銭13基・明銭のみ1基・非検出5基となる。

唐宋銭のみの中で4枚がまとまっていた2-010号遺構は、明銭1枚のみ出土した2-033号遺構と重複していた。最も新しい初葬年は2-038号遺構から出土した宣徳通宝の1433年で、他の明銭3枚・唐宋銭7枚と共伴した。

かわらけ皿類は、合計54枚が見られたが、2-014号遺構の2枚は同一個体の可能性があるため、53枚となる。単純平均では1墓当たり1.8枚である。



墓の区分

22

20

177

#### 第4章 まとめと予察

これを皿・片口と小皿に分けると、皿のみ10基・皿+片口0基・皿+片口+小皿3基・皿+小皿3基・片口+小皿0基・片口のみ2基・小皿のみ0基・非検出11基になる。出土した墓での平均は2.9枚で、基本的には皿を入れることが一般的だったようだ。片口は単独の器種ではなく、皿と同様に扱われている。非検出の場合も3基は、周辺での出土が見られた。

いずれも底部切り離し技法は、左回転糸切り無調整のものばかりである。器形を見ると、皿と片口は明らかに異なるが、区別し難いものもある。全体として焼成には、低火度酸化焰焼成であること以上に顕著な違いは見られない。小皿の多くは、かなり強い油煙痕が見られ、灯明具の転用と考えられる。皿には弱い油煙痕があるものも含まれるが、片口にはほぼ認められない。そのため器形の差は、用途の差として捉えた方が妥当であろう。ただ片口の出土は上述のように皿の代用的な感じであり、これを副葬専用と考えることは難しく、そのためかわりけは全て二次的な使用として副葬されたと言える。

他に例外的な副葬品として、2-045号遺構での刀子、2-058号遺構でのシカ角があった。

#### 4 被葬者

30基の中で、被葬者の特徴が分かる歯骨が出土したのは、21基である。これを性別で見ると、不明7体を除くと男女比は1:6となり、圧倒的に女性が多い。性別の判明した4区20基の資料(性別不明6体)を併せると、全体での男女比は7:10で、4区のみでは3:2である。

つまり、4区の性別はほぼ自然な状態に近いが、本報告の2区の場合女性墓域としてまとまっていることは、明らかである。

次に年齢(表では鑑定された幅の中で若い時期で区分した)を見ると、両区を併せた全体では壮年期を最大とし次に青年期が続くあり方で、特に不自然な感じはない。しかし性別不明を除く男女別では、青年期より若い女性の被葬者の割合が少ない。特に2区の女性は8割以上が壮年期となって特出している。

また歯の使用状況を見ると、ここでの壮年期女性7体と性別不明1体の切歯と第一小臼歯にかけて通常とは異なった異常あるいは過度の咬耗状態が認められた。そしてそれら8体の埋葬は、主に西側部分にまとまっていた傾向がある。さらに特殊な副葬品であるシカ角の出土した2-058号遺構の被葬者も、そこに含まれている。

#### 5 時期

冒頭で述べたように、2区で検出した大部分である29基は、まとまった範囲内(28×20m)にあり、平均すれば20㎡に1基となる。上面が大きく削平されており用水路攪乱もあるため、実際の数はいくらか多かったとも思われるが、墓坑底の痕跡はかなり明瞭に残っていた。そのため、本来の数が5割以上増えることは考えにくい。

そのことを考慮しながら全体の分布状況を考えてみると、まず墓どうしの重複は2-010号と2-033号しかなく、また近接も2-014号と2-048号に見られるのみである。重複とした前者も遺体のあった墓坑の中心部分はそれぞれ別個であり、程度の強い近接と考えた方がよいだろう。特に2-033号の被葬者は、ここでは例外的な思春期～青年期の女性であった。

つまり、本墓域の形成は、既存の墓坑の存在を常に意識したものであったことになる。また北端に火葬跡があり、その近くに石塔墓・集石墓がまとまる傾向にある。また各墓坑の位置関係を見ると、N-3~4-Eを主軸とする列状の配置を確認することができる。この主軸方向は、近世の区画溝である2-001号遺構や近世以来の用水路の走向と同一であり、墓地としての意識は残らないものの区画のみは近世まで影響を及ぼした。

そのため、この墓域は被葬者間に極めて一体性の強いものであって、また近世への多少の影響を及ぼしたことになる。一方、副葬品のあり方から考えると、はっきりと時期区分できるものは、唐宋銭のみを副葬する場合と明銭が加わる場合である。明銭のみが少ないことも特徴と言える。

以上を考えれば、14世紀から15世紀にかけて存在したとすることができる。

## 6 全体像への展望

冒頭に記したように、4区での検出状態が明らかにならなければ、この墓地の全容は不明である。その前提に立ちながら、この2区についてのこれまでの各検討項目をまとめると次のようになる。

- 1 2区のみで単独の墓域を形成
- 2 壮年期の女性を主体とする埋葬で、特殊な歯の使用者が多い
- 3 多数の土葬と少数の火葬・石塔造立が混在するが、全体として一体性がある
- 4 14～15世紀に形成

これに対し4区の墓域（南端部に離れた2-032号はそこに含めるべきだろう）については、現在2に関し異なった状況であることが分かっている。即ち、本遺跡の中世墓群は、周辺未調査部分も含めれば100基以上が集中していた可能性が考えられる大規模なものだが、その北側にあたるこの2区の墓域は、少なくとも上記のようになかなか特殊な区画として使われていたと考えることができる。

なお、4区との中間にあたる位置で検出した集石2-008号遺構は、墓地と関わる何らかの施設の地業と推定することもできる。

## 出土銭種別の墓一覧

番号	性格	位置	重複	歯性別	年齢	咬耗	唐宋銭	明銭	不明銭	皿	片口	小皿	備考
041	集石墓	12D21	06と近接	女	壮年		異常	0	0	0	2	0	0
017	火葬跡	12F20		なし	不明			0	0	0	0	0	焼土・焼骨
032	土葬墓	11R19		不明	壮年			0	0	0	0	0	0
030	土葬墓	12A20		なし	不明			0	0	0	5	0	1
055	土葬墓	12A22		女	壮年		過度	0	0	0	2	0	2
014	土葬墓	12C22	06と重複	なし	不明			0	0	0	2	0	0
053	土葬墓	12C22		不明	壮年?		異常	2	0	0	0	0	1枚は金銭
029	土葬墓	12D19		女	壮年			1	0	0	0	0	0
035	土葬墓	12A19		なし	不明			2	0	0	2	1	3
004	土葬墓	12A21		男	壮年～熟年			2	0	0	0	0	0
026	土葬墓	12B20		男	壮年			2	0	1	2	0	2
058	土葬墓	12D22		女	壮年		過度	2	0	0	2	1	1
046	土葬墓	12B22		なし	不明			3	0	2	2	0	0
031	石塔墓	12A19		不明	青年?			4	0	0	5	0	0
010	土葬墓	12E20	06と重複	なし	不明			4	0	0	2	0	0
048	土葬墓	12D21	06と近接	女	壮年～熟年前半		異常	7	0	1	0	0	0
033	集石墓	12E20	06と重複	女	思春期～青年			0	1	0	1	0	0
064	土葬墓	12F21		なし	不明			1	1	0	0	0	0
039	土葬墓	12A20		女	壮年		異常	2	1	0	0	0	0
007	土葬墓	12D21		女	壮年後半～熟年前半		過度	2	1	0	1	0	0
025	土葬墓	12D19		女	壮年			4	1	0	2	0	0
054	土葬墓	12D22		不明	壮年～熟年前半		異常	4	1	1	5	0	0
027	石塔墓	12E21		不明	壮年?			5	1	0	0	0	0
109	土葬墓	12A18		女	青年			5	1	0	0	1	0
045	集石墓	12B21		不明	青年～壮年			6	1	2	0	0	0
012	土葬墓	12B19		女	壮年			2	2	0	3	1	1
006	土葬墓	12C20	06と近接	女	壮年			4	2	0	0	0	0
106	土葬墓	12B19		不明	青年後半～壮年			4	3	0	1	0	0
028	石塔墓	12D21		なし	不明			2	4	0	0	1	0
038	集石墓	12E19		なし	不明			7	4	0	0	0	0
計								77	24	7	39	5	10

## 男女歯

	男2区	男4区	女2区	女4区	不明2区	不明4区	計
乳児期	0	0	0	0	0	1	1
幼年期	0	1	0	0	0	0	1
少年期	0	1	1	0	0	0	2
青年期	0	2	1	0	3	2	8
壮年期	2	8	10	6	4	4	34
熟年期	0	0	0	1	0	2	3
成人	0	0	0	1	0	14	15
不明	0	0	0	0	0	1	1
計	2	12	12	8	7	24	65

## 4-2 「あづま道」と東山道

本調査では、小八木志志貝戸遺跡6区と菅谷石塚遺跡でそれぞれ幹線道路遺構を検出した。直線距離で1km離れた両者の性格をまとめることから、古代・中世の幹線道路の問題を検討したい。

### 1 検出した幹線道路遺構の特徴

#### 1-1 小八木志志貝戸6-001号遺構

北から南南西方向に弧状(2.5×43m以上)に走る両側溝を持つ道路で、断面からはしだいに狭くなる4面の路面を確認。最下層の路面1は浅間As-B軽石を部分的に排除した状態で形成されている。出土遺物より路面2と3の境は17世紀前半頃と推定される。いずれの路面も低地部分になる南側ではあまり良好な硬化部分が少なく、側溝も確認が難しかった。路面3に伴う側溝は、最北端で西側溝のみであったが、樋暗渠により分水して東側溝を新たに設けていた。

路面幅は路面1の1.8mからそのまま拡張されて、2.5mの路面2になっている。その後何らかの自然災害の後形成された路面3は1.5mほどにせばまり、その補修面と思われる路面4も同様で、近代の字界路に繋がっている。

12世紀初頭の浅間山噴火直後に、軽石除去作業を伴って造成されているが、南東側の低地を避けるように弧状の走向をとっている。17世紀前半頃以前までの路面は幅広いものだったが、近世のその後継路は同じ位置を踏襲しながらも、狭くなっていた。

近世の地誌には、小八木村の南西側の大八木村と北東側の中尾村を通る「あづま道」と呼ばれる道があったことが記されているが、位置的にこの道路遺構がそれである可能性は高い。

#### 1-2 菅谷石塚01号道路

約N70°Eの走向の道路遺構(路面幅7.0~11.2m長24m以上)で、いずれの側溝も水流痕が明瞭であり、氾濫のために北側を拡張した可能性がある。調査時にはほとんど硬化面の検出ができなかったが、もともと存在していなかったかは不明である。時期的には浅間As-B軽石の降下時点で少なくとも側溝は完全に機能を失っていた。しかし同軽石降下直前にも、人の往来を示す足跡が多く残っていた。その時点まで側溝が補修されず排水ができない状態になりながらも、道路としての機能は存続していた。

この道路の創建年代を示す直接の資料は確認しえなかったが、南側溝中で出土した緑釉陶器線刻皿片1402を考えると、少なくとも9世紀代には存在していた可能性は高い。

これまで前橋市元総社町の上野国府推定地南端から上信国境の内山峠を結ぶN65°Eの線上周辺の7カ所の遺跡で古代の道路遺構が発見されている。これらは一応推定東山道とされているが、本道路遺構も路面幅が広く、走向が似ており、同様の時代であるため、広い意味ではそこに含まれるものと考えて良いだろう。

### 2 「あづま道」の問題点

「あづま道」の研究はまだ十分に発展しているとは言えないが、これまでの調査例ならびに問題点を検討してみた。

#### 2-1 近世の伝承と誤謬

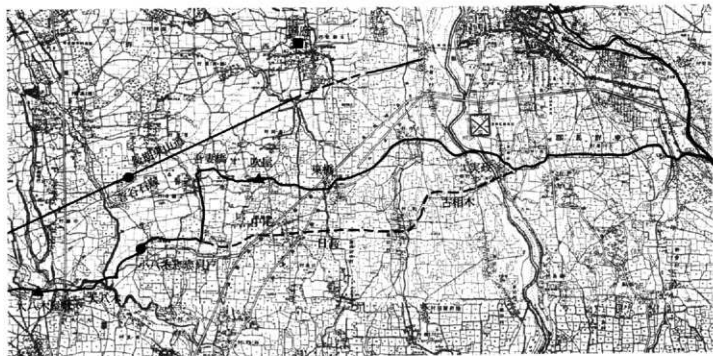
もともと「あづま道」は、文献にはほとんど残っていない。その存在を同時代に記録したのもとして、管見では唯一「夫木抄」(14世紀初頭)所収の次の和歌が取り上げられてきた。

あつまちのうまやうまやと数へつつ あふみの近くなるが嬉しき

東国から近江への道中を詠んだこの中の「あつまち」が、「東路」あるいは「東道」の音であることに大きな異論はないだろう。しかしこれだけでは、ルートは全く分からない。地域も東海道なのか東山道なのかははっきりとはしない。ただ畿内と東国を結ぶ幹線が、そのように呼ばれていたということだけである。

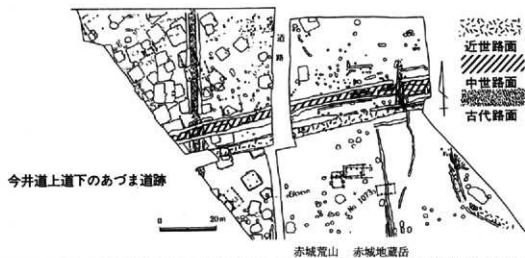
明確なそのルートが少なくとも上野において明らかにされたのは、富岡正忠の「上野名跡考」(文化6=1809





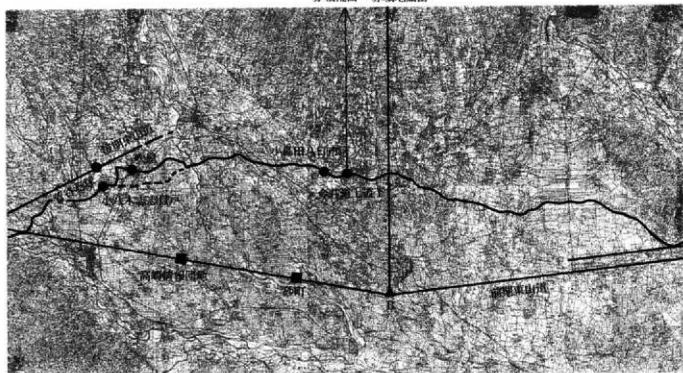
本遺跡群周辺のあづま道と東山道

明治初年迅速測図 (1/50,000) による



今井道上道下のあづま道跡

赤城荒山 赤城地蔵岳



あづま道と東山道

(1/200,000)

年)が最初である。地誌学者の正忠は、次のように記している。

からす川をわたりて、小橋・大八木・中尾・日高・古柏木より実政にわたりて、今に東道とよぶ  
 榛名山南東麓の平野部を南西の烏川から北西の現利根川に至る道が「東道」と呼ばれていたことを記しているが、さらに現利根川以東には小字名や近世の絵図・道標に「あづま道」名が少なからず残っている。現在知られている最古のものは、寛文11(1671)年の「笠懸野御新田絵図」であり、この道が17世紀中葉以前には存在していた可能性を示している。

現利根川以東ではこの道に沿って、義経伝説や牛疲劣死伝説などが濃密に残っている。

しかしここで注意を要するのは、富岡正忠は古代東山道の名残として「東道」の存在を指摘した点である。文献的には上記のようなあり方を示すものが古代の幹線道と同一であるとするには、当然多くの論証が必要である。だが、1983年の「歴史の道調査報告書 東山道」(群馬県教育委員会)に至るまで、「あづま道」と東山道がどのような関係にあるのかについて、明確な論議は見られなかった。

## 2-2 道路遺構としての特徴

現在までこの「あづま道」に関わる道路遺構及び関連遺構には、次のものがある。

- ア 今井道上道下遺跡(前橋市今井町)
- イ 小島田八日市遺跡(前橋市小島田町)
- ウ 吹屋遺跡(高崎市巾尾町)
- エ 大八木屋敷遺跡(高崎市大八木町)
- オ 中宿在家遺跡(安中市中宿)

路面が検出された道路遺構は、旧利根川流路左岸近くのAだけである。そこでは浅間 As-B 軽石そのものが最初の路面であり、その下には全く路面はなかった。両側溝を持つ形態は近世まで引き継がれるが、近世では平行して5mほど路面は移動していた。中世路面の片側溝はそのまま隣接する居館の境界となっており、この居館隣接部分だけが緩い弧状を描いていた。そして近世路面は、この居館の廃絶に伴って直線的に全体を繋いだ位置であった。中世の路面幅(側溝間)は最大4m弱だが、硬化面そのものはその半分程度であった。

ウでは、断面で側溝が確認されている。両側溝があり、ここでもその片方の掘り込みは、浅間 As-B 軽石層からなされている。現道下の路面そのものに調査は及んでいないが、両側溝の立ち上がりから、やはり約4mほどが計測される。硬化面の範囲は不明である。なお、この遺跡でも中世城館が確認されている。

イエオでは、推定現道に隣接して中世居館が検出されている。エは古代から連続した可能性のある居館だが、オは13・14世紀を中心とする堅固な防衛施設のない建物群である。ここから西は、碓氷川の流路とは異なって上野一宮の貫前神社に向かう「宮街道」が延びている。貫前神社は上信国境の各峠を越えるルートの結節点になった場所であり、この「宮街道」は「あづま道」の延長と考えられる。

以上をまとめると、両側溝を持ち路面幅は最大4mで、浅間 As-B 軽石降下直後に作道がなされている。また居館が隣接する場合が多く、走向は短区間でも弧状を描くことがある。なお、本遺跡の場合も、隣接地である5区の調査で居館が検出されていることを附記しておく。

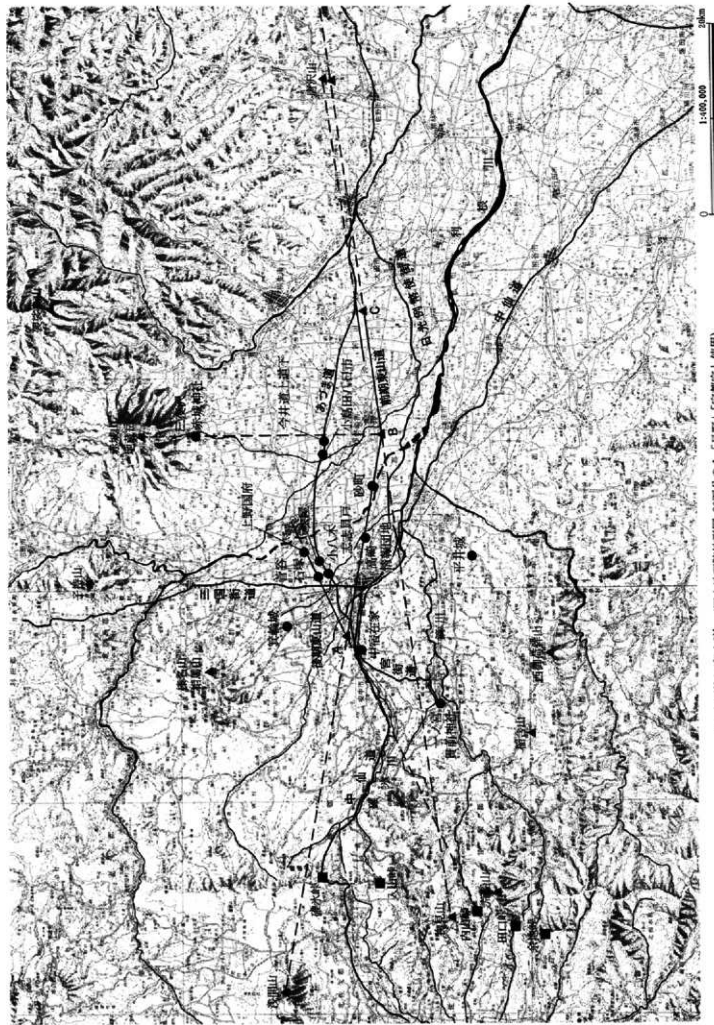
## 2-3 ルートとしての特徴

これまで現利根川の西では、富岡正忠の指摘にも関わらず近代初頭に収録された小字名には、「あづま道」に関連するものはほとんど残っておらず、また伝承も烏川までの間では伝わっていない。

しかし、『上野国郡村誌群馬郡』(明治10年代)の中には、次の関連地名が見られる。

- ア 正観寺村「吾妻橋」(高崎市正観寺町)
- イ 江田村「東橋」(前橋市江田町)
- ウ 古市村「東橋」(前橋市古市町)

ここで興味深いのはイの場合である。この橋は染谷川にかかる橋だが、実際の位置は集落の西に当たる。アの表記にも見られるように、これらはいずれも「あづま橋」と呼ばれていた可能性がある。明治20年代の「迅速測図」にこれらの位置を落として見ると、現利根川と井野川の間では前貫図のようなルートを推定すること



あづま道と東山道 (国土地理院地形図 20万分の1「奥野」「宇都宮」使用)

ができる。

この「あづま橋」ルートは、上述の宮岡正忠が指摘した中尾・日高・小相木を通るルートとは、別にならざるをえない。その中に吹屋遺跡があることを考えれば、このルートがより古い可能性が高い。そして両ルートの東の合流点が現利根川の渡しであった実政であり、現利根川への流路変遷は16世紀に起きたと推定されることから、このルート変化はその利根川の移動との関係が想定できる。

さらにいずれの場合も本遺跡の東側で合流することが推定される。これは、烏川を越えた板鼻そして碓氷川を越えた中宿という地形的な要地を目指すためには通過せざるをえないことと、低地部の縁辺に位置するという本遺跡地の立地の特異性も理由になっていたと考えられる。

全体として以上の各資料より復元されるルートは、丘陵地帯を通る「宮街道」部分はもちろん、平野部においても長距離間の直線的な傾向は認められない。上野を東西に横切り、平野部では榛名・赤城両山麓末端を通るという大きな流れはあるが、一貫した作道基準は認めにくい。数キロ程度の距離で隣接する既存の居館間を結び続けたと考えることが妥当だろう。

### 3 東山道の問題点

律令期の官道については、現在全国的に調査研究が進んでいる。上野を通っていたはずの東山道についてもその例外ではない。特に上野での東山道研究は、この20年間に大きな進歩があった。

すなわち、当初歴史地理学分野からその存在を指摘され本遺跡も関係している北側の群馬直線ルート（国府ルート）に加えて、南側の新田・佐位・那波郡を通るルート（牛堀・矢ノ原ルート）があったことが明確になってきた。さらに後者には500mの距離をもって北側にほぼ平行する下新田ルートも、少なくとも東部には存在していた。

#### 3-1 牛堀・矢ノ原ルート

牛堀・矢ノ原ルート及び下新田ルートについて、坂爪久純は次のように整理している。

このルートは東西两部分に分かれており、東側は境町十三宝塚遺跡から新田町上根遺跡を結ぶ約10kmの間で発見された7遺跡の路面の延長である。両側溝を持ち、側溝底の芯芯距離で幅は12.6～13.7mを測る。いずれでも路面硬化面は確認されており、存続期間は7世紀第3四半期～8世紀第2四半期と考えられている。走向は、N83°Eを測る。

西側は高崎市情報団地遺跡から玉村町砂町遺跡に至る少なくとも約6kmが、直線路として確実に存在していた。側溝底間芯芯距離は9～10.5mで、走向はN100°Eをとっている。路面の状態と存続期間は東側と同様で、東側とは旧利根川右岸の伊勢崎市葦塚あたりで結ばれることになる。

下新田ルートは、新田町下新田遺跡で発見された道路遺構で、両側溝を持ち芯芯距離は12.0mである。北側溝に接して轍状の跡を残す硬化面が検出されている。使用期間は、牛堀・矢ノ原ルートより長期間の可能性があると考えられている。

坂爪によれば牛堀・矢ノ原ルートは、宝亀2（771）年まで東山道に含まれていた武蔵への往復路で、下新田ルートは上野新田駅から下野足利駅を直接結ぶ「便道」の可能性が高いとしている。さらに次の点を指摘した。

7世紀第3四半期における上野での拠点地域である群馬郡の山王廃寺（前橋市）と佐位郡の上植木廃寺（伊勢崎市）からは、牛堀・矢ノ原ルートは距離的に離れていることが第一である。そして次に後述の国府ルートは9世紀後半以降の作道であるため、国府が設置された8世紀後半から約1世紀間については、未発見のルートが存在するという点である。

この牛堀・矢ノ原ルートの発見から、次の新しい問題点が考えられる。

東西两部分に分かれる意味については、作道の基準を考慮することが出発になるだろう。直線路を設定するには必ず遠望できる基準が必要であり、目立った山が最もふさわしい。それを考えると、西側部分の延長が上信国境山地で最も明瞭な浅間山であることは、はっきりしている。また東側部分の延長線は、内山峠北方の物見山にあたる。一方、東側部分の東延長線は、眺望の良い佐野市唐沢山山頂に当たっている。

そのため実際の作道は、少なくとも西側部分は東方向から視準した可能性が高い。また両部分の合流点と推定される地点(9)は、赤城山地蔵岳山頂の真南に当たっており、北14kmには最も古い赤城信仰地の三夜沢赤城神社が位置している。この地点が屈曲点になった理由は、この赤城山頂の真南であることが大きいだろう。そして、少なくともこの屈曲点と東側部分東端の新田町小金井当たり(10)に何らかの重要な施設があった可能性は高い。後者については、唐三彩陶枕が出土した境ヶ谷戸遺跡などが位置している。

しかし、上述の未発見ルートと国府創建地がどこかという大きな問題は、依然として未解決である。

### 3-2 国府ルート

本調査を含むこのルート上の道路遺構の発見は、次の通りである。

- ア 寺ノ内遺跡(高崎市) 路面幅約4m 浅間As-B降下で廃絶か
- イ 御風呂I遺跡(高崎市) 硬化面 路面幅4.6~5.2m 浅間As-B降下で移動か
- ウ 西下井出遺跡(群馬町) 硬化面 路面幅6.8~7.4m 浅間As-B降下後の路面
- エ 熊野堂遺跡(群馬町) 硬化面 路面幅1.6~4.0m 浅間As-B降下前後の3路面 9c以降14cにも存続
- オ 西浦南遺跡(群馬町) 路面幅4.4~4.8m 南側溝は浅間As-Bで埋没
- カ 福島飛地遺跡(群馬町) 硬化面 路面幅12m以下 浅間As-B降下後の路面
- キ 菅谷村前・正観寺遺跡(群馬町・高崎市) 硬化面 路面幅5m 浅間As-B降下前後の3路面
- ク 菅谷高貝戸遺跡(群馬町) 路面幅不明 推定北側溝は9世紀後半以後

アからカまでが本調査菅谷石塚遺跡の西側に当たり、キ、クは東側になる。西端のアから路面検出がなされたが報告書に記載のない鳥羽遺跡(前橋市)まで約5kmの間に、走向N64°Eほどの上記各遺跡での検出がなされた。

本調査も含めたこれらの発見は、次のようにまとめることができる。

- 1 両側溝を持ち、路面幅は1.6~7.4m(平均4~5m)か
- 2 9世紀前半以前には存在していない
- 3 浅間As-B軽石降下後も移動して少なくとも14世紀まで存続
- 4 「路」字墨書土師器を持つ9世紀集落が沿道にある
- 5 直線路地割りは国府推定地を越え現利根川右岸まで続く

もちろん、同一の道路の姿であることは間違いないが、基本的にはほぼ完全な直線路であることは確かである。その作道は9世紀中頃であり、浅間As-B軽石降下災害による路線移動(後述)あったものの中世まで使用が継続していた可能性はある。硬化面の残存状態が良く基本的に両側溝を持つこと、そして路面幅が広いことから、幹線道路と考えることは妥当である。

そのため、この直線路は延喜式段階の東山道と考えると良いものだろう。しかし、前橋市元総社町の国府推定地との関係は簡単ではない。5の延長地割りの存在が当初のルートを示すとすれば、この国府の位置はルート設定にあたって二次的な意味になる。これは、ここに国府がいつから存在したのかという問題にもかかわる。しかし、作道の基準となる視準方向を考えた時、古くから指摘されているように、この走向は明らかに同国府推定地から上信国境で最も目立つ鞍部である内山峠を見据えたものであることは確かである。

元総社国府から真南に下る「国府道」ルートも地割りとして想定されているが、ただ国府ルート直線路は地形的に考えても、東はそのまま延びて少なくとも旧利根川右岸まで至るのは自然である。一方、西側は少なくとも碓氷川沿いの要衝板鼻まで続いていたことも容易に考えられ、とすると板鼻東側の高崎市若田あたり(11)で上記牛畑・矢ノ原ルート西側と合流することになる。

現在まで不明である8世紀後半から9世紀前半のルートの問題とこの合流の可能性がどのような関係にあるのか、残念ながら答えはまだない。

## 4 小結—東山道から「あづま道」への変化

「あづま道」は基本的に、中世において上野を東西方向に横切る幹線道である。上述のようにその成立が1108年の浅間山噴火以前に遡ることは、これまでの発掘調査成果から可能性は非常に乏しい。その大災害の復興の中で、居館居住者たちがそれぞれの隣接地までを造り上げたものが結びついて生まれた幹線道である。曲折して居館どうしを繋いでいるルートのあり方は、そのような作道の性格をはっきりと示している。

また上野ではこの浅間山噴火の時点で国府は衰退していた可能性が高く、その中世での後身である「府中」的な権力が極めて弱体であったこともあって、「あづま道」のルートは元総社国府の跡地を通過しなかった。

しかし、そのような全体状況の中で「国府ルート」が中世においても存在していたことは、何を意味するのか。国府跡地に存続していた総社長尾氏の拠点蒼海城に発展する在庁官人の勢力がなお地域的な意味を持っていたのか、あるいは上野中世神道の拠点の一つであった総社神社の役割がある程度の規模があったのかということになる。または旧利根川の水運に繋がる物流が存在していたのか。

そのような状況を見る中で、本調査の菅谷石塚1号道路で検出した足跡の持つ意味は、興味深いものだろう。既述のように、それが残ったのは、浅間山噴火直前の時点において、少なくともこの場所において東山道「国府ルート」は排水機能を失っていたが、まだ通行がそれなりにあったことになる。集中的な道路の維持管理はすでに長くなされないながら、まだある程度の往来がその大災害直前まで存在していたわけである。

「あづま道」という新たな幹線道を、浅間山大噴火からの復興として新興の居館居住者たちが作り上げようとしていた少し前、少なくとも旧利根川に至るような国府を通る従来からの衰退していた道を歩く人々はなお見られたことになる。もちろん、近世まで道路として残った「あづま道」よりもずっと早く廃道となってしまったのだが。

## 参考文献

- 坂井 隆, 1984: 「道路状遺構と推定東山道について」『熊野堂遺跡(1)』, 群埋文  
 坂井 隆, 1989: 「東山道・あづま道を中心とする道路遺構の考古学的考察」『研究紀要』6, 群埋文  
 坂井 隆, 1997: 「中宿在家遺跡の中近世」『中宿在家遺跡・上豊岡一里塚遺跡』, 群埋文  
 坂井 隆, 1999: 「あづま道、上野のポスト東山道」『発掘された中世古道』2, 中世みちの研究会  
 坂爪久純, 1997: 「上野国の東山道駅路」『古代文化』49-8  
 中里正憲, 1999: 「砂町遺跡」『平成11年度調査遺跡発表会』, 群埋文

## 4-3 獣骨歯埋納

今回の調査では動物遺体（骨角製品を除く）について、表のように35例を検出した。種類別の内訳は次の通りである。

牛	歯	20例・足跡	1例
馬	歯	6例	牛又は馬 骨 1例
猪	歯	1例	
鹿	角	1例	鹿又は猪 骨 2例
不明	歯	1例・骨	2例

これらについて時代ごとに簡単に整理してみたい。

## 1 中世

菅谷石塚遺跡02号道路	馬歯	1例
小八木志志貝戸遺跡 2-058号遺構	鹿角	1例
2-092号遺構	馬歯	2例

## 2 古代

菅谷石塚遺跡浅間 As-B 下水田	牛足跡	1例
小八木志志貝戸遺跡 0-005号遺構	牛歯	2例
0-006号遺構	牛歯	1例
0-008号遺構	牛歯	1例
2-108号遺構	猪歯	1例

## 3 古墳時代

小八木志志貝戸遺跡 0-001号遺構	牛歯	12例
	馬歯	2例
	牛又は馬歯	1例
	不明歯骨	2例
同周辺	牛馬歯	各1例
0-002号遺構	牛歯	3例
2-105号遺構	鹿又は猪骨	2例
	不明骨	1例

牛馬歯は、古墳時代後期の湧水関連遺構である小八木志志貝戸 0-001・0-002号遺構に集中して見られ、特に牛歯が多い。続いてそれらと関連する古代初頭の水路遺構での出土がある。これらは、何らかの共通する祭祀行為の跡であろう。中世道路の菅谷石塚 2号道路や小八木志志貝戸の溝 2-092号遺構の馬歯は、それら古い時期の行為の延長の可能性が高い。いずれも死獣から抜いた歯を使用したと思われる。

古代末期水田にあった牛足跡は、当然耕作との関係が妥当である。

鹿猪は、まず古墳時代後期の土器集中である小八木志志貝戸 2-105号遺構中に焼骨片として見られた。この性格ははっきりとは分らない。猪幼獣歯が出土した推定古代の 2-108号遺構は、猪幼獣埋納坑と考えられる。さらに中世墓 2-058号での鹿角は、位置から義足使用の可能性も考えられる。

鹿猪（シシ）の使用は牛馬歯とはやや異なって、やや非祭祀的である。これらの遺構は小八木志志貝戸の南端部あたりに位置しているが、何らかの関係があるかもしれない。

獣骨歯		番号	遺構	種類	部位	時代	時期	備考
4086	SI 2道路	馬	歯	中世		12c	5歳馬 在来馬	
4087	As-B 下水田	牛	足跡	古代		7c	成牛	
4044	0-001	牛	歯	古墳		7c	老牛	
4045	0-001	牛	歯	古墳		7c	成牛	
4046	0-001	牛	歯	古墳		7c	成牛	
4047	0-001	牛	歯	古墳		7c	成牛	
4048	0-001	牛	歯	古墳		7c	成牛	
4049	0-001	牛	歯	古墳		7c		
4050	0-001	牛	歯	古墳		7c		
4051	0-001	牛	歯	古墳		7c	成牛	
4055	0-001	牛	歯	古墳		7c	老牛	
4056	0-001	牛	歯	古墳		7c	成牛	
4057	0-001	牛	歯	古墳		7c	成牛	
4059	0-001	牛	歯	古墳		7c	若い成牛	
4053	0-001	馬	歯	古墳		7c	牡馬	
4060	0-001	馬	歯	古墳		7c	牡馬	
4058	0-001	牛?馬?	骨	古墳		7c		
4052	0-001	不明	歯	古墳		7c		
4054	0-001	不明	骨	古墳		7c		
4069	14K31 K	牛	歯	古墳?		?	成牛	
4068	14K31 K	馬	歯	古墳?		?	幼馬	
4061	0-002	牛	歯	古墳		7c	若い成牛	
4062	0-002	牛	歯	古墳		7c	成牛	
4063	0-002	牛	歯	古墳		7c	成牛	
4064	0-005	牛	歯	古代		?	成牛	
4065	0-005	牛	歯	古代		?	若い成牛	
4066	0-006	牛	歯	古代?		?	若い成牛	
4067	0-008	牛	歯	古代		?	若い成牛	
4039	2-058	鹿	角	中世		15c	幹部	
4070	2-092	馬	歯	中世		?		
4071	2-092	馬	歯	中世		?	牡馬	
4072	2-105	鹿?猪?	骨	古墳		7c?	焼骨	
4073	2-105	鹿?猪?	骨	古墳		7c?	焼骨	
4074	2-105	不明	骨	古墳		7c?	焼骨	
4075	2-108	猪	歯	古代?		?	2か月獣	

## 4-4 小八木志志貝戸遺跡出土の須恵器

酒井清治(駒澤大学)

## はじめに

小八木志志貝戸遺跡出土須恵器のほとんどは甕類であり、形態・色調・焼成・胎土から複数の窯から供給されていることが想定される。最も多く出土する2-066号遺構でも同様で、大甕・中甕・小甕を見て各々様々である。現在須恵器の甕類の編年はおおよそ分かるもの、在地産の変遷についていまだ不明確である。小八木志志貝戸遺跡の2-066号遺構等出土須恵器(以下4桁太字番号)の年代的位置づけ、産地等について考えてみる。

## 1 口頸部の形態と文様の特徴

2-066号遺構の甕類は、1001~1004・1006~1008が大甕、1005・1020が中甕、1009~1013が小甕になる。部位の説明については、頸部の文様が施される部分を口頸部、それに続く上方の縁帯部分を口縁部、口縁部の先端を口唇として述べていく。

大甕・中甕はほとんどの口頸部は外反して大きく開くが、1004だけは直立気味に立ち上がり、口頸部上半部で大きく開く。また、大甕の口頸部の文様は3段の波状文が1003・1006・1007・1008に見られ、1005は3段の波状文の下段に2段の刺突文を巡らす。4段の波状文は1004だけである。いずれも波状文の各段の区画線は沈線であるが、1008だけは2~3本を一単位とする沈線で区画する。

1001と1002は波状文を施さず、1001は縦カキ目のの間隔を開けて3段の横刷毛目(縦カキ目は、埴輪の刷毛目と同様であるが、須恵器成形技法で従来から使用するカキ目とした。また、横刷毛目は年輪の痕跡が薄いため刷毛目と呼称したが、いずれも小口状工具であり、口頸部施文で工具を使い分けている。)を波状文の代わりに巡らし、各段の横刷毛目の上下を沈線で区画する。また、この1001は口頸部内面上半部に4段のカキ目を巡らせている。1002は横刷毛目をお互い接して4段ほど施す。1020の中甕だけは口頸部が短頸で、頸部中位に沈線を巡らし、上段に波状文を施す。小甕は1009に1段の波状文が見られるが、他は無文である。

大甕・中甕の口縁部の形態は様々で、大きく分けて口縁端面を平坦化する1001・1002があるが、前者は口唇部内面もわずかに撫でて平坦面をつくる。古墳時代からの伝統的な口縁下部に一条の凹線を巡らす1003・1007・1008があるが、1003は口縁内面に広く平坦面を作り、口唇が尖る。また、口縁下段に一条の凹線を巡らし、口縁が上方に立ち上がる1004、方形化して口唇が尖る1005、口縁が幅広化して口唇が内灣する1006がある。

小甕の口縁部形態は口縁下段に沈線を巡らす1009・1010・1012があるが、内面は1010が平坦化し、1012は窪む。1011は口縁を折り返し、口唇が丸くなる当地域に類例のない口縁である。

## 2 技法の特徴

北関東型須恵器の特色である頸部に補強帯を持つ大甕は1005と1006の2点だけで、補強帯は1005が頸部接合部やや上方にあり、1006も扁平となり補強帯の意味を成していない。いずれも大甕の胴部と頸部は別作りで、胴部の上に口頸部を乗せ、内外から粘土で補強する。1004を見ると、接合時に口頸部最下段の波状文をナゲ消すことから、接合以前に口頸部の波状文は施文されている。

叩き目はいずれも平行叩きであるが、1002は浅い平行文、1003・1004・1012は木目が浮き出て擬似格子文となる。1011は平行文に二本の平行線を直行させた、類例のほとんどない叩き目文である。平行叩きは平行の目が縦方向に叩かれ、底部においては乱打されており古墳時代にこの地域特有の叩きである。しかし、小甕1010は平行の目が斜行して叩かれている。

内面の当て目は同心円文あるいは青海波文であるが、1001と1010・1012は青海波に直行するように一本の直線を加える当て具文である。当て具文を見ると大甕は1001が7段、1002と1003は6段、小甕は1010が3段、1011



と1013が4段の当て具文の変化が見られ、積み上げの段階ごとの叩き締めによると考えられる。大甕胴部最上部の口頸部接合前の擬似口縁は、当て目の弧が上を向いており、古墳時代に通用である。小甕1010・1012、他の遺構では1092・1096の弧は左を向いている。これは外面の平行叩きが1012は斜め、1092・1096は横方向であることと関連し、叩き位置の違いであろう。

底部の当て目はいずれも成形時の当て目のあとに施されていることから、当て具で丸底に叩き出した時の当て目であろう。その当て目は弧を左に向ける例が多いが、1001・1004は中央をナデている。また、叩き出しの際の底部の叩きは底部を中心に巡るが、1010は成形時の叩きの弧と、逆にした底部叩き出しの叩きの弧が胴部中位で交差する。なお、大甕は底部に手が届く範囲を考慮すると、口頸部と胴部を接合する前に底部叩き出しを行ったと推測できる。0-002号遺構の1091の甕は、成形時の当て具と底部叩き出しの当て具が違うことから、詳細に観察すれば製作時の叩き具等の違いも確認できる可能性がある。

1013だけは胴部に回転方向を変えて施されたカキ目のラセン文が回り、計13から14段確認できる。

### 3 胎土・焼成・色調

文様・技法も含めて胎土・焼成・色調から同一窯跡で生産されたと推定しうる製品は2-066号遺構にはないため、大きく括り3類に分けた。

- 1類—砂粒は少なく灰色系で、焼成良好な1001と1005および1010は類似する。また、1007は多孔質、1008は黒色微砂粒を含むもの共通する。
- 2類—白色・黒色粒を含み灰白色、焼成堅緻で自然釉が掛かり光沢を持ち、窯壁を付着する1003・1006・1012が類似する。
- 3類—白色粒子を含み灰黒色で、未融化的白色自然釉の掛かる1004・1009は類似する。1002・1011については、砂粒少なく叩きが浅い特徴を持つものの分類は難しい。

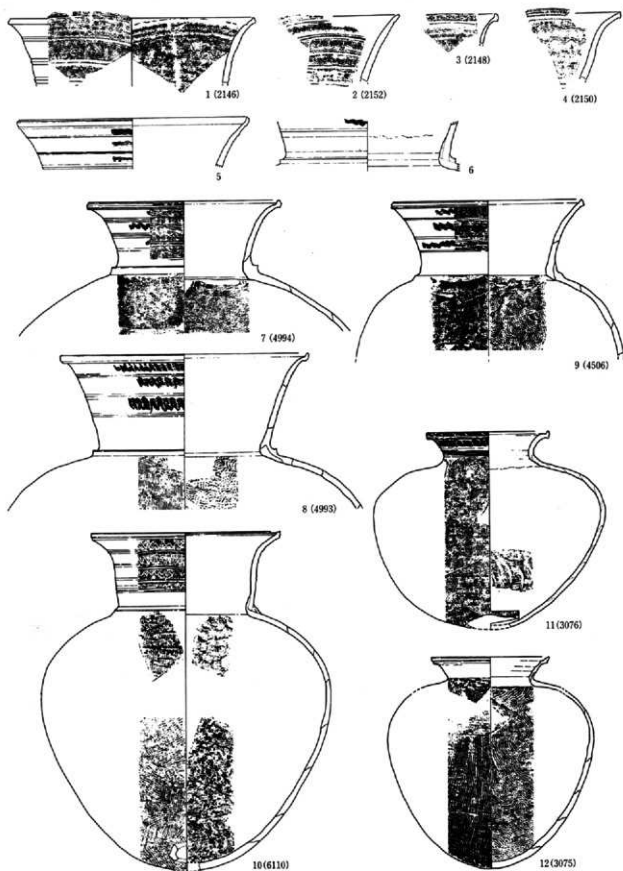
### 4 時期について

時期判定可能な古墳あるいは窯跡出土資料と比較してみよう。6世紀第3四半期～第4四半期といわれる綿貫観音山古墳、6世紀末～7世紀初頭といわれる八幡観音塚古墳、7世紀前半の奥原古墳群の須恵器群と比較検討してみる。参考資料として上野系譜を引く7世紀初頭の埼玉県寄居町末野3号窯と、その供給先である埼玉古墳群中の山古墳を加えてみる。

窯類の変遷については各地で違いがあり、群馬においては筆者は北関東型あるいは関東型と呼称するように、補強帯を持つこと、口縁部と口頸内面に波状文を持つもの、斜格子叩きと「の」の字の当て目の存在などを指摘したが、口縁下に沈線をも1本入れ、口頸部に3・4段の波状文を施す、古式な形態を長く保持する特徴も持っている。

綿貫観音山古墳の石室からは、口頸部に2段、口縁部に1段、口頸部内面1段の波状文を持つ長頸の中甕1例と、口頸部に2段、口縁部1段の波状文を持つ中甕2例が出土する。いずれも文様区画線は沈線である。墳丘出土の大甕の口頸部波状文は、3段が主体で1例だけ4段施される。波状文の文様区画線はほとんどが上下2本の沈線により突線を作り出すが、沈線1本の区画線(第1図2と2153、4桁の番号は綿貫観音山古墳報告書の土器番号)も見られ、3段の波状文だけで区画線が見られない例(第1図4)もあり、また、縦カキ目の波状文を施す(2157・2186)新しい技法がすでに出現しており、伝統的な技法が崩れ始めている。さらに口縁部の形態も伝統的な形態が主体で変化が少ないものの、肥厚する例(第1図3)がすでに出現している。

それに続く八幡観音塚古墳の甕は1例だけであるが、肩が張り綿貫観音山古墳の系譜を引く中甕である。その系譜を引く窯類は奥原古墳群に多く見られる。奥原古墳群は古墳築造と須恵器の年代が必ずしも一致しないため、須恵器の甕の変遷から大まかに古いものを奥原I期、やや新しい傾向のものを奥原II期として述べていく。奥原I期は14・15・30・37・45・49墳に見られる。奥原II期は11・13・27・50・53・60・61号墳があり、奥原3号墳はさらに新しいであろう。



第1図 變類比較資料(1)(3)

1～4 錦貫観音山古墳 5～6 埼玉中の山古墳 7～12 奥原古墳群 (四桁の番号は報告書土器番号)

まず、奥原Ⅰ期の中変類を見ると、縮貫観音山古墳と同様口縁部に波状文を巡らす、短頸の中変が30号墳(3074と第1図11、奥原資料については4桁の報告書土器番号の頭二桁は古墳番号)から出土する。30号墳の中変類は、口頸部中段を突線あるいは沈線によって区画し、1段あるいは2段の波状文を施すが、無文も出土する。この古墳では7世紀前半代の東海西部産の大甕(3077)と長頸瓶(3069)が共伴する。奥原古墳群で中変の口頸部中に区画線を入れ波状文を施す例(第1図11)は、15・37・45・49・53号墳などに見られるが、短頸化による頸部無文の中変(第1図12)が共伴する。奥原Ⅱ期を含めて中変の変遷を見ると、Ⅱ期にも頸部区画線と波状文を持つ例は存在するものの、無文が多くなること、刺突文(第2図8)が見られること、口縁部形態が肥厚化、方形化、長大化、あるいは口縁折返しなど変化に富んでくる。また、焼成や胎土、叩き方も各種で、窯跡群の増加が想定できる。

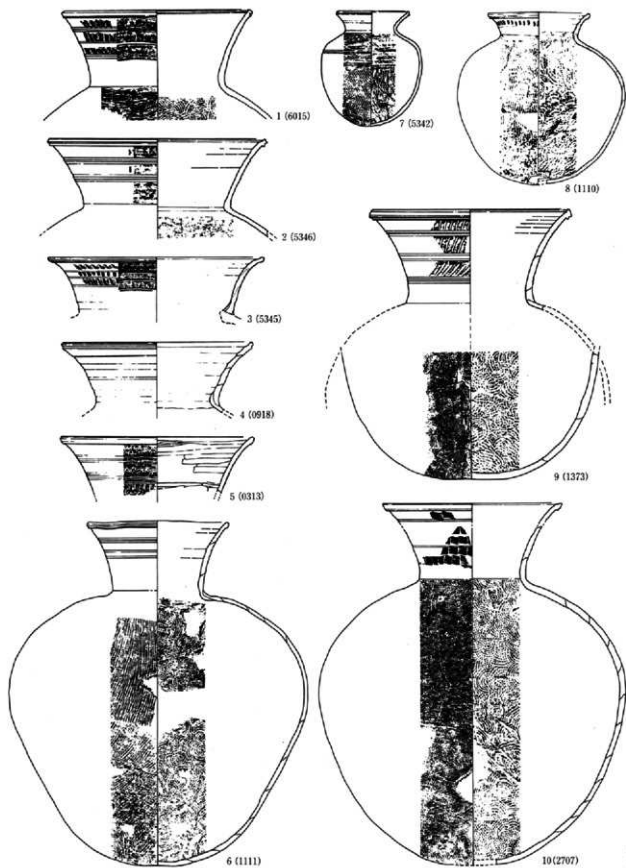
この点は大甕も同様で、奥原Ⅰ期の大甕(第1図7~9)を見ると、補強帯を持ち区画線を入れて3段の波状文を施し、いずれも補強帯はその役割を保つ。この時期の頸部の文様区画線は、上下2本の沈線により突線を作り出す例(第1図8)が多い。しかし、1本の沈線で区画される例(第1図9)や、口縁部に波状文を入れ、頸部に縦かき目を施しながら、文様区画線が2本の沈線でお互い離れる例(第1図7)など新しい傾向も見られるようになる。

奥原Ⅱ期の大甕(0313~0318・1111・1373・2707・5023・5345・5346・6015・6110・6447)は、補強帯変が2例(5023と第1図10)だけで、その補強帯も低くなっている。この補強帯を持つ変は、頸部に4段の波状文を施すものの、波状文の工具は幅が狭く、歯面も太くなる。また、刺突文(0314と第2図2・3)や罫描き斜行文(第2図9)、無文(0316・5347と第2図4・6)が出現し、頸部の文様区画線は雑になり、お互いや離れる2~3本の沈線を単位とする(第2図5)、さらに新しい傾向が見られる。口縁部についても端面下位に沈線を入れるもの、口唇部の内面に平坦面をつくるもの(第1図10・第2図10)、口縁端面の沈線が太くなり凹線となるもの(0314・0317および第2図2・4・9)、方形化するもの(第2図1・5・6)など新しい傾向が見られる。

このように甕類の変遷は補強帯の退化、消滅、頸部波状文の粗雑化と刺突文の出現、無文への変化、頸部文様区画線の沈線化と、区画線が複雑化しそれぞれの間隔が開くこと、口縁部の端面の沈線が凹線に代わり、口縁部が肥厚化、方形化することなどである。

小八木志員戸遺跡の甕類は、口縁部の形態や口頸部の文様の特徴だけに注目して類例を探してみると、1001は奥原49号墳4999、末野窯跡群灰原3(報告書第167図101)にある。1002は縮貫観音山古墳(第1図4)に、1003は奥原2702、1004は縮貫観音山古墳の石室出土甕類や奥原4996・5023・5343・5347に類似する。1005は奥原5345・5346、1006は埼玉中の山古墳(第1図5)、1007は縮貫観音山古墳(第1図2)に類似する。1008は奥原0311・0314に似るものの、奥原例が口縁下位に沈線が1本であるのに対して、1008は2本入ることと口唇内面に平坦面を作る違いがある。1010は奥原1109・4502・5348や5342(第2図7)に似るものの、1010は口唇内面に平坦面を持つ。頸部の文様においては無文の1001が奥原1111(第2図6)に、波状文と刺突文の組み合わせの1005は奥原5345(第2図3)に、文様区画線が複雑化する1008は奥原0313(第2図5)に見られ、波状文の歯面が太くなる1006は奥原5023・6110(第1図10)に類似する。

このように口縁部、口頸部の特徴からは、小八木志員戸遺跡の須恵器は、縮貫観音山古墳、奥原古墳群、末野3号窯、埼玉中の山古墳に類例が求められる。しかし、縮貫観音山古墳と比較するとすべてが新しい傾向にある。また埼玉中の山古墳およびその供給窯跡である末野3号窯と比較しても、幅広化した口縁や口唇部内面の平坦化した共通点を持つものの、それよりもまだ新しい傾向がある。小八木志員戸遺跡の甕類は、補強帯が退化しており、頸部文様区画線がいずれも沈線であり、1008のように複雑化しそれぞれの間隔が開くこと、1005の刺突文や1001・1002のように無文が出現すること、1006のように波状文の太い例が出現すること、1003・1008・1010のように口唇部内面が平坦化することなどから、奥原Ⅱ期に平行するおよそ7世紀第2四半期を中心とする時期と想定できよう。



第2図 壺類比較資料(2)(シイ)  
奥原古墳群 (四桁の番号は報告書土器番号)

## 5 産地

前述した胎土等の分類で分けた1～3類のうち、1001と1005は類似し、奥原3071・4506・4999も似ている。1007は奥原2707・6015に似ている。また、1001・1010・1012の青海波文当て目に直行するように一本の直線が彫られた文様が、奥原6107にも出土し、離れた末野窯跡群（『末野II』p.251-50～54）にも見られる。おそらく、小八木志志貝戸遺跡の須恵器の多くは奥原古墳群の須恵器と同じ窯跡群で焼成した可能性がある。窯甎の付着や歪みを持つ資料からも、利根川西岸地域の乗附を中心とした、秋間・吉井の窯跡群が該当しようが、小八木志志貝戸遺跡の須恵器の様相が様々であるため、明確に個々の資料をあてることができない。1011は、口縁部の形態、叩き目文などから関東産でないと考えられるが、産地は不明である。

群馬をはじめ関東においては古墳の墳丘に大甕を据え置く祭祀が一般的に行われたが、6世紀代は窯跡群が少ないため、群馬においては特定の窯跡群から供給されている。6世紀後半代に盛んに操業された、たとえば太田市金山窯跡群などは7世紀に至り規模を縮小しており、各地に中小の窯跡群が操業を開始し、それまで特色を保った北関東須恵器は、西からの新しい器形、技法を受け入れ、複雑化していった。小八木志志貝戸遺跡の須恵器は、そのような新しい様相を取り入れ、利根川西岸の高崎を中心とした地域で増加し始めた、複数の窯跡群から供給された大甕・中甕・小甕類と考えられる。

## 引用参考文献

- 群埋文, 1998: 『竊貫観音山古墳Ⅰ』  
 群埋文, 1983: 『奥原古墳群』  
 埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1998: 『末野遺跡Ⅰ』  
 埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1999: 『末野遺跡Ⅱ』  
 埼玉県教育委員会, 1989: 『奥の山古墳 瓦塚古墳 中の山古墳』  
 群馬県, 1981: 『群馬県史資料編3 原始古代3 古墳』

## 4-5 県内の古墳出土の大甕について

入 沢 雪 絵 (吉井町郷土資料館)

## はじめに

前章で報告した通り、2-066号遺構からは13個体の須恵器大甕、中甕<sup>9)</sup>が破砕された状態で検出された。これは出土した総個体数もさることながら、周堀底面直上でチップ状になるまで破砕されたその出土状況も特異である。遺構からは石室石材及び瓦石など河原石を含む石材の検出はなかったものの、須恵器大甕片を出土する円形の周堀状を呈す遺構形状から古墳跡であったと考えられる。

本文では県内の主要な大甕出土の古墳事例をとり上げ、その地域性と出土位置についてまとめ、2-066号遺構出土の大甕について検討を加えてみたい。

## 1 古墳出土の大甕の事例

古墳から須恵器大甕片が出土する事例は、後・終末期古墳の出土遺物に普遍的に甕があることから、その出土数は計り知れない。しかし器形が大型であることに起因し、復元が充たされず大甕の形状が不明な例や、あるいは最初から復元が試みられない例も多く、出土数に比して大甕の全容が知れる資料は少ない。従ってここで扱う大甕出土事例は、出土位置と大甕の形状などが判明する良好な資料を挙げざるを得なかった。以下、主な出土事例について遺構と大甕の概略を順を追って紹介してみたい。

1 五目牛5号古墳 (総覧記載漏れ)<sup>10)</sup>

(第1図-①)

赤堀町五目牛に位置する。墳丘は周堀を含めると約25mの方墳と記述される。石室は全長5.10mを測り、両袖型の自然石乱石積みである。須恵器甕は前庭部から出土している。本墳の前庭部は袖端部分のみに石積みが施され、その前面を掘り込むことによって前庭部を区画するものである。その中央部はかなり深く、石室開口部との比高差が1mも達し、ここから須恵器甕、長頸壺、提瓶、有蓋短頸壺と蓋、土師器坏が出土している。甕の形状は器高56.5cm、口径32.8cmの中甕で、頸部施文帯は1条沈線で区画した上下に櫛歯状工具による列点文をめぐらせている。体部外面は平行タキ調整である。また出土した有蓋短頸壺の蓋は上野型を呈す特徴から、8世紀前半までの墓前祭祀の下限が求められる。

2 五目牛29号古墳 (総覧記載漏れ)<sup>11)</sup>

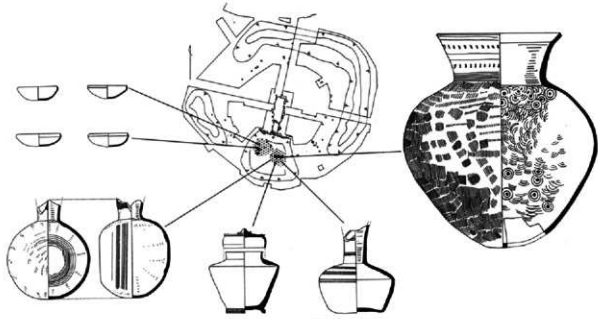
(第1図-②)

赤堀町八幡に位置する。墳丘は円墳で、規模は周堀を含め直径約25mを測る。石室は自然石乱石積みの無袖型で、全長3.52mである。石室内からの出土土器は、玄室東壁際から須恵器提瓶1点、玄室西壁際から須恵器甕2点がある。須恵器甕は、石室開口部より東側埴輪列内側から、土師器坏3点とともに出土している。甕の破片は広範囲に散乱せず、甕底部が据え置かれた状態で壊れ破片が集中する出土状況で、この点から出土位置に据え置かれていた状況が推測される。甕は器高46cm、口径26cmで小甕の部類である。頸部から口縁までは短く、頸部施文帯には2条沈線による擬似帯1条によって2区画の施文帯を作り、上下とも2条の波状文を施し、また内面にも1条の波状文が認められる。体部外面は平行タキ調整である。なお本墳の築造年代は、墳丘に樹立された埴輪や玄室内出土の須恵器甕や提瓶の標相から、MT15段階、6世紀前半と考えられる。

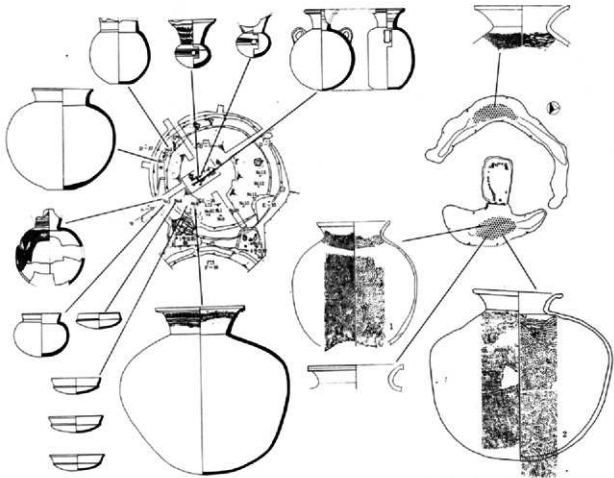
3 荒砥二之壠遺跡第2号墳 (総覧記載漏れ)<sup>12)</sup>

(第1図-③)

前橋市飯土井町に位置する。墳丘は円墳で、周堀を含めた規模は約25mを測る。石室は残存状況が悪く形状は不明であるが、規模は石室根石から約7m程と考えられる。須恵器甕は石室開口部前面から2個体と、他に復元形状の不明な甕が、開口部前面と周堀北側から1点ずつ出土している。甕1は残存器高33cm、口径18.3cm、2は器高45cm、口径24cmで小甕である。ともに頸部から口縁までの立ち上がりが短く、頸部への施文や沈線は消失している。



①五目牛5号古墳



②五目牛29号古墳

③荒延二之塚遺跡第2号墳

第1図 古墳出土の大甕位置図

0 1:10 30cm

4 引間遺跡第1号墳(総覧記載漏れ)<sup>9)</sup>

(第2図-④)

高崎市上豊岡に位置する。墳形は円墳であるが規模は不明である。石室は全長6.2mを測り、両袖型の自然石乱石積である。須恵器壺は、石室開口部前面から集中して出土した<sup>9)</sup>。復元率は高くはぼ完形で、器高82cm、口径38cmの大甕である。頸部には補強帯がめぐり、頸部施文帯は2条沈線による擬似突帯3条によって、4区画帯を作り、上から3区画までは波状文を施文し、4区画目は無文である。体部外面は平行タキ調整である。また石室前面からは他に須恵器坏身环蓋、台付長頸壺がまとめて出土している。

5 奥原15号墳(総覧記載漏れ)<sup>7)</sup>

(第2図-⑤)

榛名町本郷に位置する。奥原古墳群の調査は昭和44～46年にかけて行われているが、その間調査した36基の円墳ほとんどに須恵器大甕、中甕が検出され、当時としてはその膨大な出土資料から大甕祭祀という新たな後・終末期古墳の側面を認知するに至る調査であったと思われる。

15号墳は墳丘約10mの円墳で、周堀を含めた規模は約26mに達する。石室は自然石乱石積みの両袖型で、全長5.46mを測る。玄室からは主頭大刀を含め直刀4振りを検出している。須恵器壺は3個体の復元がある。このうち出土状況が判明するものは甕1と2の2個体で、墳頂部から破片が集中して検出された<sup>9)</sup>。出土した甕の中で最大のものは甕1で器高47.2cm、口径24.2cmを測り、底部には焼成後の穿孔が確認される。また他に出土した土器は、石室開口部前から須恵器坏蓋、土師器坏身が、墳頂部から平版がある。

6 奥原27号墳(総覧記載漏れ)<sup>7)</sup>

(第2図-⑥)

27号墳は墳丘約10mの円墳である。石室は自然石乱石積みの両袖型で、全長4.56mを測る。須恵器は墳頂部から大甕1個体、台付長頸壺、环蓋が出土している。大甕の出土状況は、破片の多くは墳頂部で確認されているが、天井石の落下などに伴い石室内からも検出されている。復元形はほぼ完形で器高75cm、口径38cmを測る大甕である。頸部施文帯は1条沈線3条によって4区画帯を作り、上から3区画までは波状文を施文し、4区画目は無文である。また底部には焼成後の穿孔が認められる。

7 平井地区1号古墳(総覧記載漏れ)<sup>7)</sup>

(第3図-⑦)

藤岡市三ツ木、白石古墳群の一角に位置する。墳形は円墳で、規模は直径約24mを測る。石室は両袖型で、全長6.8mを測る。本墳は、石室開口方向が北方である点や、早い段階で切石組積みの手法を用いている点で特異な古墳といえる。出土遺物は墳丘から円筒・形象埴輪、石室からは裝飾大刀2振りをはじめ豊富な遺物がある。

須恵器壺は2個体出土しており、出土位置は墳頂部(報告書では扁平な石を敷込んだ祭祀遺構があると記述)と、石室開口部東側の埴輪列内側の2地点である。埴輪列内側には、扁平な石を敷き込んだ祭祀遺構が確認され、その直上から須恵器壺1、2の破片の他、土師器壺・坏身、須恵器坏身・高坏・提瓶・横瓶などが出土している。特筆される点として、ここから出土した甕の破片は、墳頂部から出土した甕と接合関係にあることである。これは墳頂部から転落したものと解釈もあるが、石室開口部東側の石敷き祭祀遺構上に破片が集中して検出された事実は何らかの行為を示唆するものと推測される。

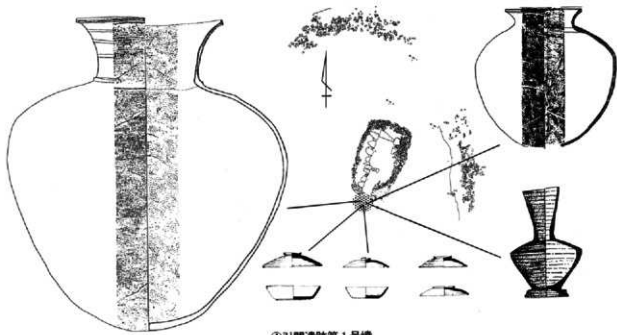
復元後の甕の形状は、甕1は器高83.6cm、口径46.6cmの大甕、甕2は器高48cm、口径23.2cmの小甕であった。甕1は、頸部に補強帯を巡らす関東では特徴的な形態をもつ。頸部施文帯は、2条沈線による擬似突帯3条によって4区画帯を作り、上から3区画までは波状文を施文し、4区画目は無文の構成で、引間遺跡1号墳出土の大甕(第2図-④)と類似している。また甕底部内面には約10cmほど黒色付着物が確認され、液体が溜まり干涸びた状況が考えられる<sup>16)</sup>。なお本墳の築造年代は、土師器模倣坏や長頸2段透かし高坏の形状から、TK43段階、6世紀第3四半期と考えられ、大甕の帰属時期に関してもほぼ同時期のものと推測される。

8 東平井古墳群時沢支群K-2号古墳(平井村383号)<sup>11)</sup>

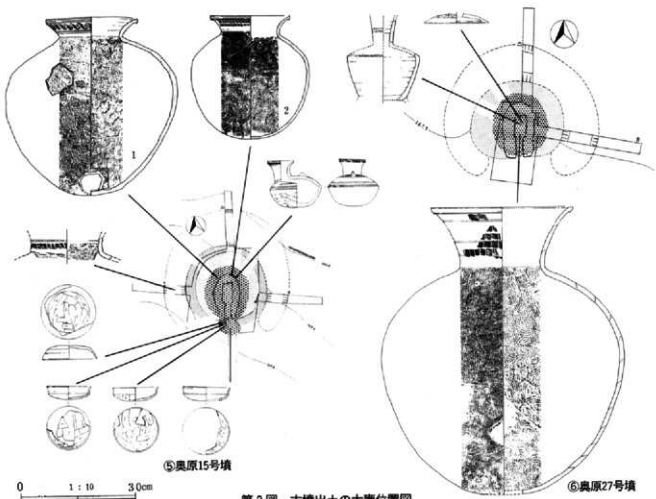
(第3図-⑧)

藤岡市鮎川に位置する。「上毛古墳総覧」によると周辺には368基に及ぶ円墳が分布し、市内最大の群集墳を形成している。K-2号墳は直径約10m程の円墳で、玄室は割張り形を呈す模倣積りで、当地域特有の石室構造を有する。周堀は、石室開口部前面で途切れる形状が確認されている。須恵器壺は、石室開口部西側の周堀端から破片が出土している。出土状況は周堀内で散乱せず、一ヵ所に集中する出土であった。これは1個体の





④引間遺跡第1号墳

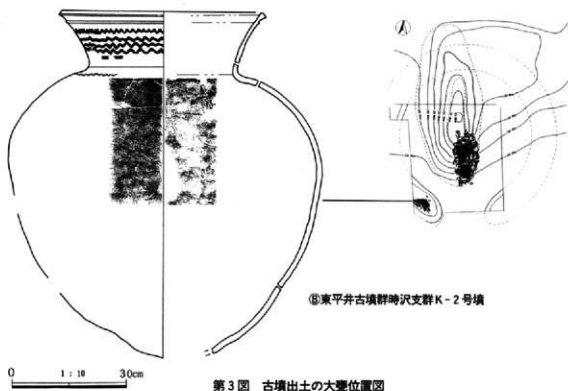
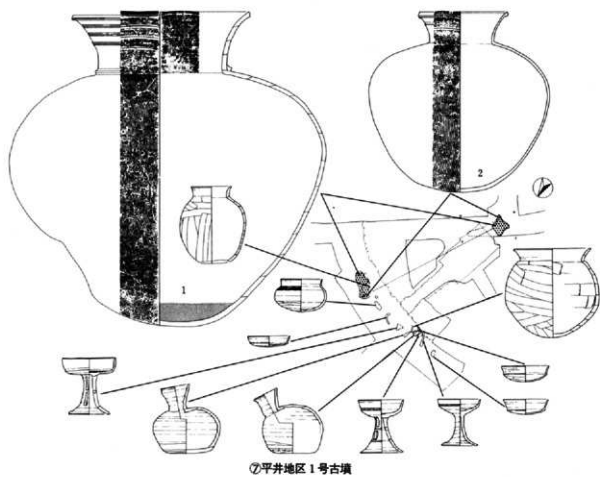


⑤奥原15号墳

⑥奥原27号墳

0 1 : 10 30cm

第2図 古墳出土の大甕位置図



第3図 古墳出土の大甕位置図

甕に復元され、器高92cm、口径54cmを測る超大甕である。頸部施文帯は沈線による区画を作らず、波状文を4条充填している。なお本墳の築造年代は、石室構造から7世紀前半と考えられる。

#### 9 東平井古墳群時沢支群 K-7号古墳 (平井村384号)<sup>11)</sup> (第4図-9)

K-7号古墳は円墳で、周堀を含めると直径22mを測る。石室は全長約7.5mを測る両袖型で、玄室は胴張り形を呈する椽椽横みである。須恵器大甕は、石室開口部前面から2個体の破片が集中して出土した。甕1は復元率が高くほぼ完形で器高98cm、口径57cmを測る超大甕であった。頸部施文帯は1条沈線2条によって3区画帯を作り、各区画に2条の波状文を施文している。また口径内側にも2条の波状文を施文する特徴が見られる。また2は、口径推定値58cmを測り、本墳には超大甕が少なくとも2個体はあったと推定される。また築造年代であるがK-2号古墳同様、7世紀前半と考えられる。

#### 10 神保松遺跡1号古墳 (多胡村143号墳)<sup>12)</sup> (第4図-10)

吉井町神保に位置する。[上古古墳総覧]によると周辺には63基の円墳が分布し、神保古墳群を形成している。墳形は円墳で、周堀を含めた規模は約15mを測る。古墳の残存状況は良好とはいえないが、石室床面と掘り方、周堀が検出されており、周堀は石室開口部前面で途切れる形状である。出土遺物は石室開口部前面から甕、横瓶、平瓶、長頸甕が各2個体ずつ出土しており、甕2個体は開口部前面に近い東西両周堀内の端からそれぞれ出土している。西側周堀出土の甕1は、散乱せず破片が集中して出土した。復元形状は底部が欠損していたが、残存器高は43.5cmを測る。東側周堀出土の甕2は、西側の甕に比べ破片の散乱範囲は広く確認された。復元形状は口径部の多くが欠損していたものの、器高58cmを測る中甕であった。

#### 11 東志免水遺跡3号古墳 (多胡村39号墳)<sup>13)</sup> (第5図-11)

吉井町多胡に位置する。[上古古墳総覧]によると周辺には91基の円墳が分布し、多胡古墳群を形成している。墳形は円墳で直径約13mを測る。石室は全長約5mを測り、玄室からは9振りの直刀が出土している。須恵器甕は数個体分の破片が検出されているが、復元が試みられたものは3個体のみである。出土位置は、甕1と2の破片の多くは墳丘上からの出土と天井石の崩落に伴う石室内からの出土であった。甕3はもとは墳丘上にあつたであろう破片が、墳丘東側の覆土に伴う転落によって、東側テラス面上で多数の破片が集中して検出された。大甕の復元形状は、甕1は器高116cm、口径50cmを測り、甕2は器高90cm、甕3は器高105cmで、3個体とも超大甕であった。なお復元は試みられていないものの、調査された他の小円墳の墳丘上からも大甕片が多数検出されている。

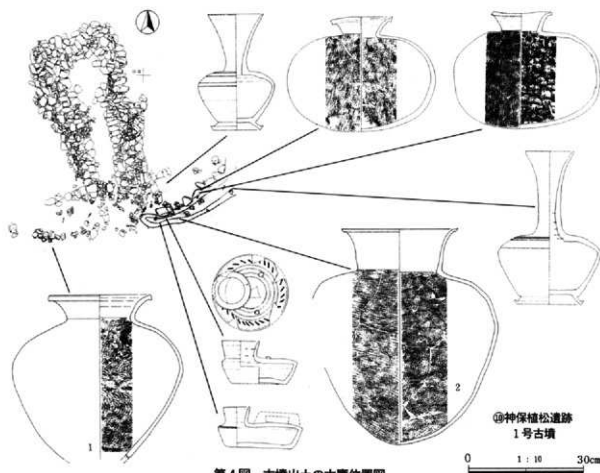
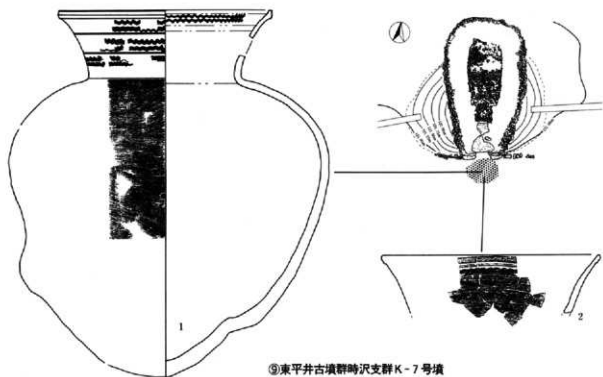
#### 12 上田藤4号古墳 (鯨鯨記載漏れ)<sup>14)</sup> (第6図-12)

富岡市田藤に位置する。墳丘は直径約20mの円墳である。石室は羨道部前半は既に崩壊していたが、玄室は3.6mを測る両袖型である。周堀は石室の前面で途切れる形状である。本墳には周堀北東部に裸が敷かれた張り出し状遺構が確認されており、その直上から約80点に及ぶ大量の土器が出土している。また周堀北西部も同様な状況で多くの土器が集中して出土している。

須恵器甕は6点出土しており、出土位置は墳頂上から1個体と、周堀北東部の張り出し状遺構から3個体、周堀北西部の土器集中箇所から2個体である。まず甕1であるが、墳頂上の各所に散乱する出土状況であり、復元形状は3分の1程が欠損していたが、器高79.2cm、口径42cmを測る大甕であった。周堀北東部の張り出し状遺構出土の甕2は器高40cm、周堀北西部出土の甕3は器高25cmと小甕であった。これら土器集中箇所から出土する甕は小振りであり、土器器長胴甕や椀など日常使用器種と共に出土している。

#### 13 川額原I遺跡 御門1号墳 (久呂保村23号墳)<sup>15)</sup> (第7図-13)

昭和村川額に位置する。周辺には五鈴鐘を出土した鍛屋地2号墳をはじめ、多くの円墳が分布する。御門1号墳は直径約16mの円墳で、石室は全長約4.5mを測る両袖型である。周堀は石室開口部前面で途切れる形状である。須恵器甕は、石室開口部から西側周堀の端にかけて8個体出土しているが、器形が判明するものは3個体であり、他5個体は口径と口頸形状のみ確認される。中でも最大の甕は1で、器高76.8cm、口径40.7cmを測る大甕である。器形は全体にやや縦長な形状で、頸部施文帯は無文である。甕2は器高41cm、3は器高42.5cmで両者とも小甕である。なお器形復元ができなかった他5個体も、口径から小甕に属するものと考えられる。ま



第4図 古墳出土の大甕位置図